429
181

火の柱

純情之巻

中村武羅夫作

甲子社書房

始

特216
576

火の柱

純情之卷

中村武羅夫作

甲子社書房

長篇小說

火の柱

目次

純情の卷

一、秋は落葉と共に……一
二、運命の女性……一二
三、霧の夜道……二三
四、もう一人の女性……三三
五、生？　死？……三八
六、父の苦衷……三三
七、災禍の後……四六
八、生命の恩人として……四九
九、彼女のねがひ……五四

一〇、ピンク色の手紙……九五
一一、愛のあかし……一〇五
一二、母のねがひ……一一九
一三、彼女の決心……一三三
一四、相寄るこゝろ……一四〇
一五、沒落の底に……一五五
一六、幸福の星……一六八
一七、奇跡の邂逅……一七六
一八、こゝろの白刃……一八八
一九、ふたりの出迎人……一九九
二〇、他人の戀人……二一〇
二一、これからの責任……二二三
二二、父ならぬ父……二三五
二三、二つの貞操……二四七

二四、惡魔の跫音……二六〇
二五、日曜日の午後……二七四
二六、男の戀、女の戀……二八二
二七、五千萬圓の財産……二九五
二八、呪はれた男……三〇六
二九、樂しき音樂の夕……三一八
三〇、青年紳士の親切……三三三
三一、堀割に沿ふた座敷……三四一
三二、空は晴れたれども……三五二
三三、男の暴力……三六六
三四、女の一念……三七八
三五、親たちの心……三八八
三六、美しき傀儡……四〇四
三七、離室の客……四一六

長篇小說

火の柱

（純情の卷）

中村武羅夫

秋は落葉と共に

一

秋の空は、高く晴れ渡つて、珠のやうにかゞやかしい日の光りは、大都會の空にも、地にも、燦々として滿ち溢れてゐた。――十月に入つたばかりで、秋は漸くこれから闌にならうとするところであつたが、それでも天氣がよくて、日中だと、殘暑めいた暑さが、ヂリ〳〵と肌に迫つて、セルの着物に羽織なしでも、ほのかに汗ばむくらゐだつた。

初音は、眞砂町から大學の構内まで、わづかばかりの道のりだつたけれども日向をパラソルもなしに、急いで驅けるやうにして歩いて來たので、かなり息も切れてゐたし、白い額や、背筋などしつとりと汗ばんでゐた

大學には近くもあるし、殊に初音の家では、三年前に父が亡くなつてからは、母と妹と三人暮らしでは、間數も多かつたし、女ばかりの家族で、寂しくもあれば、無用心でもあつたので、素人下

宿のやうなことをして、二人の大學生を置いてゐたのに、初音は、まだ一度も、大學の構内に入つて見たことがなかつた。――イヤ、二度ばかり、病院に入院してゐたお友達を、見舞つたことがあつたし、四五年前父が丈夫だつた時分に、一度だけ池の附近を、散歩したことがあつた。――それだけで、講堂や、事務室のはうは、ちつとも知らないのである。

だから赤門から入つて行つたはうがいゝのか、それとも正門から入つてゆくのか、わからなかつた。眞砂町のはうから來ると、赤門が近いので、ちよつと、のぞいて見たけれども、餘りひつそり閑としてゐるので、また、急いで、正門に廻つた。

（こんなことなら不斷、杉村さんにでも、津川さんにでも、學校のはうでお目にかゝる時には、どうしたらいゝか、よく伺つて置けばよかつたのに）

と思つたが、それは後の祭りだつた。――まさか、こんなことをして、不意に學校を訪ねなければならないなどと、誰が思ひ及んだゝらう。

杉村も、津川も、二人とも初音の家に下宿して、大學に通つてゐる醫科の學生だつた。

初音は、その一人の津川宛てに、故郷の家から打つて寄越した電報を、一時も早く本人に屆けてやりたいと思つて、不斷着のまゝ、急いで驅け出して來たのであつた。

餘程急ぎの電報だと見えて、物々しく至急報の記號が印してある上に、電報のことだから、封もしないので、取敢えず電文を讀んで見ると、父が危篤だから、すぐに歸つてこいといふのである。

――何は措いても、一刻も早く、本人に見せなければならないと、初音が焦つたのも無理はなかつた。

二

透きとほるやうな黃金色に、美しく黃ばんだ銀杏の葉が、風もないのに、ヒラ〳〵と舞ひながら日光にキラ〳〵とかゞやきながら、靜かに地べたに舞ひ落ちてゐた。――正門から入つた廣い、眞直ぐな道の兩側には、かなり大きな銀杏の木が、見上げるやうに空高く梢を揃へて、規則正しい並木の列をつくり、それ等の木々の一つの〳〵葉が、皆な一色の美しい黃金色に黃葉して、その落葉は地上に點々として、まるで黃金の切れっ端でも、撒きちらしたやう。

今、正午のサイレンが鳴つたばかりで、しづかな邊りに、虫の聲が、細々と鳴いてゐるのが、哀れに、物さびしく聞えてゐた――。

初音は、一瞬間、自分は、物しづかな田舍にでも來たやうな錯覺におそはれたが、ハツトして氣

が附くと、向ふから大學生の一群れが、三々伍々と、出てくるのが、眼に附いた。制服制帽の學生もあれば、和服に袴をはいて、帽子をかぶつてゐるのもあるし、それからきちんと制服を着てゐるくせに、帽子をかぶつてゐないのもゐるし……初音は、その大學生の群れを見ると、急に救れたやうに、ほつとした。

（――あの學生さんに、聞いて見たらわかるわ）

と思つて、小急ぎに驅け寄つて行つたが、

『あら、杉村さん』

と、思はず彈んだ聲をかけて、につこりした。

思ひがけなく初音は、その學生の一群れの中に、杉村の姿が混つてゐたので、意外でもあれば、うれしくもあつた。――だから聲をかけて、につこりして、息をはずまして驅け寄つたが、他の學生の眼が皆な、好奇心にかゞやいて、不思議さうに自分の上にそゝがれてゐるのに氣がつくと、ハツとしてきまりがわるくなり、つい首筋の邊まで眞赤に染めて、伏眼になつた。

『やあ、初音さん。――わざ〳〵こんなところまで出かけて來て、どうしたの？　何か、急用でも出來たの？』

杉村は、背丈がすらりとして、色白で、眉目清秀な青年だつた。――初め、豫期しない初音の姿を、不意にこんなところに見出して、親しさうに聲をかけられた時、ちよつと當惑さうに、くつきりと濃い眉を、ひそめずにはゐられなかつた。でも、今まで一度も、大學になど訪ねて來たことのない初音が、わざわざ出かけて來たのには、何か容易ならぬ用件が出來たのにちがひないと思ひ返して、すぐに顏色を和らげて聞いた。

『あの、電報が來たものですから、急いでお眼にかけなければならないと思つて。持つてまゐりましたの』

『えつ、僕にですか？　どこから、何んといつて來たのでせう？』

と、杉村がさつと顏色を變へて、慌てゝ聞くと、

『あら！　杉村さんに來たのぢやございませんのよ。――津川さんに、お故郷から、お父さまが危篤だから、すぐに歸つて來いつて……』

『あつ、さうか。それは大へんだ。――ぢや、早く津川君に、知らせてやらなくちやならないが……それにしても津川の奴、どこにぼやぼやしてゐるのかな』

杉村は、自分の上に起つた變事でなくて、まアよかつたと思ふ間もなく、それが友の上に起つた

不吉な變事を知らせる電報だと聞くと、一刻も早く、知らせてやらなければならないと思つた。

二人は、同じ初音の家に下宿してゐるばかりでなく、中學校時代から高等學校、大學と、學校も同じ、志望も同じ、殊に大學に入つてからは、クラスまで同じで、長い間の無二の親友だつた。

今まで、同じ講堂で、同じ講義を聽いてゐたのに、自分たちは、これから外に食事に出かけるところだが、津川は、別に誘ひもしなかつたが、どうしたのだらう？　と思つたが、講堂では、たしかにいつもの通りに、熱心に講義を聽いて、こつ〳〵と、ノートを取つてゐる姿を見たけれども、その後でどうしたのか、心當りがなかつた。

（講堂に一人で殘つて、ノートの整理をしてゐたよ）

と言ふ者もあれば、

（イヤ、廊下を歩いてゐるのを、たしかに見た）

と言ふ者もあり、さうかと思へば、

（津川は、たしか帽子掛のところにゐた。あそこで、まご〳〵してゐたのが、たしかに津川だつた）

と言ふ者もあつた、大勢の學生の言ふところがみんな區々なので、さつぱり要領が得られなかつた。

――恐らく、そのいづれも本當なのだらうが、今、どこにゐるのか、それが分らない。

『初音さん。それでは僕は大急ぎで、津川を探して、電報を渡して來ますから……』

と、杉村は電報を持つて、慌てて引つ返してしまつた。

三

初音は、杉村が電報を渡すべく、請合つて驅けて行つた以上、自分がこゝまで、わざ〳〵來た責任は果したのだから、もう家に歸つても、いゝのだと思つた。——それに、お正午である。自分が歸るまでは、母は食事もせずに、待つてゐるにちがひない。妹の美知子は、今年、女學校を卒業すると、すぐにタイプライターの教習所に通つてゐるので、日曜や祭日のほかは、いつでもお晝の食事は母と二人きりである……。

母に食事を、待たせるのは、わるいと思つたけれども、でも、初音は、このまゝすぐに歸つてしまふ氣にはなれなかつた。——杉村が、早く津川を見附けるか、どうかといふことも氣になつたし、電報を見たら津川は、きつと直ぐに、一應は家まで歸つて支度をして、それから出發するのだらうから、それなら、いつしよに歸りたいと思つた。歸る時には、どうせこゝに出てくるのだらうから、しばらく待つて見るつもりだつた。それには杉村が、電報を津川に渡すのを、いかに急いだからと

は言へ、自分一人を、こゝに打つちやらかしたまゝ、驅け込んでしまつたことが、初音としてはなんだか、物足りなく、心寂しい氣がした。

（杉村さん、この頃、冷淡になつたのぢやないかしら？）

戀してゐる若い女の敏感な本能から、すぐに惱えて、小さな胸が、臆病にをのゝくのであつたが、

（でも、ほかの時とはちがつて、今は一刻を爭ふくらゐに、急がなければならない場合だから）

と、すぐに思ひ返した。——それは初音の聰明な分別といふよりも、愛し合つてゐるはずの相手が、自分に冷淡になつたのではないかなどと、少しでも疑ふことは、可憐で、純情な若い女の常として、何んだか怖ろしいのであつた。

若し、それが事實であつても、なるべく、そんな怖ろしい事實は見ないやうに、氣が附かないやうにと、我れから打ち消すのが、哀れな女ごころだつた。

いつの間にか、さつき杉村と、いつしよに出て來た學生の一群れは、思ひ〳〵に正門の外に出て行つてしまつたし、後からも、ぽつり〳〵と出てくる學生があつたけれども、津川や、杉村の姿は、ナカ〳〵現はれては來なかつた。

たつた一人、黃葉した銀杏の木の下に、人待ち顏に立つてゐるのが、初音はだん〳〵きまりがわ

るくなつて來た。――中には通りがかりの學生が、無遠慮にヂロ〳〵と、訝かしむやうな視線を向けて、過ぎて行く者もあつた。

そんな時初音は、面を背けるか、俯向くかして、やうやく我慢してゐたけれども、たん〳〵堪へられなくなつた。

二十分以上も經つた。

（どうなすたのだらう？　津川さんが、ナカ〳〵見附からないのかしら？　それとも、ほかの道からでも、お歸りになつたのぢやないだらうか）

不安は感じてくるし、いつまで待つてゐても、若しほかの出口からでも歸つてしまつたのなら、仕方がないからと諦めて、初音が、そろ〳〵歸らうとした時だつた。

ちやうど、津川と杉村の二人が、急いでこつちに驅けるやうにしてくる姿が見えた。初音が、ハツと思ふ間もなく、もう二人は、傍まで來てゐた。

『とんだことでしたわね。どんなにか、ご心配でせう』

初音は、朴訥な顏に、深い憂ひを湛へてゐるやうな津川を見ると、心から同情せずにはゐられなかつた。

『どうも、わざ〳〵ありがたう。――これだけの電報では、何が何んだか、さつぱり分らず、まるで夢のやうな氣がしてゐるんですが……とに角、これから支度をして、大急ぎて出發します』

不斷は口數が少なく、人が十言も二十言も喋べる間に、自分は、やうやく一言か、二言くらゐしか、口を利かない津川が、口重たい調子ではあるけれども、一氣にそれだけ喋つたのは、珍らしいことだつた。――不意の變事を知らせた電報を受取つて、恐らく餘程興奮してゐるのだらう。

『初音さんは、まだ、こんなところに、まご〳〵してゐたのか。これから早く歸つて、津川君の出發の支度だ。』

杉村は、初音が、待つてゐたことを、意外に思つたらしく、叱りつけるやうな調子で、急かし立てた。

初音は、辯解したいこともあつたけれども、不幸な知らせを受けて、不安と心配とに、打ち挫がれてゐるやうな津川の前だと思ふと、何んにも言へなかつた。

『さうね、では、ごいつしよに、大急ぎで歸りませう』

先に立つて正門を出ると、初音は自分で、タクシーを交渉した。

『いろ〳〵すみません』と、津川は禮を言ひ、初音に頭を下げてから、乘り込んだ。

運命の女性

一

上野ステエションの廣い構内は、發車間近の旅客や、見送人のために、雜沓を極めてゐた。

午後二時三十分、信越本線廻りの列車の發車までには、まだ二十五分からの間があるので、改札は始つてゐなかつた。――コンクートの上に靴や、下駄を鳴らして、右往左往する者、ベンチに凭れてゐる者、大きな荷物に、寄りかゝつてゐる者、氣早やに改札口に、詰めかけてゐる者……見る限り波のやうに、搖れ動いてゐる人の群の混雜と、蜂の巣を突つ附いたやうな雜音のどよめきと、それから塵埃の渦卷だつた。

津川は、既に切符は買つたし、荷物といつては、小型のスーツ・ケースが、たつた一つきりの身輕さだつたし、いかに混み合つたところで、自分一人の座席くらゐ、素早く取れる自信があつたの

で、早くから慌てたり、焦つたりする必要がなかつた。スーツ・ケースだけベンチの上に置いて、その傍に立つて、改札の始まるのを待つてゐた。

『お父さんが、ご全快なすつたら、きつと、歸つて下さるわね』

初音と、杉村とは、津川が一應斷つたにもかゝはらず、わざわざステエションまで、見送りに來てくれた。

杉村は、賣店のはうにでも行つたのか、それともトイレットにでも行つたのか、今まで三人いつしよに、かたまつてゐたのに、つい姿が見えなくなつてゐた。

初音は、津川と二人きりになると、耳もとに口を寄せるやうにして、小聲に、そつとさゝやいた。

『歸つて來ますとも！　僕としても、大事な學年ですから、そんなに長くは、休んでゐられないのです』

『わたし、心配なことがあるの』

『どんなことですか』

津川の男らしい太い眉が、心持ちひそめられて、澄んだ、するどい眼が、じつと初音にそゝがれた。

父は失ひ、生れてから、まだ、兄といふものゝ味を知らない初音は、津川に對して、ほんたうの兄があつたら、こんなものではないかしらと思へるやうな、慕はしさと、懷しみの情愛を抱いて、親しんでゐた。――それは杉村に對する異性としての戀愛感情とは、全然別のもので、何んにつけても頼りにもすれば、力にしてゐるのであつたし、また、妹のない津川としても、初音を本當の妹のやうな氣がして、可愛がつたり、どんなことでも相談されゝば、力にもなつてやつた。

それが、今、初音に、心配なことがあると、心細さうに言はれると、何も聞かないうちから、津川の胸は、早やくも異樣にとゞろくのであつた。

『ご心配ごとがあつて、お故郷にお歸りになるところへ、わたしまで、こんなことを言つて、二重にご心配をかけるのは、ほんとにわるいんですけれど』

言ひさして口籠ると、初音は心弱くも、つい涙ぐまずにはゐられなかつた。

『構はないから……何んでも話してごらんなさい』

津川は、心配さうに、でも、やさしく言つた。

『杉村さんのことなの』

『杉村君が、どうかしたのですか?』

『いゝえ。どうと言つて……別に、ハツキリとは分らないんですけれども、何んだか杉村さん、この頃少し、へんなやうに思へるものですから』

『へんつていふと……一體、どうへんなのです?』

若い女性の微妙な心の陰翳や、羞恥みや、病的なくらゐ敏感な動きに對しては、まだ直接には、何んの經驗も、知識も持たない津川は、固くるしく開き直つたやうな態度で、まともに反問した。

『あの、何んですかこの頃、少し冷淡になつて來たのぢやないかといふ氣がして……わたし、心配なの』

初音は、それだけ言ふのにも、顔を眞赤にして、伏眼になつて、口籠り〳〵漸く言つた。

『冷淡になつたといふと……あなたに對してゞすか?』

『えゝ』

『そんなことはありませんよ! 僕が、保證します。杉村に限つて、そんな男ぢやありません』

思はず津川の感情と聲とに、力がこもり、人前もなく高くなつて來たので、初音はきまりがわるく、

『あら』

と叫んで、一層眞赤になつて、氣が氣でなく、邊りを見まはすと、津川もやうやく氣が附いて、

『二人は、固く誓ひ合つた仲ぢやありませんか。今更、冷淡になるなんて、そんなはずはありません。――それは、きつと、初音さんの氣のせゐでせう。僕の友達だから、自慢するわけぢやありませんが、杉村君くらゐ誠實で、眞面目な男は、まつたく類がないのですからな』

と、聲をひそめたが、ついまた熱して、だん〳〵高くなつた。

『そんなら、いゝんですけれども……わたし、何んにつけても、あなたを力にしてゐるものですから……若し、このまゝ歸つていらつしやらないやうなことでもあつたら、どうしたらいゝかと、つい心細くなつてしまつて』

初音は、フランス絹のハンカチーフで、そつと瞼を抑へた。

『大丈夫ですとも！　僕には學校といふものがあるですからな。――たとへ父の身に、萬一のことがあらうと、どんなことがあらうと、學校だけは、つゞけなくてはならないのですから、きつと歸つて來ますとも。歸つて來ずに置くものですか』

と、元氣よく、頼もしく誓ふと、初音を、安心させようとする心盡しなのだらう。――わざとはゝゝゝと、大きな聲を立てゝ笑つたりした。

初音は、ぶこつな中にも、いつに變らぬ無限のやさしさと、慈愛のやうなものと、頼もしさを、

ひし〳〵と感じ、胸を打たれて、ついホロリとならずにはゐられなかつた。――それと同時に、これといふ明らかな理由もなく、心を暗くさせられてゐた近頃の疑惑と不安とが、拭つたやうに一時に晴れて、頼もしく力強い氣がして來た。

改札を知らせる擴聲器の聲がひゞき始めた。

二

『ちや、氣を附けて』

と、プラットホームに立つた杉村が言へば、

『お大事に……早く、お歸りになつてね』

と、杉村と並んで立つた初音も、まるで骨肉を分けた兄にでも長い別れでも告げるやうに、瞳をうるまてゐた。

『わざ〳〵、ありがたう』

デッキに立つた津川は、短い言葉に、深い感謝をこめて言つた。

『學校は休んでも、心配なく。僕が、ちやんとノートを取つて置くから』

『どうぞ、頼む』

發車を豫報するベルが、ぢり〳〵と鳴りわたつてゐた。

そこへ悠々と、すゝんで來たのは、ぱつと眼が覺めるやうに美しく、華やかな一人の令嬢だつた。

津川は、ほんの一瞬間の印象だつたけれども、そのすらりとした高貴な姿と、個性的な美しさの溢れた美貌とを、瞳に燒き附けられたやうに、どうしても忘れることが出來なかつた。

黑のベロアを自由にカットして、共生地で編んだリボンを飾つたマニッシュ型の帽子を、右の片つ方の眼が隱れるやうに、深く傾げてかぶつた。黑味の勝つた焦茶色のスリーコータースのコートと、チュニックのブラウスのアンサンブル。それが氣品に滿ちた令嬢の容貌と姿とに、とてもよくマッチして、單に津川一人ではなく、邊りに氣ぜはしく動いてゐる人々の眼を、欹たせ、一瞬間しんとなつたやうな氣がした。

『ちよつと、ご免あそばせ』

そのしんとしたやうな中に、美しく、やさしく、快く澄みわたつた聲が、ひゞいたと思つたら、それは令嬢が、呆然としてゐる津川に、言葉をかけてゐるのではないか。

津川は、ハッとして氣が附くと、三等車に連結された二等車のデッキに立つたまゝ、ぼんやり令

嬢の姿に、見惚れてゐたのであつた。

『どうも、失禮』

吃り氣味に言つて、急いでプラットホームに飛び降りると、令嬢は輕く會釋をして、發車時間が切迫してゐるのに、別に急ぐでもなく、同じやうに淑やかな態度で、ハイヒールにステップを踏むと、すつと二等車に入つて行つた。

自家用自動車の運轉手らしく、制服を着て、制帽をかぶつた背丈の高い、がつしりした男が、大型と小型のスーツ・ケースを兩手に提げて令嬢の後につゞいた。

『おい〳〵津川君。これなら汽車賃だけ奮發して、二等にすべきだつたぢやないか』

一時は言葉もなく、令嬢の姿に見惚れてゐた杉村が、照れくささうに、ニヤ〳〵笑ひながら、場所も忘れたやうに、冗談めかして言つた。

『馬鹿な！　そんな馬鹿なことを』

と、津川はムキになつて打ち消したが、でも、顏がほてり、胸がどき〳〵と鼓動し、呼吸がはずむのを、どうすることも出來なかつた。

令嬢の後から入つて行つた運轉手は、すぐに降りて來た。

前部の方で、汽笛が鳴つて、汽車が動き出してから、津川は慌てゝ飛び乘ると、先に取つて置いた三等車の座席に腰を降ろしたが、そのうち汽車の速力は、次第に早くなつた。

でも、津川の頭には、いろ〳〵なことが群がり起つて、ナカナカ氣持が落着かなかつた。危篤だといふ父の容態、學校のこと、それから、わざ〳〵ステエションまで見送りに來てくれた杉村や、初音の、いつに變らない深切と、厚い友情。實は、突然のことで、歸りの汽車賃なども、初音と、杉村の二人が出し合つてくれたのであつたが……別れ際に二人きりになつた時に、初音が心細さうに訴へた杉村の態度に對する不安や、二等車に乘り込んだ、あの美しい令嬢のことなどが、次ぎから次ぎと、津川の頭に、取り留めもなく浮んだり消えたりするのであつた。

いつの間にか、車窓の外には、明るい秋の午後の日が、しみじみと當つて、黄ばんだやうに熟した田園の光景が、眼まぐるしく移り變つてゐた。

霧の夜道

一

東京から汽車で五時間、M――といふ山間の小さなステエションで降りて、そこから更に三里、溪流に添うた危つかしい斷崖の道を上つてゆくと、R――溫泉といつて、この頃東京の方にもだんだん有名になつて來た溫泉がある。實際か、どうかは分らないけれども、動脈硬化症にも、ナカナカ効目があるし、神經痛とリウマチスとに特効があることは、昔から古く、言ひ傳へられて來てゐるところだ。

津川の家は、先祖代々、その溫泉場の醫者だつた。あまり古い時代のことは、ハツキリしないけれども、五百年くらゐ昔からの記錄が殘つてゐるが、土地では最も古くからつゞいてゐる家柄で、今では、財産といふやうなものこそないけれども、人人から敬はれてゐる名家である。

祖父の代には、土地の人々から推薦されて、本業のはうの醫業は打つちやつて、助手のやうな者

に任せきりにして、自分は二十年間も村長として、大いに土地の自治のために働いた。

この祖父は、元來の性格が、醫者といふよりも、むしろ政治家肌の人で、土地の開發と、發展といふことには、ずゐぶん慾徳放れて、力を盡した。

現在、R――溫泉といふものが、東京の方にまで有名になつて、季節を問はず、いろ〳〵な方面の有名な人々が、この溫泉に治療に來たり、且つ、夏の避暑、秋の紅葉、冬のスキイなどのために、ぽつ〳〵別莊が建てられるやうになつて來たりしたのも、まつたくこの祖父が、長い間、土地のために盡してきた結果にほかならない。

また、昔は、徒歩か、駕籠か、或ひは駄馬の背に依るよりほかなかつた道路を、今日の如く、とに角、自動車が走れるやうに改修したのも、この祖父の力に依るところが、大きいと言はなければならない。

この祖父のおかげに依つて、R――溫泉場は有名にもなり、發展もしてきたが、先祖傳來の津川家の財産を、公共の仕事に奔走してゐる間に、すつかり減らしてしまつたのも、また、この祖父である。さればこの祖父は、R――溫泉のためには大恩人で、土地の公園には、記念碑まで建てられてゐるくらゐだが、津川家のためには、先祖傳來の財産を失つた、不孝の子孫と言はなければなら

ないかも知れない……。

父は、祖父の性格とは、がらりと變つて、眞面目で、寡默で、慈悲心が深くて、ひたすら醫療の道にのみ熱心で、その他の方面のことには、一向、頭を向けることを知らない、純粹な科學者といつてもいゝ人物であるが――

その父が、今や危篤だといふ知らせの電報である。

『M――驛。M――驛』

『R――溫泉行きの方は、こゝでお降りになります』

まだ、汽車が、すつかり停まりもしないうちから、薄暗いプラットホームに、驛員の呼び聲が聞えた。

三十分も前から、既に降り支度をしてゐた津川は、列車が停まるのを待ちかねるやうにして、スーツ・ケースを一つ提げた身體を、身輕に飛び降りた。

海拔三千尺に近い、高原のステエションである。

まだ、十月の初旬とはいひながら、やがて十一時に近い夜更のことで、じーんと身の引き緊るやうな冷氣が、しんしんとして肌に迫り、吐く息は、すぐに白く凝集して、湯氣のやうに見えた。

月の出た空は、氷のやうな色に冴えてゐるのに、地上には、雲のやうに濃い霧が、しづかに流れてゐた。

『あれ、若旦那さま、お歸りなさいませ。はア、どんなにお待ち申してをりやしたことだか』

津川が、改札口の方に出てゆくと、何十年と津川家に使はれてゐる老僕の吾助爺さんが、いきなりうれしさうに聲を彈ませて、飛び出して迎へてくれた。

『おゝ、爺や』

津川も、懐しさの餘り、手を取らんばかりに驅け寄つた。

二

『電報を打つことは、打つたゞけども、はア何時の汽車でお歸りになることやら、とんとわからねえのでな。この二汽車も前から、停車場さ出てきて、この汽車か〳〵と思つて、どのくらゐお待ち申してゐたことだか、知れねえだに』

『僕が、この汽車で着くからと知らせて、電報を打つたのは、見なかつたの？』

『そんなもの、見るもんかね』

『ぢや、僕の電報を見ないうちに、迎ひに出て來てしまつたんだな』

『若旦那さまの電報を見るどころかね。何んしろ旦那さまが、禎輔のヤツは、まだか〳〵つて、まるで腹切りの時の鹽谷判官さまが、大星由良之助を待ち遠しがるやうなあんばいでな、吾助、早く禎輔の迎ひに出かけろ〳〵つて、おらが早く迎ひに出かけたところで、若旦那さまが、ちつとも早くお歸りなさるわけでもあんめえのに、口もよく利けねえ身で、氣を揉みなさるのが、何んぼにもお氣の毒で、見てゐられねえのでな。當てなしに飛び出して來て、停車場で首を長くして、今か今かと思つて待つてゐたゞよ』

『それは、すまなかつた。――それでお父さんの容態は？』

津川は、先づ何よりもそのことが氣がかりで、氣ぜはしく聞いた。

『さあ、それだが……何んでも腦溢血たらいふ病氣で、引つくり返つたまゝ、それきりどうにも、動けねえだがね』

『えつ、腦溢血？』

津川の聲は、思はず高くなつた。――どちらかといふと父は痩形のはうで、頸は長いし、顏色も蒼白くて、腦溢血體質とは思へなかつたのに！　腦溢血とすれば、二度目、三度目の溢血が、いつ

襲つて來ないとも限らないし、若し、そんなことがあつたら、十中の九までは、生命が覺束ないと覺悟しなければならない。幸ひに快くなるとしても、半身不隨か、生涯自分の力では動けない身になるか、とに角、豫後はむつかしい。——母を失つてから、ちやうど三年目、今また父がそんな不仕合せな病氣に罹つてしまつて！　と、津川は暗澹とした。

とに角、一刻も早く、歸らなければならない。津川は自分でスーツ・ケースを提げて、先きに立つて、廣場を突つ切ると、そこに並んでゐるタクシーの前に、つか〳〵と進んで行つた。

タクシーが並んでゐるといつても、たつた二臺きりで——一臺は三十六年型の新らしいシボレー一臺は三十二年型で、古びて、ガタ〳〵のフオードだつた。

津川は、こんな場合なので、別にタクシーの古いとか新しいとか、車體や、乘り心地の選り好みをする氣など、みぢんもなかつた。どんなタクシーでも、たゞ、早く乘つて、早く歸りさへすれば、それでよかつたのであるが、ちやうど新しいシボレーが手前にあつて、運轉手が立つてゐたので、

『R——溫泉まで、急ぐんだ』

と言つて、自分でドアを開けて、乘り込まうとすると、

『この自動車は、ほかのお客さまを、お迎ひに出てゐるんですから』

と、運轉手はにべもなく斷つたが、すぐに改札口のはうに配つてゐた眼に、何かを認めると、

『あつ、お見えになつた』

と叫んで、ひらりと運轉臺に飛び乘り、すぐにジ、ジーとエンジンを掛けて、ハンドルを廻した。

津川は、早く歸らねばならないと、焦り切つてゐるところだつたし、運轉手の態度が、あまりにそつ氣なかつたので、ついむつとせずにはゐられなかつた。——思はず睨むやうにして、自動車の行つた改札口の方を見送つたが、

『あつ』

と、驚きの叫び聲が、口を衝いて迸ると、われとわが眼を疑ふやうに、大きく見張つた。

そこには、上野驛でチラと見た、あの氣品の高い令嬢が、うす暗い、小さな田舎の見すぼらしいステエションの出口に、まるで邊りを拂ふやうにして、すらりと立つてゐるではないか！　そして二個のスーツ・ケースは赤帽が提げて、鞠躬如として從つてゐた。

自動車が、令嬢の前に、ぴたりと留まり、運轉手が飛び降りて、恭しくドアを開けると、すぐに令嬢は、車上の人となつた。そして運轉臺にスーツ・ケースを積み込んだ赤帽が、ぺこぺこ頭を下げてゐるのに、令嬢は胸を反らすやうにして、シートに凭つたまゝ、會釋一つ返さうとはしなか

つた。そのうちに、自動車は滑るやうに動き出してゐた。

三

『先に行くタクシーに乗つてゐるお嬢さんは、どこの人だね』

津川は、古びた、がた〳〵のフォードに乗つて、險しい道をR――溫泉に走らせながら、滿ちあふれる好奇心に、聞かずにはゐられなかつた。

『さあ、どんな人が乘つたゞかね？　ちつとも、氣が附かなかつたゞが』

と、吾助爺さんの返事は、甚だ頼りなかつた。

津川は、すぐその後で、われながら愚かな質問をしたものだと思つて、恥かしかつた。

どこの人だかといふことは、上野ステエションから、同じ汽車に乘つて來た以上、聞かずと知れた、恐らく東京の人にちがひあるまい。R――溫泉場にも、この頃は、東京のお客が、よく出かけてくるし、また、別莊もあることだから、あの令嬢も、多分、旅館に滯在する客の一人か、それとも、別莊に、わざ〳〵やつて來たのだらう。

それにしても、お伴も連れずに、令嬢が、たゞ一人で、こんなに遲く着く汽車で、こんなに遠い

ところまで、やつて來るとは？

（それが、どうしたといふのだ？　僕にとつて、何んの關係があるのだ？）

津川は、あまり、令嬢に拘泥つてゐるのが、自分ながらきまりがわるくなつて、まるで叱りつけでもするやうに、獨り心の中で反省した。

『あんなにスピードを出して、この道ぢや、危つかしいものだな。いくら自動車が新しくたつて、崖から落つこちたら、人も、自動車もそれきりぢやないか

津川たちを乘せたボロ自動車の若い運轉手は、そんなことを言ひながら、運轉の手腕だけは確かで、自分も前を走つてゆく自動車に負けないくらゐなスピードを出しながら、どんな急角度のカーブでも、巧みに切るのであつた。

道は、ます〳〵峻險になつてゆく。――自動車の窓から、空を仰ぐと、夜眼にはたゞ黑々とだけ見える絶壁がそゝり立ち、H――川の流れに添うて上つてゆくのであるが、下を見ると、何十丈といふ深さで、もちろん底のはうは、ハッキリと見えるはずはなかつた。かすかに、岩を嚙む水勢が聞えてくるだけである。――斯ういふ險難な道の特徵で、勾配はあるし、急角度のカーブは多いし、それに幅員が狹いことだつた。若し、向ふから自動車でも、荷馬車でも來たのに出逢ふと、交すの

が一骨だつた。

殊に夜のことで、空には月が出てゐても、役には立たず、乳色をしたベールのやうな濃い霧の層が、絶えず流れたり、渦巻いたりしてゐた。

『運轉手君。氣を附けてくれよ。急ぐことは急ぐんだけども、事故なんか起されると、困るからな』

津川が注意をすると、

『大丈夫ですよ。自動車は古くたつて、手腕だけは、確かですからな。――それにこの道は、一日に何遍となく往復してゐるから、眼をつぶつてゐたつて、ハンドルは間違ひなく取れるんです』

元氣のいゝ若い運轉手は、自慢すると、カラ〳〵と笑つた。

ちやうど、その時だつた。――若い運轉手の高い笑ひ聲が、まだ止むか止まないうちに、前方で怪しい、切迫した人間の叫び聲のやうなものが起つたと思つたら、若い運轉手は、突然、

『あつ！　やりやがつた』

と叫ぶと、急にブレーキを掛けて、後ろを振り返つたが、その顏は、死人のやうに眞蒼だつた。

『おい、どうしたんだ？』

と、津川も異樣な胸騷ぎがして聞くと、運轉手は、

『墜落ですよ』

と、簡單に答へて、とに角、運轉臺のドアを開けた。

『墜落つて？　前を走つてゐた自動車か？』

津川はびつくりした。

『さうです。――だから言はないこつちやない。道の樣子も、よく考へずに、ヤケに走らせやがるからよ。こゝで落ちたら、何もかも、それぎりでお陀佛ぢやないか。可哀さうに、三十六年型の新しいシボレーで、お客は、眼の醒めるやうな、別嬪さんだつたのに』

M――驛と、R――溫泉場と、ちやうど眞中頃だつた。土地の人々から、俗に九十九折といはれてゐる一番の難所である。往來から下の流れまでは、六十丈以上もあるし、特に水勢の烈しいところだから、こゝから墜落したとすれば、自動車も、人間も、途中の岩角に幾度か打つかつて、紛々になつてしまふだらう。水まで落ちれば、はげしい水勢に、呑まれてしまふに違ひない。

津川は、愕然として、心の寒くなる思ひだつた。

――をのゝく心を押し鎭めるやうにして、フロント・ガラスから、前方を透して見ると、今の今まで七、八メートルの間隔を置いて、前方を走つてゐた自動車など、影も形も見えず、ただ白い羽

毛のやうな夜霧が、輕々と流れてゐるだけだつた。

もう一人の女性

一

『若旦那さま、こんなことに、途中で鬪り合つて、暇取つてゐる場合でねえだよ。旦那さまが、あんなに待つてござらつしやるだに、一刻も早く歸つて、お會ひにならねえと。わるいだよ』

吾助爺やとても、決して薄情な人間といふではない。――それどころか、七八つの鼻たれ小僧の時分から、五十餘年の長い間、津川家に仕へて、蔭日向なく働いて來た、正直一徹、忠義無類、殊には朴訥で、人情に厚い氣質だが、伜の歸りを、それこそ一刻千秋の思ひで待ちわびてゐる主人の傷々しいこゝろを察すると、自分の心は鬼にしても、早く歸らなければならないと思つた。――遭難者には、ほんたうに氣の毒だが、こんなところで、道草を喰つて、遲くなつたがために、折角こゝまで歸つて來てゐる若旦那を、主人の死目にも會はせることが出來なかつたといふやうなことで

もあつたら、律義な主人思ひの吾助爺やとしては、それこそ腹を切つても、申わけないのである。

どうかして、思ひ留まらせようとしたけれども、年若く、人道主義的な情熱に燃えてゐる禎輔は、父のことも心配ではあるが、しかし、現に今、眼の前に見てゐる遭難者を、このまゝ打つちやつて置けなかつた。生きてゐるものか、死んでしまつたものか、救へるものか、救ふ方法のないものか？　といふことすら見極めもせずに、知らん顏して過ぎ去つてしまふことは、どうにも忍び能はないところであつた。

若し、最初に汽車から降りた時、津川が、前の自動車に乘つてゐたとすれば、或ひはこの恐ろしい奇禍に遭遇してゐるのは、令孃ではなくて、却つて禎輔自身であつたかも知れないのである。――まことに禍福は糾へる繩の如く、新しいシボレーに乘ることが出來なくて、古ぼけて、ガタガタのフオードに乘つたことが、禎輔の身の助けとなり、令孃は、この恐ろしい奇禍に逢ふことになつたのだ。言つて見れば、令孃の災厄は、まつたく禎輔の身代りになつてくれたものと、言へないことはないのである！

それだのに、どうしてその災厄を、眼前に、このまゝ見捨てて、いかに先を急ぐ身だからといつて、知らん顏をして行つてしまふことが出來るだらう。

出來ない！　禎輔としては、斷じて出來ないことだ。

『爺や、せめてどんなことになつてゐるのか、見屆けるだけでも、見屆けないといふのは、人間として忍びないことだから……助かるものなら、どんなことをしても、助けなければならないし』

禎輔は、自分でドアを開けると、先に走つてゐる自動車が墜落したらしい現場まで行つて見た。

あゝ人間の運命といふものは、わからないものだ。――若し、この時禎輔が、吾助爺やの言ふ通りに、こんな事件にかゝり合はずに、眞直ぐ自動車を走らせてゐたら、骨を嚙み碎くやうな、あの恐ろしい悲劇は、起らずにすんだであらうものを！

一寸先は闇！　とはよく言つた。知らないといふことは、仕方がない。――このために何人の人間の涙を絞り、血の涙に泣かせることになつたことか。

二

それは後のこと――

現場まで行つて見ると、若い運轉手は、今更のやうにおぞけを振つて、深い〳〵崖下をのぞき込んでゐるし、一人の醉つぱらひが何も知らぬ顏に、

あなーたと呼べば

あなーたと答へる

『か、こん畜生！』

と、危つかしい狹い道を、調子はづれのだみ聲で唄ひながら、手ぶり身ぶりも面白をかしく、踊つてゐた。

それは、この邊で通稱を丑松と呼ばれて、炭燒を業としてゐる獨り者の低能者だつた。

『こゝから落ちたんでさあ。この通り、ずり落ちた痕があるでせう。丑松の野郎が、不意に踊り出しやがつたものだから、それを躾くまいとして、慌てゝハンドルを切り過ぎたから、たまりませんや。前のタイヤが道からはづれると、そのまゝずるずると土が崩れて、もろに墜落してしまつたんで』

運轉手の指ざし示すところを見ると、なるほど土のくづれた跡が、夜眼にも生ま〳〵しく、歷然として殘つてゐるのが、禎輔にも見えた。

『それで、自動車は？』

禎輔が、胸をどき〳〵波打たせて聞くと、若い運轉手は、地べたに腹這ひになつて、身を乘り出すやうにして、危つかしい、深い崖下をのぞき込みながら、

『それが、どうも水まで落ちないで、どうやら、下の方に、引つかゝてゐるらしいんですが……』
『えつ、引つかゝつてゐるつて？』
『どうも、この霧ぢや、ハツキリ見えないんで。――畜生！　もう少し、晴れてくるとな！　こんな月夜だし、ハツキリ見えるんだが……』
と、運轉手が忌々しさうに嗄鳴つか時、ちやうど、霧の流れの間から、さつと蒼白い月の光りが射した。
『あつ、見えましたぜ！　やつぱり引つかゝつてゐる！』
あなーたと呼べば
あなーたと答へる
『獨り者は、どうするんだい！』
と丑松の嗄鳴るだみ聲が、霧の夜の谷々にこだました。

三

（今度の汽車でも、お歸りにならなつたのかしら）

と呟いては、里枝は幾度、胸をときめかせつゝ、門まで出て見たり、また、病室に引つ返したりしたことか知れなかつた。
禎輔の父の禎之進の腦溢血は、割合に輕い症狀らしく、急激に來た一度の發作で、身體こそ動かなかつたけれども、意識を失ふやうなこともなく、また、昏々と眠りつゞけるといふやうなこともなく、かなり舌が縺れるけれども、それでも言葉が、聞き取れないことはなかつた。
『禎輔は、まだか？』
と言はれ、
『何をぐづ〳〵してゐるのだらう。わしは、生きてるうちに、どうしても話して置かなければならないことがあるのに！　なぜ、早く歸つて來ないのか？』
と、焦れて、癇癪を起される度びに、里枝は、氣が氣ではなかつた。
里枝は、津川の家とは、遠い親類つゞきの家の娘。即ち禎之進の妻で、禎輔には亡くなつた母の從姉妹とか、再從姉妹とか、とに角、親類といふ名目でも、實際の血のつゞきは極めて薄い。生家は長野の町だが、小さい時分から、子供の少ない津川家に引取られて、小學校にも禎輔といつしよに通つたし、女學校時代の五年間こそ、長野の生家に歸つて、そこの女學校に通つたけれども、禎

輔とは、まるで兄妹のやうにして、育てられて來た。

ちやうど、禎輔の母が亡くなつたのが、里枝が女學校を卒業した年だつたので、それからまた三年間、ずつと津川の家に歸つてきて、主婦を失つた家庭の主婦代りに、何かとまめ〳〵しく立ち働き、一方禎之進にも、父か、舅にでも仕へるやうに、やさしく、いろ〳〵な面倒を見てきた……。

『どうして禎輔は、歸らぬのだらう。話があるんだ。——里枝、お前のことについても、大事な話が……』

禎之進は、廻りくどい舌で言ふのであつた。

時計は、ちやうどチンと、たつた一つ、一時を打つた。

生か？　死か？

一

山上の夜更けの寒さは、しん〳〵として、骨の髓までも沁みとほるやうに、鋭く感じられた。

一時は、疾つくに過ぎた。——二時を打つのもきいた。三時を打つのを聞いてからも、既に大分經つた。

でも、里枝は、眠るわけにもいかなかつた。禎之進の枕もとに附き添つて、夜もすがら看病する覺悟だつたが、そればかりではなく、病人が待ちこがれてゐる禎輔の歸りを、彼女としても、待ち切つてゐるのであつた。たとへ病人の看護のためには、代りの者を附けて置いても、ちよつとの間くらゐは、眠られないことはなかつた。が、里枝自身、禎輔が無事に歸つて來て、その顏を見せてくれるまでは、まつたく、眠るどころではなかつた……。

いつまで待つてゐても、ナカ〳〵歸つて來ないので、だん〳〵、氣が氣ではなくなつてきた。

東京からの終列車が、M——驛に着くのが、十時三十分である。それから三里の山道を、自動車で歸つてくるとして、少し急げば、十一時半までには、歸つて來なければならないはずである。

——どんなに緩くりしたつて、十二時よりも、遲くなるはずはない。

それだのに、既に三時を過ぎても、まだ歸つて來ないといふのは、一體、どうしたのだらう？

（電報は、ご覽にならなかつたといふわけはないのだし……ちやんと、ご覽になつたればこそ、すぐ歸るといふ返事の電報が來てゐるのだから。ほんとに、どうなすつたのか知ら？　）

考へれば考へるほど里枝は、心配でたまらなかつた。

病人が待つてゐる氣持も、痛切には違ひなかつたが、病人が待つてゐるよりも、里枝の待つこゝろのはうが、もつと深刻で、傷々しかつた。

――病人の頭腦には、どうかすると少し呆けたのではないかと思はれるやうなチグハグなふしぶしもあつたし、鎭靜させるための注射や、頓服藥のために、うと〳〵と眠つてゐる時間も多い。だが、里枝の場合には、健全な頭腦で、一睡もせずに、刻刻の時間を、待ち切つてゐるのである。それだのに、いつまで待つてゐても、歸つて來ないとなると、いろ〳〵な不安やら、心配やらが、むら〳〵と群がり起つて、その苦しみと腦みとは、二倍にも三倍にもなつて、里枝の小さな胸を押しつぶす。

若しや、途中で、何かの間違ひでもあつたのではなからうか？

汽車に乘つても、どんな不慮の變事が、起らないとは限らないし、また、M――驛から降りて、R――溫泉場まで歸つて來る途中だつて、ナカ〳〵險難な道で、あまり急ぐ場合など、却つて、どんな恐ろしい事故を引き起さないとも、限らないのである。自動車道路が開通してからこつち、さういふ恐ろしい事故の實例を、二つ三つくらゐ、里枝も知らないことはなかつた。

そんなことを想像すると、里枝の小さな胸は、はげしい不安と恐怖とに襲はれて、まるで早鐘でも撞くやうにドキ〳〵として、今にも自分の息の根が、留まるのではないかと思はれる。

何よりも氣になることは、禎之進に急き立てられて、禎輔からの返事の電報も、まだ見ないうちに、迎ひのためにM――驛まで、飛び出して行つた吾助爺やまでが、歸つて來ないことだつた。

禎輔一人が歸つて來ないのなら、一汽車乘り遲れて、朝早く着く一番列車で歸つて來るだらうといふこともあるし、また、M――驛には停車しない急行に乘つて、四つばかり手前のK――といふ大きな驛で降りて　そこから自動車で　歸つて來るかも知れないといふことが、想像出來ないことはなかつた。

それは時間の點からいつても、費用の上からも、甚だしい不經濟のことではあるが、急ぎの場合に、汽車に乘り遲れたりすると、時にはさういふ方法を取る場合だつてないことはなかつた。

二

（ほんとに爺やまで、どうしたといふのだらう？）

部屋の隅には、大きな支那燒きの瀨戸火鉢を置いて、鐵瓶の口からは、かすかな音を立てゝ、溫

かさうに湯氣を吹いてゐた。

一時間ばかり前に、この醫院で、禎之進の下に働いてゐる助手の醫員が、一本注射したのが、利いたのだらう。病人は、鼻孔の奥に呼吸が引つかゝるやうな鼾を立てゝ、眠つてゐる。

顏色は、相變らずわるい。殊に、光線の加減をして、薄暗くした電燈の光りの下で見るせいか、下瞼のあたりに、陰氣なくまが、ほのかに浮んだ。里枝は、じつと病人のその顏を見つめてゐると、氣のせゐばかりでなく、何んだか死相が現はれてゐるやうな氣がして、心細くもあれば、かなしくもあつた。

(どつちにしても、早く歸つて來て下さらなければ……)

里枝がさう思つて、ほつと溜息を吐いた時だつた。

しんとして靜まり返つてゐる深夜の遠くの方に、かすかに自動車の音がきこえたやうな氣がして、

(あら)

と、里枝が胸をとゞろかして、聞き耳を立てたと思ふと、自動車の音は、すぐに近づいて來て、ちやうど、門の前あたりで、ぴたりと留つた。

(きつと禎輔さんが、歸つていらしたのだわ)

思ひつめてゐたばかりではない。たしかに、さういふ豫感が、里枝の頭に、ぴんと來た。

ちやうど、病人は、よく眠つてゐるところである。

里枝は、急いで立ち上ると、禎之進の寢顏を、もう一度振り返つて見て、よく眠つてゐることをたしかめて置いて、イソイソとして玄關まで出て行つたが、

(おや!)

と、びつくりして眼を見張ると、そのまゝ廊下に、立ちすくんだ。

眠らずに禎輔の歸りを待つてゐたのは、必らずしも里枝ばかりではない。門は閉めず、玄關の戸締りもしないで、書生も、藥局の看護婦も、待つてゐたのである。里枝が、玄關に出て行つた時には、既に玄關の扉も、廊下と、玄關とを仕切つてゐるドアも、開け放たれて、書生や、看護婦が、迎へてゐるところだつた。

玄關前に、一臺の古ぼけたフオードが留つてゐた。たしかに禎輔も、吾助爺やも、歸つて來るには來たけれども、二人だけが、歸つて來たのではなかつた。

禎輔は、帝大の制服制帽で、クラバネツトのオーバーを着てゐた。運轉手や吾助爺や、それに自分も手傳つて、今一人の令孃を、自動車から降ろしてゐるところだつた。それを、書生も、看護婦

も、何が何んだかわからずに、呆氣にとられたやうに立つて見てゐた。

里枝は、その光景を一眼見るなり、びつくりして廊下に、立ちすくんでしまつたのだが、そのまま そこに、いつまでも立ちすくんでゐるわけにも、いかなかつた。

一瞬間、その光景を見て取ると、詳しいことは、何もわからなかつたけれども、大體のことは想像が附いたので、つか〳〵と玄關まで出て行くと、

『お歸りなさいませ』

と、しとやかに言つた。

三

禎輔は、死んだやうに、ぐつたりとなつて、意識があるのかないのか、もちろん自分では動く力もない令嬢の頭のはうを抱へ、運轉手と、吾助爺やとに、胴と、足のはうを支へさせて、玄關まで運びこんで來たところだつた。

『やあ、里枝さん』

と、禎輔はチラと、里枝の顏を見上げたが、すぐに眩しさうに反らして、

『お父さんの容態は、今も看護婦さんの顏を見るなり、聞いたんだが、別に、變りはないさうだね』

と言つた。

小さい時分から長い間、兄妹のやうにして、いつしよに育てられて來た仲なので、禎輔のはうでは、里枝に對して　ちやうど妹と同じやうな氣持を、持つてゐるのであつた。——里枝の氣持は、必ずしもさうではないとしても、禎輔は、妹以外の氣持や、感情で、里枝を見たり、考へたりしたことは、一度もなかつた。

『えゝ。——注射をしたので、今は、よく眠つてゐらつしやいますわ』

『里枝さんには、いろ〳〵厄介をかけて、ほんたうにすまない』

『あら、當り前のことですわ。——そんな他人行儀なことをおつしやつて、わたしイヤですわ』

と、里枝は怨めしさうに言つた。

『でも、君がゐてくれるものだから、いくらか僕も安心して、途中で、こんな道草を食つたりして……すつかり、遲くなつてしまつた』

禎輔は、さういふ間も、令嬢を診察室のはうに、運び上げてゐた。——看護婦と書生とには、取

敢ず診察室に、患者を迎へる準備をするやうに言ひつけたので、いそいで先に、そちらの支度に行つた。

『どうなすつたの？　わたしも、お手傳ひしませうか』

と言ひながら里枝は、三人が代る〳〵靴を脱ぐ間、自分でも手を貸して、令嬢の身體を支へた。

『いつしよに、M――驛を降りた人なんだがね。途中で自動車が、墜落したんだ。現在、その有様を見ながら、そのまゝ打つちやらかしては置けないものだから、皆なで、いろ〳〵苦心をして、やうやくのことで、助け上げたんだが……』

禎輔は、こんなに遲くなつた辯解のためにも、事情を掻いつまんで話さうとしたが、そこまで言ふと、つい暗然として、口ごもつてしまつた。

『まあ』

里枝は、さういふ事情のために、こんなに遲くなつたのかと頷きながら、問投詞を投げるよりほかなかつた。

『ところが、運轉手が即死してゐるし、このお嬢さんも、意識を失つてしまつてゐるものだから、行く先もわからない始末なんでね』

『さう』

『それで、とも角、こゝは何んといつても醫院のことだし、すぐに應急の手當だけでも、して上げられると思つたものだから、お連れしたんだ』

言ひながら禎輔は、皆なと力を合せて、一先づ令嬢の身體を、診察室に運び込んだ。

支度の出來てゐるベッドの上に、そつと横はらせたけれども、令嬢は、まるで死んだやう。何も分らなかつたし、また、助かるものか、それとも、このまゝ駄目なものか、それもまだ、誰にもわからなかつた。

看護婦が、既に自分の部屋に入つて、眠りについてしまつてゐた助手の醫員を、急いで起して來た。

四

令嬢を診察室に運び込んで、ベッドの上に横はらせると、禎輔は、その應急處置は、助手の醫員や、看護婦に賴んで置いて、自分は里枝といつしよに、急いで父の病室に行かなければならなかつた。

障子を開けると、仄暗い部屋の中には、たつた一人で父が、まだスヤ〳〵と、寝息を立てゝゐた。

さうして眠つてゐるところを見ると、たゞ表情が少し陰氣くさい感じに見えるだけで、頭腦の内部に、恐ろしい崩壊作用が行はれて、不安な病床に就いてゐるのだなどとは、夢にも思はれなかつた。飽くまでしづかに、穏やかに見える。

（まあ好かつた）

禎輔は、父の穏かな寝顔を見ると同時に『チチキトク　スグカヘレ』の電報を讀んで以來、まる十三時間あまりの間といふもの、張り切つてゐた氣持ちが、急に緩んで、ほつとした。――ほつとすると同時に、父の枕もとに突つ立つてゐる膝頭のあたりが、がつくりとして、危ふくクタ〳〵とその場にのめりさうになつた。

『あら、どうなさいましたの？』

と、後に寄り添つてゐた里枝が、素早く兩の腕を延ばして、支へてくれたので、禎輔は、やうやく立ち直ることが出來た。それでも、そこに敷かれてゐた座蒲團の傍まで、どうにかニジリ寄るやうに進むと、崩折れるやうに坐つた。

『お氣分が、わるいの？』

里枝は、どうしていゝのか分らず、蒼ざめた顔色をして、おど〳〵と、不安さうな眼色をして、心配でたまらないやうに、禎輔の顔色をうかゞつてゐた。

『イヤ、何んでもないんです』

と禎輔は、かすかに頭をふつたが、兩方のコメカミのあたりを、片つぱうの手を擴げて抑へると、『多分、ひどく疲れたせゐでせう……何んだか、ちよつと眩暈がして、急に倒れさうになつたのだが……もう、大丈夫です』

と、言つた。

『ぢや、お父さまは、よくお眠りになつてゐらつしやいますし……この間に、ちよつでも、おやすみになつたら、いかゞです？』

里枝が、やさしくすゝめると、禎輔は却つて、彼女を劬はるやうに見て、

『里枝さんこそ、今まで、ちつとも眠らなかつたのだらう？』

と、聞いた。

『えゝ。――でも、わたしなんか、一晩や二晩くらゐ眠らなくたつて、何んでもないの』

里枝はニッコリして、健氣に言つた。

『だが、僕が、歸つて來たんだから、これから僕が附いてゐるから、里枝さんこそ、少し眠ると、いい』

『わたし、眠らなくたつていいの。ちつとも、眠くなんかないわ』

『それぢや、すまないが、水を一ぱい、貰ひたいな』

考へて見ると禎輔は、朝のご飯を、東京の初音の家で、杉村や初音や、初音の妹の美知子や、母などといつしよに食べたきり、後は何んにも咽喉を通してはゐないのであつた。

お正午の食事を、これからするといふところに、電報を見たので、そのまゝ食事をする暇もなく、すぐに支度をとゝのへて、上野ステーションに、タクシイを走らせた。汽車に乘つてからも、何も食べるどころではなかつた。——父のことを考へると、心配で〳〵、胸がいつぱいだつた。遂ひにお茶一ぱい、飲まずにしまつた。

父の寢顏を見て、安心すると同時に、急にクタ〳〵になるほど、はげしい疲勞を覺え、眩暈を感じて、危ふく倒れさうになつたのも、單なる疲勞ばかりではなく、恐らく極度の空腹のせゐかも知れなかつた。

禎輔は、里枝が運んで來てくれたコップの水を一ぱい、ぐつと一息に飲みほすと、譯を話して、急いでお茶漬の支度をして貰つた。そして、父の眠つてゐる枕もとで、里枝のお給仕で、三四はいのお茶づけを食べた。

それでも、父はまだ、よく眠つてゐて、眼を醒まさなかつた。

禎輔は、自分が起きてゐるから、里枝に、少しの間でも寢むやうに、などと言つたくせに、お腹が滿ちると、急に烈しい眠氣を誘はれた。そのまゝ疊の上に肱枕をして、いつの間にかグー〳〵と、かすかな鼾を立てゝゐた。

里枝は、食事の後を片附けて、部屋に歸つてくると、父と子とが、頭を並べて、たわいもなく眠つてゐるこの有樣を見て、

（まあ）

と呆れたが、すぐに、どんなに疲れてゐるか知れないのだから、無理はないと同情した。

（風邪をお引きになつたりすると、わるいから）

と呟いて、そつと押入の襖を開けると、夜着や、枕を取出した。そして、しづかに禎輔の身體に被せかけてやつたり、また、頭に枕を、工合よく當てゝやつたりした。——でも 禎輔は、何んに

も知らずに、まるで子供のやうに、眠りこけてゐた。

そのまゝ里枝は、自分一人で夜通し眼をさまして、まるで二人の病人に附き添つてゐる、一人の忠實な看護婦のやうに、二人の枕もとに坐つてゐた。

冷たい秋の夜が白々と明け放れ、曉の光りが射し込むのも知らずに、父も子も、よく眠つて、ナカ〳〵眼を醒まさうとしなかつた。——里枝は、禎之進が、あまりいつまでも眠りつゞけるのが却つて、次第に不安になつてきた……。

父の苦衷

『おゝ、よく歸つて來てくれた。わしは、待つてゐたぞ』

父は、眼をさましても、初め暫らくの間は、そこに坐つてゐるのが、自分があんなにも、歸りを待つてゐた禎輔であることが、わからないものゝやうだつた。

——中心點の定まらない、いくらか光りがぼやけたやうな視線を、慄へるやうにウロ〳〵させて、物問ひたげな色を浮べて、顏ばかり見てゐるので、禎輔は堪らなくなつて、

『お父さん』

と叫ぶと、膝をニジリ進ませて、近々と顏をのぞき込んだ。

すると、視覺よりも、却つてこの聲で、記憶を呼び覺まされたのだらう。サッと父の顏に、一瞬間、生き〳〵とした表情が動いたと思ふと、赤く血が上つて、少し聞き取りにくい、縺れ氣味の舌で言つた。そして、息子の手を握らうとするつもりなのだらう。右の手を動かさうとしたが、そちらの半身には、麻痺がきてゐるので、どうしても動かなかつた。

『お父さん、手ですか』

禎輔はそれと察して、自分の手を延べると、父は右の手が動かないことに、初めて氣が附いたやうに、あわてゝ左の手を出した。

禎輔が、父の左の手を、しつかりと握つてやると、父は、うつとりとしたやうに、息子の顏を見つめながら、

『しつかり握つてくれ……もつと〳〵強く』

と、喘ぎ〳〵言つた。

『こんなに早く、歸つて來てくれて、わしは嬉しいぞ。いつになつたら、歸つて來てくれるかと思つて、待つてゐたのに、よく早く歸つて來てくれた。――わしは、お前の顏が、見たかつたのだ。話して置かなければならない、いろいろ大事なこともあるしのう』

父の頭には、ハツキリした時間の觀念が失はれてゐるばかりでなく、かなり混亂してゐるらしかつた。――でも、息子が歸つて來てくれた喜びと、何か、改めて言ひ殘して置かなければならない、いろいろ大事なことがあるといふことには、ちつとも狂ひがないらしい。

力いつぱい、禎輔に手を握らせながら、そして息子の顏をしげしげと見つめながら、見る見る禎之進の片つ方の眼から――痲痺してゐない左りの眼から、涙が溢れてきた。

禎輔は、あまり一時に、はげしい感動を與へるのは、よくないと思つたけれども、逃げ出すわけには、いかなかつたし、禎輔が逃げ出しでもしない以上、父の興奮と感激とは、つゞくに違ひなかつた。

『お父さん。すこし安靜に、お休みになつたはうがいいですよ。いろ〳〵なお話は、何も急いで今、伺はなくたつて、また後で、いつだつて伺ひますから』

と言つて、宥めるよりほかはなかつた。

でも、それくらゐのことで、禎之進の興奮と、感激の嵐は、ナカ〳〵鎭まるべくもなかつた。

『イヤ〳〵、そんなことを言つても、今、斯うして口が利けるうちに、話して置かなければ……わしは、自分が醫者だから、自分の身體のこと、生命のことは、人に聞くまでもなく、よく分つてゐるのだ。今、斯うして口をきいてゐても、いつ第二の發作に襲はれて、何んにも言へなくなるか、わからないのだから』

『ですから、第二の發作が來ないやうに、用心なさらなければ……』

『だが、話して置かなければならないことを、言ひのこすことも出來ないうちに、口が利けなくなつたり、死んでしまはなければならないのは、心殘りだからな。イヤ、心殘りといふよりも、死んでも死にきれんのぢや』

禎之進は、息子が宥めようとする言葉を、途中から掴ぎ取るやうにして、早く話さうとして、焦るのであつた。何ものも、禎之進のその強い最後の慾望を、阻止することが出來なかつた。

禎輔は、沈默して、父の舌がつゞく限り、いはんとするところを、言はしむるよりほかなかつた

二

里枝は、すつかり夜が明け放れ、禎輔が眼をさましてから、自分の部屋に引き取つて、昨夜から延べられたまゝになつてゐる寝床の中に、身を横へた。

でも、誰にでも覺えがあるやうに、一晩中一睡もしなかたのだから、すぐ眠れさうなものだのに、却つて頭腦が冴えて、容易には眠れなかつた。

しかし、寝床の中で、しばらくモゾ〳〵してゐるうちに、いつともなく眠つたが、直きに眼が醒めてしまつた。——書棚の上の置時計を見ると、それでも二時間ばかりは眠つたらしく、時計の針はちやうど七時を指してゐた。

里枝は、もう眠れさうもなかつたし、禎之進の病室のはうも氣になるので、すぐに起き出してしまつた。

筧から落ちてくる冷たい、清冽な山の清水で顔を洗ふと、睡眠不足で、ぼんやりと暈のかゝつたやうな頭も、いくらかハツキリしてきたし、重い氣分も、いつものやうに、爽やかになつた。

『食事のお支度が、出來てゐますけれども……』

里枝が、身じまひをしてゐると、女中が知らせてくれた。

『ちつとも、欲しくないから後で……もう直きに、お正午だから、お正午のご飯といつしよにいただくわ』

里枝は、姿見に映る女中と顔を見合せたが、

『お兄さんは？』

と、聞いた。

多分、禎之進の病室に、附き添うてゐるにちがひないとは思つたけれども、若しかしたら、危禍に逢うた令嬢のはうに、行つてゐるかも知れないと、ちよつと、不安な氣がした。

里枝は、小さい時から禎輔のことを呼ぶのに、お兄さんと言つて見たり、禎輔さんと、その名を呼んで見たり、場合々々で、きまりがなかつた。

『旦那さまのお部屋に、附いてゐらつしやると思ひますが』

女中の返事を聞くと、里枝は何氣なさゝうに、

『さう』

と、うなづいたが、でも、安堵に胸が輕くなるのを覺えた。

髪も搔き上げたし、簡單な身なりもとゝのへた。それから、ほのかに化粧もすますと、姿見に映る里枝の容貌は、我れながら見ちがへるやうに潑剌として、美しく、可愛らしくなつた。

里枝は、自分で自分の美しさ、可愛らしさに滿足して、鏡の中に映つた顏が、艶やかにニツコリすると、そのまゝ、いそいそとして、長い廊下を、足音もしとやかに、禎之進の病室に急いだ。

禎之進の病室は、母家からは、廊下つゞきに、曲折りに曲つた十疊と八疊の二間で、ちよつと離室めいた感じになつてゐた。——不斷は、禎之進の書齋にもなり、居室にもなつてゐる部屋を、發作以來、病室に當てたものである。

『禎輔、お前に言ひのこして置かなければならない、先づ第一に大事なことゝいふのは、實は、里枝のことだが……』

里枝が、廊下を曲つて、次ぎの間の緣側に、かゝつた時だつた。ちやうど、障子に手をかけようとした時、偶と、禎之進の聲が、十疊の部屋から聞えてきた。——里枝は、そんな話を立ち聞きする氣持など、さらさらなかつた。

父と、息子とが、どんなことを話し合つてゐるのか、それは分らなかつたし、況んや、自分のことについて何か話してゐるようなどといふ期待は、夢にも抱くはずがないのである。

若しかしたら禎輔は、あちらの令嬢のはうにでも、行つてゐるのではないかと、かすかにそんな氣がして、不安なまゝに、だから先刻も一應、女中にたしかめたくらゐである。

それが、計らずもこゝまで來て見ると、禎之進の口から、自分の名が言はれたのが、思ひもかけず耳に入つた。——里枝がハツとして、そこに立ちすくんでしまつたのも、無理はなかつた。

それでなくても父と子とが、何か大事な話を始めてゐるらしい氣配は、何んといふ理由もなく、障子の外にまで、アリ〳〵と感じられるのであつた——

今や里枝は、部屋の中に入つてゆくには、行かれないし、さうかといつて、引つ返すことも出來ず、廊下に立ちすくんだまま、否でも應でも、部屋の中からハツキリと、洩れ聞えてくる父と子の話を、立ち聞きしなければならないはめに、身を置くよりほかはなかつた。

——聞くまいとしても、聞えてくるのは、仕方がなかつた。

三

部屋の中の父と子とは、里枝の立場などに、氣が附くはずがなかつた。

『里枝さんのことゝ言ふのは、どんなことですか？』

禎輔は、父の言葉が、途中でプツリと切れてしまつて、しばらく待つても、そのまゝつゞかないので、何氣なく自分のはうから、後を促がした。

『今まで、改つて打ち明ける機會もなかつたが、實は、里枝とお前とは、幼い時分から、許嫁の間柄に、なつてゐるのぢや……』

『はあ』

父に打ち明けられても、禎輔は、格別、驚きもしなかつた。——改めて打ち明けられるのこそ、今、父の口から聞くのが、初めてゞはあるけれども、或ひは、さういふことではないかとは、疾つくに察してゐた。

『當人の心持もわからないのに、幼い時分から、親と親との間で、そんなことを決めて置くといふのは、今の時世から言へば、まことに舊弊で、野蠻なことかも知れないが、とに角、五つ六つの頃からの約束になつてゐるのだ』

と、父は息を吐いた。

『それで僕に、里枝さんと、結婚しろとおつしやるのですか?』

『イヤか?』

『別に、イヤといふわけではありませんが、里枝さんの氣持は、一體、どうなんでせうか』

『里枝に、異存があるはずはないのぢや。里枝が、お前のことを想つてゐるのは、よく分つてゐる』

『ぢや、里枝さんは、二人が許嫁だといふことを、知つてゐるのですか』

『まだ、打ち明けてはゐないのだから、知つてゐるはずはないだらう。或ひは薄々は、さうではないかと、感づいてゐるかも知れないが』

『結婚するとしても、まだ〳〵先のことですな』

『それは、さうぢや』

と言つて父は、うなづくやうな眼をして、じつと息子に見入つた。

『僕は、まだ、學校を卒業してゐないことですし……それに、學校を卒業してからも、二年や三年は、東京の大きな病院にでも勤めて、十分、勉強したいと思つてゐますから』

禎輔に取つては、今のところ、里枝と結婚婚しようと、誰と結婚しようと、そんなことは、一向に差支へがなかつた。でも、實際に結婚生活に入ることなど、五年も七年も先のことで、それを今から問題にするのは、何んだか夢のやうな氣がして、ちつとも實感がなかつた。

『ところが禎輔、わしがこんな病人になつて見ると、お前も、そんな悠長なことを、考へてゐるわ

けには、いかなくなつて來たのだ」

と、父の顏には、さつと血が上つて、聲を勵ました。

『ですが、まだ、大學も卒業しないうちから、僕には、結婚問題を考へるなんて、餘裕がないのです』

『それは、分つてゐる』

と、父は息子が、學業にいそしんでゐる氣持に、さも〳〵滿足したやうに、かすかに頷いたが、

『だから、わしは、何も今の今、里枝と結婚するやうにと、そんなせつかちなことを、言つてゐるのではないのぢや。どんなことがあつても、大學だけは、きつと卒業して貰はねばならぬ。——お前が、里枝と結婚することを、今のうちから承諾して置いてくれゝば、結婚するのは、卒業してからで、結構ぢや』

『もちろん、承諾はしますが、しかし、大學を卒業したからといつて、すぐといふわけには……』

『なぜ、すぐといふわけには、いかないのぢや？』

『勉强しなければならないのです。大學を卒業したからといつて、すぐに醫者として、役に立つといふわけには、ナカ〳〵いかないのですから。——少くも二三年くらゐは、實地の勉强をしなければ』

『禎輔、ところが實際の事情は、とても、そんな餘裕はないのだぞ。わしの身體が、こんなことになつた以上、これから先の二年間、お前を無事に、大學を卒業させるまでの學費だつて、つゞけることは、とてもむづかしいくらゐだから』

「お父さん。それは、どういふわけですか」

禎輔は、びつくりせずにはゐられなかつた。——父は今まで、津川家の財政狀態などについて、一度も、息子に話して聞かせたことがなかつた。どんな場合にも、苦勞するのは、たゞ自分一人、必要に應じて學費だけは、少しづつでも餘裕があるくらゐに、送つて來た。

家の財政狀態について、苦しいことを打ち明けて、心配させたり、學費に不自由な思ひをさせ、そのために、息子に、餘計な苦勞をかけたところで、どうなるものでもない。若しもそのために、學業に影響するやうなことがあつてはならないといふ、親の情けと慈悲とから、今までは、何んにも知らせずに來たのである。

だが、今や父は、それを今までどほりに、禎輔の前に、隱して置くことが出來なくなつてしまつた。

四

里枝は、始終、津川家にゐて、苦しい財政狀態のことなど、いくらかは知つてゐるので、禎之進の苦しい心中を察して、障子の外で、涙を呑まずにはゐられなかつた。――いくら抑へようとしても、涙は後から〳〵と、瞼にあふれる。それを里枝は、ハンカチーフで、そつと拭ひ〳〵してゐた。

『さう言つては、わるいかも知れないが、津川家の財政狀態が、今日のやうな有樣になつたのは、まつたくお祖父さん、つまり、わしの父のお蔭と、言はねばならん』

と、禎之進の吐く悲しさうな溜息まで、里枝の胸を突き刺すやうに、傷々しく聞えた。

『だと言つても、わしは何もお祖父さんを怨む氣もなければ、責めるつもりもない。お祖父さんは立派な人物で、立派なことをなさつたのだから……この溫泉場が、現在のやうに有名になり、立派に發展して來たのも、皆なお祖父さんの力なのぢや。だが、溫泉場がだん〳〵發展するにつれて、お前も知つてゐる通りに、醫者の家も、津川一軒だけといふわけにはいかなくなつて來てゐる。今では東京から新しい學問をして、立派な技倆を持つた博士が來て、立派な機械を具へ、すぐれた設備をして、新しい病院を開いて、どし〳〵患者を吸收してゐるのだからな。わしのやうに經驗を積

んで來たといふ以外には、やうやく專門學校を卒業したゞけの學歷しかなく、博士の學位もなければ、患者の機嫌を取る商賣氣もない者には、とても太刀打ちが出來ないのは、當然のことで……七八年前までのことを言ふと、土地は榮えて來たけれども、その反對に、この醫院は、ちつとも流行なくなつてしまつてゐるのぢや』

『だからといつて、そんな悲觀することは、ありませんよ』

禎輔の憮然としたやうな、でも、父を慰めようとする聲が聞えた。

『悲觀するとか、しないとかいふことよりも、だからお前にも、一刻も早く歸つてもらつて、設備なども改善して、しつかり、やつて貰はないと、五百年以來の津川家も、わしの代で、めちや〳〵に潰れてしまふことになるからな。それでは、このわしが、ご先祖に對して、申わけがない』

『……』

『それには禎輔、お前が好い成績で　大學を卒業して、一日も早く歸つて來てくれることゝ、それから、里枝と結婚してくれることが、一番、津川家に取つて、大事なことなのぢや』

『では、僕が里枝さんと結婚すれば、津川家の借金の整理も出來るし、醫院を改善して、新しくやつてゆく資本も、出るとおつしやるのですか？』

『今のところ、里枝の實家に助けてもらふよりほかには、方法がないのぢや』
『僕は、さういふ政策のために、結婚するのは、イヤですな』
禎輔の潔癖らしい聲が、きつぱり言つたので、立ち聞きしてゐる里枝の胸は、思はずどきりとした
『イヤ、里枝と結婚するのは、政策のためではないぞ。二人は、小さい時分からの許嫁になつてゐるのだから……』
父と子の話が、まだ、どちらとも決着しないうちに、母家の方から廊下づたひに、小急ぎに來る人の足音が、バタ〳〵と聞えたので、里枝はハツとしたが、どうにも身體を交す暇がなかつた。
こんなところに立つて、人の話を立ち聞きしてゐる姿を見られるのは、里枝として、いかにも辛かつたので、
『ご免あそばせ』
と、今そこに來たやうなふりをして、障子を開けた。
ちやうどその時、白衣の看護婦が、廊下を急いで、こちらに來る姿が、里枝の眼に、ちらと見えた。

災禍の後

一

醫院といつても、患者を收容する室が、四、五室は、設備してあつた。でも、東京から來た博士が、新しい設備で、病院を開いてからは、多くの患者は、大抵そちらの方に行つてしまふので、こゝ二三年といふもの、入院患者などは一人もなかつた。
だから、建物が古びてゐる上に、室なども、かなり荒廢した感じだつた。壁紙など、色が褪めた上に、ところ〳〵には、雨漏りの滴でも傳うた痕なのだらう。地圖のやうな汚點が描かれてゐるし、窓枠のペンキなども、剝げかゝつてゐれば、カーテンなど、同じまゝに何年か垂れ下つたまゝなので、光線の當るところと、影になるところと、まだらに色が褪めてゐるのであつた。でも鐵製のベットだけは、ずゐぶん古いものだが、古いものだけに、出來は頑丈で、スプリングなど、吟味したものだつた。

禎輔が助けて來た令嬢は、一應診察室で醫員の手當を受けると、改めて、入院患者を收容する一室に運ばれた。そして部屋は見すぼらしく、古びてゐても、柔らかな、心地のいいスプリングの附いてゐるベットの上に横はり、清淨な白布で包まれた輕い羽根蒲團と、白い毛布とをふわりと身體に掛けられたまゝ、何んにも知らず、昏々として眠りつゞけてゐた。

幸ひなことに、助手の醫員は、外科の方が專門で、地方の醫者として、內科の方も分らなくはないといふ程度だつた。これは偶然のこととは言ひながら、奇禍に遭うた、どこの誰ともわからない令嬢のためには、まつたく、奇蹟的な幸運と言はなければならなかつた。

助手の醫員は、青柳といふのが、その姓だつたが、彼の診察したところに依れば、右脚大腿部と、左腕第二關節と、二ケ所の骨折が、最も大きな負傷で、その他には身體の各所に、擦過傷や、裂傷や、打撲傷を受けてゐるけれども、それは、いづれも大したことはないといふのである。

裂傷だつて、淺いものだし、打撲傷だつて、皮下に鬱血がある程度で、內臟や、頭腦など、身體の重要な各部分には、少しの異狀も認められず、外部から診察したところでも、打擊を受けたやうな痕跡は、認められないといふのである。

運轉手は、頭蓋骨の粉碎と、胸部の强打とが致命傷で、卽死だといふのに、同じ自動車で、奇禍

に逢ひながら、令嬢の負傷が、この程度で、しかも手當が早かつたので、不具になる心配もなければ、生命にも別條がないと請合れたことは、全く夢のやう。——これも奇蹟的な幸福と、言はなければならなかつた。

二

その朝になつて、この椿事は、R——溫泉場全體に、知れ渡つた。そして、忽ち大騷ぎになつた。令嬢の父といふのは、外交官の間でも、今を時めく前×××大使を三年間も勤めて、今では外務次官として、本省詰になつてゐる有名な波多野良吉氏。良吉氏の父、卽ち令嬢の祖父に當る人は、政黨華やかなりし頃、政黨出身者として、三度も閣僚の椅子を占めたことがあり、現在でも前官禮遇で、どこに行くにも、その地方々々で、警官の護衛が附くといふ豪勢さ。父、良吉氏も、今まで政變の度びに、二三度は大臣候補に數へられたことがあり、今度、一二回の政變の機會には、或ひは新進有力な外務大臣として、實際にその經綸を行ふことになるかも知れないといふ人物。

母——卽ち、良吉氏夫人は、或る身分の高い貴族の出で、その美貌と、才媛ぶりとは、派手な外交官生活の中でも、一際際立つて、名高いものだし、良人の任地先に於ける華やな外國の社交界で

も、波多野夫人と言へば、ナカ〳〵の人氣があり、到るところで、いい意味の評判を、殘してゐるのであつた。

令孃の名は君江。

生れたのは、その當時の父の任地先である、或るヨーロッパの大都市だつた。三歳の時に兩親と共に、一度歸朝した。が、兩親が再び外國に赴任する時には、そのまゝ日本に殘されて、祖父母の膝下で、眼に入れても痛くないほど可愛がられ、甘やかされて、育てられた。

祖母は五年以前に亡くなつた。祖父は、昨年、この土地に建てた別莊に、夏のうちから來てゐたのが、偶として風邪の心地から寢ついたまゝ夏の終りになつても、歸京することが出來ず、まだ、病床に就いてゐる。

その祖父が、急性肺炎を起したといふ知らせに、母夫人は取るものも取敢ず東京から、主治醫の博士を連れて、昨日の朝の汽車で、出向いて來たのであつた。が、君江は、生憎、お友達の熱海の別莊に行つてゐたので、急の知らせを受けると同時に、急いで歸京して、改めて上野ステーションから一人で出發したのであつたが——

計らずも途中で、あの恐ろしい奇禍に逢うたのである。

三

禎輔が、看護婦の知らせを受けて、とに角、令孃の病室まで急いで來て見ると、君江の母夫人が、お伴の召使を二人、それに祖父に附添はせてあつた、東京から連れて來てゐる三人の看護婦のうちから一人と、それから昨日、東京からいつしよに來た博士は、昨夜のうちに歸京してしまつたので、土地に新しく病院を建てゝゐる、院長の若い博士を同道して來てゐた。そして、これから君江を、土地の病院に移すことにしたいと、主張してゐるところであつた。——それは、しかし、母夫人自身の意見といふよりも、若い博士の提案に、夫人の考へが動かされたものだつた。

『どうも、斯ういふ設備では、十分のお手當ても、出來かねるのではないかと、その點が、案じられますので』

內科の若い博士は、秀麗で、色白で、いかにも優しい容貌をしてゐるのであつた。が、荒廢したやうな、ひどく見すぼらしい病室の有樣を、チラと一瞥すると、その濃い眉を、心持ちひそませるやうにして、夫人のご機嫌を、伺ふかのやうに言つた。

それで一も二もなく、夫人の心は動き、博士の意見に同意するのは、是非もないことだつた——

生命の恩人として

一

禎輔が、ちやうど一歩、病室に入つた時、博士の言葉が、耳を打つた。――斯ういふ設備では、十分の手當ても、出來かねるとは、何んといふ侮蔑的な言葉であらう！　と思ふと、禎輔のこゝろはムラ〳〵として、聞き捨てにならない氣がした。それに貴夫人に向つて、いかにも媚びるやうな態度と、詭ふやうな調子とが、あり〳〵と見えすいてゐることが、一層、禎輔の癇癪を、煽らずにはゐなかつた。

しかも　さつき父から聞いた言葉もある。この由緒の古い津川醫院が、今日の如く見すぼらしく沒落してきた原因の一つには、新しく出來た病院の壓迫があるといふではないか！

それは餘計、この色の生白い博士に對する禎輔の反感を、そそり立てるのに十分だつた。――この醫院にやつて來てまで、この醫院の設備の見すぼらしさを侮蔑し、ケチを附けようとしてゐる。

禎輔は、博士の言葉を、聞き捨てには出來なかつた

『どうして、斯ういふ設備では、十分の手當てが、出來ないのでせう？』

禎輔は、いきなり博士の前に、つか〳〵とすゝんだ。

病室で、聲を荒げたり、してはならないこと、殊に患者の母夫人に對して、挨拶もしないのは、どんなに失禮だかといふこと、それを知らない禎輔ではなかつた。でも、あまりの無禮な言葉に、くわつとしてしまつて、そんなことなど考へてゐる餘裕が、なかつたのである。さすがに聲こそひそめたけれども、すこし蒼ざめた顏が、殺氣を帶びて、全身がガタ〳〵と慄へるのを、どうすることも出來なかつた。

『失禮ですが？……』

さすがに若い博士は、さつと顏色を變へた　でも、すぐに冷靜を取り返すと、にこやかに微笑すら含んで、

『あなたは、どなたでしたでせうか？　ついお見それしてしまつて……どうも、すみません』

と、わざと落着きはらつて言つた。――でも、その眼には明らかな敵意と、輕蔑感とが、あふれゐた。

『僕は、この津川醫院の者ですが』
『ご用のない方が、づかづか病室に入つてきては、困りますな。――たとへ、この醫院の方でも、こゝは病室ですからな。それにご覽のとほり、患者は、ナカ〳〵重態なんです』
『若旦那が、お嬢さまをお助けになつて、こゝまでお連れになつたのです
さつきから、暴慢な博士の態度に、ムカ〳〵しながらも、ムシを殺して、じつと我慢してゐた青柳助手が、堪りかねたやうに、横合ひから口を出した。
『あつ。では、あなたが、君江をお助け下さつたので――
それまで　何も知らなかつた母夫人が、感謝の表情をその美しい、氣品の高い顏に現はすと、つか〳〵と禎輔の前にすゝんで、頭を下げた。
博士は、呆氣にとられたやうに、二重瞼の女のやうに優しい眼を見張り、夫人と、禎輔との顏を見比べてゐた。

二

身分の高い貴族出の夫人は、人に對してもほとんど、頭を下げることをしなかつた。でも、可愛

いいたつた一人の愛嬢を助けられたといふことは、よく〳〵身に沁みて、うれしかつたのだらう。――生れてから、まだ一度も下げたことのないやうなその頭を、愛嬢の生命の恩人たる禎輔の前に、何度も〳〵下げた。
呆氣にとられたのは、單に博士一人のみではなかつた。――その場に居合せた人々のすべてが、みんな驚異の眼を、見張つてゐた。
『あなたがゐらつしやらなかつたら、君江は今頃、どうなつてゐるか、わからないところでございましたわ。――ほんとに、ありがたうございます』
夫人は感謝のあまり、禎輔の手を、取らんばかりにした。
『イヤ、そんなにお禮をおつしやられては……僕は、却つてきまりがわるいくらゐです』
禎輔は、たゞ口先ばかりではなく、心からさう思つてゐた。
『まあ』
夫人には、ちよつと見たばかりでも、禎輔が眞面目で、凜々しいことが氣に入つたし、更にその謙遜なことが、とても氣に入つた。――夫人も　君江が遭難した現場の險岨なことは、よく知つてゐるし、あそこから一人の人間を助け出すことの、いかに困難で、身の毛がよ立つほど恐しいかと

いふことも、ハッキリ知つてゐた。殊に、父の危篤の報に接して、歸りを急いでゐた時だといふではないか！　大抵の者なら、そのまゝ知らん顔をして、通りすぎてしまふだらう。それを冒險をかして、わざ〳〵助けてくれたばかりか、べつに手柄顔もしないところが、頼もしくもあれば、實に奥ゆかしい氣がするのだつた。

『僕は、たゞ、誰でもしなければならない、當り前のことをしたといふだけですから……そんなにお禮をおつしやるほどのことではないのです』

令嬢の母夫人から、感謝されることは、禎輔もうれしくないことはなかつた。でも、實際に禎輔は、自分のしたことを手柄顔して、誇る氣持など、ちつともなかつた。まつたく、誰でもがする當然のことだと、さう思つてゐた。

『それに、この容態では、お嬢さまが、果してご全快になるか、どうかは、一つにこれからのお手當てや、ご養生にかゝつてゐることですから』

博士は明らかに、夫人が禎輔を、令嬢の生命の恩人として感謝することが、氣に喰はないらしかつた。――實際に、また博士の言ふとほりに、令嬢の生命は今後の問題で、今のところ、どつちとも分らなかつた。

だから事實に於いて、禎輔が果して生命の恩人であるか、どうかは、まだ、わからないことに違ひなかつた。

『でも、こゝまで救ひ出して、お連れくださつたことだけでも、大へんですわ。――そのことに對してだけでも、どんなに感謝しましても、感謝しきれないといふ氣がしますわ』

夫人は、子の愛のために、眞心を披瀝せずにはゐられなかつた。

『それよりも、一時も早くお嬢さまを、もつと設備の完全な病院に、お連れしなければなりませんが』

博士は、自分がこゝにゐることが、何んだか單身敵地にでも乘り込んで來てゐるやうな感じがして、どうにも氣が落着かないのであつた。

――早く令嬢を連れて、自分の病院に引き上げたいと思つた。令嬢を連れて、自分の病院に引き上げさへすれば、何んといつても、勝利は自分のものだといふ氣がして、焦つてゐた。

『さうでございますね。――でも、ほんたうに君江は、連れて行つたはうが、いいのでございませうか？　こゝに入院させて置いたのでは、十分な手當てが、行きとゞかないのせうか？』

母夫人は、不安さうに、迷つたやうな視線を、博士から禎輔の上にと、交互に移してゐた。

三

『さうです！　このまゝにしてお置きになつてはイケません。一刻も早く、病院にお移しになることが、肝要でございます』

博士は、自信を以つて言つた。――こゝにゐるのは、助手や、學生や、書生や、看護婦ではないか。何んの遠慮をしたり、恐るゝとロろがあらう。自分は立派な博士ではないか。

この自負と、誇りとが、博士を傍若無人の態度にさせた。患者なんて、氣が弱く、迷信が深い。病氣の時に、絶對に信頼するものは、醫者よりほかにはないのだし、しかも博士の肩書は、神さまよりも、もつと尊いだらう！

さういふ氣持が、博士の態度を、高飛車にした。

『なぜ、そんなことを言ふんです？』

博士の指圖で、看護婦たちが、君江をベットから、擔架に移さうとするのを、禎輔は、突然遮ぎると、博士の前に詰め寄つて、詰るやうに言つた。

『君などが、口出しすべき場合ではないのです』

と、博士は頭から輕蔑したやうに、撥ねつけてしまつた。

『しかし僕は、患者に對して無茶な取扱ひをするのを、默つて見てゐるわけには、いかないんです。』

『何が、無茶です』

『無茶ぢやありませんか。――こんな重態な患者を、やうやく收容して、落着いたばかりのところを、すぐにまた動かすなんて、これが無茶でなくて、何んです？　あなたも醫者で、假にも博士といふ立派な學位まで持つてゐらつしやる以上、それくらゐのことが分らなくてどうするんです？素人にだつて、分ることではありませんか』

禎輔の道理ある言葉に、一度は博士も、ぐつと詰つたが、すぐに何氣ない顏色になつて、微笑を浮べると、

『君には、まだ、何んにも分つてゐないのだから、默つてゐたまへ』

と、穏やかに言つた。

『なるほど、君の言ふことにも、一理はある。しかし、それは一を知つて、十を知らないといふものだ。まだ若いし、經驗もないのだから、まあ仕方もないさ。しかし、醫者としては、殊に僕などの眼から見れば、斯ういふ設備の醫院には、實際、安心して患者を預けておくわけには、いかない

んです』

博士の態度は、極めて物しづかだつたけれども、その言葉は冷やかで、且つ、意地わるかつた。

『あなたは、設備々々とおつしやるが、しかし、設備だけで、病氣が癒るものではありませんからな』

と、禎輔も負けてはゐないで、同じ意地わるい調子で報いた。

『何？』

『若し、設備だけで病氣が癒るものなら、立派なホテルにでも泊るか、或は醫療機械店にでも入院したら、病氣などけろりと癒りさうなものですな』

『では、君は、このボロ醫院の設備を、完全だと言つてゐるのですか？』

『どういたしまして、完全だなどと、己惚れてはゐません』

『では、より完全な設備の病院に移して、十分の手當てをするのが、ほんたうではないか』

『父の主義は、營利主義ではありませんから！』

『ちや、君は、僕の病院は、營利主義だとでも言ふのか』

『さあ、そんなことは、どうか知りまんが、たとへ設備は不完全でも、醫者としての良心と、眞心

とが籠つてゐますから、どんな重態なご病人をおあづかりしても、間違ひはありません』

それだけは禎輔も自信を以て、昂然として言つた。

四

二人は、表面は、どんなに冷靜を裝うてゐても、また穏やかな調子で、ていねいに口をきいてゐても、心と心では鎬を削り、明らかに喧嘩してゐるのであつた。――博士は、名譽にかけても、令嬢を自分の病院に連れてゆかなければならないと思つてゐるし、禎輔は意地になつて、この患者だけは、渡すまいと思つてゐる。

二人のその爭ひは、いつの間にか、相手を罵り、傷つけ合ふやうな、見にくい結果になつてしまつた。

『いつまでも、君を相手にして、爭つたところで、仕方がない』

と言つて博士は、さげすむやうな一瞥を、チラと禎輔の上に投げつけると、夫人に向つて、

『どうなさいますか？　このまゝお嬢さまを、こんなところにお置きになるのでしたら、私としては、お嬢さまの今後のお手當てに對して、責任を持つわけには、いかないことになりますが』

と、うや〳〵しく頭を下げた。――でも、それは醫者として、夫人を脅迫してゐるのも、同じことだつた。

『この際、何より大事なことは、君江を元通りの健康な身體に、癒してやるといふことですから』

夫人は、禎輔の氣を兼ねるやうに、遠慮ぶかく言つた。

『それが、このまゝにして置いたのでは、どうも不安なのです。私としは、責任が持てないのです』

博士が、不安さうに言ふことは、餘計、夫人の氣を揉ませるのに、役立つのであつた。

『先生が、さうおつしやるのでしたら　では、君江を、あちらの病院のはうに運んで、十分手當てをしていたゞくことにしたいと思ひますが』

と、夫人の心は、また動いた。

『私の病院にお連れすれば、もちろん、私が、十分の責任を持ちます』

『すぐに電報を打ちましたから、夕方には、東京から外科の先生が、いらして下さると思ひますし……』

『それには猶ほのこと、こゝでは、困りますな』

と言つて博士は、勝ち誇つたやうに、かゞやかしい眼をして、チラリと禎輔の顏を見やつた。

『では、やつぱり、先生の病院に、連れて行つていたゞきますわ』

夫人が決心して、きつぱりさう言ひ切つた時、禎輔は、夫人の前にすゝみ出ると、

『それはイケません』

と、言つた。

『とに角、大怪我をなすつてゐらつしやるお嬢さんを、今、動かすといふことはイケません』

『でも、こゝに置いたのでは、十分の手當てが、出來ないといふことでございますから……』

『そんなことは、ウソです。僕は、醫者としての良心を以て言つてゐるのです。お嬢さんのお手當ては、ちやんとしてあるのです。青柳さんは、この津川醫院の助手ですが、外科のはうが專門なのです。なるほど、いろ〳〵な點で、設備は舊式ですが、しかし外科の機械なども、ちやんと整つてゐるし、十分の責任を以て、お預かりいたしますから、どうぞお嬢さんを、このまゝこゝから、動かさないで下さい』

禎輔が、いくら熱心に言つても、しかし夫人としては、學生である禎輔の言葉を信ずるよりも、どうしても博士の言ふことのはうを、信じもすれば、頼りにするのは、仕方がなかつた。

『君江を助けて下さいましたあなたが、そんなにまでおつしやるのに、無理に連れてゆくのは、あ

なたに對しては、ほんたうにすまないと思ひますが、でも、出來るだけのことをして、十分に手を盡してやりたいと思ひますから』

と夫人は、氣の毒さうに言つた。

『では、どうしても博士の言ふ通りに、連れていらつしやるのですか』

禎輔は、絶望的に言つた

『君江が、助けていたゞいたお禮は、後でいたしますから』

『お禮なんか……僕は、そんなことを、問題にしてゐるのぢやありません。——僕は誠心誠意、お嬢さんのために言つてゐるのです。こんな重態の患者を、手當てをしたばかりで、すぐに動かすことは危險ですから、それで僕は心配して、留めてゐるのです』

『もう分つたよ、君の言ふことは』

と博士は、愬へるやうに言ふ禎輔の言葉を、冷やかに一蹴すると、今度は、附いて來てゐる看護婦たちに向つて、

『さあ、ぐづ〳〵してゐないで、お連れするんだから、そつと擔架に、お移ししなければならない』

と、命令した。

今や、禎輔も、どうすることも出來なかつた。

この上、押し止めることも　拒むことも出來ないで、口惜しさに慄へながら、手を空しうして、傍觀してゐるよりほか、仕方がなかつた。

彼女のねがひ

一

君江は、まつたく意識を失つてしまつてゐた——

墜落の刹那に、ハツと思つたゞけだつた。

（もう駄目だ！）

さう感じた瞬間、彼女の頭腦には非常な速力で、いろ〳〵な想念が、群がり湧いた。小さい時分に見た外國の都會の記憶や、一度、小田原の海岸で、土用波にさらはれて、溺死しかけたことや、それから大事にしてゐたフランス人形を、弟に壞されて、口惜しかつたこと。——不斷は、すつか

り忘れ果てゝ、つひぞ一度も、思ひ出して見たこともないやうな、つまらないことが、チラ、チラと頭に閃めくかと思ふと、肺炎を起して危篤だといふお祖父さんのこと、自分が、こゝで無惨な死を遂げたなら、父や母は、どんなに悲しみ、どんなに嘆くか知れないのだといふ悲痛な思ひや、それから人間といふものは、死後に於いて、果してどうなるだらうか？　といふこと。

そんな取り留めのないことが、ハッと瞬きするほどの僅かな僅かな間に、さながら旋風のやうに頭腦の中に渦巻いたと思つたら……それきり、すべての自覺を失つてしまつた。

もちろん、死もなければ、生もなかつた。――何が何んだかわからない、一切が空だつた。

その無自覺で、空虛な時間が、どれくらゐ經つたのか、わからなかつた。一時間か、或ひは二時間くらゐの間か？　それとも一年も、二年もの間が、飛び過ぎて行つたのか？

それは分らなかつた。

偶と氣が附くと、人の話聲が、かすかに耳に入つた。――聞き覺えのない男の聲や、母の聲が入りまじつて、何か話してゐるのが聞える。

君江は、何んだか夢を見てゐるのではないかといふ氣がした。――しづかに〳〵眼を開いて見ると、自分はいつの間にか、見知らぬ部屋に連れて來られて、ベッドの上に寢かされてゐる。天井を

見ても、壁を見ても、窓を見ても、何んにも見覺えがないし、ベッドも、毛布も、シーツも、記憶にないものばかりである。

それでゐて、たしかに母もゐるし、屋敷で使つてゐる召使の姿が、二人までも見えてゐる。

（こゝは、一體、どこだらう？）

と思ひ、

（いつの間に、どうしてこゝに連れて來られたのだらう？）

と思ひ、そして、

（わたしは、一體どうしたのだらう？　何事があつたのだらう？）

と思つた。

疑問は續々として、頭腦にいつぱい群がり起つたが、それを深く考へ究めようとして焦りながら、すぐに意氣地もなく、くたくたに疲れて、そのまま意識はかすかに、朦朧となつてゆく。つひには何が何んだか分らなくなつて、そのまゝ、また眠つたやうになつてしまつた。

でも、すぐにハッとして氣が附くと、人々の話し聲は、相變らずつゞいてゐる。――同じ室、同じベッド、同じ人々の同じやうな話し聲。

そんなことを、二度も三度も、繰り返してゐる間に、君江はやうやく、すべての事實を思ひ出した——

自分が恐ろしい奇禍に遭うたこと、危ふく命拾ひをしたこと、それから、誰かに助けられて、こゝに連れて來られたのだといふこと。——こゝが病院であること、自分を助けてくれたのは、こゝの病院のうちの誰かであること、母が、醫者や、召使や、看護婦などを連れて、自分を引取りに來てゐるのだといふこと……それ等のすべてのことが、君江の頭腦にハッキリとわかつた。

二

（まあ！）

君江は、自分を助けて、こゝに連れて來てくれたのが、禎輔だといふことがわかつた時に、思はず驚きの叫び聲を、かすかに慄へる唇から洩らし、その美しい眼を、大きく〳〵見張つて、深い溜息をつかずにはゐられなかつた。

（東京から、同じ汽車に乘つて來た、あの人だわ）

さう思つた時に、意外な感じに打たれると同時に、さながら靈火でも、全身に浴びたやうに、不

思議な感激に打たれた。

懷しさと、魅力とが、君江の胸を摑んでしまつた。

（この人の氣持に、逆らつてはイケない！　この人の言ふとほりにならなければイケないのだわ）

説明することの出來ない——それは本能的な氣持で、さう感じた。そして自分は一生、全生涯を通して、禎輔から離れてはならないのだといふ氣がした。

君江自身が、さう思ひ、さう感じたといふよりも、それは何んだか、動かすことの出來ない至上の命令だつた。——君江は、まるで呪縛でもされたやうに、たゞ、自分の胸を打つて來たその命令に、素直に服するよりほかなかつた。

（わたしを助けてくれた人。わたしの命の恩人！）

感激と、思慕の思ひをこめて、じつと禎輔の上に、その恍つとりと夢見るやうな眼ざしをそゝいで、見惚れてゐる時に、ちやうど看護婦たちは、博士の言ひつけで、君江の身體に、そつと手をかけると、擔架に移さうとした。

『ちよつと、待つてよ！』

君江は、かなりはげしく言つたつもりだつたけれども、その聲は、やうやく聞きとれるか、聞き

とれないかくらゐに、かすかで、弱々しかつた。

『あつ、君江！』

と叫んで夫人は、令嬢のベッドに驅け寄つた。

それまで、君江が意識を回復したことには、誰も氣が附かなかつたのである。——ところが、いつの間にか、君江を博士の病院に移すとか、移さないとか、みんなが爭つてゐる間に、彼女は意識を取返して、大體の話は、聞いてしまつたのである。

『よく、まあ氣が附いて！　どうなることかと思つて、今まで、どんなに氣を揉んだことか知れなかつたのに。よかつたわ。ほんたうによかつたわ』

夫人の瞼には、いつぱい、うれし涙が浮んでゐた。負傷して、全身に繃帶されてゐる令嬢の身體に、まさか取りすがることは出來なかつたけれども、でも、ベッドの上に、身を折りかゞめるやうにして、すがり附かんばかりにして、うれし涙にくれてゐるその姿には、ほんたうに純眞な母性愛があふれて、美はしい光景だつた。

その際間、誰一人として、聲を立てる者もなかつた。

『お母さま。わたしね、おねがひがありますの』

弱々しい聲で、かすかに言ふと、母夫人の顏を見上げた。

幸ひに顏だけには、かすり傷一つ受けてゐなかつたので、もちろん繃帶する必要もない。——血色こそ蒼ざめたけれども、相變らず氣品に富んだ顏は、珠のやうに美しくかゞやいて、見る者の心を、恍つとりとさせずには措かなかつた。

『おねがひつて、何？』

と、母夫人は涙にうるんだ瞳を、につこりさせて、やさしく聞いた。

『わたしね、どこにも行きたくないの。ですから、どこにも連れて行かないで、こゝに置いてよ』

と、君江は低い〳〵聲で、息を切らしながら言つた。

『君江さんは、こゝがいいの？』

『えゝ』

『あなたが、こゝにゐたいと言ふんなら、どこに連れてゆくものですか』

『さう。うれしいわ』

君江のうつくしい顏には、澄んだ微笑が浮んだ。

『では、先生。——當人が、あゝ申しますから、やつぱりこゝで、養生をいたせますから』

夫人は、苦り切つたやうな表情をしてゐる博士に向つて、きつぱり言つた。

三

その日の夕方になつて、急電に接した外科の博士が、助手や、看護婦を連れて、わざ〳〵東京から來てくれた。

診察の結果は、青柳助手が診立てたと、同じことだつたし、處置に對しても、これなら少しも遺漏の點はないと、褒めてくれた。

何しろ東京から、わざ〳〵來てもらつた外科の泰斗から褒められたのである。禎輔も、青柳助手も、鼻が高いわけだつたし、それで波多野夫人も、すつかり安心した。——外科の博士の診察を受けるまでは、夫人も内心では、聊か不安を感じないわけではなかつた。が、博士が、一應ていねいに診察をした上で、

『大丈夫です』

と言つて、滿足さうにうなづくのを見ると同時に、それまで土地の博士に依つて、吹き込まれてゐた不安も、懸念も、きれいに拭はれたやうに、消え去つてしまつた。それと共に、禎輔に對する

感謝が、更に倍加されるのを感じた。

（ほんたうに君江の命が助かつたのは、何から何まで、あなたのお蔭ですわ。ありがたう〳〵）

口に出してこそ、何んにも言はなかつたけれども、心のなかでは、全く手を合せんばかりだつた。

『處置萬端、このまゝでよろしい。——たゞ必要なことは、絶對安靜だけです。動かしてはイケません。右脚と左腕の骨折も、幸ひに單純な骨折ですから、後に何んの痕跡をとゞめることなしに、完全に治癒することを請合ひます。よくも敏捷に、こんなに完全な處置を取られたことは、ほんたうに不幸中の幸ひと言はねばなりません。——あなたでしたか？　お孃さんに、この手當てをしたのは。全く、結構です』

達磨のやうに、ずんぐりと肥つて、色が白く、肌がすべ〳〵として、それで頬髯が濃く、細い、鋭くかゞやいた眼に、度の強い近眼鏡をかけた外科の博士は、青柳の手を求めると、固く固く握手をして、強く振つた。——醫者としての立場から、患者に對する處置に滿足して、純眞な悦びに堪へないことが、その髭むくじやらの童顏のかゞやきに、あり〳〵と現はれてゐた。

青柳の喜びと、感激！

禎輔までも、夫人に對して、また博士に對して、十分の面目をほどこしたのである！

ちやうど、外科の博士の診察がすんだところへ、祖父の容態が急變したことを知らせて、一人の召使が、母夫人の迎ひに、やつて來た。

『あゝ、わたしは、行かれないのね。折角こゝまで來たのに』

と、君江はベッドの上で、身もだへするやうにして嘆いた。

老體のことで、或ひはこのまゝ、臨終になるかも知れなかつた。——それだのに、わざ〳〵東京からこゝまで來て、眼と鼻との間にゐながら、すぐに驅けつけることも出來ないとは！

君江が遣る瀬なくかなしみ、嘆くのも、當然だつた。

殊に、三歳の時から、兩親に代つて、まつたく眼に入れても痛くないやうに可愛がつて育てゝくれた人である！　その祖父の容態が、急變したといふ知らせを聞きながら、このベッドの上から、一寸もうごくことが出來ないのである。

『仕方がないわ。君江さんは、こゝに溫和しく、養生してゐなければならないのよ。お祖父さまの容態を見た上で、わたし、またすぐに、來るからね』

夫人は、身體が二つあつても足りないくらゐだつた。——かなしむ君江を慰めて置いて、急いで別莊に歸つて行つた。

ピンク色の手紙

一

山は燃え立つやうな紅である。峯といふ峯、谷といふ谷——今がちやうど、すべての木々の紅葉の眞つ最中であらうか。見るかぎり、さながら紅蓮の焰に包まれてゐるといつたらいいか、滿山に緋の絹でも投げかけてゐるといつたらいいか？　眼にしみるやうな紅である。しかも空は、どこまでも澄明に蒼い。

禎輔は、歸鄕して十餘日。父の容態にさへ變りがなければ、疾つくに東京に歸つてゐるはずであるのに、それがまだ、鄕里に斯うしてぐづ〳〵してゐるのは、第一の發作を起してから、ちやうど七日目に、父が、また第二の發作に見舞はれたためである。が、それも重くはなかつた。

でも、今度は全身の痲痺と、完全な言語障害とで、身うごき一つ出來ず、咽喉から怪しげな發音をひゞかせるだけで、一言だつて、明瞭に口をきくことが出來なかつた。——寢返り一つするのも

人手を借りなければならないし、食事も赤ン坊のやうに、あんと口を開くだけのところへ、誰かゞ食べものを匙ですくつて、食べさせてやらなければならない。

それはすべて、里枝がしなければならなかつた。

ほかの者では、どうしても父の氣に入らないのである。

禎輔は、いくら學校のはうがあつても、その父を殘して、自分は東京に歸つてゆくわけには、いかなかつた。

君江は、依然としてベッドに横つたまゝである。

幸ひにして彼女は、餘病も出なかつたし、一日は一日と、ぢり〳〵と回復に向ひつゝあるやうなものゝ、自由に外出など出來るやうになるには、今年いつぱいくらゐは、かゝるかも知れない。

でも、君江には回復の曙光が見えてゐるし、全快さへすれば、それで、若い生命としての希望もあれば、いかなる幸福が待つてゐるかも知れない。

しかし、氣の毒なのは、彼女の祖父だつた。——あの日、母夫人は、迎ひを受けて歸つて行つたまゝ、君江のベッドを、再び見舞ふことが出來なかつた。危篤の祖父の枕もとに附き切りで、たうとう翌日の午後十一時といふ時間に、最後の息を引取るまで、夫人は祖父の枕もとを、離れるわけ

にはいかなかつたのである。

父の良吉氏も、東京から呼ばれたが、やうやく臨終の三時間前に、間に合つたゞけである。

君江の枕べを、ちよつと見舞つてくれたけれども、五分間と、附いてゐることは出來なかつた。

良吉氏としては、確實に全快する君江を見舞ふことよりも、確實に死んでゆかなければならない祖父の臨終の床に侍するはうが、どんなに重要だつたか知れない。

祖父は遺骸のまゝ、良吉氏夫妻、その他に守られて、東京の本邸に連れて歸られて行つた。

歸る間際に、夫人は君江の病室に立ち寄つて、すべてのことを禎輔に、くれ〳〵も頼んだ。

東京へ歸れば、葬式やその他で、とても忙しいから、君江の容態に變化でもないかぎりは、一週間や十日は、來られさうもないといふことだつた。

(あゝ、わたし、お祖父さんの臨終に、お眼にかゝることも出來ず、お葬式にも、並べないのだわ)

と、君江が悲嘆に沈むのを、禎輔は慰めなければならなかつた。

二

禎輔は、自分の家の事庭からつゞいた、見晴らし臺と呼ばれてゐる丘になつた小公園に上つて、

そこの木製のベンチに凭つて、眩いやうな美しい滿山の紅葉を、見るともなく見てゐた。

日がよく當つて、日中、斯うして日向のベンチに凭つてゐると、額や、背筋などに、しつとりと汗がにじむほど暖かで、日が落ちてからの寒さなど、まるでウソのやう。——睡眠不足の身は、いつの間にか眠氣に誘はれて、うつら〳〵と、我れにもなく居睡りが出てゐた。

邊りには、弱々しい秋の虫が、それでも忙しさうに、ヂ、ヂーと鳴きしきつてゐるのが、人のこころを何んだか地底にでも、引きずり込むやうに、寂しくする。

偶と、禎輔の後の虫の聲が、止んだと思つたら、いつの間にか里枝が、しづかに近づいて來てゐた。

でも、快い氣持ちになつて、眠氣に誘はれてゐる禎輔は、もちろん氣が附くはずがなかつた。

後から見ると、ちやうど景色にでも見惚れてゐるやうな恰好をして、甘い居睡りをつゞけてゐるのであつた。

里枝は、傍まで寄つて行つて、禎輔が、うつら〳〵と眠つてゐるのに氣が附くと、ちよつとの間その場に立ちすくんで、起すのを躊躇してゐた。

でも、やがて思ひ切つたやうに、その肩に、そつと手をかけると、

『禎輔さん』

と、呼んだ。

だが、聲が低かつたのだらう。禎輔は、眼をさまさなかつた。

『禎輔さん』

もう一度、今度はいくらか強く呼んで、手をかけたままでゐた肩さきを、そつと搖すつて見た。

すると禎輔は、ハツとしたやうに、頭をもたげ、惚えたやうな眼つきをして、振り返つたが、

『何んだ、里枝さんぢやないか。びつくりした』

と、言つた。

『こんなところで、居ねむりをなすつたりして、風邪を引くとイケないわ』

『日向ぼつこをしてゐるうちに、いつの間にか、いい心地になつて、ついうと〳〵と、眠つてしまつた』

と、禎輔は笑つたが、思ひ切つて兩手をのばして、大きく一つ伸びをした。

『お手紙が來ましたの。だから、持つて來てあげたの』

『どこから?』

『東京からよ』
『誰からだらう？』
と言つて禎輔は、首をかしげるやうにしてゐた。
東京から來たのなら、きつと君江の母夫人からか、さうでなければ、親友の杉村からか、二人のうちのどちらかに違ひないと思つた。が、里枝は、手紙を持つて來たと言ひながら、ふところにでも入れてゐるのか、すぐに出してはくれなかつた。
『誰から來たのか、當てゝご覽なさい。當てなければ、出してあげないから
里枝はさう言つて、つと顏を反けてしまつた。
チラと禎輔が見たところでは、いつの間にか里枝の瞳は、涙ぐんでゐるやうな氣がしたし、表情が固く硬ばつて、美しい横顏を見せてゐるのだが、長い睫毛が、かすかに慄へてゐた。

三

『どうしたの？』
禎輔は、急に變つてきた里枝の表情にびつくりした。

『何んでもないわ』
里枝は依然として、顏を反けたまゝ、かすかに答へたが、ポロリと一滴、眞珠のやうな露の玉が、瞼をあふれて大地に滴つたのを、禎輔は見のがさなかつた。
『なぜ、泣いてゐるの？　何か、怒つたんぢやない？』
禎輔には、里枝の樣子が、いよ〳〵解せなかつた。
『このお手紙、ご覽になるといいのよ。ほんとにひどいわ』
里枝は、精いつぱいの怨みを籠めて言ふと、ふところから一通の封書を取り出して、禎輔の眼の前に突きつけた。
見るとそれは、四角なピンク色の西洋封筒に、忘勿草か何かの模樣を刷つて、一眼で、女からの手紙だといふことが、すぐにわかつた。
そればかりではない。既に誰かゞ讀んだのだらう。無慘に封が、切られてゐるではないか。
『これが、僕に來た手紙なんですか？』
宛名は、たしかに禎輔になつてゐるのであるが、それを手に取る前に、とにかく一應、たしかめずにはゐられなかつた。――禎輔には、若い女性から、こんなに艶めかしい手紙など、貰ふやうな

心當りは、全くなかつた。

『ちやんと、禎輔さんの宛名に、なつてゐるぢやありませんか』

『それは分つてゐますが……誰か、封を切つてゐますね』

『えゝ。そのことは、わたし初めに、お斷りしなければならなかつたのですけれども、つい間違へて、わたしが切つてしまつたの……』

『君が？』

『えゝ。――でも、わざとぢやないのよ。女の人からの手紙だものだから、自分に來たのだと思つて、よく宛名を讀みもしないで、封を切つてしまつたの。さうしたら、すこし讀んで見ると。何んだかへんなんですもの。びつくりして宛名を見ると、あなたに來たお手紙だつたのよ。――間違へて封を切つたことは、ご免なさいね。その點は、わたし謝りますわ』

里枝は、殊勝に禎輔の前に、わざ〳〵頭を下げた。

『そんなことなんか、ちつとも謝つてくれなくたつて、いいけれども……それにしても、誰が、こんな手紙をくれたのかしら』

と訝しく思つて、首をかしげつゝ里枝の手から、手紙を受取つた。

裏を返して見ると、本郷眞砂町二丁目三十四番地野々宮初音と書いてあつた。

『何んだ、初音さんから來た手紙ぢやないか。ははゝゝゝ』

禎輔は、朗らかに笑つたが、さて、內容には、どんなことが書いてあるのだらう？　と思ふと、ちよつと不安になつた――初音は、親友の杉村と、相愛の仲である。もちろん禎輔との間に、人に知られて恥しいやうな、そんな疚しいわだかまりがあるはずはない。が、鄉里に歸つてくるのを、上野のステエションまで見送つてくれた時、この頃の杉村の態度に對して、何か慊りない節があるやうなことを洩らしてゐたが……その後、どうなつたのだらう？　と、偶と氣がかりになつた。

歸鄉してから十餘日になるのに、君江の奇禍を救つたり、引きつゞいてその祖父の死、それから父の第二の發作と、何やかやゴタ〳〵して、つい今まで、杉村にも、初音にも、一度の便りも出さないでしまつたが……何か變つたことでも出來たのではないかと、つい禎輔は不安になつた。

四

上野ステエションにお見送りしてより、早や十日、秋は、いよ〳〵深くなりまさり、都でも朝夕の寒さは、めつきり身にしむやうになりました。御地は東京よりもはるかに北に當り、且つ海拔

幾百メートルの高地とか、かねてのお話に伺ひをりますことゆゑ、定めて朝夕のお寒さも、一きはきびしきことゝお察し申し上げ、母や妹などとも、ともく〳〵にお噂いたしてゐます。

その後お父さまのご容態はいかゞでゐらせられませうか。これが近いところでしたら、何かとお手傳も出來ませうものを、遠く幾山河を隔つる身とて、心に思ふばかりにて、一向自由に任せず、ほんたうにかなしい思ひがいたします。ご相談申上げたいこと、お力にすがらねばならぬこと、十日ばかりお別れしてゐる間に、お話し申し上げたきこと山ほどつもり、若しわがこゝろのまゝになるものなら、すぐにもお傍まで飛んでもゆきたき思ひの切なるものがあります。

でも、それはわたくしの氣持だけ、何ほど思うても、現實の身には叶はぬことゝ諦めてゐます。

たゞ、ひたすらに願ふは、一日も早く、お父さまご回復の上、ご上京お眼もじの折を、お待ち申上げてゐます。

いろ〳〵申上げたきことがございますが、只今のところ、とてもこの不束な筆には盡されませぬ。

何卒々々、お歸りの日を、お待ち申げてゐます。

×

レターペーパーにペンで、美しい筆蹟だつた。

なるほど、禎輔が讀んだところでは、べつに深い意味があるとは思へない。骨肉の兄のやうに慕ひ、賴りにしてゐる間柄としては、あまりに當り前過ぎる手紙である。でも、二人の關係など、何んにも知らない里枝などが、突然、この手紙を見たら、何か意味があるやうに感じ、をかしく思ふのも無理はないやうな氣がした。

禎輔は、どう言つてこのピンク色の手紙の誤解を解いたらいいだらうと、ちよつと思案にくれた。

愛のあかし

一

里枝の小さな胸の中に、禎輔に對する窃かな戀ごころが萠え初めたのは、いつの頃からだらうか？

それは、里枝自身にも、ハツキリとは分らなかつた。

小さい時から、同じ家の内で、まるで兄妹のやうに仲よくして、育つてきたのである。——里枝

が兄のやうに慕へば、禎輔は、妹のやうに可愛がつた。

禎輔のはうでは、いつまで經つても、小さい時分からの里枝に對する妹のやうな氣持に、ちつとも變りがなかつた。けれども里枝は、だん〳〵年頃になつて、いろいろに感情が眼覺めてくるに從つて、いつまでも小さい時のまゝの氣持では、ゐられなかつた。兄に對するやうな懷かしさは、いつの間にか、戀人に對するやうな慕はしさに、變つてゐるのであつた。

だから、今まで口に出しては、自分のほんたうの氣持など、一度も打ち明けたことはなかつたし、そんな機會などもなかつたけれども、心の中では、どれくらゐ禎輔のことを、戀人として思つてきたか知れない。それとなく思ひを通はせるやうな手紙だつて、幾度も書いて送つたこともあるし、たま〳〵禎輔が學校の休暇で歸つて來た折りなどに、顏を合せると、いつでも里枝は、それとなく自分の心持を、素振りのはし〴〵に、通はせたつもりであつた。

でも、禎輔のはうでは、氣が附かないのか、それとも氣が附いてゐるくせに、わざと知らないふりをしてゐるのか？　里枝の氣持など、ちつとも汲んでくれようとはしなかつた。いつまでも小さい時のまゝに、妹に對するやうな氣持に變りがないことが、里枝は物足りなくもあれば、焦れつたくもあり、また、怨めしくもあつた。

それが、今度、禎輔の父が、突然病氣で倒れたのを機會に、二人の間が、小さい時から、親と親との間で約束された許婚の仲であることが分り、禎輔が、大學を卒業するのを待つて、二人は結婚しなければならないのだと言ひ渡されて、里枝としては、こんな嬉しいことはなかつた。

里枝自身、ひそかに望んでゐたことが、親同志の間の固い約束であり、新たに命令として、禎輔の父の口から、ハツキリと言ひ渡されたのである。

父と同じやうに可愛がつてくれ、長い間仕へてきた禎之進の病氣は、かなしくないことはなかつた。でも、里枝としては、禎之進が病氣になつたのを機會に、自分と禎輔との間が、單なる兄妹のやうな仲好しであるばかりではなく、許婚の仲であつたことを知り、二人が結婚するやうにと、命令されたことは、うれしかつた。――病氣の禎之進には、わるいかもしれないけれども、里枝は、こんなうれしいことはなかつた。

式こそ擧げないけれども、自分は既に、禎輔の妻だと思つてゐる！　二人は一生涯連れ添うて、離れることのない夫婦だと思つてゐる！　それだのに今、東京の見知らない女から、なまめかしい手紙などが來たのを、見たのである。

里枝の心が穩かでないのは、無理もなかつた。自分でも端ないと思ひながらも、嫉妬の焰が胸を

焦がすし、癪にもさはれば、腹が立つた。どんな女か、正體も、素性もわからず、また、どの程度の關係かも、一向わからないために、里枝としては一層嫉妬を煽られ、不安に胸を掻き立てられずにはゐられないのであつた。

二

手紙には、べつにこれといつて、怪しむやうな具體的なことは、何んにも書いてはないのである。でも、その甘えたやうな感情や、頼り切つてゐるやうな氣持を、ちつとも隠さうとはせず、懇へるやうに綿々として書きつらねてゐるところは、どうしてもアカの他人とは思へない。

里枝は、果して禎輔が、どんな顔をして讀むだらうか？　それに依つて二人の關係を、判斷しようと思つた。一行々々禎輔の眼が、手紙の文字を追うて走るのを、里枝は息を呑むやうにして、じつと熱心に見まもつてゐた。

すると初めには、禎輔の顔に、さつと驚きの色が現はれたが、それがだん〳〵、困惑の表情に變つた。そして、手紙を讀んでしまつても、しばらくの間は、文面から視線を離すことが出來なかつた。

それは禎輔としては、何んと言つて里枝の前に説明したらしいのかと、困惑したのであつたが、里枝としては、餘計、疑惑を深めずにはゐられなかつた。

『その手紙を書いた、野々宮初音さんて、どんな方？』

里枝は、いつまでも禎輔が、だまつてゐるので、たうとう我慢が出來なくなつたやうに聞いた。

若い女の一途な嫉妬と、憤りとを隠すことが出來ず、その眼は涙ぐみ、その聲は、かすかに慄へてゐた。

『どんな人つて……、この人は、僕が下宿してゐる家の娘さんなんですが……』

と、禎輔は手紙から眼を離すと、口ごもつた。

『あら。それでも今まで、下宿してゐらつしやるお家に、こんな美しい娘さんがあるなんて、一度だつて、おつしやつたことがなかつたわ』

怪しいと思ひ込むと、何から何まで、すべてが怪しく感じられる。――嫉妬に煽られる里枝には、まだ、一度も會つたことも、見たこともない初音の姿までが、ハツキリと見えたばかりではない。その美しい娘と、禎輔との交渉までが、あり〳〵と眼の前に浮んで、見えるのであつた。

『さあ……美しいか、どうか分らないけれども……とにかく、溫和しい性質ではあるが』

『きつと、美しいに違ひないのよ。わかつてゐるわ。——美しくて、温和しくて、それでその娘さんが、禎輔さんの氣に入つたんだわ』

『そんなつまらないことを……獨りで決めてしまつても、困るな』

『わたし、一人で決めてゐるんぢやないわ。——何んでもない人が、どうしてそんな媚めかしい手紙を、寄越したりするでせう?』

『父がないし、お母さんは病氣勝ちだし、きつと心細いんだよ』

『いくら心細くたつて、女の人が、アカの他人に、そんな馴れ馴れしい手紙なんか、書くはずはないわ。——わたしだつて、お兄さまに、そんな手紙を、一度だつて、差上げたことはなかつたわ』

『この手紙は兎もかく、僕と初音さんとは、實際、何んでもないのだから……この手紙のために、里枝さんに氣をわるくされたり、へんに疑はれたりすると、僕は困つてしまふ』

情にもろく、氣の弱いところのある禎輔は、當惑した。

『ぢや、何んでもない人が、どうしてお兄さまのところに、こんな手紙を寄越したりしたの?』

『それは、僕にもわからないけれども……』

『それぢやあんなさい』

『だつて、この手紙に、ちつとも怪しいことなど、書いてないぢやないか。——つまり初音さんは、僕の友達と戀仲なんだけれども、その友達が、この頃急に、冷淡になつて來たといふので、僕が、こちらに歸つて來る時にも、ひどく心配してゐたから……それで心細いものだから、きつと、この手紙を書いたのだと思ふ』

『あら。ぢや、初音さんといふのは、お兄さんのお友達の戀人なの?』

里枝は、その娘が、禎輔の友達の戀人だと聞くと、すぐに氣持が明るくなつた。——友達と戀仲である以上、忌はしい三角關係などがあるものとは思へなかつたし、若し、自分の戀人であるなら、友達の戀人だなどと、そんなウソが吐けるものではないと、里枝は自分の純眞な氣持から、固くさう信じないわけには、いかなかつた。

三

『杉村といふ友達なんだ。僕といつしよに、やつぱり野々宮さんの家に、下宿してゐるんだけれども、杉村と初音さんとは、疾つくから戀仲なんだ』

禎輔は、里枝の疑ひが晴れてゆくことが、うれしかつた。

『まあ。さう！　では、そのことを、早くおつしやればいいのに』
『大學を卒業したら、正式に結婚することになつてゐるんだけれども……』
『それぢや、わたしたちと、ちやうど同じことだわね』
と言つて、ニッコリすると里枝は、幸福にかゞやくやうな眼をして、禎輔の顏を見入つた。
『だが、それを初音さんは、杉村が冷淡になつたといつて、心配したり、心細がつたりしてゐるのだよ』
『まあ。それが若しほんたうなら、その方はお氣の毒だわね』
『だけど僕は、杉村は、そんな男ぢやないと、信じてゐるんだ』
禎輔は、自分の親友のために、つい熱心にならずにはゐられなかつた。
『でも、わからないわ』
里枝は、人のことだけれども、眉を暗くして、首をかしげた。
『どうして？』
『だつて、初音さんといふ方だつて、その杉村さんといふ方の心が、實際に變りもしないのに、冷淡になつたなんて、心配なさるはずはないと思ふわ』

『僕は、しかし、それは初音さんの思ひ過ごしではないかと思ふんだ。すくなくも杉村の人物を、十分信じてゐる僕から考へるとね』
『わたし、お二人とも、ちつとも知らないのだから、何んとも言へないけれども……でも、女の氣持なんて、自分の愛してゐる人のためには、とても眞劍なものですから、ちよつとしたことでも、敏感に感じるものよ。だから初音さんといふ方だつて、何んにも原因がないのに、そんな冷淡になつたなんて、自分の戀人のことをお感じになるはずはないと思ふわ。きつと、それだけの原因があるのだわ』
『原因？』
『えゝ』
『どんな原因が？』
『それは、よくわからないけれども……つまり、お二人の仲に、それだけの隙間が出來たのよ』
『そんなことを言つたつて、杉村は、とても眞面目な男だし、初音さんだつて、純情だし……、二人の間に、そんな隙間なんて、出來るはずはないんだ』
『でも、それはわからないわ。女の方が、どんなに眞面目で、純情でも、さういふ疑ひや、不安を

感じさせるだけに、やつぱり男の愛情に、きつと際間が出來てゐるのよ！　わたしには、よくわかるわ。――さうにちがひないといふことが』

里枝は、ムキになつて言つたが、それは初昔のために言つてゐるよりも、里枝の實感としては、何んだか自分自身のために、ムキになつてゐるやうな氣がするのであつた。

四

禎輔は、里枝の言ふことを、眼を見張るやうにして、聞いてゐた。

少女時代の無邪氣なさま〳〵な振舞ひが、まだ、眼の前にチラついてゐるやうな氣がするのに、いつの間に、こんな一人前の女らしい、大人のやうな分別くさいことを、言ふやうになつたのかと、不思議な氣がして、じつと里枝を、物をも言はずに、見つめずにはゐられなかつた。

『あら、お兄さまは、どうしてそんなに、わたしの顔を、ご覽になるの？　そんなに見ちや、イヤよ』

と、里枝は恥かむやうに顔を赧らめると、やさしく睨むやうに、禎輔の顔を見返したが、すぐに袂で恥かしさうなしなをすると、自分の顔を抑へてしまつた。

『だつて、僕は、不思議な氣がするんだもの』

禎輔は、眞劍な表情をして、まだ眼を見はつてゐた。

『どうして？』

『里枝さんは、いつの間に、そんなに大人になつたの』

『あら！』

と叫ぶと、里枝は顔を抑へてゐた袂を、ぱつと拂ひのけたが、禎輔の眞面目くさつた顔を見ると、お腹をかゝへるやうにして、笑ひころげてしまつた。――顔を眞赤にして、くつ、くつと聲を立てて、容易に笑ひ止まなかつた。

『どうしたんだ？』

と、今度は禎輔が、心配さうに眉をひそめた。

『だつて、をかしいですもの』

『何が、そんなに、をかしいんだ？』

『わたしだつて、いつまでも、子供ぢやないわ』

『それは、さうだけれども……でも、いつの間に、そんなに、すつかり大人になつてしまつたのか

と思ふと、僕は、不思議な氣がするんだ』
『不思議でも、何んでもないわ。いつの間にか、大人になるのが、當り前ぢやないの。若し、いつまでも大人にならなかつたら、そのほうが不思議だわ』
『……』
『お兄さんは、わたしを、まだ、子供だと思つてゐらしたの？』
『うん。何んだか、まだ、子供のやうな氣がしてゐたんだよ』
『まあ』
里枝は、半ば心外さうに、半ば怨めしさうに、禎輔を見やつた。
『それが、急に大人つぽいことを言ふものだから、僕は、つい面くらつてしまつたんだ』
『イヤね。それだからお兄さんは、今まで、わたしの氣持なんか、ちつとも、問題にして下さらなかつたのね』
『里枝さんの氣持つていふと？』
禎輔に聞かれて、里枝は、しばらくの間、じつと禎輔の顏を、まともに見つめてゐたが、急にパッと、眞赤になつて、

『あら！』
と叫ぶと、それまで腰掛けてゐた榻から、立ち上つた。
『意地わるね、お兄さまは』
立ち上つたまゝ里枝は、獨りごとを呟くやうに言ふと、つと顏を反けてしまつたが、その眼は、かすかに涙ぐんでゐた。
でも、禎輔は、里枝の涙などには、何んにも氣が附かず、
『どうして、僕が、そんなに意地わるなんだ？』
と、聞いた。
『だつて〳〵、お兄さまは、わたしの氣持が、おわかりにならないなんて、あんまりひどいわ』
里枝は、顏を反けて、背中を見せたまゝ、身を揉むやうにして、焦れつたさうに言つた。——瞼にいつぱい涙ぐんでゐたのが、長い睫毛を傳うて、ポロ〳〵と二三滴こぼれたけれども、背を向けてゐるので、それは禎輔には見えなかつた。
『……』
禎輔は默つて、慄へてゐる里枝の背中を、じつと見つめてゐた。——涙こそ見えなかつたけれど

も、泣いてゐることは、その身體ぜんたいの感じで、ハッキリ禎輔にも分つた。

（さうだつたか！）

今まで、ちつとも氣が附かなかつたけれども、心から（さうだつたか！）と、思はずにはゐられなかつた。

それは、まるでその時まで、瞳にぴつたりと貼りついてゐた鱗が、突然ぽろりと、剝げ落ちたやうな氣がした。そして、新たな氣持と、新たな感情とを以て、つく〳〵と里枝の可憐な姿を見直すと同時に、

（さうだつたのか！）

と、もう一度心につぶやいて、ほつと深い溜息を、吐かずにはゐられなかつた。

禎輔は、眼に見えない重い〳〵ものが、自分の肩にのしかゝつて來たやうな氣がして、身ぶるひした。

里枝は、相變らず拗ねたやうに向ふを向いてゐたが、その背中も、肩も、首筋も、かすかに〳〵慄へてゐるのが、いつ止むとも見えなかつた。

午後の日は、くわつと眩しいくらゐ、明るく照つてゐる。

母のねがひ

一

『お氣分は、いかゞですか？』

禎輔はノックして、いつもの優しい君江の聲が、返事するのを待つて、病室に入つて行つた。

君江は、まだ、自由に身體を動かすことは出來なかつたけれども、いい工合に餘病も出なかつたし、負傷の苦痛も、きれいに拭はれたやうに、癒えてゐた。たゞ、じつと安靜にして、骨折が完全に癒着し、傷ついた筋や肉が、十分に治癒するのを、待つてゐればいいのであつた。

身體に、どこといつて苦痛を感ずる部分もないのに、終日終夜じつとして、同じ姿勢で、ベットに横はつてゐなければならないといふことも、そのこと自身が、かなり退屈でもあれば、また、苦痛なことでもあつた……

だから、禎輔が斯うして、一日に一度か二度、病室を見舞つてくれることが、どんなにかうれし

く、待ち遠しいことでもあつた。――話をしてゐる間だけでも、退屈をまぎらすことが出來るし、また、苦痛を忘れてゐることも出來た。

『えゝ、いいの』

君江は、婦人雜誌を見てゐたのを、枕もとの小卓の上に置くと、ニッと甘えるやうな微笑を含んで、ベットに横はつたまゝ、眼だけで迎へたが、心のうれしさを、その美しい、明るい表情が、巧みに現はしてゐた。

こんなに喜んで迎へられると、禎輔も今では、この病室を見舞ふことが、そゞろに樂しく、ともすれば心は、君江の病室に走り勝ちだつた。

『好かつたですな。――早く苦痛が除れたから』

禎輔は、ベットの枕もとのはうに廻り、ちやうど、君江の顏が見える位置の小イスに着いた。

『これも皆、あなたのおかげですわ。――わたし、何遍も言ふことですけれども、どんなに感謝してゐるか知れないの。生命の恩人として』

と言つて、じつと禎輔の顏を見た君江の黑い瞳は、かすかに涙ぐんできた。――長い間、ベットに横はつて、センチメンタルになつてゐるからばかりではない。この頃の君江は、どうしたのか禎

輔の顏を見るたびに、つい涙ぐまずにはゐられない。――生命を助けられた恩人に對する感謝と同時に、細かなところにまで、心の行きとゞく禎輔のやさしさに對して、ついホロリとするやうな、甘い感動が、胸に迫つてくるのを、どうすることも出來なかつた。

『そんなに言はれると、却つて僕は、困るんです』

禎輔は、すこし照れないわけにはいかなかつた。でも、胸がわく〳〵するやうな嬉しさと、感動とに、全身を搖り動かされるやうな氣がした。

『いくら感謝しても、感謝し足りないと思つてゐるわ

君江が瞳をうるませて、さう言つた時、顏色を變へた一人の召使が、あわたゞしく入つてくると、

『あの、旦那さまが……』

と言つた切り、後が言へなかつた。

『えつ、お父さんが？』

と、言つた時には禎輔は、既にすべてを察して、イスから立つてゐた。

『お早く。どうぞ……』

召使は、呼吸が迫つて、思ふやうに口がきけなかつた、

二

召使の迎ひに、禎輔が急いで、父の病室に驅けつけた時は、禎之進は意識を失つてゐた。

禎輔が、父の身體に取りすがるやうにして、いくら呼んでも、叫んでも、その悲痛な聲も、禎之進の耳には、最早や通じないのであつた。瞼を固く閉ぢたまゝ、ぐつたりとなつて、すでに血の氣を失つたやうな土色の唇を、かすかに慄はせてゐた。

『仕方がありません』

禎輔よりも先に飛んで來て、禎之進の手首を掴んで、じつと脈を見てゐた助手の青柳さんが、しづかに、絶望的に言ふと、看護婦が、すぐに用意してきた水を、ガーゼに含ませた。

禎輔が、涙ながらに、父の唇を濕してやると、里枝も悲しさに咽び泣きながら、同じことをした。

明らかに三度目の溢血が襲つたのである、どうすることも出來なかつた ——最期の言葉を話す暇もなかつたし、たとへその暇があつたとしても、禎之進の舌は、一言だつて、完全な言葉を發す

ることは、不可能だつた。

でも、今更、何を遺言することがあるだらう

言はねばならぬこと、言ひ遺さなければならぬことは、曾つて禎輔が歸つて來た時に——まだ、第一回の發作で、禎之進の舌が自由に喋べれる時に、すつかり言ひのこしたはずである。

豫て、覺悟はしてゐたことゝは言へ、でも、實際、父の死に直面すると、禎輔は悲しいことも悲しかつたけれども、すべてのことが、何もかも一時に双肩に落ちかゝつた來たのには、面くらはずにはゐられなかつた。五百年以上もの昔から、この土地に連綿としてつゞいて來た名家として、實際の內情や、家政の狀態が、どうであらうとも、とにかく家柄に應じた葬式もしなければなかつたし、後始末なども、ナカ〳〵複雜で、面倒くさかつた。

禎輔としては、何度途中で、萬事を投げ出してしまひたいと思つたか知れなかつた。今までは、家事その他のことには一切無關係に、たゞ一途に、學業に勵んでゐれば、それでいい身分であつたのが、一時に、繁雜な事務の眞たゞ中に、飛び込んだのも同じことである。——つく〳〵と、やり切れない氣がするのも、無理はなかつた。

それにこの五六年以來といふものは、夏冬の休暇以外には、家庭に寄りついたこともなかつたの

で、家のことなど、何一つとして分らなかつた。

徒らにマゴ〳〵するばかりの禎輔のために、里枝と、吾助爺やとが、何かと力になつて、助けてくれた。

そして、どうにか父の葬ひもすまし、初七日もすましたと思つたら、急に債權者が、どつと押し寄せて來たのには、禎輔は、手も足も出なかつた。

所有の山林から、土地邸宅までが、すつかり二重三重の擔保になつてゐる上に、期限が疾つくに切れてゐるのであつた。——それを、とにかく父の禎之進が生さてゐる間は、その信用で、皆な猶豫してくれてゐたのである。

禎之進が死んだとなると、それ等の債權者たちが、我れ勝ちに押し寄せて來たのだから、これは禎輔ならずとも、手も足も出ないのが、當然だつた。

三

禎之進が亡くなると、すぐに知らせを受けた里枝の兩親は、取るものも取り敢ず、長野からやつて來て、何かと後始末の手傳ひをした。

が、葬式だけすますと、父の庫吉は、急いで歸つて行つたが、母のお峯だけは、後に殘つた。

しかし、お峯も、初七日をすますと、直きに歸らなければならなかつた。——長野の家は、相當に大きな生糸の工場をやつてゐる上に、父の庫吉は、公共の仕事にも、いろ〳〵關係してゐた。

或る日——

それは、初七日の墓參をすまして歸つて來ると、里枝は、まだ、着物を着換へずに、自分の部屋にゐるとこへ、母のお峯が、そつと入つて來た。

お峯も、歸つて來たまゝで、黑の紋附を着てゐた。——白髮のまじつた頭髮を、小さな丸髷に結ひ、田舍風に、黑々と鐵漿を附けてゐた。

『話があるんだけれども……』

お峯は、緣側の障子を閉め、そつと邊りの氣配ひを覗ふやうにしてから、その小肥りに肥つた身體を、火鉢の前の座蒲團に坐り、聲をひそめた。

『あら、さう』

里枝は、母が改つて話があるなどと言つても、重大なことには、考へもしなかつた。——自分も氣輕に、姿見の前から火鉢の傍に寄つて、火の上に兩手をかざした。

久しぶりにいつしよになつた母娘だけれども、しかし、二人だけで、しみ〳〵話をするやうな機會など、今まで取込みの中では、一度もなかつた。――火鉢を中に、母と子と二人が、斯うして顔を見合せたのは、これが初めてだつた。

『もつと早く、話さなければならないと、思つてゐたことだけれども……』

と言ひかけてお峯は、何か言ひにくさうに口ごもつた。

『どんなこと？』

里枝は、飽くまで無邪氣だつた。――母の話といふのは、きつと禎輔と許婚になつてゐることを、この際打ちあけるのだらうと思つてゐた。

（そんなことなら、わたし、疾つくに知つてゐるのに）

と思ふと、母の物々しい態度が、をかしかつた。

『わたし、明日は、歸らうと思つてゐるんだよ』

『まあ。――もう、お歸りになるんですか？

『歸らなければならないんだよ。――今、家では、大へんなところなんだから、一日も早く歸らないと……斯うしてゐても、心配で〳〵』

と言つて、お峯は剃り落した眉のあたりを、暗くすると、くつたくさうに、溜息を吐いた。

それでも里枝は、べつに何んにも氣が附かなかつた。――母が、急いで歸らなければならないといふのは、きつと家のはうが、忙しいのだらうと思つた。

『そんなにお家の仕事が、お母さんまで忙しいの』

と、言つた。

『何言つてゐるのよ。たゞ、仕事が忙しいだけぢやないのだよ』

『ぢや、何かあつたの？』

『大へんなことが、あるんだよ』

と言つて、母は息を呑んだが、里枝の暢氣さうな顏を見ると、今こゝで、何を言つたところで、仕方がないのだとでも、諦めたやうに、

『それで里枝、お前もいつしよに歸るのだから、今日のうちに、その支度をしなくちや、ならないの』

と、肝腎の用件だけを、ずばりと言つて、顏を反けるやうにした。

『えつ』

寝耳に水とは、このことだらうか。——里枝は、あまり思ひがけない母の言葉に、一度は我が耳を疑はずにはゐられなかつた。二重瞼の愛くるしい眼を、大きく〳〵見はつて、驚いたといふよりは、怪しむやうに母の顔を、いつまでも〳〵、じつと見つめて息を呑んだ。

『何もかも、今日のうちに片附けて、皆な一時に持つて歸るといふわけにも、いかないだらうから、とにかく始末だけして置いて、荷物は、また後で、誰かに取りに來させることにするといいよ』

お峯は、娘がびつくりしてゐることなどはよそに、顔を背けるやうにしたまゝ、しづかに言つた。

四

里枝は、母の言葉を聞いても、しばらくは默つて、母の横顔を、じつと見つめてゐたが、その双の眼には、見る〳〵涙があふれて來ると、

『わたしは、歸りませんから！　お母さま一人で、お歸りになればいいわ』

と、冷たく、きつぱり言つた。——でも、涙は瞼からあふれて、こぼれるに任したまゝ、拭はう

とはしなかつた。

『まあ！　里枝。お前は本氣で、そんなことを言ふの？』

それまで、落着きはらつてゐたお峯が、今度はあわてた。——眞直ぐに、里枝のはうに向き直ると、涙に濡れた里枝の顔を、まともに見つめて聞いた。

『えゝ』

と、里枝は強く頷くと、

『わたし、本氣ですわ。歸りませんから！』

と、固い決心を思はせるやうに、更にきつぱり言つた。

『歸らないつて、お前、こゝは自分の家ぢやあるまいし……たとへ自分の家だとしても、借金の抵當になつて、差押へになつてゐるのだから、イヤでも、どうでも、近いうちには、どうしたつてこゝから、立ちのかなければならないんだよ。——追つ立てを喰はないうちに、早く自分の家に歸つたはうが、利巧ぢやないか。お前には、自分の家があるんだもの』

そんなことを、いくら言ひ聞かされても、里枝の氣持が、納得するはずはなかつた。——たゞ、母の言葉が、あまりに冷淡なのが、里枝としては口惜しかつた。借金の擔保として差押へられ、近

いうちに追つ立てられなければならないことが分つてゐるなら、なぜ、せめてこの家屋敷のためだけにも、金を出して、救つてはくれないのか？　自分の娘さへ、連れて歸つてしまへば、後はどうならうと構はないといふのでは、我が親ながら、あまりに淺ましい。

『この家が、借金のために取られるなら、どうしてそれだけのお金を出しては、下さらないの？』

里枝は、詰るやうに言つて、怨めしさうな眼ざしに、母を見た。

『お金を出すつて……どこから出すのさ？』

『お父さんが、出して下されば、いいと思ふわ』

『お前、お父さんに、そんなお金があると、思つてゐるの？』

『ないはずはないでせう？』

『お前は、何んにも知らないのだから……』

と、お峯は涙をにじませて、かすかに溜息を吐いた。

『ぢや、お父さんにも、お金がないんでせうか？』

あんなに、盛大に事業をやつてゐる父に、この家屋敷を救ふくらゐの金がないなんて、里枝には、どうしたつて信じられないことだつた。

『今、お父さんは、そこどころぢやないんだよ』

『どうして？』

『家の中は、火の車さ。いつ破産するか、わからないんだよ』

『まあ』

『そればかりぢやないの。——里枝、もつと恐ろしいことがあるんだよ。お前は知らないけれども』

と言つてお峯は、またしても深い溜息を吐くと、肩をすくめた。

『もつと恐ろしいことつて……どんなこと？』

里枝も顏色を變へて、息を呑み、母の顏を見つめた。

『お父さんはね、今、公のお金を使ひ込んで、それを今のうちに辨償しておかないと、刑務所に行かなければならないやうなことに、なるんだよ』

と、聲をみそめて言つて、慴えたやうな眼をして、そつと邊りを見まはした。

『まあ』

そんなことゝは里枝も、今まで夢にも知らなかつた。——いざといふ時になれば、五千圓や、一萬圓の金なら、どんなことでもして、すぐに都合がつくと考へてゐたゝ、これからの禎輔の學費だ

つて、大學を卒業して、新たに醫院を開くにしても、その費用くらゐは、父から容易に出してもらへるものと、信じてゐた。

『どつちを向いても、皆な貧乏なのだわねえ』

里枝は、今にもわつと聲をあげて、泣き出しさうな、かなしい聲で言つた。

『ほんたうに』

と、お峯もつく〴〵言つた。

『だからお父さんは、今、そのお金をつくるために、毎日々々血眼になつて、奔走してゐらつしやるんだよ』

『一體、どれくらゐなの？　そのお金といふのは？』

『五千圓だけれどもね』

『どうして、それだけのお金が、お父さんに、都合出來ないの？』

『都合が出來れば、何んにも言ふことはないんだけれども……どうしても都合が出來ない時には、里枝、お前に頼まなければならないことがあるのだよ』

『えつ、わたしに？』

『お前の力で、そのお金の都合をして、お父さんを助けてもらはなければならないんだよ』

『だつて……わたしの力では、とてもそんな大金が、都合が出來るはずはないわ』

『ところが、お前が承知してくれさへすれば、それだけのお金を貸してくれるといふところがあるの』

『まあ』

『それは、東京の藝者屋なんだけれども……』

『えつ』

里枝は、藝者屋と聞くと、顏色を變へて、身ぶるひした。

彼女の決心

一

債權者の寄合ひが、土地の或る溫泉宿で開かれるといふので、禎輔も當然、家督を繼いだ責任

者として、その寄合ひに出席しなければならなかつた。

禎輔が、その寄合ひに出かけてゆく前に、里枝としては、どうしても一度會つて、話をしなければならなかつた。

寄合ひは、午後二時から開かれるといふのである。

禎輔が、遲いお晝の食事をすまして、ちよつと二階の書齋に上ると、その後を追つかけるやうにして、里枝が二階に上つて來た。彼女は、昨日、母のお岑から話を聞いてから、いくら母に催促されても、引き上げて歸る支度など、何一つせずに、自分の部屋に閉ぢこもつて、泣きひたつてゐた。——どうしたらいいか、わからなかつたが、とにかく、母といつしよに歸るのは、イヤだつた。況んやいくら父を助けるためとは言へ、藝者屋からお金を借りて、藝者になるなんて！ そんなことは里枝として、死んでもイヤだつた。——藝者になるくらゐなら、本當に死んでしまつたはうが、いいと思つてゐた。

母は、汽車の時間の都合もあるし、二時には、こゝを發ちたいと言つてゐる。——禎輔も、二時には開かれる寄合ひに、行かなければならない。

里枝が、禎輔の後を追つかけるやうにして、二階に上つた時には、二時までに、アト四十分しか

なかつた。

『お兄さま。——大へんなことになつてしまつたのよ』

里枝は、禎輔の傍に寄り添ふやうにして坐ると、行きなり言つた。——今朝から、まだ、碌に化粧もしてゐなかつた。クリームだけで、白粉氣のない顏が蒼ざめて、あまり泣いたせゐだらう。瞼のあたりが、腫れぼつたくなつてゐた。でも、年が若く、健康で、生き〳〵とした皮膚には、滑らかな彈力があつて、かゞやかしい珠のやうな美しさだけは、ちつとも衰へてゐなかつた。

禎輔は、机の上に、何か書類のやうなものを、ひろげて見てゐたが、里枝の言葉に、振り返つて、

『どうしたの？』

と、いつもの溫和しさに似合はない、何かを思ひ詰めたやうな里枝の强い調子に、びつくりした。

『わたし、お兄さまに、お願ひがあるの。どうぞわたしを、お兄さまの力で、救つていたゞきたいの！』

里枝は、熱にでも浮かされたやうな、物くるはしい眼を、ギラ〳〵とかゞやかして、すがり附き

でもするやうに、じつと禎輔の顔を見つめた。
『急に、そんなことを言つても、僕には、わからないけれども』
と、禎輔は息を呑んだ。
『わたしね……わたし、どうしたらいいか、分らないの！』
言つたかと思ふと里枝は、ハラ〳〵と涙を流した。
『一體、どうしたんだ？　わけを話してごらん』
と、やさしく言はれて、里枝は一層、胸が迫つたのだらう。
（わつ）
と、思はず聲をあげると、そのまゝ禎輔の膝に、泣き伏してしまつた。――悚へようとしても、悚へることが出來なかつたのである。

二

何も知らない禎輔は、いよ〳〵面くらつてしまつた。それでも、膝に突つ伏したまゝ、華奢な肩先や、脊中などをブル〳〵と慄はせて、咽び泣いてゐる里枝の肩に、やさしく手をかけてやりながら、彼女が泣きながら話すことを、くはしく聞いた。そして、話を聞いてゐるうちに、次第に彼の濃い眉は、さもさも途方に暮れたものゝやうに、暗くひそめられて行つた。
『困つたものだ』
と、禎輔は溜息を吐くよりほかなかつた。――いくら助けてくれと言つて、泣いてすがり附かれても、助けるために先立つものが巨額な金である以上、今の禎輔としては、どう考へて見ても、その力に及ぶことではなかつた。
『それでね、お兄さま。わたしは、決心したの！』
里枝は、不意に身を起し、顔を擡げると、涙に濡れた眼を、何か深い決心にキラ〳〵とかゞやかして、禎輔の顔を、突き刺すやうに見つめた。
『決心といふと？』
禎輔は、だじ〳〵となりながら、眼を伏せるやうにして聞いた。
『わたし、親も捨て、家も捨てゝ、逃げる覺悟をしたの。だからお兄さまも、わたしといつしよに、逃げてよ！　わたしたち二人が、いつしよにならうとするには、それよりほかに道はないわ』
『えつ、逃げる？

容易ならぬ里枝の決心に、禎輔はさつと顏色を變へた。

『えゝ、さうなの！　わたしは決心したの。ですから、どこでもいいから、連れて行つてちやうだい。外國だつて、滿洲國だつて、お兄さまといつしよなら、わたし、どこだつていゝわ』

『……』

『わたし、お兄さまと別れて、藝者になるなんて、死んでもイヤだわ！　ね、お兄さま。わたしを愛して……わたしを助けて……わたしを連れて、二人だけで、どこにでも、逃げてちやうだい』

情熱と、信頼と、決心とに慄へながら、愛する男の前に、身を投げ出さんばかりにして、一所懸命に言つた。

『……』

それでも禎輔は、呆然として、言ふところを知らなかつた。

『わたしが、これほどお願ひするのに、なぜ、默つてゐらつしやるの？　わたし、今、お兄さまに助けていたゞくことが出來なかつたら、藝者にならなければならないのよ。――一度藝者になつたら、わたしの身は、どうなるか、お兄さまには、わかつてゐらつしやらないの？』

『それは、わかつてゐるけれども……』

『わかつてゐるけれども、どうなの？』

『この際、二人が、いつしよに逃げるといふことは、どうかと思ふ』

『ぢや、おイヤなの？』

『二人が、いつしよに逃げてしまへば、すべてを破壞することになるだらう。――里枝さんのお父さんだつて、どうなるかわからないし……』

『さう！　それでお兄さまのお氣持は、よくわかつたわ。周圍のために――親や、家のために、お兄さまは、わたしに、藝者にでも、何んでもなれと、おつしやるのね！　よく分つたわ』

『イヤ、さういふわけではないが……』

と、禎輔が辯解しようとするのを、里枝は皆まで聞かず、

『いいのよ、もう何も伺はなくたつて、お兄さまのお氣持は、わたしには、よく分つたから！』

と言ひすてゝ、引きつるやうな、硬張つた表情をして、思ひ切りよく、さつと立ち上つた。――立ち上つて一歩、歩き出さうとしたが、よろ〳〵と眩暈でもするやうに、よろめいたが、ぱつたりとその場に、くづ折れてしまつた。

喰ひしばるやうにした齒と齒の間から、帛を裂くやうな鋭い悲鳴が洩れて、背が波のやうに慄

へた。

三

いよ〳〵家も、屋敷も、津川家の一切の財産を、投げ出さなければならないことに決つて、禎輔が寄合ひから歸つて來た時には、里枝は既に母といつしよに、長野に歸つて行つた後だつた。

禎輔は、何もかも一時に失つて、まるで氣ぬけのやうに、ぼんやりしてしまつた。

相寄るこゝろ

一

君江は、もう三日したら、東京に歸れるのだと思ふと、うれしくて堪らなかつた。——長い間の病床生活と、色彩も、變化もない田舍の生活には、飽き〳〵してしまつてゐた。思へば、實に長い〳〵五十日あまりの月日だつた。

でも、その間のことを振りかへつて見ると、何んだか夢のやうな氣がする。——恐ろしいあの瞬間限り、自分は死んでゐるはずのところが、何んの變りもなく、斯うして生きてゐるなんて！

（これも、まつたく、あの方のおかげなんだわ）

さう思ふと、どんなに感謝しても、感謝し切れない氣がする。——あの時、若し禎輔に助けられなくて、あのまゝになつてゐたら、今、斯うして生きてゐることは出來ないのだ。

美しい景色を見ることも出來ず、再び、東京に歸るのだといふ、この喜びも感ずることは出來ない。

（生命の恩人！）

君江は、口に出して、つぶやかずにはゐられなかつた。

津川醫院を引きあげて、別莊に落着いてから、もう三日經つのであつたが、その三日間、まだ、一度も禎輔に會はない。——醫院にゐる間は、毎日、三度や五度は、顏を見ない日とてはなかつたのに、それが斯うして三日も會はないと、まるで三月も三年もの長い間、會はないやうな氣がする。

（どうしてゐらつしやるかしら？）

と、思ふこゝろは、いつの間にか、

（なぜ、津川さんは、一度も訪ねて下さらないのだらう？）

と、かなしい怨みごころに變つてゐるのであつた。

（お忙しいのかも、知れないけれども……でも、どんなにお忙がしくたつて、來て下さらうと思へば、すぐに來られるはずだわ。こんな近いところだのに）

それは醫院にゐた時のやうに、同じ家ではないけれども、同じ土地である。道のりにしたら、もの〻十丁とは離れてゐないのである。——どんなに忙しくたつて、三十分か一時間の暇をぬすめば、ちよつと來れないことはないはずだ。

それを、一度も來てくれないのは、どうしたのだらう？　と、君江が氣にするのも、無理はなかつた。

二人の氣持は、五十日ばかりの間に、どちらからともなく、離れがたく惹きつけられてゐたから。そんな氣持など、お互ひに口に出しては、一言だつて打ち明けたことはない。けれども心と心では、いつの間にか、しつかりと結び附いてゐた。——もちろん、二人とも、さういふ相手の氣持など、知るよしもなかつたけれども。

（やつぱり、まだ、何やかとお忙しいのだわ）

と、君江は心の中で呟いた。——彼女は、禎輔の境遇や、事情などについては、何んにも知らなかつた。が、彼の父の死後は、何か一家がゴタ〳〵して、いろ〳〵忙しさうなことだけは、分つてゐた。だから、忙しいために、一度も來てくれないのだと思ひ、さう言ふことに依つて、心の寂しさを、自から慰めてゐた。

すると、意外にも君江は、自分に默つて、禎輔が東京に出發しようとしてゐるといふことを聞いた。

そのことを、偶と、君江の耳に入れたのは、別莊番の爺やだつた。

「えつ！」

君江は、顏色を變へて、卒倒せんばかりに驚いた。

『それは、本當なの？』

と、急きこんで聞いて、眼は一生懸命な光りに、キラ〳〵とかゞやき、血の氣の褪せたやうな唇から、呼吸が荒らかに、あへいでゐた。

二

君江が、縁側の籐椅子に凭つて、紹刺に夢中になつてゐると、そこへ爺やが、庭の掃除に廻つて來た。

爺やは萬吉といふ名で、古くからの土地の者であるばかりでなく、津川醫院の吾助爺やとも、友達だつた。

萬吉は、落葉を掃いて、ちり取りに入れてゐた。

『爺や』

君江は、紹刺の手を止めて、萬吉が落葉を掃くのを、じつと見てゐた。——細かい仕事に疲れた眼に、明るい晩秋初冬の白い日の光りが、チカ〳〵と眩しく沁みて、涙がにじんでゐた。

しんとした午後の靜かさ。

君江は、何がなし人なつかしさに、つい呼んで見た。

『へえ』

誰もゐるとは、氣が附かなかつたのだらう。——爺やは、びつくりしたやうに、振りかへつた

が、君江と顏を見合せると、につこりとした。

『これは、お嬢さま』

と、腰をかゞめるやうにして、下器用なお辭儀をした。

『少し、お休みよ』

『へえ』

『退屈だから、こゝに來て、何か話を聞かせて』

君江にさう言はれると、もぢ〳〵してゐた萬吉爺やは、やうやくそこの縁側の端に腰を降ろした。そして、腰の煙草入れを抜くと、鉈豆煙管で、刻み煙草を二三服吸ひながら、偶と、話が、津川禎輔の噂に及んだのであつた。——

『あそこの若旦那さまも、お氣の毒なことで……』

と言ひかけて、溜息を吐くと、涙ぐんだやうに、口ごもつてしまつた。

『お氣の毒なことつて……禎輔さん、どうかなすつたの？』

君江はハツとしたやうに、息ぜはしく、聞かずにはゐられなかつた。

『お嬢さまは、では、何もご存じありませんので？』

『知らないわ』
『あの家を追つ立てられて、いよ〳〵お立ち退きになるんでごぜえますよ』
『あの家つて？』
『醫院も、お住居も……兩方ともでがすよ』
『なぜ、追つ立てられたりするの？』
『借金のためでね。何しろ先代は、えらくこの土地のために働いた人ですが……その一方では、ずゐぶん派手に、金を使ひなすつたのでな。山のやうな借金が殘つて、それでも先代の先生が、生きてござらつしやる間は、どうにか持ちこたへてゐたのでごぜえやすがね。先生がお亡くなりになると、まだ初七日もすまねえうちから、借金取りが押しかけて來て、たうとう若旦那は、追ひ立てを喰つて、逃げ出さなければならないことになつたのでがすよ』
『それで禎輔さんは、どこに行らつしやるの？』
『東京だといふことでござえますだ。何しろまだ、大學のはうは、勉強中だといふことでがすからな』
『えつ、東京？』

『へえ』
『それで、いつお發ちになるの？　爺やは知らないの？』
『今日でごぜえますだ』
『まあ、今日なの！』
『へえ』
と、爺やは頷いて、
『わしもこれから、お庭の掃除をすましたら、ちよつくらお見送りに行つて來べえと、さう思つてゐるとこでごぜえますだが……』
と、煙管をボン〳〵と叩いて、吸ひがらを落すと、煙草入れを腰に差して、立ち上つた。

三

君江は、禎輔が家を追つ立てられて、東京へ出發するのだと聞くと、あまりの意外さに、しばしは啞然としてしまつて、なすところを知らなかつた。
（そんなはずはない）

と思つて見たが、しかし爺やが、ウソを吐くとは思へなかつた。

父の病氣の報に接して、大學を休んで來たのだといふことは、君江も知つてゐた。――だから亡き父の後始末が附いたら、いづれは、東京に出てゆかなければならぬのだといふことも、わかつてゐた。

だが、萬吉爺やから聞いたやうな事情で、土地からも、家からも、追つ立てられて、東京へ出てゆくことなど、夢にも知らなかつた。――しかも、その出發が、今日に迫つてゐるなどとは、知るはずもなかつた。

そんなに出發が差迫つてゐるのに、どうして禎輔は、そんなことなど、おくびにも出さなかつたのだらう？　若し禎輔が、このまゝ默つて東京へ出發してしまつたら、禎輔の行方は、わからなくなつてしまふではないか？

大學にゐることは分つてゐても、東京では、どこにゐるのか？　どんな宿にゐるのか？　そんなことは今まで、一度も觸れたこともなかつたし、禎輔の口から、聞いたこともなかつた。

（わたしに默つて、東京に行つてしまつて……禎輔さんは、わたしとは二度と再び、もうお會ひにならないつもりだつたのかしら？）

さう思ふと君江は、かなしさ、切なさに、思はず涙ぐまずにはゐられなかつた。同時に、どういふつもりか分らないけれども、そんなことなど、何んにも打ち明けてくれない禎輔の冷淡さが、君江は口惜しくもあれば、腹立たしかつた。

（わたしが、こんなに思つてゐるのに、人の氣も知らないで！）

と、唇の內側を、嚙みしめずにはゐられなかつた。

ぐづ〳〵してゐたら、今にも禎輔は、出發してしまふかも知れない。

『爺や

と、君江は呼んだ。

『へえ』

と、爺やが振り返ると、

『急いで、人力車を、一臺呼んで』

と、言つた。

君江は、あれ以來、自動車といふものは、考へるだけでも、何んだか恐ろしいし、氣味がわるかつた。

『どちらへか、お出ましになるのでごぜえますか』
萬吉は、びつくりしたやうに、君江の顔を見上げてゐた。
別莊には歸つて來たやうなものゝ、外出するなんて、思ひも寄らないことだつた。長途の汽車旅行も、まだ案じられるので、醫者が大事を取つて、歸京は三日先にと、決めてゐるくらゐである。
それを人力車なんか呼んで、どこに行かうとするのだらう？
萬吉爺やが、びつくりするのも、無理はなかつた。
『えゝ』
『どちらへ、行らしやるので？』
『津川さんのところまで、行くの』
『若し、ご用でごぜえやしたら、わしがちよつくら行つて來ますべえ』
『いゝえ』
と、君江は頭を掉つて、
『わたし、自分で直接、行かなければならないの！
と、强く言つた。

「お嬢さまは、まだ、お出歩きなさいましては、身體にわるいのでごぜえませう』
『いいのゝ！　そんなことは、自分でも知つてゐるから』
『ですから、わしが行つて、ご用を足してまゐりませう」
『爺や、お前は急いで、人力車を呼んでくれゝばいいのよ』
君江に强く言はれると、萬吉は、仕方がなく、
『へえ』
と言ふよりほかなかつた。
『では、急いでね！』
と、きびしく言ひつけておいて、君江はさつさと、支度のために、自分の部屋に入つてしまつた。

四

津川醫院の玄關に立つと、三日前に君江が、こゝを引きあげて、別莊に歸つて行つた時とは、すつかり樣子が變つてゐるので、びつくりした。

イヤ、邊りの有様は、そのままである。それにもかかはらず、家の中は、まるで空家のやうに、がらんとして、玄關に立つたゞけでも、何んとなく底冷たさが、ひし〳〵と感じられるのであつた。

見たところ、つい三日前までは、そこにおいてあつた大きい瀬戸火鉢も、銀泥に御所車を描いた、立派な衝立も、見當らなかつた。

廣い土間に置いてあつた、ステッキ立ても、植木鉢の臺も、それから、その上に置かれてゐる立派な松の植木鉢も、どこにも見えなかつた。

たゞ、敷臺の片隅に寄せるやうにして、スーツ・ケースが一つと、古ぼけた柳行李が一つ、麻縄でからげて、寂しさうに置いてある切りだつた。

（やつぱり、萬吉爺やが言つたことは、本當なんだわ）

君江は一歩、玄關の土間に入つて、あたりの様子を、一眼見るなりさう思つた。――そして、はげしく胸がとゞろくのを、どうすることも出來なかつた。はげしく胸がどゞろいたり、呼吸が切れたりするのは、必ずしも衰弱がすつかり回復しない身體を、無理をして人力車になど乘つて、こゝまで出かけて來たせゐばかりではない。

『ご免下さい』

君江は、しばらく土間に立ちすくんで、じつと胸をしづめてから、案内を乞うた。

だが、奥のはうは、しんとしてゐるにもかゝはらず、案内の聲が通じないのか、それとも誰もゐないのか、何んの返事も聞えて來なかつた。

『ご免ください』

再び、三度び呼んで、やうやく奥のはうで、返事があつたと思つたら、看護婦が、急ぎ足に出て來た。

でも、その看護婦は、白い着物など、着てゐなかつた。これから外出でもする時のやうに、さつぱりした銘仙の着物と、つゐの羽織を着てゐた。

『まあ！』

看護婦は、君江の姿を見ると、びつくりして、眼を見張つた。――君江がこゝに連れて來られた夜から、入院してゐる間中、何かといろ〳〵親切に、世話をしてくれた看護婦だつた。

『お出かけになつたりして、大丈夫でございますの？』

驚きが過ぎ去ると同時に、心配さうに聞いた。

『わたし、じつとしてゐられなかつたんですもの』
と、君江は呼吸を喘がせると、訴へるやうに言つた。
『どうかなさいましたの？』
『だつて、禎輔さんは、今日、東京にお發ちになると聞いたものだから、それで大急ぎで來たの』
『まあ』
『本當？』
『はい』
と、かすかに返事をすると、かなしさうに涙ぐんで、俯垂れた。——五年以上も津川醫院に勤めて、今では家族の一員も同じに、馴れ親しんでゐた看護婦だつた。わが家も同じやうに思つてゐるのに、今日を限りに、散り〳〵ばら〳〵に、別れなければならないのだと思ふと、つい悲しみが、胸にこみ上げて來ずにはゐなかつた。
『禎輔さんは、ゐらつしやる？』
と、君江は急き込んで聞いた。
『はい』

『ぢや、わたし、すぐにお眼にかゝらなければならないから』
と言ふなり君江は、看護婦が取次ぐのも待たずに、家のうちの案内は、豫て知つてゐるので、つか〳〵と上ると、奥のはうに消えた。
看護婦は、ぼんやり後を見送つたまゝ、留めようともしなかつた。

沒落の底に

一

家の中は、まるで空家と、同じことであつた。
醫院の器具や、醫療機械のたぐひも、どこかに、すつかり片附けられてしまつてゐたし、住居のはうの家財道具も、いつの間にか、きいれに、どこかに運び去られてしまつてゐた。
君江は、構はず奥に入つてゆくと、父の亡くなつた部屋の縁側に、禎輔は制服に着換へて、ぼんやり立つてゐた。

でも、君江が來たことなどには、ちつとも氣が附かなかつた。——亡くなつた父が好きで、丹精してゐた盆栽なども、すつかりなくなつて、荒れ果てた庭に、じつと寂しさうな眼をやつてゐるのであつた。その眼は、かなしさうにうるんでゐたが、でも、君江のはうには背中を向けてゐるので、わからなかつた。

『禎輔さん』

君江は、すこしフラ〳〵するやうな足もとをして、よろめくやうに近づいてくると、二三尺くらゐ離れたところから、堪らなくなつて呼びかけた。

『え』

誰ともわからないけれども、不意に呼びかけられて、禎輔が振り返つて見ると、夢にも思ひがけない君江の姿が、蹌踉として立つてゐるではないか！

『君江さん、どうして？』

と言つた切り、息を呑んで、後の言葉がつゞかなかつた。

『ひどいわ。——禎輔さん、ほんとにひどいわ」

君江は、禎輔の顏を見た刹那、わつと聲をあげて、その胸に取りすがつて、思ふさま泣きたいと

ころを、それでもぐつと抑へた。

だが、胸いつぱいに溢れてゐる怨みを、やうやくそれだけ言ふと、喉がしめつてきて、鼻がつまつて、後はもう、何んにも言へなかつた。

『どうしたんです？』

禎輔は、自分のはうから、二三歩君江の傍に近づくと、フラフラとして、今にも倒れさうに危つかしい彼女の身體を、支へるために、そつと抱いてやらなければならなかつた。

『……』

君江は力なく、くつたりと禎輔の腕の中に、凭れるやうになつて、默つてゐた。——じつと、しづかに瞼を閉ぢてゐたが、黑い、長い睫毛には、露のやうな涙の玉が、連なつてゐた。

『無理をして、身體に障つたら、どうするんです』

禎輔は、君江のくつたりしたやうな身體を、やさしく兩腕にかゝへたまゝ、窘めるやうに言つた。

『だつて、それは、あなたがわるいんですもの』

君江は、ぱつちり眼をあけて、涙にうるんだ瞳で、禎輔の顏を、じつと懷かしさうに見つめなが

ら、いくらか甘えるやうな調子で言つた。
『どうして？　』
『皆な、聞いたわ』
『何を？　』
『あなたは、わたしに默つて、東京に行つてしまふおつもりだつたんでせう？　知つてゐるわ』
『誰から聞いたんです？　』
『いいぢやないの、誰から聞いたつて。ね、さうだつたんでせう』
『僕は、さうするほかにないと、思つたものですから』
『なぜ？　』
『すくなくも、さうすることが、一番いいと思つたのです』
『わたしに默つて、一人東京に行つてしまふことが？　』
『さうです』
と、禎輔はきつぱり言つて、つと顏を反けた。

二

君江は、禎輔の返事を聞くと、やさしく自分を抱へてゐるその手を、つと拂ひのけるやうにして、しやんとして、自分の力で立ち直ると
『本當に？　』
と言つて、燃えるやうな眼をして、禎輔の顏を見つめた。
『いろ〳〵事情を話したり、改まつて別れを告げたりすることが、辛かつたのです　幾度考へ直して見ても、僕には、とてもその勇氣がなかつたのです』
と言つて、禎輔は本當に辛さうに、溜息を吐いた。
『まあ』
『それに、何んにもお話せずに、あのまゝ默つて、お別れしてしまつたはうが、いいのだと思つたものですから。いろ〳〵お話をしたり、別れを告げたりすると、却つて僕は、何んだかあなたに、別れられなくなるやうな氣がしたものですから』
『では、わたしがお訪ねしなければ、あのまゝ永久に二人は、別れてしまふつもりだつたのね？』

『でも、さうするよりほかに、仕方がなかつたのです』
『まあ、ひどいわ。人のこゝろも知らないで！』
『……』
『さうしたら、二人は二度と再び、會へないぢやないの！』
『さうです。二度と再び、あなたには會はない決心だつたのです』
『まあ、ひどい人！』
君江は叫んで、怨みをこめた瞳を、じつと禎輔にそゝいで、
『そんなことは、わたしイヤです。――あなたが、そのつもりでも、わたしはイヤですから』
と、必死になつて言つた。
君江のその一生懸命の言葉と、思ひつめた眞實の態度とは、禎輔の胸を、はげしく打たずには措かなかつた。
『では、どうしたらいいのです？』
『なぜ、わたしに、正直に打ち明けて下さらないのせう？』
『あなたに、正直に打ち明けたところが、どうなるのです？』

『どうにでも、わたしに出來るだけのことをするわ』
『……』
『わたし、あなたが困つてゐらつしやるのを、そのまゝにして、知らん顔をしてゐるわけに、いかないわ』
『……』
『どんなことでも、打ち明けて、相談して下されば、いいのに』
『ですが、僕は、あなたにご迷惑をかけたくないのです』
『迷惑ぢやないわ』
『僕が、今困つてゐるのは、金の問題ですから……』
『知つてゐるわ』
『だから、あなたの力を借りるわけに、いかないのです』
『どうして？』
『僕は、すべてのものを失つてしまつた。でも、自尊心だけは、まだ、失ひたくないのです』
『わたしの厚意を受けることが、そんなに、あなたの自尊心を、傷つけることでせうか？』

と言つて、かなし氣にうるんだ君江の瞳が、じつと禎輔の顏にそゝがれて、瞬きもしなかつた。

『……』

『あなたの氣持が、わたしに對して、そんなに他人行儀で、白々しいのだと知ることは、わたし、とても悲しいわ。――わたしの本當の氣持を、どうぞ知つていたゞきたいと思ふの』

『……』

『わたしは、こんなにあなたのことを、思つてゐるのに！　あなたのためなら、わたしの身などは、どんなになつてもいいから、盡したいと思つてゐるのに……それだのにあなたのはうでは、そのわたしの氣持など、ちつとも察して下さらうとはせずに、そんな水くさいことを、考へてゐらつしやるなんて！』

（ほんとうにひどい！）と言はうとして、後は言へなくなつて、初めて聲を忍んで啜り泣くと、寂然と沈默したまゝ立つてゐる禎輔の身體に取りすがり、その胸に顏を埋めてしまつた。

『君江さん！　ゆるして下さい！』

ほつと深い溜息と共に、切ない聲を絞るやうにして言ふと、禎輔は君江の小刻みに慄へてゐる背中を、やさしく、しづかに撫でてゐた。

三

助手の青柳さんは、醫院がつぶれてしまつた以上、仕方がないので、昨日のうちに、東京に歸つてしまつたし、ほかの雇人たちも、それ〴〵暇を出したので、お臺前のうちに、引取つて行つた。

たゞ、後に殘つてゐるのは、吾助爺やと、さつきの看護婦と　二人きりである。それも看護婦は、もう直きに、鄕里の信州まで、歸つてゆくはずだつたし、吾助爺やは、禎輔をステエションまで見送るといつて、どうしても聞かないのであつた。――見送つて置いて、この土地の或る旅館に、庭掃除の爺やとして、住込みむことに、話が決つてゐるのであつた。

だから、家の中には何んにもなく、空つぽの上に、人もゐないので、ひつそりしてゐた。

さつきから、緣側に立つてゐたので、君江は、かなり疲れたらしいことが、禎輔にもわかつた。

『お掛け下さいと言ひたいのですが、ご覽の通りに、椅子一つないのです。坐つていただくにも、座蒲團が一枚も、ない始末でして……』

禎輔は、氣の毒さうに、恥かしさうに、顏を赧らめた。

『いいわ、座蒲團なんか。わたし、こゝに腰掛けるから』

と言つて君江は、白つぽいホコリに汚れてゐる縁側に、平氣で腰を降ろさうとするので、禎輔はあわてゝ、

『では、失禮ですが、これでも敷いて下さいませんか』

と、傍に置いてあつた、自分のクレバネツトのオーバーを、敷いてやつた。

『すみません』

と、君江は素直に敷くと、禎輔の顏を見上げて、

『ね、わたし、お願ひがあるの』

と、言つた。

『僕に？』

『えゝ』

『どんなことですか？』

『これから、わたしの別莊に、いつしよに來ていたゞきたいの』

『あなたと？』

禎輔は、何んのために君江が、突然、そんなことを言ひ出したのか、さつぱり分らなかつた。

『えゝ』

と君江は、禎輔の顏を見上げたまゝ、うなづいた。

『ですが、僕は、これから東京へ、出發しなければならないのですが』

『だから、あなたの出發を、すこし延ばしていたゞきたいの』

『どういふわけで？』

『三日だけ延ばしていたゞきたいの。——さうしたらわたし、あなたと、ごいつしよに歸れるんですもの』

『……』

『ね、いいでせう？　その間に、あなたの將來のことについても、よくご相談して置かなければならないわ』

『……』

『なぜ、默つてゐるの？』

『……』

『おねがひですわ。——わたしの言ふことを聞いてよ』

『僕の將來のことゝいふと、どんなことですか？』
と禎輔は、初めておも〳〵しく、口をひらいた。
『あなたは、これから、どうして學校を、おつゞけになるつもり？』
と、君江は聞いた。
『そんなことは、まだ、何んにも考へてゐないのです』
『さうでせう』
『東京に行けば、親しい友人もゐますから……とにかく上京した上で、相談して見るつもりです』
禎輔の頭には、漠然と杉村のことや、初音のことが、思ひ浮んでゐるだけだつた。二人に相談したところで、どうなるといふ當てはなかつた。
でも、それよりほかには、今のところ、何んの當てもない。——石に嚙りついても、大學だけは卒業しなければならないと、固く決心はしてゐても、その學費の出るところなど、まつたく當てはないのである。溺れる者が藁をも掴むと同じことで、とにかく親友にでも相談して見て、それから何んとかするといふ、そんな空漠としたことよりほか、何んにも考へてはゐなかつた。
『でも、そんなことが、しつかりした當てになると思つて？』

と、君江は微笑をふくんで聞いたが、禎輔は悄氣て、
『それは、相談して見ないと、わからないのです』
と、言つた。
『さうでせう。——相談してご覽になつたつて、むつかしいものではないかしら……』
『その時には、僕は、苦學でも何んでもする決心です』
と、禎輔は悲壯だつた。
『苦學ですつて？』
『さうです』
『今のやうな時代に、そんな苦學なんかゞ出來るか、出來ないか、あなたにだつて、わかつてゐるぢやないの』
『しかし、決心一つだと思ふんです……たとへ出來ないまでも、倒れるまではやる決心です』
『ですから、そんな悲壯な決心をなさらなくたつて、あなたのこれからの學校のことは、わたしが引受けますわ』
『えつ』

禎輔は、君江の口から、そんなことを聞くのは、意外だつた。
『兩親に頼んで、きつと心配のないやうにしますから……安心してゐらつしやるといいわ』
君江の言葉は、頼もしかつた。――そんな厚意に甘えていいか、どうか分らなかつたけれども、現在の禎輔のためには、それは救ひの神が、突然現はれた如く、心強い限りだつた。

幸福の星

一

口に出して愛情を、誓ひ合つたわけでも、何んでもないけれども、しかし、二人の心と心とは、誓ひ合つたよりも、もつとしつかりと、結び合はされたも同じことだつた。言葉で約束するよりも先に、生活で結び附いたのである。
君江は、豫定よりも一日遲れて、東京に歸ることになつた。もちろん禎輔といつしよである。
東京から、誰か、しつかりした者が、迎ひに來るはずだつたが、禎輔がいつしよだといふので、

それも見合せになつた。――たゞ、君江が負傷して以來、東京の本邸から呼び寄せられて、ずつと病床に附き添つてゐた、ミネといふ召使が、やつぱり、いつしよに歸るのである。彼女は、四十年以上も波多野家に勤めて、もう六十歳近い年配だつたが、それでもナカ〳〵利かぬ氣で、身體も丈夫だつた。
M――ステエションまで、君江と禎輔と、ミネの三人は自動車だつた。見送りの吾助と、萬吉の二人の爺やと、荷物とは、馬車で行くことになつた。
『わたし、自動車に乘るのは　何んだか怖いわ』
君江は、一度ひどい目に逢はされて、自動車に對して慴え切つた心が、まだ、すつかり回復してはゐなかつた。――東京にでも歸つたら　どうか分らないけれど、もうこゝの危つかしい山道では、二度と自動車に乘る氣がしなかつた。
『大丈夫ですよ』
と、禎輔は笑つてゐた。
『だつて、また今度、崖から落るやうなことがあつたら、どうするの？』
と、怖ろしさうに肩をすくめ　眉をひそめてゐた。

『そんなことは、心配しなくても、幾度も繰返して、あることぢやないんですから』
『だつて、分らないわ』
『自動車を利用しなかつたら、何んで行くんです』
『馬車でも……』
『ははゝゝ。馬車のはうが、かへつて危いですよ』
『どうして？』
『自動車は機械だから、人間が運轉するでせう』
『えゝ』
『ところが馬車は、馬が引つ張るのですからな』
『それで？』
『畜生のことですもの。どんな拍子に驚いて、驅け出さないとも限らないし、どんな危つかしいところでも、見さかひもなく、飛び込まないとも限らないし……』
『まあ、怖いわ』
と、君江は蒼ざめた顔を、思はず兩手で掩うた。

『だから、自動車のはうが、どれくらゐ安全か知れませんよ』
『さうね』
『僕だつて、どいつしよに乘つて行くんですもの。大丈夫ですよ』
『ぢや、わたし、やつぱり自動車にするわ ——二度と、もうこんな怖いところには來ないから、いいわ』
そゐで君江も、やうやく自動車に乘ることになつた。
『僕だつて、もうこの故郷には、二度と歸る必要がなくなつたのだ』
と、禎輔は感慨ぶかく言つて、思はず嘆息せずにはゐられなかつた。

二

再び歸る必要のなくなつた故郷であるとは言へ、それでも五百年以來の祖先の地であると思へば、山も、川も、すべてのものが、禎輔に取つて、なつかしくないものはなかつた。
自動車の窓外に移り變る景色も、はるかの崖下に流れてゐる水の音も、今更の如くなつかしい。
『何をそんなに、ふさいで、考へ込んでゐらつしやるの？』

自動車は、曲りくねつた道を、三十キロか、せい〳〵三十五キロくらゐまでの速力で、ゆつくりと走つてゐる。——君江は、さつきから默り込んだまゝ、すこしうるんだやうな眼を、窓の外にやり、さうかと思ふと、輕く溜息を吐いたりしてゐる禎輔の、端正な横顏を覗くやうにして、につこりして、やさしく聞いた。

『故郷と別れを告げるのが、そんなに悲しいの？』

『イヤ……さういふわけではありませんが』

と、禎輔は口ごもつた。

『大學を卒業なすつたら、こゝに歸つて來て、開業なさるといいわ。——二度と、もう歸らないなんて、そんな頑固なことは、おつしやらないで』

『しかし、こゝには、もう家もないし、開業すると言つても、それだけの資本もないのだし……』

『だから、駄目だとおつしやるの？　でも、あなたが、若し、こゝに歸つていらつしやるなら、わたしだつて、どいつしよに、また來ますわ』

『ほんたうですか？』

と言つた禎輔の眼は、燃えるやうにキラ〳〵とかゞやき、呼吸は喘ぐやうに、大きく彈んでゐ

た。

『何もかも、知つてゐらつしやるくせに。わたしが、あなたのことを、どんなに一生懸命に思つてゐるかといふことは、ちやんと知つてゐらつしやるくせに』

俯垂れて、口早やに言ひながら、いつの間にか君江の柔らかな手は、禎輔の手を、そつと取つてゐた。

『君江さん！』

と言つて禎輔は、火のやうに熱い息を、ホツと吐いた。

『これからは、わたし、あなたのゐらつしやるところなら、どこでも一緒にゐるの！　一生涯、離れないわ』

君江は、かすかに慄へる聲で言ひながら、その華奢な手は、喰ひこむやうに強く〳〵、禎輔の手を握りしめてゐた。

『君江さん……』

喘ぐやうに言つて禎輔も、一生涯離さじといふやうに、固く、しつかりと、君江の手を握り返した。海拔三千尺に近い標識を示す高い山の初冬である。身を切るやうな寒さだのに、それでも二人

とも、しつとりと汗ばんでゐた。

ミネは、何も知らずに自動車に搖られて、さつきから、いい心地さうに、居眠りをしてゐた。

三

父は亡くなり、家も、財産も、すつかり失つてしまつて、禎輔は、ほんたうに心細い身の上と言はなければならなかつた。——それにもかゝはらず、彼は幸福だつた。こんな嬉しいこと、こんな悅びは、生れて一度も感じたことはない。

それと同時に、新しい希望が、その胸に燃え、漲つてゐた。——この希望の光りが、消え失せない限りは、どんな苦勞も、困難も、すこしも恐ろしいとは思はなかつた。いかなる荒波も、十分の勇氣と、自信とを以て、美事に乘り切つて見せる！　といふ意氣に溢れてゐた。

まつたく、人間には、一寸先きの運命は、わからないのだ！　禎輔は、現在の悅び、現在のこの希望が、やがて自分の胸を腐蝕するやうな、恐ろしい毒の汁にならうなどとは、幸福に有頂點になつてゐる今、夢にも考へて見ることが出來るはずはない。現在の二人の愛と、希望と、幸福とは、永遠に變ることがないものゝやうに信じて、疑はなかつた。

東京に行くといふことが、うれしかつた。自動車の中でも、汽車の中でも、君江と二人、いつしよにゐるといふことが、とても幸福だつた。

口をきかなくてもいい。手を握り合はなくてもいい。——ただ、斯うして君江の傍にゐて、彼女の瞳が微笑むのを見、二人が顏を見合せて、かすかな溜息を吐くだけで、それでもう禎輔の胸は、幸福の甘い切なさで、いつぱいになるのであつた。

禎輔の希望と、悅びとを乘せた汽車は、まつしぐらに、東京へ〳〵と、走つてゐる。關山、田口、柏原と過ぎる頃には、短い初冬の日は、既にあわたゞしく暮れ初めて、陰慘に曇つた空は、黑く〳〵地の上に押しかぶさつて來るやうに、車窓の外は、だん暗く〳〵なつてくるのであつた。でも、繼を得た喜びと、幸福に有頂天になつてゐる禎輔には、北國特有のこの寂しい初冬の夕暮れの景色を見ても、氣持が滅入るやうなことはなかつた。

禎輔は、眼に見るもの、耳に聞くもの、何もかも樂しく、心が浮き〳〵して、踊り出したいやうに、燥いでゐた。——でも、それは彼の氣持だけのことで、身體は行儀よく、君江と向ひ合つたクッションに腰掛けて、二人は、時々眼を見合はせては、どちらからともなく、ついにつこり微笑を交して、そのまゝホッと、幸福に滿ちた輕い溜息を、吐くのであつた。

偶と、禎輔が氣が附くと、汽車は、どこかのステエションに停つてゐた。

（どこだらう？　）

と思つて、窓の外をのぞくと、仄暗いプラットホームには、降りる客、乘る客が、ごた〳〵してゐた。

『ナガノ、ナガノ』

と　呼び歩く驛夫の聲。

『あつ』

禎輔の眼の前に、いつの間に乘り込んで來たのか、里枝が、しよんぼりと立つてゐるではないか。

奇蹟の邂逅

一

禎輔は、何んだか　夢を見てゐるやうな氣がした。

すぐには、自分の眼を信ずることが出來なかつた。――今の今まで、里枝のことなど、すつかり忘れてしまつてゐたのである。自分が新らしく得た戀の仕合せに、自分に對する里枝の戀のかなしさなど　思つて見る暇もなかつたのである。汽車は、長野のステエションに停つてゐるのに、ここが里枝のゐるところだとは、思ひ出しても見なかつたのである。だから、突然自分の眼の前に、里枝の姿が、しよんぼりと立つてゐるのを見た時には、咄嗟には禎輔は、自分の眼をも、信ずることが出來なかつた。――夢を見てゐるやうな氣がした。

でも、次ぎの瞬間には、こゝが長野だといふことに氣が附いた。それなら里枝が、斯うして突然、自分の眼の前に立つたといふことも、決してあり得ないことでも、何んでもない。

夢でもなければ、不思議でもなく、偶然、同じ汽車に乘るといふことだつて、あり得るはずだし、また、或ひはわざ〳〵、自分に會ひに來たのかも知れない。――しかし、それにしては、自分がこの汽車に乘つてゐることを、里枝は一體、どうして知つたのだらう？

そんなこととは知らずに、偶然、乘り合せたのだらうか？　それなら、これからどこへ行くのだらう？

東京へか？

里枝の姿を見た瞬間、禎輔の頭には、その想念がムラ〳〵と、風のやうな素早さで、走りすぎた。

それは、ほんとに瞬きするほどの、短い間だつた。

『里枝さん』

びつくりして、しばらくの間に口も利くことが出來ないで、たゞぼんやりと、里枝の顏を見つめてゐた禎輔が、やがて心を落着けて、呼びかけた。

『はい』

里枝のはうでも、意外らしかつた。——何も知らずに、汽車に乘つて見ると、そこに思ひがけもなく禎輔の姿を見出して、呆氣にとられたのだらう。——禎輔から呼びかけられるまでは、默つて、不思議さうに眼を見張つて、禎輔の顏をマジ〳〵と、見まもつてゐるだけだつた。

が、それでも禎輔から、我が名を呼びかけられると、かすかに返事をしたけれども、見る〳〵双の瞳がうるんでくるのを、どうすることも出來なかつた。

『どこかへ、行くんですか？』

と、禎輔が問くと、

『えゝ』

と、里枝はうなづいた。

『どこへ？』

『東京ですわ』

『一人で？』

『いゝえ』

と言つて、里枝がチラと振り返つたはうを見ると、そこには二人の男女が、座席に着かうとして、帽子をぬいで網棚の上に載せたり、膝掛をシートの上に擴げたりしてゐるところであつた。

『あの人たちが、里枝さんと、いつしよに行くの？』

と、禎輔は二人のはうを見て、眉をひそめた。

『えゝ』

里枝は、恥かしさうに微かに言つて、ほのかに顏を赧らめた。——そんなに長く顏を見なかつたわけでもないのに、里枝は、ひどく顏の色がわるかつたし、かなり憔悴れてゐるのが眼立つた。

禎輔の家にゐた時のやうな若々しさや、明るさや、潑剌とした快活さなどは、どこにも見えず、

しばらく病氣でもしてゐた後ではないかと思はれるほど、元氣もなかつたし、かなしさうだつた。

さすがに禎輔は、そんな悄然とした里枝の姿を見ると、哀れさに胸がいつぱいになつた。

二

里枝の連れといふ人たちは、一見して花柳界の人だといふことが、禎輔などの眼にも、よくわかつた。

あんな人々といつしよに、里枝が東京に行くなんて。

それでは里枝は、いつか泣いて話してゐたやうに、いよ〳〵藝者になるために、これから東京に連れられて行くところであらうか？　あれきり里枝の話など、思ひ出して見る暇もなかつたけれども、父を助けるために、五千圓とかの金を、とゝのへなければならないと言つてゐたのは、本當だつたのか。

（わたし、お兄さまと別れて、藝者になるなんて、死んでもイヤだわ！）

と、身を揉んで泣いてゐたのに、いよ〳〵これから藝者にならうとして、東京へ出て行くのか。

さう思つて禎輔は、暗然とならずにはゐられなかつた。

自分の力で、助けられるものなら、どうかして助けてやりたいが、先立つものが金では、今の禎輔には、どうすることも出來ないのであつた。

家も、屋敷もなくなつて、これからの自分の學資すら、人の世話にならなければならない境遇である！　いくら里枝が哀れでも、氣の毒でも、どうして救つてやることが出來るだらう！

禎輔は、腸を掻き裂かれるやうに辛かつたけれども、今の場合、どうすることも出來なかつた。

『ぢや、偶然いつしよになつたわけだね？』

と、禎輔が聞くと、

『えゝ』

と、里枝はうなづいたが、ふかい感慨をこめて、

『わたし、本當は、どうしても、もう一度會ひたいと思つてゐたの。一生懸命に祈つてゐた甲斐があつて、斯うしてお眼にかかれたんですわ』

と言つて、かすかに溜息を吐いた。――心に祈つた甲斐があつて、會ふことは會へたけれども、しかし禎輔は一人ではないのだ。禎輔が助けた令嬢――君江といつしよであることが、里枝はかな

しくもあれば、不安でもあつた。

その後の二人の關係など、里枝には何んにもわからなかつたけれども、睦じさうに、二人が同じ汽車に乘つて、東京へ出て行くところを見れば、里枝の胸は、怪しく波立たずにはゐなかつた。

――これが嫉妬といふのだらうか？　つんと取りすましてゐる美しい君江が、憎らしい氣さへしてくるのであつた。

『僕も、まさかこの汽車で、里枝さんに會ふなんて、夢にも思ひがけなかつたものだから、さつき里枝さんを見た時には、びつくりした』

禎輔は、斯うして君江と二人でゐるところを、里枝に見られたことは、いくらか極りがわるくもあつたし、更に里枝に對して、すまないやうな氣がするのであつた。――親と親とが決めた許嫁だから、禎輔には何んの責任もあるはずはない。殊に里枝は、一家の事情で親の手許に引取られてしまつたのである。

だから、許嫁の約束なども、誰が破るともなく、自然と解消してしまつたわけだが、それでも禎輔は、里枝自身の口から、切ない愛の告白を聞いてゐるだけに、こんな場合に遭遇すると、里枝に對して、すまない氣がせずにはゐなかつた。

『これから、東京に行らつしやるところなの？』

と、里枝がきいた。

『もう僕には、歸るべき故郷も、家もなくなつてしまつたのだ』

『それで、これから東京へ行つて、どうなさるの？』

『どんなことをしても、大學だけは、つゞけるつもりです』

『だつて、これからの學資など、どうなさるの？』

里枝が、心配さうに聞くと、それまで默つてゐた君江が、初めて口を挾んで、

『そのことは、わたしが引受けましたの』

と、言つた。

『あなたが？』

里枝は、何んだか口惜しさに胸が顫へてくるのを、抑へることが出來なかつた。でも、つとめて心を落着けるやうにして、念を押したが、その聲にも、緊張した態度にも、鋭い、挑戰的なものが含まれるのを、どうすることも出來なかつた。

『えゝ』

と、君江は冷やかに、誇りに満ちた態度で、うなづいた。

里枝は、口惜しさにぎり〳〵してくる氣持を、どうして紛らせることも出來なかつたし、さうかといつて、喰つてかゝるわけにもいかなかつた。

汽車は、長い鐵橋の上にでも、かゝつたのだらう。——急に、はげしいひゞきが、とゞろいた。

三

君江も、禎輔も、十時すぎた頃には、それ〴〵寢臺車のはうに行つてしまつた。でも、里枝は、今日からは自分の身で、自分の自由にはならなかつた。——二等車に乘るのすら贅澤かも知れないのに、況んや寢臺券を買ふどころではなかつた。

金を出してくれた藝者屋のおかみさんと、中に立つて、いろ〳〵世話をしてくれた人とが、寢臺車に行かないのに、里枝として、どうして自分一人で行くことが出來よう。彼女は、狹くるしいシートの上で、どうかして少しでも眠らうとして、氣ばかり焦つてゐたが、眠るどころではなかつた。汽車のひゞきが、絶えずゴト〳〵と、やかましく耳につく。その上、自分の身の上について考へたり、禎輔のことを思つたりして、眼は、ます〳〵冴えるばかりだつた。

父から拜むやうにして賴まれたり、母から泣いて賴まれて見ると、どんなイヤなことでも——本當に死ぬほどイヤなことでも、里枝はさすがに拒み通すことが出來なかつた。父を救ひ、母の嘆きを助けるために、まつたく死んだ氣で、承諾するよりほかはなかつた。

賣られて行くまでに、どうかしてもう一度、禎輔に會ひたいと、窃かに心に念じ、何かに祈つてゐた甲斐があつて、際どい場合に、奇蹟的に會ふことは會へたけれども、君江がいつしよのために、打ち解けた話など、何んにも出來ないうちに、二人とも寢臺車のはうに、引つ込んでしまつた。

里枝は、こんな味氣ない、かなしい氣持など、生れてからまだ一度も、味つたことがなかつた。——自分も禎輔の後を追つかけて、寢臺車のはうに行かうかと思つて、何度シートから立ちかけたか知れなかつた。でも、そんな端ない振舞ひをすることも、の內氣な女として、さすがに憚かられるのであつた。

車掌にさう言つて、呼んで來てもらはうかしら？　とも思つたけれども、それもやつぱり、躊躇された。

里枝は、身悶へするやうにして、あつちを向いて見たり、こつちを向いて見たり、それから幾度

も、深い、遣る瀬ない溜息を吐いた。――でも、いくら眠らうと努めても、眠られるどころではなかつた。十二時が過ぎ、一時が過ぎても、里枝はたつた一人で、眼がさめてゐた。

禎輔のことなど、すつかり諦めてゐたつもりであつた。自分では、諦めたつもりでゐても、やつぱり里枝の本心は、決して諦めてなどゐなかつたのに相違ない。――もう一度だけでもいいから、どうかして會ひたいと、心で祈つたり、斯うして奇蹟的に會つて見ると、更に二人きりで、もつと打ち解けた話をしたいといふ慾が出てくるところを見ると、決して諦めてなぞゐたのではなかつたのだ。

諦めなければならない。諦めるよりほかはない。諦めようと、理性では思つても、その實、里枝の本心は、理性通りに諦めてゐたのではなかつた。

(上野のステエションに着いてしまへば、それぎり、どうしても別れなければならないのだから)

今度別れたら、それこそもう永久の別れであらう。

禎輔は學生だし、自分は藝者にならなければならない身である。――同じ東京に住んでゐても、一人は學生で、一人は藝者では、自由に會へるわけはないのである。そしてまた、會つたとて何んにならう。――里枝が、ひそかに前途に描いてゐた二人の結婚などといふ希望の夢は、疾つくに破

れてしまつてゐるのだから。

でも、里枝は、このまゝ上野ステエションに着いて、飽氣なく別れてしまふのは、何んとしても物足りなかつた。もう一度、禎輔と二人だけで會つて、打ち解けた話をしなければならないと思つたし、若し、このまゝに打ち過ぎてしまへば、そんな機會は、永久に來ないのだといふ氣がして、焦らずにはゐられなかつた。

しかし、どんなに思つても、どんなに焦つても、さすがに里枝は、自分のはうから寢臺車に押しかけて行くことは、どうしても出來なかつた。

眠らうとしても眠れないし、じり〳〵してゐるうちに、夜は、ます〳〵更けてゆくばかりである。――絶え間もなく、ヤカましくひゞいてゐる車輪の音と共に、汽車は刻一刻と、二人の別れなければならない東京へ向つて、驀進して行きつゝあるので、里枝としては、餘計、氣を揉まずにはゐられなかつた。

こゝろの白刄

一

寢臺車に、行く者は行つてしまつたし、二等車は、ほとんどガラ空きといつていいほど、すいてゐたし、スチームが、とても溫かだつた。

それに里枝のほかには、眼をさましてゐる者など、一人もゐなかつた。——座席が空いてゐるので、皆な二人分の席を、一人で占めて、横になつてゐた。口をあけて、鼾をかいてゐる者もあれば、ムニヤ〳〵と、何かわけのわからない寢言を、時々喋べつてゐる者もあつた。

里枝は、皆な眠つてゐる中に、自分一人だけ眼をさましてゐることが、だん〳〵薄氣味がわるくなつて來た。——强ひて眼を閉ぢてゐると、間斷なく車輪の音が、耳にひゞき、瞬の裏側には、禎輔の面影が、燒き附けられでもしたやうに、アリ〳〵と浮んで來た。

樂しいこと、うれしかつたこと——曾つてのさま〴〵なことが、里枝の心を驅けめぐるのであつ

た。

『里枝さん』

偶と、誰かゞやさしく呼んで、かるく肩に手をおいた。

『え？』

びつくりして、眼をあいて見ると、そこに禎輔が立つてゐるではないか。——里枝はハッとして胸がとゞろいたが、夢だか、現實だか、わからないやうな氣がした。あまりに禎輔のことばかり思ひつゞけたものだから、今、とろ〳〵と眠つた間に、幻でも見てゐるのではないだらうか。

『眠つてゐたんですか？』

と聞かれて、里枝は、

『いゝえ』

と、あわてゝ頭を掉ると、につこりして禎輔を見上げて、

『お掛けにならないの』

と、言つた。

『僕は、どうしても、眠れなかつたものだから』

と言ひながら、里枝と向ひ合つたシートに腰をすろした。――ちやんと制服を着てゐた。

『わたしも……どうしても、眠れなかつたの』

と、里枝は言つたが、思ひがけなく禎輔のはうから、わざわざ來てくれたことが、とても嬉しかつた。――この瞬間、里枝は幸福だつた。

他に乘客はあつても、皆な眠つてゐるのである。この瞬間こそ、まつたく誰の眼もない、たつた二人だけの天地、二人だけの世界だつた。

この幸福が、いつまでつゞくか知れないけれども、里枝はうつとりした氣持に浸つてゐた――

二

『里枝さん、さつきは、傍にあの人もゐたし、思ふやうに話も出來なかつたけれども、一體、……どうしたといふことなの？　里枝さんが藝者になるなんて、僕には何んだか信じられないのだけれども……』

と、禎輔が沁みゝ〳〵言へば、里枝もつい涙ぐんで、

『わたしだつて、まるで夢のやうな氣がしてゐるのよ』

と、鼻をすゝつた。

『だつて、里枝さんの家が、どうしてそんなに困るやうになつたのか、僕には、合點がいかない』

『わたしだつて、詳しいことはわからないのよ』

『里枝さんの家が困るなんて、そんなことがあるはずはないやうに思ふんだけれども……あんなに盛んに、やつてゐたのだもの』

『でも、今、困つてゐることは、本當なの。わたしが藝者にならなければ、お父さまは、刑務所に行かなければならないところだつたのよ』

『何んと言つても仕方がないけれども、僕は、どうかして里枝さんを、助けてあげたいと思ふんだ……』

『あら、本當？　』

『しかし、里枝さんも知つてゐるとほり、僕は一文なしだからな。どんなに思つたつて、僕には、何んの力もないのだ』

『よく、わかつてゐるわ』

と言つて、里枝は思はず、すゝり泣いてしまつたが、

『でも、わたし、禎輔さんから、さう言つていたゞくだけでも、うれしいわ。——その心持を聞くだけで、わたしは、ほんたうに本望だわ』

と、涙に慄へる聲で、しかし心から言つて、ハンカチーフを取り出すと、そつと瞼を抑へた。

『僕は、里枝さんに、ゆるしてもらはねばならないのだ』

と、禎輔は切なさうに聲を絞つて、溜息を吐いた。

『あら、わたしに許してもらはねばならないつて……それは、どんなことなの？』

と、里枝はびつくりしたやうに、涙にうるんだ眼を見張つて、じつと、禎輔の顏を見つめた。

『僕が、意氣地がないものだから、こんな場合にも、里枝さんを助けることが出來なくて、指を銜へて、引つ込んでゐなければならないなんて。——まつたく、すまないと思ふんだ』

それはお世辭や、たゞ口先ばかりの言葉ではなかつた。——少くも長い間、妹のやうにして育てて來た里枝である。その里枝が、今、斯うして藝者に賣られて行かうとしてゐるところを見ては、禎輔ならずとも、救つてやりたいと思ひ、救はずにはゐられない氣持になり、しかし、救ふ力のない自分の腑甲斐なさを、嘆かずにはゐられないのは、當然だつた。

でも、里枝の身になれば、それだけのことでも、禎輔自身の口から聞くことは、うれしかつた。

『ほんたうに、さう思つて下さるの？』

里枝は、聲を彈ませた。

『今は、どうして上げることも出來ないけれども……僕だつて、いつまでも、このまゝではゐないから。いづれ學校を卒業して、どうにかなつたら、きつと里枝さんを、助けに行くよ』

『わたし、禎輔さんのその心持を聞くだけで、澤山だわ』

と、里枝は泣いてゐた。

『わたし、今までは、自分より不幸な者は、この世の中にゐないやうに思つて、獨りでかなしんでゐたけれども、もう大丈夫だわ。あなたの本當の氣持を聞いて、わたしくらゐ仕合せな者は、ゐないやうな氣がして來たわ。わたし、うれしいの』

さう言ひながら里枝は、やつぱりすゝり上げてゐた。——かなしいために泣くのではなく、うれしいために、自然と涙があふれるのであつた。

三

二人が、氣持を打ち明けて、話してゐるところへ、いつの間に眼をさましたのか、君江が出て來

た。

『あら、津川さんは、もうお眼ざめになつたの？』

と言つて、君江は二人の様子を、ジロ〳〵見た。

『僕は、眠れなかつたものですから』

と、禎輔は恐縮したやうに、辯解したが、

『あなたは、すこしは眠れましたか』

と、聞いた。

『わたし、眼がさめてしまつたの。だから、起きて來たの』

と言つたが、その實君江は、禎輔のことが氣になつて、やつぱり眠れなかつた。

ちやうど、禎輔の寢臺とは、向ひ合せになつてゐたので、氣になるまゝに、氣を配つてゐた。

一旦、禎輔が寢臺に入つたことも、それから三時間近くも經つてから、出てしまつたことも、カーテンの隙間から、そつと見てゐたのである。

君江は、どんなに氣を落着けようと努めてみても、どうしても落着かなかつた。――いろ〳〵な妄想が、雲の如く群がり起つて、どうにもやり切れないので、たうとう起き出して、出て來たので

ある。

すると、果して禎輔は、皆なの寢しづまつた中で、里枝とたつた二人きりで、睦じさうに、顔を寄せ合つて、何かひそひそと、囁いてゐるではないか。

君江は、ムラ〳〵と胸に沸き立つてくる嫉妬と、怒りとを、やうやく抑へて、何氣なく振舞ふのに、骨が折れた。――行きなり里枝の胸もと眼がけて、飛びかゝつて行きたいやうな衝動を、辛じて我慢すると、

『わたしも、お話の仲間に入れてね。――眼をさまして、寢臺車に獨りでゐるのは、つまらないから……こゝに腰掛けても、いいでせう』

と言ひながら、禎輔が腰掛けてゐる座席の隣りを、チラと見た。――そこには、里枝の小さなスーツケースが、一つおいてあつた。

『どうぞ』

と言つて禎輔が、あわてゝそのスーツ・ケースを網棚の上に乘せようとするのを、里枝は、

『いいぢやないの。それは、そのまゝにして置いても』

と、禎輔に言つてから、今度は君江に向つて、

『こちらに、お掛けになつたら、いかゞですか』
と、自分の身體を、すこし窓際に寄せるやうにした。
『ありがたう。――でも、いいのよ。こゝで』
と言ひながら君江は、里枝の言葉を無視したやうに、禎輔にぴつたりと身を寄せて、腰を下ろしてしまつた。
『……』
里枝は思はず、（まあ！）と呆れて、溜息を洩らすところであつたが、やうやく、それだけは抑へたけれども、しかし默つて、君江の顏を見つめてゐた。――咎めるやうに、詰るやうに、キラキラとかゞやいた二つの眼が、じつと君江の顏にそゝがれたまゝ、瞬きもしなかつた。
でも、君江は、里枝の存在なぞ、頭から無視してしまつたやうに、どんな眼で見つめられようとも、まるでどこを風が吹くかといふやうに、平然としてゐた。そして一層ぴつたりと、禎輔の身體に寄り添ふやうにして、自分の顏を近々と、禎輔の顏に觸れんばかりに近づけて、
『ねえ』
と、甘つたれるやうな鼻聲で、呼びかけた。

すると禎輔は、それを迷惑さうな顏色も見せず、
『はあ』
と、慇懃な態度で答へるのが、里枝は見てゐるだけで、シヤクにも觸つたし、苛ら〳〵せずにはゐられなかつた。
（どうして、こんなに下手になつて、ぺこ〳〵しなければならないのだらう？）
と、口惜しいよりも、むしろ腹が立つた。
どんなに素晴らしい家庭の令嬢であつても、しかし、令嬢にとつて禎輔は、生命の恩人ではないか。
假りにも命の恩人に對して、何んといふ馴れ馴れしさであり、我儘な態度をするのだらう。君江に對しても腹が立つたが、それよりも里枝は、禎輔がぺこ〳〵してゐるのが、口惜しかつた。――もつと傲然として、冷淡にあしらつたつてよささうなものだのに、まるで下男が、女王さまにでも傳づくやうに、君江の機嫌ばかりとつてゐるのが、里枝は、口惜しくてたまらなかつた。じつと見てゐるだけで、自然と全身が慄へてくるのを、どうすることも出來なかつた。
『津川さんは、東京に着いたら、どうなさるつもり？』

と、君江がやつぱり鼻にかゝつたやうな甘え聲で聞くと、
『さあ……僕は、どうしたらいいかと思つてゐるんです』
と、禎輔は君江の顏色をうかゞふやうにして言つた。
『わたしといつしよに、屋敷まで來てくださるんぢやないの？』
『はあ。——それは、いづれ後で伺ひますが……』
『後でなんて、そんなことはイヤ。——とにかく、いつしよに來てくださらなくちゃ』
「上野から、すぐにですか？」
『えゝ』
『……』
『ど迷惑なの？』
『決して、迷惑といふわけではありませんが……』
『ぢや、いつしよに來てね』
『一度、本郷の宿まで歸つて、それから伺ふことにしたら、どうでせう？』
と、禎輔はまるで腫れものにでも觸るやうに、恐る〳〵言つた。

『イヤ〳〵。そんなことはイヤよ。いつしよに來て下さらなくては』
君江は、まるで聞きわけのない駄々ッ兒のやうに、甘つたれた。
『いいわね。いつしよに來て下さるわね。わたし、約束したから』
と言はれても、禎輔はたゞニヤ〳〵笑つてゐるだけだつた。
里枝は、口惜しさに焦り〳〵しながら、どうすることも出來なかつた。——心では君江に對して、白刄を磨ぎ澄ましながら、でも、表面は平靜にして、たゞ、しづかに見まもつてゐるだけだつた。

ふたりの出迎人

一

汽車が、いよ〳〵大東京の區域に入つて、赤羽、日暮里などの驛々を後に殘して、まつしぐらに上野ステエションへと突きすすむ時分には、さすがに長い冬の夜も、すつかり明けはなれてゐた。

空は薄曇りがしてゐるのか、それとも煤煙や、塵埃などのためか、よくわからなかつたけれども、暗い灰色に掩はれてゐた。——それでも左側の車窓を見ると、建物の屋根々々が重なり合つた遙か向ふの空が、美しい薔薇色に、ほのかに朝燒けのしてゐるのが見えた。

恐らく、日の出に、もう間がないのだらう。——佗びしい冬の日ながら、それでも朝だつた。

列車の中で、一夜を明かした人々も、すつかり起きて、それぞれ降り支度をとゝのへてゐた。

里枝は、禎輔の傍にばかり、ゐるわけにはいかなかつた。既に、金で買はれた身である。——自分の降り支度をとゝのへると同時に、大金を出して、彼女を抱へてくれた所謂『おかあさん』の身のまはりの世話も燒かなければならなかつたし、中に立つて、世話をしてくれた男のためにも、手傳はなければならなかつた。

『里枝さん、あなたもこれから、ずつと東京にゐらつしやるのだから、時々、屋敷に遊びにいらつしやるといいわ。さうすると、いつでも津川さんに會へるわよ』

いよ〳〵別れる時が迫つて來た時に、君江は調子よく、そんなことを言ふのであつたが、しかし里枝は、素直な氣持で、聞くことは出來なかつた。——すくなくも君江の調子には、勝ち誇つてゐるやうなところがあつた。表面はさうではなくても、意識の底では、自分の幸福と、勝利とを振り

かざして、みじめな里枝を、足の下に踏みにじらうとしてゐる敵意と、憎惡とがひそんでゐるのを、里枝は見のがさなかつた。

『え、。ありがたう』

里枝も表面は、何氣なく言つたけれども、胸の中は煮えくり返るやうなのを、どうすることも出來なかつた。——でも、たつた一つ縋り附くのは、禎輔の自分に對する氣持だけだつた。

『あなたは、これからは、ずつと波多野さんのお屋敷に、お世話におなりになるの？』

と、かなしさうに聞いた。——ウソでもいいから、この場合（さうではない）と答へてほしかつた。けれども禎輔の答へは、彼女のかなしい期待と、願ひとを裏切つて、無造作に、

『さうするよりほかはないのです。——これからは、大學を卒業するまで、何から何まで、波多野さんの厄介にならなければならないのです』

と言つて、かすかに苦笑すると、君江のはうをチラ、と見た。

『あら、厄介になるなんて、さうぢやないわ。——命を助けて下すつた恩人のためですもの。出來るだけのことを盡すのは、當り前ぢやありませんか』

君江は、朗らかに笑つけたれども、里枝は、すつかり打ちのめされてしまつた。——斯くして自

分の戀は、かなしくもこれ限りにみじめに踏みにじられてしまつたのだと、諦めるよりほかなかつた。

傷々しい敗北感！

でも、里枝は心の中で、

（わたし、どんな境遇になつたつて、自分一人の心で、禎輔さんのことばかりを、思ひつゞけてゆくから！　決して〳〵禎輔さんのことは、わたしが生きてゐる限り――一生涯忘れないから！　どこにゐても、どんなことをしても、禎輔さんの身に萬一のことがあつた時には、わたしが眞先に飛んで行くから！　）

と、改めて固く、誓はずにはゐられなかつた。――踏みにじられたみじめな足の下で、あらん限りの處女の誠と、純情と、熱意とを以て、喘ぎ〳〵誓はずにはゐられなかつた。

二

『里枝さん〳〵。――さあ、いらつしやい。降りるんですから』

呼ばれる聲に、氣が附いて見れば、汽車は既に、上野驛の構内に、ゆつたりと停つてゐた。プラ

ツトホームには、この朝が早いのに、出迎の人々がチラホラ見え、驛員が、上野驛の名を呼びながら、窓の下を歩いてゐた。

皆な乘客は、座席から立つて、デツキのはうに歩いてゐる者もあれば、窓から荷物を出して、赤帽に渡してゐる者もあつた。――君江も、禎輔も、立ち上つてゐた。

『ぢや、禎輔さん……』

里枝は、涙ぐんだ眼に千萬無量の思ひをこめて、じつと禎輔の顏を見つめたまゝ、胸がいつぱいになつて、アトの言葉は、何んにも言へなかつた。

『氣を附けて……どうせ東京にゐるんだから、きつと、時々は會へることもあるだらう』

禎輔はソハ〳〵して、さういふ言葉も、たゞ口の先だけで、ちつとも眞情など籠つてゐなかつた。

――自分の荷物やら、君江の荷物を、赤帽に預けるために、せか〳〵してゐた。

『さやうなら！』

里枝は、瞼の内側が熱くなつて、危ふくハラ〳〵とこぼれさうになるのを、君江や、禎輔に見られるのが辛く、そのまゝついと降りてしまつた。

それが別れだつた。――それつきり禎輔は、里枝に向つて口をきく暇もなかつたし、彼女の後

を、見送ることも出來なかつた。（さやうなら）と言つたその聲が、あまりに悲痛にひびいたので、思はず里枝の後を追つかけようとしたが、

『あら、こゝにも、一つ荷物があるぢやないの？』

突然、君江に言はれて、立ち留つてしまつた。

クツションの横のところに、立派な鰐革のスウツ・ケースが一つ、まだ取りのこされてゐた。

『これを忘れたら大へんよ。わたし、困つてしまふわ』

その中には、君江の洋裝の衣裳が、いつぱい詰つてゐた。

『すみません』

禎輔は、自分の失策でもあるやうに恐縮して、そのスウツケースを急いで、赤帽に渡さなければならなかつた。

『そんなに慌てなくてもいいのよ。ゆつくり降りれば』

と言ひながら、君江と、禎輔と、ミネの三人は、誰よりも遲れて、一番後から、ゆつくりと降りた。

すると、向ふからキヨロ〳〵と、誰かを探しながら歩いて來た二人の若い女が、禎輔の姿を見つ

けると、

『あら、津川さん』

と叫んで、人を掻きわけるやうにして、寄つて來た。

『やあ、初音さん』

禎輔も、さすがにうれしさうに聲を彈ませたが、初音と並んで、ニコ〳〵してゐる、もう一人の可愛らしい丸顔で、藍色の霜降りになつたスーツを着て、トオク型の帽子をかぶつた若い女を見ると、

『美知子さんも、いつしよだつたんですか。――こんなに早く、わざ〳〵迎ひに來ていたゞいて、どうもすみませんな』

と、言つた。

『何んでもないわ。――近いところですもの』

と、美知子がニツコリして、謹ましく言へば、初音は嬉しさに、ソハ〳〵しながら、

『あんまり長く歸つていらつしやらないものだから、どうなすつたのかと、心配してゐましたわ。――でも、お變りもなく歸つていらして、ほんとに安心したわ。さう〳〵、お悔みを申し遲れまし

たけれども、お父さまのご不幸は、何んともお氣の毒でしたわね。これがお父さまが、ご全快になつて出ていらしたのだと、もつと〳〵うれしんだけれども』

初音は、表情も、聲も、曇らせて言つた。――禎輔は、父の死んだことだけは知らせたけれども、家の沒落のことなど、初音にも、杉村にも、まだ知らせてゐなかつた。そんなことは、とても手紙などに書けなかつたので、いづれ會つてから、詳しく話をするつもりでゐた。

三

若い、美しい女が二人までも、わざ〳〵禎輔を出迎へて來たりしてゐたことは、君江にとつて意外でもあれば、何んとなく心が穩やかでなかつた。――この二人の若い女が、禎輔と、どういふ關係か、わからないけれども、イヤに馴れ〳〵しいことも、ひどく氣にならずにはゐなかつた。

『とにかく、わたしたちも、早く出なければ』

と、君江は苛ら〳〵して言つた。いつの間にか、プラットホームの人々は、疎らになつてゐた。

『どうも、失禮しました』

禎輔が恐縮すると、皆なは急に氣が附いたやうに、ぞろ〳〵と改札口のはうに向つて、歩き出した。……そこには波多野家の運轉手が、さつきから待つてゐた。

『お歸りなさいませ』

運轉手は、君江の顏を見ると、うや〳〵しくお辭儀をした。

禎輔は君江にすゝめられるまゝに、波多野家の立派な自家用車に、乘るよりほかなかつた。

『あら、津川さんは、眞直ぐに眞砂町に、お歸りになるんぢやないの？』

初音は、當てがはづれたやうな顏をして言つた。

『僕は、ちよつと、君江さんをお送りしなければなりませんから……直きに歸ります』

禎輔は、折角、姉妹二人で、わざ〳〵迎ひに來てくれたのに、いつしよに歸らないのは、わるいやうな氣がしたけれども、でも、仕方がなかつた。

『さう。――では、お晝前には、歸つていらつしやるわね』

と、初音はかなしさうに、やうやく念を押した。

一晩を汽車の中で明かして、はる〳〵歸つて來るのだからといふので、朝、早くから起きて、風呂の支度もして來た。それから、いつしよに歸つて來て、皆なで朝の食事もするやうに、すつかり用意をして出て來たのに、當てがはづれてしまつた。――話したいことも、聞きたいことも、どつ

さりあるし、第一、差迫つて相談しなければならないことは、杉村が默つて、出て行つてしまつたきり、歸つて來ないことである。大學にも二度ばかり訪ねて見たが、その度びに會へなくて、空しく歸つて來なければならなかつた。

今の初音は、たゞ、禎輔一人だけを力にもすれば、頼りにもして、一日も早く歸つてくれることを待つてゐたのに！　その禎輔が、やうやく歸つて來た顏を見て、やれ嬉しやと思へば、何んだか以前とは、すつかり樣子が變つてゐるやうな氣がする！

初音は、かなしさに、胸がいつぱいなつて、今にも涙がこぼれさうなのを、やうやく我慢してゐた。――今、こんなところで泣いたりしては、見つともないばかりでなく、禎輔にも、どんな迷惑をかけるかも知れない。

『もちろん、お蔓前までには、歸りますから』

と言つて禎輔が、そのまゝ自動車に乘り込むと、さつきから待ち構へてゐたやうに、すぐ辷り出した。

初音と、美知子とは、しばらく、その場にぼんやりと突つ立つて、自動車の後を、見送つてゐた。

四

『今の人たちは、誰？』

自動車が動き出すと、すぐに君江が聞いた。

『僕が、下宿してゐる家の娘さんたちです』

と、禎輔が答へると、

『素人下宿ね』

と、君江はフンと鼻の先で冷笑するやうに言つて、

『あなたとは、何んだか特別に親しさうぢやないの？』

と、言つた。

『イヤ、特別に親しいなんて……決して、さういふわけではないんですけれども……』

禎輔は、辯解した。

『だつてあの姉さんの、はうは、妊娠してゐるぢやないの』

君江は、禎輔がムキになつて辯解するのを、輕くからかふやうに、ニヤ〳〵微笑しながら言つ

た。

『えつ』

と、禎輔が眼を見張り、びつくりして息を呑むと、

『あの人、まだ、ミスなんでせう？』

と、君江が言つた。

『はあ。——まだ、結婚なんかしてゐないんですが』

『だつて、をかしいぢやないの？　結婚もしないうちから、姙娠するなんて！　をかしいわ』

君江が遠慮もなく、ツケ〳〵言つた時、自動車は、立派な門構への大きな屋敷の中に、しづかに滑り込んだ。

他人の戀人

一

『こゝが、あなたのお部屋なの』

と言はれても、禎輔はたゞ、

『はあ』

と言つたきり、しばしは呆然としてしまつた。

『お氣に召して？』

君江が、につこりして聞くと、初めて我に返つたやうに、

『こんな立派な部屋を……僕には、勿體ないですよ』

と、禎輔はあわてゝ、吃り〳〵言つた。實際、まだ學生である身としては、あまりに豪奢に過ぎ、贅澤に過ぎて、かへつて身が竦む思ひだつた。

『どこか玄關脇の書生部屋で、僕は結構なんです』

さういふ禎輔の言葉に、嘘も、僞りもなかつた。

（これからの自分は、波多野家の食客ではないか）

と思ふと、こんな立派な洋室を、自分の部屋として當てがはれることが、かへつて苦痛だつた。

『まあ、どうしてそんなことを、おつしやるの』

君江は、咎めるやうに言つて、つと禎輔の傍に寄り添ふと、やさしく睨めるやうにして、顔をのぞき込んで、

『折角、來ていたゞくのに、書生部屋におくなんて、そんなことが出來るものですか。——あなたは、書生さんぢやないんですもの』

と、にこりした。

頬と頬とが近々と相觸れ、髪の匂ひや、息の香や、化粧品や、香料の匂ひが、嫵めかしく鼻を衝くと同時に、禎輔の胸は、はげしくとゞろいた。

洋館の二階である。召使が附いて來たが、ドアを開き、カーテンを引いて、二人を案内をしてしまふと、そのまゝ、出て行つてしまつた。

外は、風立つて來たらしい。——明るい日が照つてゐるが、椎や、槇などの庭木の梢が、飛走の風に搖れてゐる。でも、部屋の内は、スチームで、春のやうにあたゝかであつた。

『ですが、こんなお客さまのやうに、立派な部屋におかれたりすると、かへつて窮屈ですから』

『だつて、お客さまぢやありませんか。わたしに取つては、大事な〳〵お客さまだわ。お客さま以上に、生命を助けていたゞいた恩人……』

『僕は、あなたから、そんなに言はれると、どうしていいか、わかりません。——あの場合のことは、全く偶然だつたのだし、それに、誰だつてその場に打つかれば、當然、さうしなければならない、當り前のことをしたゞけなんですから』

『でも、やつぱり恩人といふことには、ちつとも變りがないわ。——その上あなたは、わたしに取つては、もつと〳〵大事な人なんですわ』

『恩人よりも、更に、もつと大事な人とおつしやるのは？』

『あら、お分りにならないの？』

『はあ』

『まあ、イヤだわ』

と、君江は笑ひながら、ちよつと眉をひそめたが、

『戀人ぢやないの。——いゝえ、愛人と言つたはうがいいわ。わたしのためには、大事な〳〵愛人だわ』

言ふなり君江のしなやかな手が、禎輔の肩にかゝり、呼吸の喘いでゐる顔が、胸に埋つた。

二

畳を敷いたら十六畳くらゐは、敷かれるだらう。

椅子、テーブル、棚などが、配置よくおかれて、まつたく學生のゐるべき部屋とも思はれない。絨毯でも、窓掛でも、立派なものだつたし、高い天井から垂れ下つてゐるシャンデリア、華やかな壁紙の色と模様。建築の様式こそ、すこし古くさいけれども、それでも明るいフランス式で、しかも書齋の奥には、六畳ばかりの寢室が、もう一部屋附いてゐるのである。

その部屋に通ずるのは、垂れ幕一重が境になつてゐるだけだが、それでも、ちやんと仕切りになつてゐるのである。——幕の隙間から、立派なベットや、ベッドの枕もとにおかれた小卓や、その上の絹のシェードを持つた七寶のスタンドなどが、ほのかに見えてゐた。

『ほんとうに僕は、どこでもいいんですが……』

禎輔としては、部屋の設備の完全なことや、立派なことがわかれば分るほど、ます〳〵恐縮せずにはゐられなかつた。

『まだ、そんなことを言つてゐらつしやるの。——いいのよ、もうそんなことは。それよりも、荷

物でもお解きになつて、着物を着換へ、バスに入つて、すこしおくつろぎになるといいわ』

田舍から持つて來た大小二つのスーツ・ケース、それに麻縄で絡げた柳行李などが、さつき召使が運び込んで來たまゝ、まだ入口のところに、積んであつた。

『イヤ、僕は今、そんなことはしてゐられないのです』

禎輔は、そは〳〵してゐた。

『どうして？』

『とにかく、一度眞砂町のはうまで、行つて來なければ』

『以前の宿なの？』

『はあ』

『さつきステーションに、迎ひに來てゐたわね』

『はあ』

『きれいな人だつたわ』

『さうでせうか』

きれいだか、どうだか、そんなことは禎輔には、問題ではなかつた。——他人の戀人である。

それよりも、杉村と初音との間に、何か事件が起つてゐるらしいことや、しばらく見ない間に、かなり憔れの眼立つて見えた初音のことなどか、禎輔としては氣がかりだつた。

『あなたは、早くあの方に、お會ひになりたいのぢやないの？』

『いゝえ。――さういふわけぢやありませんが』

禎輔はあわてゝ、打ち消したが、君江は、

『どうだか、』

と、笑つて、

『でも、あなたは、今日からこゝにねらつしやるんだから、いいわ。――荷物を解きませう。わたしも、お手傳ひしますから……』

と言ひながら、重いスーツ・ケースなど、動かし初めた。――そんなことなど、今までに一度もしたことのない君江だつたのに、不思議なことだつた

荷物など、このまゝにしておいて、とにかく一度、眞砂町に歸つて來たい禎輔だつたけれども、君江が先に立つて、重いスーツ・ケースなど動かすのを、默つて見てゐるわけにはいかなかつた。

『いいですよ。そんなことは、僕がしますから』

スーツ・ケースや、柳行李を開いても、氣の利いたネクタイ一筋、洋服一着あるわけではなかつたし、學生の身の上として、碌な着換への着物が一枚、あるわけではなかつた。――何から何まで君江に見られるのは、恥しいやうなものばかりだつた。

それでも君江は、

『これは、洋服箪笥に入れておいたはうが、いいわ』

とか、

『これは、戸棚に入れておくわ』

とか、イヤな顏もせずに、自分で一つ〳〵整理してくれた。

たうとう、荷物をすつかり片附け、用意してあつた風呂に入り、正午の食事をすまし、お茶の時間には、紅茶や、お菓子が出たりして、禎輔が眞砂町に歸るのは、夕方になつてしまつた。

三

自家用の自動車で、行つて來るやうにと、君江が無理に强ひるのを、それだけは禎輔も固く辭退した。

『電車で結構です』

と言へば、君江は、内玄關まで送つて來ながら、禎輔に寄り添ふやうにして、

『電車なんて、時間ばかりかゝつて、仕方がないわ。――ですから、屋敷の自動車にお乘りになるのが、どうしてもおイヤだつたら、タクシイで行つて來てよ。ハイヤーを呼ばせるわ』

と、鼻を鳴らすやうな聲で、甘えるやうに言つた。

『いいですよ。ほんとうに、すぐ歸つて來ますから』

これから大學を卒業するまでの長い間、とにかくいろ〳〵と――何から何まで厄介にならなければならない身が、初めから、あんまり優遇されるのは、長つゞきがしないのではないかといふ氣がして、禎輔は、かへつて不安だつた。

『さう。――ほんとうに、直きに歸つて下さるわね』

と、君江は念を押した。

『すぐに歸ります』

『ぢや、待つてゐるわ。――わたし、待つてゐるから、夕飯にはきつと間に合ふやうに、歸つて來てね』

内玄關まで送り出して來た君江は、さう言ふと行きなり禎輔の手を取つた。

『約束のしるしよ』

と、さすがに火照る顏を反けた。

『……』

あまりに突然だつたので、禎輔は面くらつてしまつた。

『心配だわ』

そのまゝ、しばらく無言で、二人とも固くなつて立ちすくんでゐたが、やがて君江は、ホッとかすかな溜息と共に、かなしさうに呟いた。

『大丈夫です』

固く誓ふやうに言つておいて、禎輔は外に出た。

電車の便利は、あまりいいはうではなかつたので、眞砂町まで行くのに、五十分近くもかゝつてしまつた。

いつでも電車に乘り降りしてゐた停留所で降りると、禎輔は直きに横町に曲つて行つた。――曾つて毎日々々、幾度となく見て通つた煙草屋だの、酒屋だの、藥種屋だのが、軒を並べてゐる通り

を、一丁とは行かないうちに、見馴れた板塀と、さゝやかな門が並んでゐるのが見えた。
耳門を入り、格子戸を開けると、けたゝましい音を立てゝ、ベルが鳴りひゞく。――その音を聞きつけると、初音が飛んで出て來て、迎へてくれた。
『お歸りなさい』
かなし氣な初音の顏に、さつと生き〳〵とした表情が動くと、素早く敷臺まで降りて來て、
『わたしが、脱がして上げますわ』
と、禎輔が身をかゞめて、編み上げ靴の紐を解いてゐるのを、初音は自分の手で、解かうとした。
『いいですよ。自分でしますから』
さすがに禎輔が、固く拒むのを、初音は、
『わたしにさせて……ね、どうぞ、わたしにね』
と、泣くやうに頼んで、無理に禎輔の手を拂ひのけて、自分で紐をといてやりながら、
『今朝、お迎ひに行きました時、お話するつもりだつたんですけれども……でも、あんな工合になつて、お話出來なかつたんですが、わたし、お話しなければならないことがありますの』

と言つたが、その聲は低く、かすかに慄へてゐた。
『どんなお話だか知りませんが……とにかく、上つてから、ゆつくり伺ふことにしませう』
禎輔は、きつと杉村との問題について、何か話があるのだらうと思つた。――でも、その話を、何んのために、そんなに急いでしなければならないのか？　なぜ？　今こんなにして、わざ〳〵靴の紐を解きながら、その話をしなければならないのか？　それは分らなかつた。
『早く〳〵、今、聞いていただかなければならないことなの。――母は、あなたのお歸りを、どんなにお待ちしてゐたか知れないの』
『さうですか』
『母が　あなたにお會ひする前に、是非、あなたに、聞いておいていたゞかなければなりませんの』
『それは、どんなことですか？』
と、禎輔が聞いても、初音は徒らにオド〳〵ばかりして、
『とても〳〵困つたことが出來て……わたし、あなたに助けていたゞかなければなりません』
と、慄へる聲をひそませるやうにして言つたが、その手まで、ブル〳〵とはげしく慄へて、容易

には靴の紐も、解けないのであつた。

『俟に、助けて……

あまりに意外の言葉に、言ひかけて禎輔は息を呑んだ。

『どうぞ、わたしを助けて……母が、わたしのことを……わたしのことを、聞きましたら……』

言はふとして初音は、言ひつゞけることが出來なかつた。――舌がもつれるやうになつて、聲が咽喉の奥にからんで、消えてしまふと、涙が瞼から逃るやうに、ハラ〳〵と初音の手の上に、禎輔の靴の上に、それから土間のコンクリートの上に、音もなく滴り落ちて、見る〳〵露の滴のやうな斑點を、その邊りに散らした。

『どうしたんです？』

禎輔は、呆氣にとられて聞いたが、その時初音は、突然、

『わつ』

と聲をあげて、その場に泣き伏してしまつた。

禎輔は、どうしたらいいか、わからなかつた。

土間に突つ伏すやうにして、細々とした首筋や、痩せて、尖つた肩先を顫はせて、傷々しく咽び

泣いてゐる初音のあさましい姿を、たゞ、ぼんやりと、眺めてゐるよりほかなかつた。

これからの責任

一

『どうしたの？　初音さん』

母は、心配して、玄關まで這ふやうにして、出て來た。

『津川さんが、お歸りになつたのぢやないかえ』

寒さに向つた時候のせゐだらう。――一つづつ年を取るに從つて、毎年々々、次第に重くなつてゆく持病のゼンソクの發作が、今年も秋の頃から出てきて、ナカ〳〵癒らなかつた。いつもの年だと、十二月になつて、寒さが定まると、發作も自然と治まるのであつたが、どういふわけか、今年のゼンソクは、發作もひどかつたし、十一月が終り、十二月になつても、容易に治らなかつた。

朝晩、毎日くるしい發作に襲はれては、脂汗を流して、もがき、くるしんだ。――もちろん、寢

床に就いた切りだつたが、禎輔の歸つて來たらしい氣配がして、すぐに初音が飛び出して行つたのに、いつまで待つてゐても、何んの音沙汰もないので、母はじつとして、寢床の中で、待つてゐることが出來なかつた。

たうとう待ち切れなくなつて、しやんと起きて歩くことも出來ず、息を切らしながら這ふやうにして、ブル〳〵と慄へる手に、やうやく襖を開けて、玄關まで自分で出て來たのである。

『あつ、お母さま……今、すぐに行きますわ』

初音は、禎輔が母に會ふ前に、是非話しておかねばならぬことがあると、あんなに言つてゐたくせに、たうとうコレといふ話は、何んにもしないうちに、母と禎輔とは、會つてしまつた。

『やつぱり津川さん……歸つていらしたのね』

と言つゝ切り、母は禎輔の顏を見ると、涙に咽んでしまつた。

早くから母を失ひ、なつかしい母の慈愛の味を知らない禎輔は、初音の母が、やさしくしてくれるのを、ほんたうの母のやうな氣がしてゐた。

そして杉村も、やつぱりさうだつたが、初音たち姉妹と同じやうに、いつでも『お母さん〳〵』と呼んでゐた。――さう呼ぶことに依つて、更に、眞實の母のやうな氣がするのであつた。

『どうなすつたのです？　どこか、おわるいのですか』

禎輔は、度び〳〵貰つた初音の手紙にも、べつに母が病氣だといふことなど、知らせて來なかつたのに、どうしたのだらう？　と思つた。

病人のやうに血色がわるく、痩せた肩から胸を、まるで大波でも搖れるやうに、喘がせてゐる。

『いつものゼソソクが……出て……』

母は言はふとするのであつたが、思ふやうに言へなかつた。

『お母さまは、持病のゼンソクなの。――今年は、とてもひどいの』

と、初音は說明したが、おろ〳〵してしまつた。

『さうでしたね、そんな持病があつたんですね。――それだのに初音さんは、知らせてくれないものだから』

やうやく禎輔も思ひ出すと、怨みがましく言つたが、

『そんなに苦しいのに、どうして玄關まで出て來たりするんです。――そんな輕はずみなことをして、若し、風邪でも引いたら、どうするんです』

叱るやうな語調で窘めて、靴をぬいで玄關に上つた。

疊の上に突つ伏すやうにして、くるしさうに、ぜい〳〵と息を喘がせながら、身を揉んでゐる母の身體を、かる〴〵と抱き上げると、そのまゝ座敷に抱いて行つて、それまで母が寢てゐた寢床の上に、そつと寢させてやつた。

『どうも……いろ〳〵ありがたう。ありがたう』

母は、ぜい〳〵息を切らしながら、言葉も途切れ〳〵に言つて、兩眼に涙をにじませて、感謝した。

『そんなことよりも……安靜にしてゐらつしやらないと、イケませんね。――しばらく、口を利かないはうが、いいんではないですか』

禎輔が、やさしく言ふと、母は子供のやうに、かすかに首をうごかして見せるのであつた。

二

しばらく安靜にしてゐるうちに、母の發作のくるしみも、いくらかづつ鎭まつて來た。

禎輔が、ちよつと二階の自分の部屋に上つて來るといふのを、母は苦しげな息遣ひの下で、あわてゝ引き留めた。

『ちよつと、待つて……もうしばらく、こゝにゐて』

母は、哀願するやうに言つて、しげ〳〵と禎輔の顏を見つめるのであつたが、その眼ざしには、曾つて禎輔に見せたことのないやうな、深い〳〵情愛が、湛へられてゐた。――それは恰も本當の息子が歸つて來たのを迎へる時のやうな親愛と、うれしさと、頼もしさとに滿ちあふれてゐた。すがり附くやうな懷かしさと、胸に抱きしめて、愛撫の情の限りをこめて、母の掌で、頭でも撫でてやりたいやうな愛情のかゞやきとに、しつとりと潤うてゐた。

今までだつて、いろ〳〵やさしくしてくれたけれども、禎輔は、曾つてこんなにも慈愛の光りを湛へて、こんな優しい眼で見られたことは、一度もなかつた。

『僕が、こゝにゐたはうが、いいのでしたら、いつまでだつて、ゐられるだけは斯うしてゐますから』

勢ひ禎輔としても、さう言はずにはゐらなかつた。

『ありがたう〳〵』

と、母は感謝に滿ちた眼に、いつぱい涙をたゝへて、幾度も幾度もうなづくやうに、頭を下げた。

『……』

禎輔には、母の氣持が、さつぱり分らなかつた。

『わたしは、津川さんはあのまゝ、とても歸つて來て下さらないと、さう思つてゐたんですよ』

『歸らないなんて……そんなことがあるものですか』

『きつと初音が、いい加減に、騙されてゐるのではないかと思つて』

『初音さんを、僕が騙すなどといふことが、あるものですか』

と、禎輔は力をこめて言つた。

『ほんたうにあなたは、そんな方ぢやないのだわ。――そのことは誰よりも、自分でよく知つてゐるくせに！　でも、正直のところわたしは、そんな心配もして、どんなに氣を揉んだことか知れませんの』

『ですが、この通り、ちやんと歸つて來たぢやありませんか！』

『ほんたうにね！』

母は、ひどく感動したやうにうなづくと、新たに涙を浮べて、

『やつぱり、歸つて來て下すつたのだわ。初音との約束を守つて、ちやんと歸つて來て下すつたのだわ』

と、繰返し〳〵言つて、さめ〴〵とすゝり泣くのであつたが、それは悲しんで泣いてゐるのではなかつた。

『父が亡くなつたりしたものですから、豫定よりすつかり遲れてしまつて、すみますんでした』

『いゝえ。――歸つて來てくだされば、それでいいんですの。さう〳〵、この度は、お父さまが、ほんたうに不幸なことでして……』

と、母は思ひ出したやうに、あわてゝ悔みを言つた。

『父が亡くなつたばかりではなく、何もかも一時になくなつてしまつて、どうしたらいいかと、途方に暮れてしまつたのですが……』

『いゝえ　そんなに力を落すことはありませんよ』

『僕も、さう思つてゐます　これからだつて、大いにやるつもりです』

『さうですとも！』

と、母は強くうなづいたが、傍でハラ〳〵しながら、顏を伏せて聞いてゐる初音のはうを振り返つて、

『わたしだちだつて、どんなにも、出來るだけのことはお力になりますわ。——ねえ、初音さん』
と、言つた。
『えゝ』
初音はうなゐ垂れたまゝ、かすかに、うなづくよりほかなかつた。
『ありがたう！』
母娘の厚意に感激した禎輔は、心からお禮を言つて頭を下げたが、あやふく眼がしらが熱くなつて來て、瞼にはじんわりと、涙がにじんで來た。
『津川さん。これからは、あなただつて、責任が重いのよ』
と、母は改つた調子で言つた。
『わかつてゐます』
『初音だつて、たゞの身體ぢやないんですからね』
『はあ』
禎輔には何んのことだか、咄嗟には、はつきりとは分らなかつた。
『あら、初音は、まだ、あなたには、何んにもお知らせしませんでしたの？』

と、母はにこやかに聞いた。
『お母さん』
初音は、顏を眞赤にして叫んだが、母は穏やかに微笑した眼もとで、娘の姿を可愛しさうに見ながら、
『恥かしがることがあるものかね。當り前のことですもの。——それよりも、先づ第一にお知らせしなければならない人に、まだお知らせしてゐないなんて……イケないわ』
『それは、どういふことですか？』
禎輔は、さつぱり事情がわからず、訝かしさうに聞くと、
『それがね、津川さん。もう直きわたし、ほんたうのお祖母さんになるのですよ。——孫が生れるんですね』
『えつ』
『初音は、お母さんになるのですし、あなたも……』
と、言ひつゞける母の言葉を引き取つて、
『お母さん！』

と、初音は必死になつて叫ぶと、呆氣にとられたやうに、眼を白黑させてゐる禎輔のはうを、拜むやうな、祈るやうな、切ない眼をして見た。

三

初音が姙娠して、やがて母になることや、それを母が、どんなに喜んでゐるかといふことだけは、禎輔にもハッキリ分つた。——さういへば、ステーションで君江は、初音の身體を一眼見るなり、姙娠してゐるやうなことを言つてゐたが……母の言葉の端々から想像すると、どうやらその父となるべき者は、自分のやうに思ひ込んでゐるらしい。

露骨にさうだとは、口に出して言はなくても、母の言葉を綜合して考へると、どうしても、さう思ひ込んでゐるのに違ひないのである。

だが、禎輔は、まつたく身に覺えのないことなので、どう言つて母の言葉に、調子を合せたらいいのか、わからなかつた。——誤解を解くために、辯解しようとすると、いかにもかなしさうな、今にも泣き出しさうな初音の眼が、禎輔に向つて哀願するので、言ふべきことが、どうしても禎輔には言へなかつた。

（馬鹿な〳〵。——僕は、父でも何んでもありません！）

と、心の中では、力いつぱい叫びながら、しかもそれを辯解することも出來なければ、說明することも出來ない悟かしさ、焦れつたさ！

禎輔は、だん〳〵不愉快になつてくるのを、どうすることも出來ないで、苛〳〵してしまつた。

とにかく、一時も早く、この場を避けたいと思つてゐるところへ、ちやうど、格子戸に取りつけてあるベルの音をひゞかして、

『たゞ今』

と、妹の美知子が、元氣よく歸つて來た。

『お歸りなさい』

母がさう言つてゐる間に、禎輔はそつと座敷を脫け出すやうにして、自分の借りてゐる二階の部屋に上つてしまつた。

八疊の部屋だつたが、机でも、本箱でも、禎輔が故郷に歸つて行つた時のまゝになつてゐた。

机の上には、塵埃がかゝらぬやうに、布の掩ひを掛け、部屋の中は、きれいに掃除がし　あつ

た。——恐らく禎輔が、久しぶりに歸つて來るのを迎へてくれる初音の心靈しだらう。

本箱の上には、二本のフリーヂヤを挿した硝子の花瓶がおいてあつて、一歩部屋に入ると、ゆかしい、高い香りが、ほのかに鼻に來た。

火鉢には、サクラ炭をいけて、鐵瓶は微妙な音を立てながら、ほのかに湯氣を立てゝゐた。

何んといつても、大學に入つてからこつち、長く落着いてゐた部屋である。——禎輔は、久しぶりで自分の家にでも歸つて來たやうな、親しみと、くつろぎとを感ぜずにはゐられなかつた。

それに、何から何まで、懷かしかつた。古い建物で、すこし煤けた天井も、襖の模樣も、一年に二三度くらゐしか掛け替へることのない床の間の一軸も、部屋の中のすべてのものが、なつかしかつた。

これからの學資に、困りさへしなければ、あんな豪奢な波多野家の食客になるよりは、この質素ではあるけれども、つゝましくて、親しみのある部屋に、いつまでもゐることが叶はなければ、せめて大學を卒業するまでゝも、ゐたいと思つた。——あんな立派な部屋にゐるよりか、こゝにゐるはうが、學生の身には、どんなに自然で、相應しいか知れないのだ。單に、學校に近いからばかりではない。じつくりと落着いて、勉强もよく出來さうな氣がした。

禎輔は、こゝの部屋に歸つて見て、輕卒に波多野家の厄介になることに決めてしまつたことが、何んとなくかすかに後悔されるのであつた。

（若しかしたら、僕は、間違つてゐたかも知れない）

朝から、火鉢の火も絶やさぬやうにして、禎輔の歸りを、待ちかねてゐたのであらう。——貧しいけれども、でも溫かな思ひやりと、心づくしの籠められてゐる、居心地のいい部屋の座蒲團の上に、どつかと坐つて禎輔は、つく〳〵とさう思はずにはゐられなかつた

——父が亡くなつて以來、こゝ暫らくの間禎輔は、こんなにも落着いて、さながら我が家に歸つて來たやうなくつろぎを、感じたことがなかつた。

何をするのも忘れたやうに、じつと坐つたまゝ、夢のやうな鐵瓶の溫かな湯氣の音に、しづかに耳を傾けてゐた。

すると、やがて二階の階段を上つて來る忍びやかな足音が、かすかに聞えたと思つたら、後の障子が、音もなく開いて、初音の元氣のない姿が、まるで幽靈のやうに、しよんぼりと立つた。

父ならぬ父

一

『やあ、初音さん』

禎輔は振り返ると、聲をかけたが、でも、初音は、

『はい』

と、かすかに消え入るやうな聲で、返事をした切りで、部屋に入るのでもなければ、何んにも用事を言ふのでもなく、入口に立ちすくんだ切りである。

『どうしたんです？』

と、禎輔が聞いても、

『……』

初音は、默つてゐた。

『お入りになりませんか』

と、すゝめても、すぐには入らうとしなかつたが、二度三度、同じ言葉を繰返すと、やうやくのことで、部屋に入り、火鉢の傍に坐つた。

『僕には、さつきのお母さんのお話が、どうも、さつぱりわからなかつたのですが……』

禎輔は、べつに初音を咎める氣持なぞはなく、笑ひながら言ふと、初音はさつと顏色を變へて、

『すみません』

と言ふなり、いきなり禎輔の膝にすがり附くやうにして、傷傷しく全身をわなゝかせて、咽び泣いてしまつた。

禎輔は、何が何んだか分らず、面くらつてしまつて、

『どうしたんです？』

と、あわてゝ聞いた。

『わたし、あなたに、何んと言つてお詫びをしたらいいか、わかりません。——どうぞ許して』

と、咽び〳〵言つて、初音は更に烈しく、泣きしきつた。

『えつ。ゆるしてくれつて、どういふことですか？』

『申しわけありません』
『一體、何がそんなに、申しわけがないんです』
『でも、あなたが、あんな工合に、母に調子を合せて下さいましたものですから、わたし、助かりましたの』
『えつ。――僕が、お母さんのお話に、調子を合せたつて？』
何んのことだか禎輔には、さつぱり俯に落ちなかつた。
『えゝ。ほんたうに、ありがたうございました』
初音は、相變らず泣きながら、しきりにお禮を言つた。
『僕には、どういふ意味だか、すこしもわかりませんが』
禎輔は、たゞ、呆れるばかりである。
『若し、母に本當のことがわかつたら、わたしは斯うして、生きてはゐられなかつたところですわ』
『初音さん』
『はい』

『どうぞ、僕にわかるやうに、詳しくわけを話して下さ』
『はい』
『さうでないと、僕には、何んにも分らないので』
『ど尤もですわ』
『一體、どうしたといふのです』
『津川さん。――あなた、どうぞ怒らないでね』
と言つて初音は、今まで禎輔の膝の上に泣き伏してゐた顏を、初めてもたげると、涙に濡れたその顏を、恥かむやうに仄かに赧らめて、うるんだ眼をオド〳〵させて、チラと禎輔を見たが、すぐに眩しさうに視線を反らした。
『怒るも怒らないも、わけを聞いて見ないと、わからないぢやありませんか』
禎輔は、やさしく言つて、苦笑するよりほかなかつた。
『わたしね……わたし、赤ちやんが生れるの』
と言つて初音は、急にパッと眞赤な顏をすると、また俯首れてしまつた。
『そのことは、さつきお母さんからも、うかゞひましたが……とにかく早く、結婚するんですな』

『え〻』

と、かすかに頷いたが、初音の顔は、ます〳〵低くうなだれて、さながら乳の上に觸れんばかりである。

二

禎輔は、こんなに初音が恥かんだり、ハツキリしたことを説明出來ないのは、まだ結婚もしないうちから、赤ん坊が生れるのを、純眞な女性のデリケートな感情から、極度に恥かしがつてゐるのだと思つて、かへつて同情せずにはゐられなかつた。——それにしても、古くからの親友として、こんな問題こそ、杉村が説明してくれなければならないはずだのに、いつの間にか、どこかへ引つ越してしまつて、行く先を知らせる端書一本くれないなんて、何んといふことだらう！　と思つて　聊か腹を立てずにはゐられなかつた。

『杉村君が、當てにならないので、心配してゐらつしやるやうなお手紙を、いたゞきましたが、一體杉村は、その後どうしたんですか？』

と、禎輔は聞いた。

『わかりませんの』

『分らないのですか？』

『え〻』

『こゝを出てしまつて、どこへ行つたのです？』

『さあ』

『行先を、あなたのところにも、知らせないのですか？』

『え〻』

『それは、すこしひどい！』

と、禎輔は叫んだが、すぐに聲を和らげるやうにして、

『なぜ、確めないのです？』

『だつて……』

と言ひかけて初音は、切ない眼ざしをして、愬へるやうにチラと禎輔を見たが、また、すぐに伏せてしまつた。

『學校にでも行つて、調べて見たら、わかることぢやありませんか』

『それは、わたしも、さうは思つたのですが』
『では、訪ねて行つたのですか』
『えゝ。二度ほどは、思ひ切つて訪ねて行たんですけれども、會へませんでしたの。その上、あまり執拗くお訪ねして、ご迷惑になつても、お氣の毒だと思ひましたし……』
と、言ひかけて初音は、口ごもつてしまつたが、ホロリと一滴、涙が長い睫毛をつたつた。
『それは、どういふことですか？　そこまで關係が進んでゐる以上、一日も早く結婚するのが、當然ぢやありませんか』
思はず禎輔の聲が高くなるのに、初音はビク〳〵して、
『あら』
と、かすかに叫ぶと、
『あの……母に聞えると、困りますから』
と、可憐らしい眼をして、拜むやうに哀願した。
『さうですか』
と、言つて禎輔は、いくらか聲をひそめたけれども、

『ですが、お母さんは、すでにご存じぢやありませんか』
と、いぶかしさうに、眉を寄せた。
『それは母も、赤ちやんが生れるといふことは、知つてゐるんですけれども……わたしの身體を、つい母に見られてしまつたものですから』
『では、どうしてお母さんに聞かれたら、わるいのですか？』
『母は、生れて來る子の本當の父が、誰だかといふことを、すこしも知らないのですわ』
『えつ』
禎輔は、いよ〳〵驚かずにはゐられなかつた。
『どうして？』
と、聞かれて初音は、いよ〳〵絶體絶命になつて、
『それは、わたしがウソを吐いて、母を騙してゐるのですわ』
言つたかと思ふと初音は、聲を擧げて泣いた。

三

『お母さんを、騙してゐるんですつて？』

と、禎輔は呆れたが、初音は泣きながら、かすかに頷いて、

『えゝ』

と、言つた。

『どうして、お母さんを、騙したりするんです？』

『それには、いろ〳〵のわけが、ございますの』

『どんなわけが？』

と、禎輔が聞くと、初音は、やうやく顔を擡げて、

『津川さん』

と、改つた調子で呼んで、かなし氣な眼を見張るやうにして、じつと禎輔の顔に見入つた。

『僕には、どうも、何もかも、分らないことばかりです』

『ご尤もですわ

『ですから、そのわけを、話してくださいませんか』

『津川さん。わたしあなたには、とてもすまないことをしてゐるんです』

『どんなことですか？』

『母には、赤ちやんのお父さんを、あなただと言つてあるんです』

『えつ』

『すみません』

『それは、どういふわけですか？』

『母は、杉村さんを、ちつとも信用してゐないのです』

『……』

禎輔も、そのことは知つてゐるので、默つてはゐたけれども、かすかに、うなづいてゐた。

『信用してゐないばかりぢやありませんの。——母は杉村さんを、憎んでゐるのですわ』

『……』

禎輔は、やつぱり無言のまゝ、かすかに頷いてゐた。

『ですから、生れて來る赤ちやんの父が、杉村さんだといふことが分つたら、どんなに怒り、どん

なに絶望し、どんなに悲しむか知れませんの』

『……』

『怒つたり、かなしんだりするばかりではない。きつと、死ぬかも知れませんわ。いゝえ、ほんたうに生きてはゐないと思ひますの。ですから、わたし、つい母に聞かれた時に、お腹の赤ちやんのお父さまは、津川さんだと、言つてしまつたのです』

『……』

『わたしのお腹が大きいことを、母に見附けられた時、咄嗟のことで、さうでも言ふよりほか、どうにも仕方がなかつたの。――それには、母のはうでも、初めからさうと、思ひ込んでしまつて、お前は津川さんと、結婚するのだらうと言ふものですから、わたしもその時には、さうですと返事をするよりほかなかつたの』

『……』

禎輔は、黙つて聞いてゐたけれども、それで初音の立場も分つたし、今まで、どうしても腑に落ちなかつたすべてのことが、やうやくハツキリした。

でも、いつの間にか自分が、身に覚えもないのに、初音のお腹の子供の父になつてゐることは、

意外でもあつたし、迷惑なことでもあつた。

『ですからどうぞ、母の前だけでも、生れて來る赤ん坊の父になつていたゞきたいのですが』

『……』

『こんな無理なことをお願ひして、申しわけありませんけれども』

初音は必死になつて、やうやくのことで、それだけ言ふと、ほのかに顔を染めて、消えも入りたさうに俯垂れた。

『……』

禎輔は、拒みもしなければ、承諾もしなかつた。いかにも困惑し切つたやうに暗い顔をして、考へ込んでゐた。

二つの貞操

一

ヂリ〳〵と鳴り渡つてゐる開演を知らせるベルの音に、二人は急き立てられるやうにして、階段

を上ると、案内女に導びかれて、場内に入つて行つた。――まだ、電燈が明るく點いて、人々の溢れた華やかな光景を、照らしてゐた。

まつたく、大入り滿員だつた。見渡すかぎり、人の頭と、顏ばかりである。五月の中旬だといふのに、蒸し暑い日で、それに觀客でいつぱいの場内は、まるで眞夏のやう。さすがにまだ、扇子を使つてゐる客こそ見えなかつたけれども、それでも手にしたプログラムや、白いハンカチーフを、ハタ〳〵と動かして、顏や、襟筋に、微風を送つてゐる人々の姿が、そこにも、こゝにも、見えてゐた。後ろの壁に取りつけてある扇風器も、かるく廻つて、しづかな風を送つてゐたが、それくらゐなことでは、この人いきれと、蒸し暑さとは、どうにもならなかつた。

『映畫もいいけれども……これからは暑いのが閉口だわね』

と、君江は座席に着くと、そつと禎輔の耳にさゝやいた。

『今日は、特別ですよ』

言ひながら禎輔は、君江の後から、座席に入つて行つた。

ひどく混んで、二階でも既に後のはうには、かなり立つてゐる人々もあつたが、君江は指定席の豫約を申し込んでおいたので、二人が腰掛ける座席が、たつた二つだけ空けてあつた。

ある有名な女優が主演してゐるフランス映畫が、大へんな人氣を呼んで、この大入りなのである。

題は、『二つの貞操を持てる女』といふのであつたが、監督も巨匠だつたし、主演女優の素晴らしい演技が人氣を呼んで封切り前から、既に大へんな評判だつた。連日の超滿員で、切符を買ふのにも、二時間もかゝつた上に、入ることは漸く入つても、座席などは容易に取れないといふ有樣だつた。

映畫が好きで、封切り毎に、減多に見のがしたことのない君江だつた。――初日から何度も、いつしよに行かうとせがまれてゐたのを、たうとう今日まで、來ることが出來なかつたのである。

それは禎輔が、映畫なんかあまり好かなかつたからばかりではない。――いろ〳〵勉强の都合もあつたし、それに現在の禎輔の身の上としては、映畫など暢氣に見て、樂しんでゐられる場合ではなかつた。殊に、父の病氣から死に逢つて、學校も長く休んだためであるとは言へ、禎輔の進級試驗の成績は、あまり芳しいものとは言へなかつた。

今度は、今のうちから心がけて、石に嚙り附いて勉强しても、禎輔としては、優秀な成績を取らなければならなかつた。――さうでないと、卒業試驗の時の順位にも、自然と關係を及ぼすことになるだらうし、さうなると、卒業してからの就職に、必然に影響を及ぼすわけだつた。

禎輔は、悲壯な決心で、必死になつて勉強してゐるところだつたので、たとへ一晩でも、君江のお伴をして、映畫を見るなどといふことは、むしろ迷惑でこそあれ、決して、ありがたいことではなかつた。

二

初めのうちは、かへつて有難迷惑の氣持ちで、スクリーンの上に、次ぎ〳〵と、いろ〳〵な美しいシーンが現はれるにもかかはらず、禎輔のこゝろは、ちつともそれに惹き附けられなかつた。——主演女優の美貌が、さま〴〵な角度から大寫しになつたり、表情や、身ぶりがいかにも自然で巧まないところに、その人物になり切つてしまつてゐる巧妙な演技が、あらゆる場面で發揮されたりしても、ちつとも感動もしなかつた。

雲のやうに渦卷いた金髪や、長い睫毛の下にうるんだ瞳のかがやき、それからツンと高い鼻、濡れたやうにくつきりと、鮮かな色をしてゐる魅惑的な唇、それを禎輔も、美しいと思はないわけではなかつたけれども、たゞ、それだけのことだつた。

（まあ！）

とか、

（きれいだわね）

とか、

（ほんとに素的）

とか、そんなさゝやきが、方々で起り、中には、うつとりしたやうな溜息が、かすかに吐かれるのであつたが、それを洩れ聞いても禎輔は、べつに深くこゝろを動かされることもなかつた。——たゞ、刻々にうどいて行く美しい繪卷物でも見てゐるやうな、素朴な心持ちで、單純にスクリーンの上に、視線をそゝいでゐた。

が、ほんたうに映畫の内容が、だん〳〵強く禎輔のこゝろを掴みはじめたのは、晩寫が三分の一以上も、進んでからだつた。——一人の女が、二人の男を愛する話。三角關係といふのか、ありふれたストオリイかも知れないが、シナリオの運びが、實に自然なのと、主演女優の演技が眞に迫つてゐるのとで、だん〳〵映畫を見てゐるやうな、暢氣な氣持ではゐられなくなつて來るのであつた。一方の男性は、精神的に愛しつゞけながら、遂ひに唇をも許さなかつたプラトニック・ラブだつたのが、一方に別の男性が現はれて、どうしても結婚しなければならない事情にまで追ひ詰め

られた時、女は九天直下、すべてをその愛する男に捧げておいて、もう一人の男性と、結婚してしまふ。そして、そこから悲劇は發生するのであつた。

なぜかといへば、女のその行爲は、神をも、良人をも欺むくものであると同時に、結婚して月足らずに生れて來た子供は、當然、たつた一度だけ身を許した結果、生れて來たところの前の本當の愛人の子供であつたのだから——

責罰は、彼女の上に、おそひかゝつて來る！

彼女は、心の本當の愛人にも貞實であるために、今生の思ひ出として、たつた一度だけ身を許したのであつたが、正式に結婚した良人に對しても、決して不貞の妻ではなかつた。飽くまで貞淑に、良人に對して妻としての誠を盡し、かなり放埒な良人で、そのために常に苦しめられながらも、操を守り、忠實に仕へてゐるにもかゝはらず、過去の罪科が、どこまでも彼女の上にのしかゝつて來て、彼女をくるしめ、責め、苛み、彼女を押し潰す。

たゞ一つの貞操のみに從はずに、二つの貞操を持つたがために、苦しみ、罰しられなければならない女。

哀しき女！

映畫が、次第に終りに近づき、いよ／＼ストオリイが高調に達した時には、そこでも、こゝでも、かすかな啜り泣きの聲が聞え、鼻をすゝる音が、しのびやかに聞えて、觀客はすべて、涙にひたり、悲しみに陶醉してしまつた。

禎輔が、ふと見ると、隣りに腰かけてゐる君江も、白いハンカチーフを取り出して、そつと眼にあてゝゐるのが、チラと、ほの見えた。

三

『出ませうか？』

自分であんなに熱心に誘つておきながら、君江は『二つの貞操を持てる女』だけ見てしまふと、さう言つた。

最後に、女は毒を仰いで死ぬと、ちやうどその顏の上に、美しい鐵砲百合の花が一輪、ぽたりと落ちた。そして、見る／＼スクリーンの上が、ほの暗くなつてゆくと、やがてザ・エンドの文字が現はれ、薄い絹の幕は、兩側からしづかに閉つて行くといふ、かなりロマンチックな終りだつた。

直きに場内は、一時にパッと明るくなつた。

『さうですな。――僕は、どちらでもいいですが……』
と、禎輔は君江の氣持を計りかねて、その顏色を見てゐた。
『わたし、この映畫が見たかつたの。――アトのを見てもいいけれども、つまらないアメリカ映畫なの』
『さうですか』
映畫なんか、あまり見たことのない禎輔には、どの映畫が、どんなのだか、さつぱり見當が附かなかつた。
『折角、こんないい映畫を見て、快く興奮してゐるのに、アトで、くだらない映畫なんか見て、印象を打ちこはすのは、惜しい氣がするの』
『さうですな』
『でも、わたしが我儘を言つて、お誘ひしたんですから、あなたが、見てゆきたいとお思ひになれば、もつと見て行つたつていいのよ』
『それでしたら、これで出ませう』
『あら、出て下さる』

『僕は、今のを一つ見たゞけて、澤山ですから』
と言ひながら、禎輔は氣早やに、もう立ち上つてゐた。
『早く出て、その代りすこし散歩して、それから銀座にでも出て、わたし、お茶を飲みたいわ』
君江もつゞいて立ち上ると、後から禎輔を追つかけるやうにして、ぴつたりと寄り添つて歩きながら、甘えるやうに言つた。
ピンク色のジョーゼットに、襟に小さい飾りの附いたアフターヌン・ドレスを着て、マニッシュ型の帽子をかぶつたのが、とても君江を美しく見せた。いつもより白粉は薄いと思はれるのに、ルージュをすこし濃いめにしたのが、効果的であつた。
不斷、見馴れてゐる禎輔の眼にも、十倍も二十倍も、うつくしく、魅力的に見えたばかりではない。――男も、女も、行き逢ふほどの人々が、驚異の眼を見張るやうにして、二度も、三度も、わざ〳〵振り返らずにはゐなかつた。
（まあきれい）
中には、感嘆したやうに、さう言つてさゝやくかすかな聲が、禎輔の耳にも入らずにはゐなかつ

た。

もちろん、君江の耳にだつて、聞えないはずはないのに、彼女は、まるで知らんふりをしてゐた。

禎輔は、君江が美しいのは、うれしくもあつたし、群衆の中でも、人々の注意を引くのは、心中ひそかに、得意でないことはなかつた。

でも、それだけに不安で、氣が揉めるのであつた。

いかなる點からいつても、自分などが、君江から愛される資格は、すこしもないやうな氣した。

――それが斯うして愛されてゐるのは、夢ではないだらうか？　夢のやうな氣がする。

いつ、どんなはずみで、この幸福な夢が、醒めることがないとは限らない。――二人の間では醒めなくても、今、見たばかりの映畫のやうに、突如としてどんな障害が現はれて、二人の結婚の計畫も、幸福の夢も、めちや〳〵に破壞されてしまふかわからない。

――さう思つたゞけで禎輔は、恐怖に身ぶるひし、改めて君江の顏を、しげ〳〵と見つめずにはゐられなかつた。

四

帝劇を出ると、二人は電車線路を向ふに突つ切つて、濠端を、日比谷の交叉點のはうに、しづかに歩いてゐた。――外に出ると、それでも五月の夜氣は、いくらか冷や〳〵として、すこし汗ばんだやうに熱してゐる肌に、快かつた。

でも、そよりとの風もなく、濠の水の上には、小皺一筋寄つてゐなかつたし、舗道に垂れ下つてゐる糸のやうな柳の枝も、細い若葉も、ちよつとも搖れてゐない。晝間は濁つてゐる水も、夜見ると美しく、まるで鏡のやう。

その水の上に、東京會館や、帝國劇場のネオンサインや、飾り電燈が、美しく映つてゐた。

まるで龍宮とは、この水の中にあるのではないかと思はれるほど、赤や、青や、黃色に美しかつたし、じつと見てゐると、飛び込みたくなつて來るやうな錯覺に、おそはれるのであつた。

『いい夜だわね』

と言つて君江は、かすかに溜息を吐いて、並んで歩いてゐる禎輔の腕に、自分の腕を、そつと絡ませて來た。

『さうですな』

禎輔の血は、くわつとして燃え立つやうになつた。

その瞬間に、全身の血といふ血が、一滴も殘さずに焰になつたのではないかと思はれるほど、身體の中が熱くなつて、咽喉はカラ〳〵に乾からび、胸も、脚も、はげしく慄へた。

でも、そつと絡んで來てゐる君江の腕を、どうしても振りはなすことが出來なかつた。

『人に見られると……きまりが、わるいぢやありませんか』

喘ぎ〳〵禎輔は、やうやくのことで言つたが、その聲は、自分でもみじめなほど、慄へてゐた。

人通りは疎らだつたし、邊りは薄暗かつたけれども、禎輔は、行き違ふすべての人々から、じろじろ見られてゐるやうな氣がして、恥かしかつた。

そのくせ、絡んでゐる君江の腕を、無理に自分から、振りはなすのは、何んだかわるいやうな氣がした。

『いいわ、誰に見られたつて』

と、君江は平氣だつた。

『外人なんか、もつと人混みだつて、仲好く手を組み合つて、歩いてゐるぢやないの。——そのこ

とを思へば、これくらゐのこと、ちつとも、きまりをわるがることなんかないわ』

ます〳〵意固地になつたやうに、きゆつと强く絡んだ。

『ですが、僕たちは、外人とは違ふのですから』

『心配しなくたつていいの。——わたしたちは、決して人に見られてわるいやうなことを、してゐるのぢやないんですもの』

『……』

禎輔は、それ以上押し返して、何も言ふことが出來なかつた。

『今、見て來た映畫を、どうお思ひになつて？』

しばらく無言で、しづかに歩きつゞけた後、君江は急に話題を變へて、かすかに溜息を洩らした。——ほのかな街燈の光りの中に、いつの間にか歩みを留めて、濠端の鎖の傍に立つてゐた。そして君江は、濡れたやうにうるんだ瞳で、じつと禎輔の顏に見入つてゐた。

相變らず、しつかりと、腕は絡んだまゝである。

『どうしたのです？』突然。——何を思ひ出したのです』

禎輔は、かへつて君江の顏を、見返さずにはゐられなかつた。

『可哀さうだわ。今の女』
『今の女といふと、映畫で見た女ですか？』
『えゝ』
『だつて、あれは映畫の女で、現實のことではないぢやありませんか』
輔禎は、君江が眞劍に同情してゐるのが、一方ではをかしい氣もしたけれども、しかし、あゝいふ架空の女の悲しい運命に、今更のやうに同情してゐるところに、一種のしほらしさを感じて、今まで氣が附かなかつた君江の優しい一面を、初めて眼のあたりに見たやうな氣がした。

惡魔の跫音

一

『今、見て來たのは、映畫だけれども……でも、あれと同じやうなことが、この現實に、ないことはないと思ふわ。——いゝえ、いくらだつてあるのよ。きつと、多いのぢやないかと思ふわ』

君江は、現實のことではないと、禎輔に言はれたせゐか、なぜかムキにならずにはゐられなかつた。
『それは、實際の世の中は廣く、現實は複雜ですから、どんなことだつて、ないとは言へませんが』
禎輔は、なぜ君江が、こんな問題に、そんなにムキにならずにはゐられないのか、さつぱり分らなかつた。
『だからわたし、あの女の人を、可哀さうだと思ふの』
『それは、實際とすれば、もちろん可哀さうですが』
『あなたは、若しわたしが、あの女と同じやうな運命になつたら、どうお思ひになつて？』
『だが、あなたがあの女と同じ運命になるなんて……そんなバカなことが、あるはずがない』
禎輔は、一言の下に笑ひ捨てたけれども、しかし、君江は異樣に眞劍だつた。——今にも同じやうな運命が、わが身の上に迫つて來てゐるやうに、すこし蒼ざめた顏を緊張させて、眼には涙すら浮べて、じつと禎輔の顏を見つめてゐた。
『だつて……どうだか、わからないと思ふわ』

と、君江はかすかに言つて、ホツと溜息を吐いた。

『どうして？』

禎輔はびつくりして、眼の色までサツと變へると、あわてゝ聞いた。――どうだかわからないのを、やうやく身を支へた。

……と聞いたゞけで、もう呼吸は彈み、はげしく胸が喘いで、危ふくその場に昏倒しさうになつた

『あゝ、頼もしいわ』

と言つて、君江はニツコリした。

『何が頼もしいのです？』

『あなたは、やつぱりわたしを、愛してゐて下さるのね』

『それは、どんなにか……』

禎輔は情が迫つて、それ以上は言へなかつた。

『うれしいわ』

君江はうつとりしたやうに言つて、禎輔の腕にからんでゐるわが腕に、思はずきゆつと、力が入つた。

『だが、どうして、あんなことを言つたのです？』

『若し、わたしが、あれと同じ運命になつたら、困ると思つて……わたし、恐ろしかつたの』

『そんな恐ろしいことは、どうぞ考へないやうにして下さい』

『えゝ』

『僕は、びつくりして、倒れさうになつたのです』

『ご免なさい』

君江は、素直にあやまつたけれども、でもニツコリして、眼も、顔も、生き〳〵とかゞやかすと、

『わたしを、本當に愛して下さることがわかつて、わたし、とてもうれしいの。わたしは、仕合せだわ。――あなたから、こんなに愛されるなんて』

『君江さん。――それは、ほんたうですか？』

『わたしが、仕合せだといふこと？』

『僕のやうな者に愛されることが、そんなに仕合せですか？』

『えゝ。わたしが、生れて初めて逢つた立派な方。それは今までにも、いろ〳〵な男の方に、おめ

にかゝつてはゐるけれども、わたしが戀しいと思ひ、愛してゐるのは、あなた一人なの』

『……』

禎輔は感極まつて、かへつて何んにも言へなかつた。

『そのあなたから、こんなに愛されてゐるなんて……これが仕合せでなくて、ほかに、どんな仕合せがあるでせう！　わたし、幸福だわ』

君江は、情と、熱とをこめて言つたが、そのうつとりとうるんだ瞳は、まるで夢みるやうにかゞやいて、禎輔の顔を見入り、いつの間にか、絡んでゐた手を離して、今度は二人の手と手が、しつかりと、握り交されてゐるのであつた。

『僕も幸福です！　一生懸命に勉強して、一日も早く、二人が結婚出來るやうになりますから』

禎輔も涙ぐんで、その聲は感激のために、かすかに慄へてゐた。

『どうぞ、早くさうなすつてね。わたし、待つてるわ』

『君江さん』

今は人に見られることも、それから、きまりがわるいのも、まつたく忘れたやうに、固く〳〵手を取り合つたまゝ、希望のかゞやかしさに、將來の樂しい期待に――二人の身も魂も一つに融け合

つたやうに、うつとりとなつてゐた。

戀する幸福に浸るのに、ふさはしいやうな、しづかな春の宵である。――現在の幸福に陶酔し、希望の美しい星のかゞやきばかりを見て、血を燃え立たせてゐる二人の耳には、忍びやかに近づいて來る惡魔の跫音など、聞えるはずはなかつた。

もう直ぐそこに、近づいてゐるのに……二人の幸福を蝕む惡魔が、しのびやかに、それ、すぐそこまで、忍び寄つて來てゐるのに。

でも、二人は何も知らずに、幸福に醉つたやうになつてゐた――

二

『津川君。――おい、津川君ぢやないか』

いつの間に來たのだらう。見るも素晴らしい高級車が、二人が手を取り合つて佇ずんでゐる傍まで、音もなく近づいて、ぴたりと留まると、ドアが開いて、突然、聲をかけられた。

『えつ』

ゐるいことでもしてゐるところを、誰からか見とがめられでもしたやうに、びつくりした。

びつくりしたはずみに、禎輔は思はず邪險に、君江の手を振りはなすと、更に驚かずにはゐられなかつた。

ニコ〳〵して、自家用らしい高級車から、すらりと降りて來たのは、親友の杉村ではないか！合着の背廣に、薄茶色のソフトをかむり、ドイツ・ボックスの靴を穿いて、見るからに五分の隙もない青年紳士である。

立派に髭なぞ生やして、、禎輔が別れたのは、忘れもしない去年の十月の初めのことだつたが、それからこつち七ケ月か八ケ月の間に、どうして斯うも立派な紳士になつてしまつたのか？

學生時代の面影など、どこにもとゞめず、見るからに貴公子とでも言ひたいやうな、瀟洒として、品位の備はつた、立派な風采ではないか。

『おゝ、杉村君！』

と言つた切り、後の言葉がつゞかず、禎輔は驚異の眼を見張つたまゝ、まじ〳〵と杉村の顏を見つめてゐる。――まつたく驚いたといつていいか、呆れたといつていいか、禎輔は狐にでも化かされたか、夢でも見てゐるやうな氣持である。

『どうしたんだ？　久しぶりで、偶然逢つたのに、何をそんなに、ぼんやりしてゐるんだ？』

と、杉村は屈託もなさゝうに、明るい笑顏をして近づくと、そこに理由もわからず、手持無沙汰さうに立つてゐる君江のはうを、チラと見て、

『君のお友達？　どうだ、僕にも紹介してくれないか』

と、飽くまで優雅な態度は失はないけれども、でも、無遠慮と思はれるほど、まじ〳〵と君江の美しい顏に見入りながら、昔ながらの親しさで言つた。

禎輔は聞きたいことや、言ひたいことで、胸がいつぱいで、この咄嗟の場合に、君江を紹介するどころの氣持ではなかつた。でも、杉村から催促され、君江が、手持無沙汰さうに立つてゐるのを見ると、遽かに氣が附いたやうに、

『こちら、波多野君江さん。――僕が今、大へん厄介になつてゐる屋敷のお嬢さんだ』

と、君江について、簡單に說明してから、今度は杉村のことを、

『大學で、同じクラスにゐたんですが……僕の親友です』

と、言つた。

それ以上、どう言つたらいいのか、禎輔には分らなかつた。

以前は、たしかに親友だつたけれども、今も猶ほ親友といつていいか、どうか？　それから、ま

だ、大學に籍を置いてはゐるけれども、去年の暮れから、ずつと休んだ切りである。

禎輔が東京に歸つて來て、とにかく麻布三河臺の波多野家に、身を落着けることになると、既に冬の休みは、眼前に迫つてゐたにもかゝはらず、わづかな時間を惜しんでも、長く休んでしまつた授業を受けなければならないので、何はおいても大學に出席した。

だが、以前は毎日、同じ講義を聽いてゐたのに、杉村の姿は、どこにも見えなかつた。いろ〳〵調べて見ると、ちやうど一週間前から、休んでゐるといふことであつた。――初音の問題もあるので、禎輔は、どうかして早く逢ひたいと思つて、東京の引つ越し先を調べて見たけれども、どうして分らなかつた。

誰に聞き合せても見ても、知つてゐる者はゐなかつたし、學校にも、依然として眞砂町の初音の家にゐることになつてゐて、移轉先など、屆けてはなかつた。

禎輔は、たうとう杉村の鄕里の山口縣のはうにも、幾度か手紙を出して見たけれども、一度も返事もなかつた。

杳として消息がなく、皆目行方がわからないので、どうすることも出來ないでゐるうちに、今こゝで、偶然にも杉村の變つた姿と、行き逢うたのである。――禎輔は夢のやうな氣がして、どう言

つて杉村のことを、君江に紹介したらいいのか、わからないのも無理はなかつた。

三

君江と、杉村とは、禎輔の紹介が終ると、それ〴〵初對面の挨拶を交した。が、君江があつさりお辭儀だけしたのに、杉村のはうは、もう馴れ〳〵しく、

『散歩ですか』

と、聞いた。

『えゝ』

と、君江が何氣なくうなづくと、禎輔は傍から正直に、

『今、映畫を見て、出て來たところなんだが……』

と、言つた。

『映畫は、お好きですか？』

杉村は、スカさず君江に話しかけた。

『えゝ』

君江のはうでは、ちつとも打ち解けたところを見せなかつた。――馴れ〳〵しく話しかけられるので、仕方なく、たゞ簡單に返事だけした。

『僕も、映畫は好きで、この頃は、よく見るんです』

『今、帝劇で、二つの貞操を持てる女といふのを、見て來たところだ』

と、禎輔が言つた。

『あれは二三日前、僕も見たよ』

『君は、もう見たのか』

と、禎輔はびつくりした。――でも、心の中では、そんな映畫なんか見る暇があるのに、どうして初音のところには、顏出しもせず、自分のところも、訪ねてはくれないのかと、不平だつた。

『どうです？　それぢやこれから、いつしよに銀座にでも行つて、お茶を飲まうぢやありませんか』

杉村は、禎輔などはそつちのけにしておいて、君江を誘つた。

『でも……』

と、君江は、ためらつて、チラと禎輔の顏を見た。

『僕は、いろ〳〵君に、話さねばならないことがあるんだ』

禎輔は、杉村がまるで別人にでもなつたやうに、過去のことや、初音の問題などに對して、知らんふりをして、ちつとも觸れようとしないのが、不思議でもあれば、物足りなくもあつた。

銀座に出て、お茶でも飲まうと誘はれたのを幸ひ、いつしよに行つて、初音のことだけでも、是非、早く話さなければならないと、氣が焦つた。

『わかつてゐるよ。――僕だつて君には、いろ〳〵聞きたいこともあるし、話したいこともあるんだ』

と、チラと禎輔のはうを見ると、謎のやうな微笑を、その眼のまはりや、唇もとに浮べたが、

『しかし、そのことは、いづれ改めて二人で、會ふことにしようぢやないか。そのはうがいいだらう』

と、言つた。

『それは、改めて二人で會つても、いいけれど』

なぜ、今すぐではイケないのか？　こゝで會つたついでに話しては、イケないのか？　その理由は、禎輔には分らなかつたけれども、改めて會つて話したいといふなら、それはそれでもよかつ

た。

『だが、君の住所が、わからないものだからね』

と、禎輔は今までの不平もこめて、すこし皮肉に言つた。

『それは、僕の名刺もあげるがね……ナニ、いづれ明日にも、僕のはうから、訪問するよ。ちやうど明日は、日曜だから』

杉村は、ほがらかに笑ひながら、如才なく言つた。

『僕のところに訪ねて來てくれるのもいいが……僕は、今、君江さんの家に、厄介になつてゐる身だからね』

『親友の僕が、訪問するくらゐのことは、構はないだらう』

と、杉村は無遠慮に言つたが、今度は君江に向つて、

『どうですか？　おうかゞひしても、構ひませんか』

と、聞いた。

さう聞かれて君江は、斷はるわけにはいかない。

『どうぞ』

と、簡單に言つた。

『それでは、明日訪ねるから、今夜は、何も言はないことにして、これからいつしよに、銀座に行かう』

と誘はれて、君江は勿論、禎輔も餘り氣がすゝまなかつたけれども、とにかく杉村が待たせてゐる自家用車に、三人とも乘つた。

『銀座だ。――さうだな、どこがいいかしら？』

と、杉村は呟くと、問ひかけるやうに、君江を見た。

『わたし、どこでもいいわ』

實際、君江は、どこでもよかつた。――折角、禎輔と二人きりの樂しい時間を、これで滅茶々々にされたやうな氣がした。それでも、久しぶりに禎輔が逢つた親友だと思へば、このまゝ素つ氣なく別れてしまふわけにもいかない。早く、お茶だけつき合つて、別れたいと思つた。

日曜日の午後

一

杉村は、スペイン・ホールの前で、自動車を留めると、先づ君江を、助け降ろした。

ドアを開けて入つてゆくと、どこからか、ベエトオベンの作品百三十二番のクワルテットのメロディが、聞えてゐた。——恐らくホールの隅つこのはうで、エレクトロラが、レコードを奏してゐるのだらう。セツトも、照明も、スペイン風に氣持よく落着いて、お客は溫和しく、高い話聲や、笑ひ聲を立てる者もゐなかつた。

三人は、二階に上つてゆくと、そこの一隅の椅子に着いた。

紅茶に、シエリー酒。

禎輔は、いつの間に、どうして杉村が、こんな自家用車など乘り廻すやうな、立派な紳士になつたのか？　今は、どうしてゐるのか？　大學のはうは、これからどうするつもりなのか？　それを

たしかめたいと思つたけれども、それを聞かうとすると、杉村は手を振つて、

『そんな話は、今夜は一切しないことにしよう』

と、笑つて取り上げないのであつた。

『それよりも、僕は、君江さんに初めてお眼にかゝつたのだから、これからは津川君同樣、一つ親しく交際していただきたいものですな』

と、どうしても話を、君江のはうに向けるのであつた。

『わたしこそ』

初對面の儀禮としても、杉村に對して君江は、あまりすげない態度を見せるわけにはいかなかつた。

それに、精しいことは、まだ何んにも聞いたことはないけれども、禎輔の親友である以上は、これからもやつぱり、親しく交際をつゞけてゆかなければならないだらう。——だから君江としては、どうかして、もつと打ち解けなければならないと思ひながら、なぜか、どうしても打ち解けられないのであつた。

これがムシが好かないといふのだらうか？　それとも、自分たちの幸禮を破壞する惡魔の役割を務

める男だといふことを、この時から既に、君江の女としての何か不思議な神秘的な力が豫感して、忌み、きらつてゞもゐるのだらうか？

君江は、杉村から親しさうに話しかけられれば話しかけられるほど、如才なくもてなされると、もてなされるほど、ますます厭はしさを感ぜずにはゐられなかつた。——早く〳〵別れたいと、心では焦りながら、さうもいかなかつた。

禎輔としては、とにかく、久しぶりに逢つた親友である。——それも會はうとして、ナカナカ會ふことが出來なかつたのが、やうやく會へたといふのだから、何んとなく懐しいのは、無理もないことだと、君江としては察しないわけにはいかない。

さう察しると君江は餘計、たとへ自分が、どんなに杉村をムシが好かないとしても、自分から早く別れて歸るわけにはいかないし、そんな氣持を、氣ぶりに見せられないと思つた。

仕方なく、當らず、觸らずの態度で、相手になつてゐるよりほかはなかつた。

『君は學校のはうは、どうするつもりなんだ？』

禎輔としては、どうしても話が、ついそのはうに向くのを、どうすることも出來なかつた。

『君は、やつぱり、そんなことばかりに、拘泥つてゐるんだね』

と、杉村は眉をひそめた。

『だつて、それが何より肝要なことぢやないか』

『しかし、僕が、大學をつゞけるとか、このまゝ止してしまふとか、さういふことは、君江さんには、何んのかゝはりもない問題だからね』

『それは、さうだが……』

『だから、君と僕とだけで、そんなことを話してゐたら、當然、君江さんは、退屈されるぢやないか』

『なるほど』

禎輔は、杉村の言ひ分に感心して、自分の氣の利かなさを恥ぢ入るよりほかはなかつた。

二

『杉村さんて……一體、どういふ方なの？』

銀座から自動車に乘つて、三河臺の屋敷まで走らせながら、君江は禎輔と二人切りになると、初めてホッとしたやうに、心の自由と、くつろぎを取返し、明るい顏色になつて聞いた。

スペイン・ホールを出てからも、杉村は、二人を自動車で送つてくれると言つて、ナカ〳〵聞かないのを、それだけは君江が固く斷つて、駐車場からタクシイを拾つたのであつた。

『僕の中學時代からの親友なんですが……』

『中學時代からといふと、杉村さんも、やつぱりあなたと、郷里は同じ方面の方なんですの？』

『さうぢやありません。——僕は、ご存じのやうに長野縣ですが、杉村は、山口縣なんです』

『まあ、そんなに離れてゐるのに、どうして中學が、同じだつたんでせう？』

『僕も、杉村も、中學時代から、東京ですからね』

『あら、さうね』

と、君江は頷いて、

『ぢや、杉村さんのお家も、山口縣の田舍なんですの？』

『中學校も何もない、とても不便なところだといふことです』

『それでお二人とも、東京の中學にお入りになつたのね』

君江は、二人が中學時代からの友達だといふことは、それで腑に落ちたけれども、でも、やつぱり杉村を好きになれないのは、同じことだつた。

『でも、あたし、あなたのやうな方が、杉村さんと親友だといふことが、何んだか不思議な氣がするの』

『どうして？』

『あなたは、やさしい、善良な、とてもいい方でせう』

『さう言はれると、どうも少し、きまりがわるいですが』

と、禎輔は羞含むやうに、ほのかに顏を赧らめた。

『ほんたうだわ。——ほんたうに、いい方だわ』

と、君江は眞面目に言つて、獨りでうなづくと、

『それだのに杉村さんは、わたしには、どうしもいゝ方だとは思へないわ。恐ろしいやうな氣がするわ』

と言つて、肩をすくめた。

『それは、あなたの誤解ですよ』

禎輔は、親友のために、辯解せずにゐられなかつた。

『さうでせうか？』

『杉村も、いい男です。僕なんかよりも、ずつと頭がいいし、物もよくわかつてゐるし、ナカ〳〵頼もしい男です』

と、思はず力をこめて、杉村を褒め上げたが、しかし、初音との問題を考へると、つい心が暗くなつて、あまり力強くは言へなかつた。

『さう。――あなたは、さうおつしやるけれども、でも、わたしは、どうしてもさう思へないわ』

と、君江は呟いた。

三

翌日は日曜日だつたので、禎輔は朝から自分の部屋に閉ぢこもつて、熱心に勉強してゐた。――お晝のご飯の時に、一時間ばかり食堂に降りたゞけ。すぐにまた、自分の部屋に歸ると、デスクに向つた。

コツ、コツとノックの音。

『お入り』

眼は書物の上にさらしたまゝ、振り返りもせずに返事をすると、しづかにドアが開いて、入つて

來たのは君江だつた。――紅茶のセットを載せた銀のトレイを、重さうに兩手でさゝげてゐた。

さつきまで、ショパンのエチュードを彈いてゐる音が、かすかに聽えてゐたのに、いつの間にか止んだと思つたら、紅茶をいれて來てくれたのである。

禎輔が、波多野家に來てから、禎輔の部屋に花を生けてくれたり、紅茶やコーヒをいれて、來てくれたり、お菓子を持つて來てくれたりするのは、いつでも君江に決つてゐた。そればかりではない。朝夕の禎輔の身のまはりの世話を、何くれとなくしてくれるのも君江だつたし、學校の往き歸りを、召使と共に送り迎ひをしてくれるのも、やつぱり君江だつた。

兩親も、暗默の間に、二人の仲を認めてゐてくれるのだらう。――それに對して、べつに干渉したり、反對したりするやうなこともなかつた。

『お疲れになつた？』

流し眸にチラと、禎輔のはうを見ると、ニツコリして、君江はお盆を小卓の上におくと、

『すこしお休みになつたらいかが……お紅茶でも召しあがれ』

と、言つた。

盆の上には、茶碗も二つ、お菓子も二人分載せてあつた。

『わたしも、どいつしよに頂きたいと思つて……いいでせう』

日曜日のお茶の時間は、禎輔が在宅さへしてゐれば、それは二人に取つて、いつでも樂しい一時だつた。

『それでは、すこし休んで、ご馳走になりませうか』

と言つて禎輔は、回轉椅子を、くるりと向き直つた。

今日は、杉村が訪ねて來るといふ、約束の日である。

男の戀、女の戀

一

梅雨の季節に入つてから、じめ〳〵したやうな、陰氣な日ばかりつゞいた。——曇つた空から、しと〳〵と絹糸のやうな細い雨が、かすかに糸を引いて落ちてくるかと思ふと、いつの間にか止んで、薄日が射したりするが、それも氣まぐれで、半日とはつゞかないのである。

また、びしよ〳〵と、しめやかな雨。からりとした晴天の日など、一日としてなかつた。——雨が止んでゐても、どんよりと頭の上まで、雲が掩ひかぶさつてくるやうな、陰欝な曇天。

日が當つても、からりとした晴天を感じさせるやうなことは、半日はおろか、一時としてなかつた。

『折角、日曜だといふのに、ほんとに陰氣な天氣』

雨こそ降つてはゐなかつたが、こんなのを、今にも泣き出しさうな天氣とでもいふのだらう。

空はすつかり厚い雲の層に掩はれて、どこからも日の目が射さない。——今にもざつと、一降り大降りでも來さうな、暗澹たる空模様である。

それに禎輔の部屋は、ちやうど南側の際に、大きな椎の木が四五本、梢や、葉を茂らせて、窓の上まで、掩ひかぶさるやうになつてゐるので、よく日の當る明るい日でも、部屋の中には、さわやかな綠りの影をつくつてゐた。それが雨の日や、こんな曇りの日には、電氣でも點けたくなるほど、薄ぐらくなつた。

君江は、トレイをサイド・テーブルの上において、自分もそこの小椅子に腰を降ろし、上手に湯を注いで、紅茶をいれながら、チラと窓のはうを見て、その美しい眉根を、心持ひそめるやうにし

た。

『日曜日でも、どこにも遊びに行く當てのない僕などには、かへつてこんな日のほうが、心持が落着いて、いいですよ』

それに禎輔は、あまりぱつとして華やかなことだとか、浮き浮きしたことなど好まない性格のせゐかも知れなかつたが、一年中の季節のうちでも、この入梅の頃とか、晩秋初冬の候、落葉に木枯の音が、かすかにさゝやいたり、時雨の渡つてゆく忍びやかな音を聞いたりする頃が、一番なつかしく、好きであつた。

『内にゐるにしても、こんな日は、何んだかくさ〳〵するぢやないの』

と言ひながら君江は、いつものことで分つてゐるので、砂糖も三つ入れたし、レモンを一切れ入れて、

『どうぞ』

と、禎輔に取つてやつた。

『ありがたう』

禎輔は、紅茶のカップを、デスクの上におくと、

『僕は、この入梅の季節が、どういふものか好きなんです』

と、言つた。

『わたしも、あなたと斯うしてゐられると、お天氣なんか、どんな日だつて構はないんだけれど』

君江は、につこりして媚びを湛へたやうな、やさしい眼で、チラと禎輔の顔を見たが、すぐに甘えるやうに、

『だつて、あなたは、ご勉強でせう。——わたしは一人で、自分の部屋にゐなければならないんですもの……退屈してしまふわ』

と言つて、鼻を鳴らした。

『勉強して、今度の學年は、もつといい成績で進級しないと、亡くなつた父にも、すみませんから』

禎輔の頭には、父の死、一家の沒落、自分の勉強、卒業、一家の再興といふやうなことが、いつでもこびり附いてゐて、一刻と雖もその考へから、解放されるやうなことはなかつた。或る時などさういふ思ひにヂリ〳〵と驅り立てられて、苛ら苛らする餘り、こんなことをして、美しい女性の愛などに溺れてはゐられないのだと、自から鞭打ち、この屋敷から飛び出してしまはうなどと思つ

たことも、幾度だか知れなかつた。

だが、こゝを飛び出して、それでどうなるといふのだ？

この反省が、禎輔の全身をギリ〳〵と、金縛りにして、身動きもさせないのを、どうすることも出來なかつた。

二

どんな氣持でゐるのか？　時々は、どんなことを感じたり、考へたりしてゐるのか？　それを知るはずのない君江は、勉強と、學校ばかりに沒頭して、ほとんど傍眼も振らない禎輔の態度が、一方では頼もしいと同時に、また、何んとなく物たりないのであつた。もつと一生懸命になつて、身も世も忘れたやうになつて、あらん限りの情熱を傾けて、全精神を打ち込んで、自分を愛してくれないのは、寂しくもあつたし、慊りなく思ふのは、戀する女の立場として、無理もないことだつた。

これが、男の戀と、女の戀との相違であらう。

男は、戀する身にも、行く手のわが希望とか、野心などを、決して忘れない。が、女は戀をする

時、戀以外に何物もない。――親も、世間も、家庭も、その眼中にないものが、何んの成功があり、野心があるものか！　戀に殉じ、戀と共に燃え――その戀のために花が開くか、或ひはまた、戀のために滅びるか！

とにかく、戀に生き、戀に死ぬのが、女の生命である。

『學校に行つてゐらつしやる間は、仕方がないわ。それだつて、わたしは辛いけれども、辛抱するわ』

と言つて君江は、じつと禎輔の顔に見入りながら、溜息を吐いた。

『……』

禎輔は、君江が何を言はうとするのか、わからなかつたので、默つたまゝ、君江の物狂はしいやうにかゞやいた、熱つぽい視線を受けて、ほのかに顔を赧くし、眩しさうに瞬きしてゐた。

『でも、せめて内にゐる時だけでも、斯うしていつしよにゐたいわ。――それなら、どんなに嬉しいかしれないのだけれども……』

と言つて、自分で餘り遠慮のないことを言つたのが、すこし恥かしくなつたのだらう。――ほのかに頰を染めると、力なく頂垂れた。

『ですが、僕は、勉強しなければならないのですから』
『わかつてゐるわ』
と、君江は再び、きつと顔をもたげると、愬へるやうに、
『ですから、わたしは、寂しいのですわ。――あなたは、勉強なさらなければならないでせう。その間、わたしは自分の部屋に、一人でゐるんですもの。あなたが、内にゐらつしやる間だけでも斯うしてあなたと、どいつしよにゐられたら、どんなにうれしいか知れないのに。ね、わたしをいつしよに、この部屋において下さらない』
と、言つた。
『そんな駄々つ兒見たやうなことを言つても、それは出來ないことぢやありませんか』
『なぜ？』
『結婚しなければ……同じ部屋になんか、いつしよにゐるわけにはいかないんですよ』
禎輔は、そんなことまで分らないくらゐ、無邪氣な君江だらうかと、今更の如く彼女の顔を、見まもらずにはゐられなかつた。見れば見るほど美しいし、その子供のやうな邪氣なさに、心を惹き附けられずにはゐられなかつた。――君江と相對しゐる時には、つとめて理性的に、落着いてゐよ

うと心がけてゐる禎輔も、だん〳〵遣る瀬なくなつてゆくやうな情熱を煽られて、胸が切なくなつて來た。
『結婚したら、あなたと同じ部屋にゐてもいいの？』
すこし首をかしげるやうにして、涼しい眼が、しづかに禎輔の顏の上に、まともに注がれた。
『それは、結婚してしまへば……自由でせう』
と、答へて禎輔は、息を呑んだ。
『ぢや、早く結婚して』
『えつ』
『すぐでもいいわ』
『そんなことを言つても……僕は、まだ、學生だし……』
『學生だつて、結婚して、お父さんになつてゐる人もあるわ』
『それは、さうですが』
禎輔は、杉村のことを思ひ出してゐた。結婚こそしなくても、杉村は、やがて父にならうとしてゐるではないか。――そして自分は不思議な廻り合せから、假りの父、贋の父になつてゐる。

『わたしは、もう待ち切れなくなつたの。あなたが、大學を卒業なさるまで、これから一年も、二年も待つてゐるなんて、とても辛抱が出來さうもないわ』

『では、どうしたらいいんです』

『だから、あなたが、早く結婚して下さるのよ』

君江は、こともなげに言つた。

三

『君江さんは、結婚といふことを、そんなに單純に考へてゐるんですか？』

禎輔は、さも〳〵可愛しいといふやうに、情をこめた眼ざしで、じつと君江を見つめながら、思はず彼女の手を、そつと取らずにはゐられなかつた。

君江は、うれしさうに眼をかゞやかし、取られた手に力をこめると、禎輔の手を固く握り返した。——君江のその手は柔らかで、熱でもあるやうに溫かだつたが、禎輔の手は、かすかに慄へてゐた。

『二人は、愛し合つてゐるんでせう？』

君江は、自分の顏を、近々と禎輔の顏に寄せながら、やさしい眼もとに微笑をふくんで、小首をかしげた。——その風情が、まるで十二か、三くらゐの少女のやうに、邪氣なく、可愛らしく、そして魅惑的だつたので、禎輔はその瞬間、思はず全身がわなゝくのを、抑へることが出來なかつた。

『はあ』

今更、何んの必要があつて、そんな分り切つたことを、聞くのだらう？　と、禎輔は腑に落ちなかつた。

『ぢや、何んにもムツかしいことなど、ないはずだわ』

『さうは、いきませんよ』

『どうして？』

『……』

禎輔は、一口には答へられないので、默つてゐた。

『二人が愛し合つてゐるから、結婚するんですもの。何んにも、そんなムツかしいことなんか、あるはずがないわ』

『僕には、まだ、家庭を持つ資格なんかありません』
『パパに頼めばいいわ』
『こんなに厄介になつてゐる上に、そんな厚かましいことが、どうしてお願ひ出來るものですか』
禎輔は、かなしさうに言つて、かすかに溜息を吐いた。
『あなたが頼まなくてもいいのよ。――わたしが、パパに頼むからいいわ。わたしの頼むことならパパは、きつと何んだつて聞いてくれるわ』
『あなたから、おねがひになるにしても、そんなことをお父さんにおねがひしたら、僕が、見つともないですよ』
『見え坊』
『えつ』
『その上に、あまり正直で、氣が小さすぎるわ』
『しかし……』
禎輔が何か言はうとするのを、君江は抑へるやうにして、
『いいわ、あなたは心配しなくたつて……』

と、口早やに言ふと、につこりして、更に禎輔の手を、力をこめて固く〳〵握りしめながら、
『わたしに任せておいて。――わたしだつて、財産を持つてゐるのよ。お亡くなりになつたお祖父さまが、わたしのために別に財産を殘しておいて下すつたのよ。結婚するまでは、お父さまが保管してゐて下さるの。結婚すれば、それはわたしたちが自由に使つても、いいことになつてゐるの』
と、言つた。
『しかし、そんな財産を、使ふわけには行きません』
『なぜ？』
『生活費にして、使つてしまつても、いい性質の財産ではないはずです』
『だつて、わたしのために、お祖父さんが殘して下すつた財産ですもの。何んに使つたつていいはずだわ。――わたしの幸福のために使ふんですもの。お祖父さんだつて、きつと本望だわ』
『それは、あなたの心任せにするとしても、僕には、どうしても實現しなければならない望みがあるのですから』
『わかつてゐるわ。――勉強でせう。大學を卒業することでせう』
『何んにも資本があるわけではなし、財産があるわけでもなく、ほんたうに我が身一つの僕なので

す。勉強し、學校を卒業して、それから津川の家を、どうかして興さなくてはならない義務があるんです！』

『わたしは、あなたの妻よ。だから、どんなことをしても、あなたを助けなければならないの』

『ありがたう』

『わたしのこの氣持は、わかつてゐて下さるわね』

『君江さん。よく分つてゐればこそ、僕は、どんなに感謝してゐるか知れないんです』

『イヤ！　そんなのはイヤ。感謝してゐるなんて、他人行儀で、水臭いわ。――それよりも、わたしを信じてね。わたしを愛して、しつかりと掴まへて、一生涯、離さないやうにして！』

君江は、熱して、熱い息をはづまして言つた。

そこに、コツ〳〵とノックの音が、かすかに聞えた。

召使が、杉村が訪ねて來たのをあつた。

五千萬圓の財産

一

君江は、杉村のことを、愛する禎輔の親友だと聞かされて見ると、どうかして自分も、好きになちなければならないのだと思つたし、わざ〳〵屋敷に訪ねて來られたりすると、なるべく愛想好くもてなさなければならないのだと思つた。

でも、さう思ひながら、どういふものか君江は、杉村に對して、いい感じを持つことが出來なかつた。――これが性が合はないとでもいふのか、或ひはムシが好かないといふのだらう。

杉村と顏を合せるのが、イヤで〳〵堪らなかつた。

二階に上つて來ないうちに、早く、自分の部屋に、逃げ出してしまひたいと、どれだけ焦つたか知れなかつた。

しかし、そんな現金なことも出來なかつた。――杉村に對しては兎もかく、それでは禎輔に對し

て、わるいやうな氣がした。杉村が來て、挨拶だけしたら、すぐに逃げ出して行くつもりで、待つてゐた。こんな場合に、わざ〳〵やつて來るなんて、まるで二人の幸福を破壞するために、のこのこやつて來た惡魔の使のやうな氣がして、君江としては一層厭はしかつた。

『やあ』

召使に導びかれて、部屋に入つて來るなり杉村は、先づッカツカと君江の前にすゝんで、ニコニコしながら、調子よく聲をかけると、

『昨夜は、どうも失禮しました。――お約束しました通り、間違ひなく、訪問しました』

と、まるで君江と、約束でもしたやうなことを言つた。

『昨晩は、どうも』

君江は仕方なく、イスから立つて、言葉少なに挨拶を返したが、その困惑し切つたやうな眼は、さながら救ひでも求める時のやうに、チラと禎輔のはうを、見ずにはゐられなかつた。

『やあ、よく來てくれたね。――待つてゐたよ』

善良な禎輔は、杉村が最初から、自分を閑却してゐることなどに、氣をわるくするでもなければ、腹を立てるわけでもなかつた。杉村が、自分のはうなど無視するやうな態度をとつて、君江にばか

り口をきくのは、それは杉村が、君江を自分の恩人として、尊重してくれるからにほかならないのだと、善意に解釋した。

『さあ、掛けたまへ』

と言つて禎輔は、自分と向ひ合つた肘イスを、杉村にすゝめた。

『失敬』

と、杉村は簡單に言つて、わざ〳〵君江と並んだイスに着くと、

『いかゞでせう？　今夜、日比谷公會堂の音樂會の切符を持つてゐるのですが、お伴願へないでせうか』

と、單刀直入に切り出した。――それは全く、傍にゐる禎輔の存在など、無視した態度だつた。正直と言へば、正直かも知れなかつたが、圖〳〵しいと言へば、さうも言へないことはなかつた。

さすがに君江は、あまりの傍若無人さに、かすかな反感を、そゝられずにはゐられなかつた。

『今夜は、差支へがありますから、行かれませんわ』

と、穏やかな言葉ではあつたけれども、言下に、きりぱり斷わつた。

すると禎輔は、傍からあわてたやうに、口を出して、

『日比谷公會堂の音樂會と言へば、シャリアーピンの獨唱會だらう』

と、言つた。

『さうなんだ。大へんな人氣で、ナカ〳〵切符が手に入らなかつたところを、いろ〳〵苦心して、やうやく二枚だけ手に入れることが出來たんだが……何しろ凄い人氣ですよ』

と、杉村は半ば禎輔のはうに答へ、半ば君江に話しかけた。

『君江さん。――それでは、ちやうど幸ひぢやありませんか。あんなに行きたいと言つてゐたのを、僕は、どうしても、いつしよに行けなかつたのだが……杉村君が、いつしよに行つてくれゝば、こんな好都合のことはないぢやありませんか。是非、行つてらつしやい』

音樂の好きな君江が、あれほど聽きに行きたがつてゐたシャリアーピンの獨唱會である。杉村が切符を二枚手に入れて、わざ〳〵誘つてくれるのこそ、何よりの仕合せと言はなければならない。

――もちろん、杉村に對する君江の本當の氣持など知るよしもない禎輔は、自分の代りに、杉村に連れて行つてもらへば、君江のために、こんな有難いことはないと思つた。

『聽きに行きたいと思つてゐらしたところですか。――それなら、ほんたうに好い都合ですな。プ

レミアムが附いてゐる上に、今日になつては、まつたく切符など、一枚も手に入らないですからな』

と、杉村は飽くまで、そゝるやうに言ふのであつたが、君江は、なぜか何んにも答へなかつた。

二

『今夜が、お終ひだといふぢやありませんか。だから、今夜行かなかつたら、もう二度と、聽く機會なんかないかも知れませんよ。何しろ、六十幾歳とかの年寄りだといふのですからな』

と、禎輔も頻りにすゝめたが、君江は、やはり默つてゐた。

『ほんたうですよ。――それに、あなたがいらつしやらないと、折角苦心して手に入れた切符を、見す〳〵無駄にしなければならないのですからな』

杉村は、とても熱心だつた。

『プレミアムの附いてゐる切符を、無駄にするなんて、まつたく勿體ないですよ。――それに音樂のわからない僕なんかと、いつしよに行くより、杉村君といつしよに行つたはうが、どれくらゐ意味があるかわかりませんよ』

禎輔が、更に一生懸命にすゝめると、君江は、じつと、かなし氣な、愬へるやうな眼をして、禎

輔の顏を見て、

『あなたは、ほんたうに、そんなにわたしが、杉村さんとごいつしよに、音樂會に行くことをすゝめて下さるの？』

と、聞いた。

『ほんたうですとも！　僕は、本氣ですゝめてゐるんですよ』

『さう』

『僕が、行けないために、君江さんまで行らつしやらないことを、僕は、どんなにかすまないと思つてゐたところなんですから……』

『あなたが行つしやらないのに、わたし一人だけが行つても、ちつとも樂しいことはないわ』

『ですから、杉村君が、いつしよに行つてくれるんです』

『さうね……』

と、言つて、君江は溜息をつくと、口ごもつてしまつた。

（あなたとごいつしよならこそ、わたし行きたいんぢやありませんか。杉村さんとなんかいつしよに行つたつて、わたし、ちつとも樂しいことはないわ）

と、その場合君江は、はつきり言ひたいところだつた。

（それだのにあなたは、わたしの氣持も知らずに、杉村さんといつしよに行けなんて、おすゝめになるのね）

心では怨めしく思つても、でも、口に出しては言へなかつた。――さすがに君江としても、杉村を眼の前において、そんなことは言へなかつた。

『津川君も、あんなに言つて、すゝめてくれるんですから、是非、お伴をしたいものですな』

杉村は、こゝろで北叟笑みながら、表面には、氣ぶりにも現はさなかつた。

『えゝ』

君江は、かすかに返事をした。

『行らつしやいますか？』

と、杉村は急に胸を躍らせ、生き〳〵と眼も顏も、かゞやかした。

『津川さんも、いつしよに行らつしやると、いいんですけれども』

君江は、まだ未練深さうに、哀願するやうな眼をして、禎輔のはうを見た。

禎輔は、胸を打たれて、この時何んだか、杉村と二人だけで、音樂會に行かせたくないやうな氣

がしたけれども、でも、そんな氣持は振り捨てるやうにして、
『僕は、昨夜も遊んでしまつたし……今夜は、どうしても勉強しておかなくなつてはならないことがあるんですから、二人で行つて下さい』
と、やさしく慰めるやうに、また、詫びるやうに言つた。
『それに、生憎と切符が、二枚切りしかないものですから』
結局、禎輔が行かなくて、君江と二人だけで行くことは、杉村としては、思ふつぼだつた。

三

雨は降らず、いい工合に雲の薄れ目から、夕方近い午后の日の光りが、かすかに射して來た。
禎輔は、君江が、外出の支度のために、自分の部屋に行つてしまふと間もなく、自分もイスから立つて、
『すこし、庭を案内しよう』
と言つて、杉村を誘つて階下に降りると、庭に出た。
昔の大名の屋敷跡を買ひ取つたのだといふ、建物こそ新たに洋館を建て增したり、夫人の好み

で、茶室なども建てたけれども、庭はそのまゝだつた。
一萬坪に餘る廣々とした敷地に、池もあれば、築山もあり、林もあれば、阿亭もあつて、ぐるりと一周り歩くだけでも、いいかげんの散歩にはなつた。
『どうして君は、こんな屋敷の厄介になることになつたんだ？』
母屋から離れて、林の下につゞいた小徑を歩きながら、杉村は先づ聲をひそめるやうにして、不思議さうに聞いた。
『殊に、あの美しい令嬢は君のことを想つてゐるらしいぢやないか。――君もナカ〳〵隅にはおけないぜ』
意味あり氣に、禎輔の顏を横眼でチラと見ると、杉村は羨ましさうに眼をかゞやかせて、ニヤリと笑つた。
『僕のことを話すよりも、先づ君のことが聞きたいんだ』
と、禎輔は言つた。
『どうして、學校にも出席しないのか？　また、いつの間に、自家用車など乘り廻すやうな、紳士になつたのか？　いくら考へても、見當が附かない』

『ははゝゝゝ、それが君には、不思議なんだね』
『まつたく、不思議だよ』
『ところが、不思議でも何んでもないんだ』
『では、どうして……』
『僕が、こんな身分になつたのかといふのだらう』
『僕には、夢のやうな氣がするんだけれども……』
『夢でも何んでもないさ。――今では僕は、これでも五千萬圓の財産のある素封家の家長なんだからな。自分のしたいと思ふことなら、大抵なことは出來るんだよ　現代は金だ！　金が力の世の中だ。吉祥寺の井之頭公園附近に、三千坪ばかりの土地附きの洋館を買つて、そこを別邸として、僕は住んでゐるのだよ』
『別邸と言へば、では、どこかに本邸があるのだらう？』
『山口縣にあるよ』
『どうして君は、夢の間に一躍して、そんな富豪になつたのだ？』
『親父が、死んだからさ』

と、杉村はこともなげに言つて、ははゝゝゝと笑つた。
『えつ』
『僕の家が、山口縣の素封家だといふことは、たしか君も、知つてゐたはずぢやなかつたか』
『それは知つてゐたけれども、君は、三男だといふので、いつでもコボしてゐたぢやないか』
『兄は發狂、次の兄は行方不明で、二人とも相續の資格がなく、それで僕が、親族會議の結果相續人と決定したんだ。君が歸國してから間もなく、僕も呼び歸されて、正式に家督相續の手續きをしたといふわけさ。――上京したのは、今年になつてから、三月の初めだつた』
『それから、吉祥寺の公園の傍に、そんな屋敷を求めたのか？』
『引越したのは、つい一ヶ月ばかり、前のことだよ』
『それまでは、どこにゐたのだ？』
『まるで探偵にでも、何か調べられてゐるやうだね』
と言つて杉村は、また、ははゝゝと高らかに笑つた。
『さういふわけではないが』
と、禎輔はつい赧くなつて、辯解せずにはゐられなかつた。

『帝國ホテルにゐたよ』

『帝國ホテルに？』

と言つたが、禎輔は聞くことのすべてが、何んだか夢のやうな氣がした。――まつたく人の身の上くらゐ、わからないものはないと思つた。

父が亡くなつたがために、一家が沒落の悲運に逢うて、その再興の責任の重荷を、双の肩の上に負はなければならない、自分のやうな者があると思へば、一方には杉村のやうに、父が死んだがために五千萬圓といふ莫大な財産が、思ひがけもなく、その懐中にころげ込んで來る人もある。――世はさま〳〵であり、人の運命もさま〳〵であると、禎輔は思はず、深い深い感慨に耽らずにはゐられなかつた。

呪はれた男

一

古い池の汀には、花菖蒲、石蒿、燕子花などが生え茂るに任せて、ちやうど紫や、白の花盛りだつた。

水の上には、水蓮が、そこにもこゝにも、ぽつかりと、美しい花を開いてゐた。白い鷺鳥の五六羽が、滑らかな水の上に、水尾を引いて、當てもなく、しづかに泳いでゐるのが、繪のやうな美しさだつた。

そこは裏庭の古池だつたが、汀の近くに、二三脚のベンチが据ゑてあつた。白樺の丸太で組立てたものが、いかにもその位置に、よく調和して、風情があつた。風雨にさらされて、白い紙のやうな薄い皮が、ところ〳〵はがれてゐた。

禎輔と杉村とは、さつきからそのベンチの一つに、腰をかけて休んでゐた。――杉村のはうは、そこにじつとしてゐるのが、何か牾かしく、心急くらしい樣子だつたが、禎輔は、どうしても聞かなければならない肝腎なことを、まだ聞いてゐないので、意氣込んでゐた。

たゞ、いくら親友の間柄とは言へ、いかにも言ひ出しにくいことなので、どういふ工合に切り出したものかと、さつきから迷つてゐた。

『君江さんは、もう支度が出來たかも知れないね』

と、杉村はモゾ〳〵して、母家のはうばかりを氣にするやうに、幾度となく振り返つたが、
『一人で打つちやらかしておいては、わるくはないのか』
と、言つた。
いくら振り返つて見ても、そこから母家までは、かなりの距離があるし、途中には林も茂つてゐれば、築山もあるし、窓も、棟も見えなかつた。
『君江さんのことなら、心配しなくても、大丈夫だよ』
と、禎輔は言つたが、その言葉を杉村は、すこし皮肉に聞いたらしく、いくらか顏色を變へると、
『イヤ、僕だつて、べつに心配してゐるわけではないさ』
と、辯解した。
『それよりも君は、その後初音さんには、會はないのか？』
禎輔が、思ひ切つて聞いたのに、杉村は造作なく、
『會はないね』
と、答へた。

『一度も？』
『うん、一度も！』
『なぜ？』
『べつに深い理由もないが……これからも僕は、初音さんには、會ふまいと思つてゐる』
『ぢや、君は、何んにも知らないのだらう……』
と、禎輔は溜息をついた。
『何んにも知らないね。――だが、知らなくたつて、いいんだ。一生涯、會ふ必要のない女だからな』
『そんなことを言つて、それでは君は、初音さんにすまないぞ』
禎輔は、腹も立つたし、言ひたいことが胸いつぱいに溢れて、顏が眞赤になつて、かへつて口が自由に利けなかつた。
禎輔がムキになればなるほど、杉村は餘計、冷やかになつて、
『君は、また、初音さんのことゝいふと、ひどく熱心になるぢやないか』
と、冷かすやうに笑つた。

『熱心にならずにゐられないさ！　僕は、いろ〳〵精しいことを、初音さんから聞いてゐるからな』

と、息を切らしながら、躍起になつて言つた。

『さうだ、君は、初音さんとは特別に親しかつたからな。――僕などよりも、かへつて君のはうを、初音さんは信頼してゐたらしいからな』

『さうかも知れない。しかし、それは君が、初音さんに對して、あまり當てにならないやうな態度を見せるから、どうしても、君の親友としての僕を、自然頼りにするやうになるのぢやないか。心細い女の立場として、無理はないよ』

『さうだらうか』

杉村は、不服さうだつたが、同時に、そんな問題に、いつまでも拘泥つてゐることが、さも迷惑だと言はんばかりに、眉をひそめてゐた。

『可哀さうに！　初音さんは、どんなに苦勞してゐるか知れないよ』

『しかし、何も苦勞しなければならないやうな理由は、ないぢやないか』

『君は、そんなことを言つて！　初音さんは、姙娠してゐるんだぜ』

『えつ』

『やがて間もなく、君の子供が、生れて來るのぢやないか』

『何を馬鹿な！』

と叫ぶと、杉村は顏を眞赤にして、から〳〵と笑つた。

『えつ』

今度は、禎輔のはうが呆氣にとられて、杉村の顏を、マジマジと見つめたまゝ、息を呑んだ。

『初音さんが、子供を產むとしても……それが、どうして……どうして僕の子供なんだ……誰の子だか……そんなことが、わかるものか。誰の子だか……』

と言つたかと思ふと、杉村はつと立ち上つた。

『待つてくれ！　君の言ふことは、聞きずてにならないぞ』

善良な禎輔も、さつと顏色を變へて、つゞいて立ち上つた。

二

『興奮しないでくれ』

と、杉村は二三歩行かうとしたのを、立ち止まつて、しづかに言つた。

『聞き捨てにならないと言つて……どうするんだ？　僕は、正直なことを言つてゐるだけぢやないか』

杉村は、こゝで禎輔と爭ふ氣など、みぢんもなかつたので、ニコ〳〵した笑顔になつて、熱してゐる禎輔を、かへつて宥めようとしてゐた。

『初音さんは、とても苦しい立場に立つてゐるんだ』

『子供が產れるために？』

『君は、行方がわからなくなつてしまふし、お母さんには、姙娠してゐることがわかつたし……』

『あの母親は、初めから僕を、嫌つてゐたんだ』

『だから初音さんは、お腹の子供の父親が、君だといふことは、どうしてもお母さんには打ちあけられないし……そのために、たうとう僕が、假りに父親だといふことになつてゐるのだ』

『そのはうが、僕の考へでは、むしろ自然だと思ふね』

と、杉村は穩やかに言つて、でも明るく笑つた。

『君は、一體本氣で、そんなことを言ふのか？』

禎輔は一歩、杉村のはうに詰め寄ると、ぐつと睨むやうに見た。

『君は、すぐその通り、ムキになるから困るが』

杉村は、相變らず狡るさうな微笑をつゞけながら、

『しかし、君は、本當に初音さんとは、何んの關係もなかつたのか？』

と、聞いた。

『杉村君。君は、初音さんを、そんな女だと思つてゐるのか？』

『……』

『また、僕を、そんな人間だと、思つてゐるのか？』

『……』

『それは、初音さんや、僕を侮辱するのも、甚だしいものだ』

禎輔は、急き込んで一氣に言ふと、はげしい怒りのために、血の氣を失つたやうな唇を、ブルブルと慄はせてゐた。――じつと杉村の顏を睨みつけてゐる双の眼からは、今にも血潮が迸しつて、吹き出すのではないかと思はれた。

『そんな意味に取つてもらつては、僕も困るのだが……しかし、僕は女といふものが信じられない

のだ。男女の關係が、信用出來ないのだ』
『杉村君。しかし、それも相手に依ることぢやないか』
『だが、表面は、どんなに何氣ないふりをしてゐたつて、一度び人間らしい教養や、扮飾を脱ぎすてゝしまへば、何をするか、分らないからな』
『それは……それは、惡魔の思想だ！』
禎輔は、恐ろしさうに肩をすくめ、唇をわなゝかせて叫んだ。
『さうかも知れない。しかし、いつたい人間といふものゝ多くが、惡魔以外の何物だらう？　僕には分らない』
『君は、呪はれてゐる！』
『さうかも知れない。しかし、信じられないものは、今更どうすることも出來ないではないか？』
『君は、いつから、そんな人間になつたのだ？　すくなくも僕の知つてゐる君は……僕の親友であつた君は、そんな人間ではなかつたはずだ』
『僕は、べつにこの頃になつて、急に變つたわけではないさ。以前の僕だつて、今の僕だつて、僕自身は、ちつとも變つてゐるとは思はない』

『イヤ、たしかに變つてゐる！　恐らく、思ひもかけない五千萬圓の財産が、不意に君のものとして、ころげ込んで來たといふことが、君といふ人間を、すつかり違へてしまつたのだらう！』
『フヽン。――君には、やつぱりさう思へるかね』
二人が突つ立つたまゝ、險しい表情をして、爭つてゐるところへ、すつかり支度をすました君江が出て來て、
『あら、こんなところにゐらつしたの。ずゐぶん方々を、探したわ』
と、何氣なく言つたが、二人のたゞならぬ樣子に氣が附くと、ハツとしたやうに顏色を變へて、
『どうかなすつたの？』
と、聞いて、異樣な二人の樣子を、見比べてゐた、
『いゝえ、何んでもないんです。ただ、ちよつと議論をしてゐたのです。――二人がいつしよになると、相變らずどうも、議論が盛んで、折角、音樂會にお誘ひしておきながら、失禮いたしました』
と、杉村は明るい調子で、如才なく言つたが、さすがに禎輔は、言葉もなく苦り切つてゐた。

三

待たしてあつた杉村の自動車に乘つて、かすかなサイレンの音を殘して、二人が出かけて行つてしまつた後、禎輔は再びわが部屋に引きこもり、デスクに向つて見ても、どうしも勉强が手に附かないのであつた。

本を開いても、一ページと讀まないうちに、つい心はあらぬことを考へて、取り留めもない思ひに耽つてゐるのであつた。——一體、杉村が言つたことは、すべて本心からの言葉だらうか？　彼は、自分では變つてゐないといふけれども、若し、あれが本心からの言葉だとすれば、人間がすつかり變つてしまつたとでも、判斷するよりほかはないではないか。

だが、人間といふものは、たつた半ケ年か、一年足らずの間に、あんなにも變ることが出來るだらうか？　杉村の言葉の一つ〳〵を思ひ出すと、禎輔は身慄ひするほど、恐ろしかつた。

禎輔は、もと〳〵杉村が、あんな人間だとは、どうしても思へなかつた。——何かに憑かれてゐるか？　呪はれてゐるのだ。

とにかく、一刻も早く初音を會はせてやりたいものだ。——やがて子供が生れてくる大きなお腹

をして、初音が苦勞してゐることを思ふと、禎輔は、少しも早く杉村のことを話して、初音に安心させてやりたいと思つた。

話したいことや、相談したいことが、山ほどあるのに、行方がわからないので、ひどく氣を揉んでゐる初音である。故郷のはうにも、幾度か手紙を出したのに、一度も便りがないといつて泣いてゐたが、早く知らせて、安心させてやりたいものだ。——杉村が、五千萬圓の富豪になつて、自家用車など乘り廻してゐることを、初音が知つたら、どんなに喜ぶだらう。

（さうだ。——とにかく、すこしも早く、知らせてやらなければ！）

と、思ふと禎輔は、デスクに向つて、勉强してゐるどころではなかつた。

急いで外出の支度をすると、本郷眞砂町の初音の家を目ざして、タクシーを急がせてゐた。

いつ間にか、梅雨らしい雨が、しと〳〵と降つてゐた。

樂しき音樂の夕

一

世界最大のバスと言はれてゐるシャリアーピンは、その堂々たる立派な躰軀を、タキシードに包んで、ステージに立つてゐる。聽衆のアンコールに答へて、お得意中のお得意たる『蛋の歌』や、『ヴォルガの舟唄』などを唄つた。

六十幾歳といふ年齢に似合はず、若々しい艶のある聲をしてゐた。表情が豐かで、身ぶりは巧みだし――何よりも魅力のある聲と、洗錬された、巧みな歌ひ方は、すつかり聽衆のこゝろを、惹きつけずにはおかなかつた。

さすがに廣い日比谷の公會堂も、文字どほりに、立錐の餘地もないやうな、大入り滿員だつた。――見渡す限り、二階にも、一階にも、人々が溢れてゐた。補助イスを出して、その上に壁際にもずらりと人がいつぱいに並んでゐるのである。やはらかな照明の光りの中に、どこを見ても、人間

の顏、顏、顏であつた。

その何千人といふ多くの人々が、シャリアーピンが歌つてゐる間は、ぴたりと、まるで誰一人呼吸する者もゐないやうに、ひつそりとしてしまふ。しんとして、さながら水を打つたやう。

呼吸をひそめ、眼ばかりかゞやかして、恍惚として耳をすましてゐる。――たとへば、どこかの隅つこに、一筋の針を落しても、その物音が、はつきりと、誰の耳にも聞き取れるくらゐ――その靜かな〳〵中に、シャリアーピンの美しい聲が、高く、低く、巧みな節まはしで、ひゞき渡る。

……毎日毎晩かまれどほし
痒くても掻くことはご法度だつた
さてしかし、若しも吾等がかまれたら
潰すくらゐは知つてゐる
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！

可笑しさうな表情と、身ぶりと――そして笑ひ聲と。『蛋の歌』を唄ひをはると、それまでしんとして靜まりかへつてゐた聽衆の間から、忽ち割れんばかりの凄まじい拍手の音が起つた。シャリ

アビンは、いとも滿足さうに、その鷲鼻の秀でた顏をかゞやかして、熱狂する聽衆に向つて、幾度も〳〵、愛嬌たつぷりの會釋を返してゐた。

『まつたく、素晴らしいですな』

と、杉村は並んでゐる君江に向つて、讃嘆するやうに言つた。——が、その實彼は、シャリアービンが歌つてゐる間ぢゆう、ちつとも身を入れて聽いてはゐなかつた。この世界的に偉大な聲樂家の絶妙の至藝も、杉村のこゝろを、感動させることなど出來なかつた。

杉村は、聲樂などは、どうでも好かつたのだ。——自分と並んで腰掛けて、熱心にステージのはゐを見まもり、うつとりとなつて、耳を傾けてゐる君江の美しい横顏ばかりに、喰ひ入るやうな眼ざしをそゝいで、見つめつゞけてゐた。

見れば見るほど、美しいと思つた。まるでギリシャの彫刻にでも、溫かい血を通はせ、滑らかな人肌を與へたのと、同じことだつた。つんと高い、貴族的な鼻と、鮮やかな紅色をして、しまりのいゝ唇から、見えるか見えないかくらゐ、しづかに〳〵呼吸を通はせてゐる。豐かに肉づいた襟脚と、肩から、胸の張り切つた線の言ひやうない魅力とは、じつと見つめてゐるうちに、眩暈がするほど杉村のこゝろを惑亂し、息ぐるしくなるほど、胸を惱ませた。

どうかしたキッカケで、我れを忘れて、突然ぎゆつと、兩腕を擴げて、力いつぱい抱擁しさうになるのを、ハッとして我に歸ると、やうやく自分を制することが出來た。——杉村としては、斯うして君江と並んで腰掛けてゐることが、今にも落つこちさうな深淵の緣にでも、立つてゐると同じことだつた。いつ足を踏みすべらして、眞ッ逆まに落ちてゆくか、自分でもわからなかつた……

でも、君江は、そんなことは、何んにも氣が附かず、ひたすらシャリアービンの藝術の魅力に、醉ふてゐた。——君江は、音樂が好きだつたし、シャリアービンは、どうかして一度聽きたいと思つてゐたところだつたからである。

それならこそ、愛する禎輔の親友とは言へ、あまりムシの好かない杉村に、熱心に誘はれて、斯うしてたつた二人だけで、わざ〳〵出かけて來たのではあつた。

二

『はんたうに！』

熱狂してゐる聽衆の嵐のやうな拍手と共に、君江は先刻から、一生懸命にその華奢な手をたゝいてゐた。

だから、杉村が(素晴らしい！　)と言つて讃嘆すると、自分が褒められたやうにうれしかつた。
かゞやいた美しい瞳だけ、チラと杉村のはうを見て、ニツコリしてうなづき、力をこめて同感した返事をすると、すぐにまた、黒い瞳をステーヂに向けて、熱心に手をたゝくのであつた。
杉村は、君江が音樂に醉ふたやうになり、藝術にばかり熱狂してゐるのを、眼の前にマザ〳〵と見せつけられると、はげしい嫉妬心を煽られて、かすかな不快を感ぜずにはゐられなかつた。
(津川なんか、あんな目出度い男から、君江さんを奪ふくらゐなことは、何んでもないことだが……)
と思つて、杉村はたかをくゝつてゐたが、しかし、君江が音樂に夢中になつてゐるのを見ると、癪にもさはつたし　口惜しくもあつた。
(今に見てゐるがいゝ！　おれの足もとに、跪づかせずにはおかないから)
藝術に興奮して、一層美しく、かゞやかしく、更に蠱惑に滿ちて見える君江の横顔を、蛇のやうに執拗な眼ざしで、じつと見入りながら、こゝろの中では太々しく、さう思ふのであつた。
だが、そんなことなど、表面には氣ぶりも見せず、
『もう、出ませうか？　』

と、さゝやいた。
『えゝ。でも……』
と、君江はびつくりしたやうに振り返ると、不思議さうに杉村の顏を、ちよつとの間見てゐたが、
『もうすこし、斯うしてゐませう。――何か、もう一つくらゐ、アンコールに應へてくれるかも知れませんから』
と、言つた。
『しかし、これ以上は、きつと歌はないと思ひますな』
『あら、どうして』
こんなに皆なが熱狂して、アンコールしてゐるのに、それに應へないといふのは、君江には腑に落ちなかつた。
『どうしてつて……かなり疲れてゐるやうですし……』
『だつて、あんなにうれしさうに、お辭儀をしてゐるわ』
『年を取つてゐるので、餘程氣が向いた時でないと、シャリアービンは、どこでもアンコールに應

へないさうですよ」

『さうだつていふことは、わたしも聞いてゐるけれども……でも、二つも歌つてくれたぢやないの』

『それは特別なんでせう。きつと、ずゐぶん嬉しかつたのですな』

『そんなことを言つてゐないで、あなたも手を叩いてよ』

『同じことだと思ひますが』

と言ひながら、それでも杉村は、君江に言はれると、お義理だけにも、手をたゝかないわけにはいかなかつた。

拍手の嵐は、刻一刻と盛んになつて、廣い場内に割れんばかりだつた。そしてシャリアーピンもうれしさうに、何遍も〳〵ステージの端まですゝんで、聽衆に向つてお辭儀をした。

ニコ〳〵した笑顔か、萬遍なく聽衆に向つて愛嬌と會釋とを振りまいても、しかし、杉村の言つた通りに、再び歌はふとはしなかつた。幾度も〳〵振り返つて、挨拶を返しながら、たう〳〵ステージの脇のはうに、入つてしまつた。

でも、藝術家の姿が見えなくなり、ステージにはグランド・ピアノが一臺おかれた切りで、空つ

ぽになつてからも、猶ほ熱心な聽衆の拍手の音は、かへつて盛んになつても、止みさうには見えなかつた。だが、それきりシャリアーピンの姿は、再びステージには現はれて來ず、幕はスル〳〵と降ろされて、舞臺と、聽衆席とは隔てられてしまつた。それでも、まだ未練ぶかさうに、そこやここで、パチ〳〵と、手を鳴らす音が、聞えてゐた。

諦めをつけて、ぞろ〳〵と歸つてゆく人々もあつた。

『さあ、いよ〳〵お終ひですよ。――いつまで、こゝにゐても、同じことですから、出ませう』

と、杉村に言はれると、さすがに君江は、これ以上、未練がましく殘つてゐるわけには、いかなかつた。

『えゝ』

と、かすかにうなづいて、座席から立ち上つた。

その時には、もう皆な我れ先にと、先を爭ふやうにして歸り始めてゐた。

三

音樂を聽いてゐる間は、氣が附かなかつたけれども、雨は、いつの間にか、かなりはげしく降り

出してゐた。――ぞろ〳〵と石の階段を下りてくる人、タクシーを呼ぶ人などで、出口の廣場は、人と自動車とが、雨にたゝかれながら、押し合ひ、へし合ひしてゐるのであつた。

『大へんな人だ』

と、杉村はその光景を見ると、眉をひそめるやうにして、つぶやいた。

『どうです？　あわてることもないから、我れ〳〵は後から、ゆつくり出ることにしませうか』

『えゝ』

君江は、うなづいた。――彼女としても、雨の中を、大勢の人々に押し揉まれるのは、閉口だつた。

『まだ、早いですからな。――どうでせう？　これから銀座に出て、お茶でも附き合つて下さいませんか』

人々の間に挾まれて、押し揉まれるからと言ひながら、杉村のがつしりした身體は、君江のすらりとした身體に、ひし〳〵と押し迫つて來るのであつた。しめつぽい身體と身體との溫みや、肉と肉の彈力が、薄いドレスを通して感じられるのが、君江は厭はしく、つい美しい眉を、ひそめずにはゐられなかつた。

『わたし、失禮いたしますわ

君江は、すげなく斷つてしまふのは、わるいと思つたけれども、でも、これから杉村と二人で、銀座に出るなんて、考へたゞけでもイヤだつた。

『いゝぢやありませんか……ちよつとの間くらゐ』

『でも、わたくし、眞直ぐに歸りたいと思ひますの』

『なぜです？　津川君が、待つてゐるからですか？』

『それもありますけれども……早く歸りたいんですわ』

『まだ、九時半ですよ。三十分くらゐなら、いゝでせう』

『ですが……わたくし、疲れてゐますの。

『我儘を言つて、大へんすみませんが、ちよつといゝですから、ぜひ附き合つていたゞきたいですな』

『でも……』

と、君江が猶ほも斷らうとするのを、杉村は執拗に、

『お話したいこともありますから……どうでせう？　二十分でも、三十分でもいゝですから……ほ

んたうに、お手間は取らせませんよ』

と、押しかぶせるやうに言つた。

『お話といふのは、どんなことでございませう？』

君江は、いくらか不安になつて、聞かずにはゐられなかつた。

『實は、津川君のことですが』

と、杉村は曖昧に言つて、思はせぶりにニヤ〳〵笑つた。

『津川さんが、どうかなすつたのでせうか？』

『あなたのために、是非、お話をしておきたいことがあるのです』

『まあ、わたしのためですつて』

『さうです、あなたのために、お聞かせしなければならないことがあるんです。かなり重大なことですし……その上、秘密なことでもあるのです』

杉村は、相手の不安をそゝり、疑惑を深めるやうに、わざ〳〵聲をひそめるやうにして、そつと邊りを見まはした。

津川に關することで、重大で、秘密を要することだと聞くと、さすがに君江も、心を動かさずに

はゐられなかつた。——自分が愛してゐる者に關して、重大なことだといふのである。が、いつたいそれは、どんなことだらう？

考へれば考へるほど、君江は、不安な氣がした。

四

ひどく雜沓してゐた邊りも、次第に空いて來てゐた。

待たせてあつた杉村の自家用車の運轉手が、主人の姿を認めたのだらう、——立派な車體が、す〳〵と二人の前に滑り寄つて來て、ぴたりと留まると、運轉手が飛びをりて、うや〳〵しくドアを開けた。

『どうぞ〳〵』

と言つて、杉村が無理に、君江を乘せやうとするのを、君江はするりと、巧みに杉村の手から滑り抜けるやうにして、

『そのお話といふのは、どんなことですかしら？』

と、聞いた。

『こゝでは、ちよつと話しにくいことですから』

と、杉村は心の中で、口惜しさうに舌うちをした。

（この女は、思つたよりも、ナカ〳〵手強いらしいぞ）

と、忌ま〳〵しく思つたけれども、そんなことなど顔色にも出さずに、かへつて一層穏やかに、

『べつに、心配なさるやうなところに、行くのぢやありませんから……トリコロールか、ゾンネか……トリコロールのはうが、いゝでせう。お旨いフランス菓子を食べさせるところです』

と、言つた。

それでも君江は、まだ、素直に自動車に乗らうとはしなかつた。——このまゝ、無理にも別れてべつの自動車に乗つて、一人で歸りたいと思つたけれども、でも、津川についての秘密な、重大な話といふのが、どんなことかと思ふと、不安でもあり、心配でもあつた。——やつぱり、それを聞いてしまはないうちは、別れられさうもなかつた。

『では、そこまで、どいつしよに伺はなければ、どうしてもお話を聞かせては下さいませんの？』

と、かなしさうに言つた。

『大事な話ですからな。うつかり、どこでも話すといふわけには、いかないのです』

と、杉村は冗談のやうに言つたが、君江が、いくらかでも心を動かされてゐる様子を見て取ると、

『ぐづ〳〵してゐる間に、徒らに時間ばかり過ぎてしまふぢやありませんか。——銀座の松坂屋の裏ですから、こんなことをしてゐる間に、疾つくに行かれるところなんです。早く、お乗り下さい』

杉村は、だん〳〵高飛車な調子になつて、それでも、まだ、ためらつてゐる君江を、手を取らんばかりにして、自動車に乗せると、自分もすぐに、ひらりと乗つた。

『トリコロールだ』

シートに落つく間もなく、運轉手にさう言つた時、一人の女が、ばら〳〵と駆け寄つて來ると、

『杉村さん！』

必死に、自動車のドアにすがり附くやうにして、かなしい聲で叫んだ。

『……』

ハツとして杉村は、言葉もなく振り返つて見ると、頭からぐつしより雨に濡れて、幽霊のやうに蒼ざめ、憔悴れた初音ではないか。

（初音さん……）

と、危ふく唇を破つて出かゝるのを、今、この肝腎な時に、女の名なぞ呼んでなるものか！

と、自から抑へて、飽くまで知らぬ顔に、

『何をぐづ／＼してゐるんだ！　早く出してくれ！』

と、杉村は、狂亂したやうな初音の姿など、全く意に介しないやうに、運轉手を叱咤した。

運轉手は、仕方がないので、スターターを切ると、自動車はすがり附いてゐる初音の身體を、引きずるやうにして、徐々に走り出した。

『杉村さん……杉村さん。待つて下さい』

初音は、濡れたアスファルトの上を、二三メートルばかりも、ずる／＼と引きずられながら、かなしい聲をあげて叫んだ。が、ドアの把手にすがり附いてゐる手の先が、すつかり感覺を失つて、痺れたやうになつて、その上、ステップの上に片足かけてゐたのも外れて、そのまゝ濡れた路上に放り出されると、のめつてしまつた。

自動車は、みじめな姿で路上に倒れ、雨に打たれてゐる初音にはお構ひなしに、そのまゝ急に速力を出して、走り去つてしまつた。

テールの赤い星のやうな光りが、雨の中にぴかりと光つて、すぐに消えた。

青年紳士の親切

一

禎輔から、杉村のことを聞かされると、矢も楯もたまらなくなつて、眞砂町の家を飛び出して來た初音だつたが——

内幸町の交叉點で、電車を降りた時には、まだ、やうやく八時を過ぎたばかりであつた。すぐに受付に行つて、杉村を呼び出して貰はふと思つたけれども、折角、音樂を聽いて、樂しい氣持になつてゐるところを、搔き亂すのはわるいと思つたし、それに、呼び出さうとしても、果して出て來てくれるか、どうかもわからなかつた。

初音は、あんなに急いで、出て來ることは出て來たやうなものゝ、音樂が終るまで、待つてゐるよりほかはないと、分別した。——禎輔から、杉村の行方がわかつたことを聞かされた刹那、かつとして興奮したけれども、三十分近くも市内電車に搖られてゐるうちには、いくらか氣持も落つ

き、思慮分別のやうなものも、取返してゐた。

びしよ〳〵と降り出した雨の中を、ヒマラヤ杉の木蔭に佇ずんで、ほとんど二時間近くの間、待つてゐた。――音樂らしいリズムなど、ちつとも流れては來なかつた。聞えて來るのは、はるかな都會の騷音と、電車のひゞき、バスやタクシイのサイレンの音。そして、ヒマラヤ杉の梢から落ちて來る雨の雫が、ボタ〳〵と雨傘の上に叩きつける音。

眼の前に聳えてゐる大きな公會堂の建物は、山のやうにうづ高く、ひつそりとしてゐるのだが、窓々には明るい電氣の光りが、かゞやいてゐた。

初音は、その窓々の華やかな光りを仰ぎながら、一時間待ち、二時間待つてゐた。脚は棒のやうになり、いくら雨傘で防いでゐても、雨の雫は、袖を濡らし、肩を打ち、しぶきや、滴は、裾を濡らし、髪や、顏を濕らせた。――こんなことをして、このまゝ、いつまでも立ちつくしてゐたら、風邪を引くのではないかと思はれたけれども、でも、初音は、どうしても動くことが出來なかつた。

若し、動いた間に、杉村が途中で出て來て、歸つてしまふやうなことがあつたら！　と思ふと、不安で動けなかつた。――出口を見渡せる位置に立つて、脚が棒のやうになつても、風邪を引きさ

うになつても、初音は辛抱づよく立ちつくしたまゝ、視線と注意とを配つてゐた。

やがて、九時も三十分を過ぎた頃、やうやく音樂が終つたのだらう。大勢の人々が、雪崩るやうに、どや〳〵と出口に殺到して來ると、忽ち廣場にあふれて、初音は、折角待つてゐたのに、誰が誰やらわからず、すつかりまごついてしまつた。でも。今まで待つてゐたのに、こゝで失望してはならないと思つた。自から勵まし、八方に眼を配るやうにして、見張つてゐるにもかゝはらず、いつまでも杉村の姿が見えないのである。

（わたしの知らない間に、もうお歸りになつたのかしら）

と、思ふとかなしく、力も、勇氣も拔けて、今にもその場に昏倒しさうになるのを、でも、

（そんなはずはない！　あんなに氣を附けてゐたんだもの）

と、じつと我慢して、後から〳〵と出て來る人々の上に、心を配り、視線をそゝいでゐた。

すると、さすがに雜沓して、押し揉んでゐた人々も、やうやく疎らになつたと思ふ頃、石の段々を降りて來る杉村の姿を見附けて、ハツとした。すぐにも飛び出して行つて、いきなり縋りつきたいと、焦り逸るこゝろを、でも初音は、齒を喰ひしばるやうにして、じつと抑へなければならなかつた。

それは杉村が、一人ではなく、女連れだつたからである。禎輔が厄介になつてゐるお屋敷の令嬢と、いつしよだといふことは、初音も聞いてゐたのに、そんなことは、いつの間にか、すつかり忘れてゐた。今まで初音は、杉村一人のやうな氣がしてゐたのが、今、女連れのところを見て、やうやく禎輔の言つたことを思ひ出したのである。

初音は、杉村が同伴してゐる令嬢に對する禮儀からいつても、いきなり飛び出してゆくわけにはいかなかつた。——胸をときめかせながら、しばらく機會がくるのを、待たねばならなかつた。

杉村と、令嬢とは、自動車が傍に寄つて來ても、しばらく何かどて〳〵してゐたが、そのうちに、やうやく令嬢が先に乘り、つゞいて杉村が、ひらりと乘つたので、初音は最早や、一刻も躊躇してゐることが出來なかつた。我れを忘れたやうに、いきなり飛び出してゆくと、必死になつて、自動車の扉に取りすがつたのであつたが——

二

『もし〳〵』

若い男のやさしい聲に呼ばれて、それまで冷たい路上に、死んだやうになつて横はつてゐた初音

は、ハツとして我れに歸つた。我れに歸ると同時に、恥と屈辱の感じが、さつと電氣のやうに、背筋を走つたやうな氣がした。つゞいて烈しい憤りが、胸に突き上げて來た。

『……』

初音は、無言のまゝやさしく肩にかゝつてゐる男の手を、力いつぱい撥ねのけた。——そして、杉村を乘せた自動車は、既に影も形も見えなくなつてから、かなりな時間が過ぎて、どこへ行つたのやら、わからないのに、その後を追つかけるつもりで、急いで立ち上らうとした。立ち上らうとはしたけれども、それだけの氣力が、なかつたのだらう。へた〳〵と、脆くもその場に、崩折れてしまふと、身をもがいた。

『どうしたんです？ 無理をしないはうがいゝですよ』

會社員らしかつた、背廣にレイン・コートを着て、ソフトの前鍔を下げるやうにして、かぶつてゐた。

初音が一度、その肩にかけてゐた手を、ヒステリツクに拂ひのけたものだから、今度はもう、彼女の身體に、一指も觸れやうとはせず、心配さうに身をこゞめて、顏をのぞいて見るやうにしながら、やさしく聲をかけるだけだつた。

『自動車は……今の自動車は、どこへ行つたのでせう？』
と、初音はかなしさうに泣きじやくりながら言つた。
『どこへ行つたのか……わかりませんよ』
『あゝ、行つてしまつた』
と、初音は絶望的にさけぶと、さめ〴〵と咽び泣いた。
『僕は、見てゐたのですけれども……さつきの自動車の人に、何か、用事があつたのですか？』
『えゝ』
『行く先は、わからないのですか』
『ええ』
『とにかく、こんなところに、こんなことをしてはゐられませんよ。身體に毒ですからな。――お起ちなさい。僕が、どこへでも、送つて行つてあげますから
と、深切に言つて、手を取つて助け起してやると、今度は初音も、拒まうとはしなかつた。
『すみません』
と言ひながら、素直に身を起したが、起き上つたはずみに、クラ〴〵と眩暈を感じて、よろ〴〵

とすると、
『危い』
と叫んで、青年紳士が抱き留めてくれたが、初音は思はずその胸に、顔を埋めるやうにして、氣が鎮まるのを待つてゐた。
『お宅は、どちらですか？』
青年紳士は、初音の背を、やさしく抱くやうにしたまゝ、聞いた。
『眞砂町ですの』
と、初音は、青年紳士の胸に、顔をうづめるやうにしたまゝ、かすかに答へた。
『眞砂町といふと……本郷でしたな』
『はあ』
『ぢや、ちやうどいゝ。――僕は、これから小石川の小日向臺町まで、歸るんですから、まんざら見ちがひの方面でもないのです。お送りしませう』
『いゝえ。いゝんですの』
『では、これからまた、どちらへか行くんですか？』

『いゝえ』
『お宅に、眞直ぐに、おかへりになるんですか？』
『はい』
『ちや、お送りしますよ』
『でも、そんなことをして頂いては、すみませんから』
それは初音の、ほんたうの氣持だつた。今まで一度だつて、口を利いたこともなければ、見も知らぬ人に、こんな厄介になつた上に、わざ〳〵家まで送つてもらふなんて、そんな無遠慮なことは出來ないと思つた。——固く辭退して、電車で歸るつもりだつた。こんな結果になるのだつたら、何んのためにあんなにあわてゝ、家を飛び出して來たのか、わからなかつた。
今夜は諦めて、このまゝ歸つて、吉祥寺の邸宅のことも聞いてあるのだから、明日にでも改めてそちらに訪ねて、是が非でも、かならず一度は杉村に會はなければならないと思つた。
『すむとか、すまないとか、そんな遠慮は、しないはうがいゝですよ』
青年紳士は、飽くまで深切に、なぐさめてくれた。
『僕が、お送りするのは、何んでもないことですから』

『でも……』
と言ひながら初音は、まだ、ためらつてゐるので、青年紳士は、彼女が承諾するのも待たず、傍に寄つて來てゐた空のタクシーに合圖をして、彼女を乘せると、後から自分も乘つた。

堀割に沿ふた座敷

一

杉村は、自分勝手の都合から、イヤなところに初音が飛び出して來たのを、ひどく腹を立てゝゐた。
（きつと津川のヤツが、教へたのにちがひない！）
と思ふと、初音にたいするよりも、むしろ禎輔にたいして、餘計、腹を立てずにはゐられなかつた。
（僕が、今夜、こゝの音樂會に來てゐることを知つてゐるのは、津川よりほかには、ゐないはずだ

から）

たとへ知つてゐる者があるとてしも、それをわざ〳〵初音に教へる者など、頑輔のほかにゐるはずがなかつた。

（友達甲斐のないヤツだ）

自分のことは棚にあげて、獨りでブン〳〵怒つてゐた。

『今の女の人、どうなすつたのでせうか……』

君江には、何んの事情もわからなかつたし、また、初音と杉村との關係など、夢にも知るよしがなかつたけれども、心配さうに聞いた。ちやうど彼女は、初音がすがり附いて來たドアの反對側に腰かけてゐたし、且つ、初音のかなしい叫び聲は、かすかだつたので、雨の音に掻き消されて、ハッキリ聞き取ることが出來なかつた。――だから君江は、どんな女だつたのか、初音の姿など見もしなかつたし、何んと言つたのか、誰の名を呼んだのか、わかりもしなかつたけれども、あの場合の異樣な空氣だけは、明らかに感じてゐた。

君江の神經は慴えたやうになつて、そのことを杉村に聞くのが、何だか怖ろしいやうな氣がしたので、しばらくの間、だまつてゐたのであつた。

『さあ……どうしたのですか、知りませんな』

杉村は、何食はぬ顏をして、冷淡に言つた。

『あら、あなたのご存じの人ぢや、なかつたのですか？』

さう言はれて杉村は、狡るさうにニヤリと微笑をうかべると、これは飽くまで、知らないていさいにしておくに限ると、腹を決めた。

『さうですとも！　ちつとも知らない女の人が、いきなり飛び出して來て、何か言つてゐたやうですが、僕には、ちつとも分りませんでしたが』

と、白ばつくれて、

『あなたは、何かハッキリお聞きになりましたか？』

と、聞いた。

『いゝえ』

と、君江はかすかに頭をふつて、杉村の顏を見つめながら、

『どういふことを言つてゐたのか、ぢや、あなたも、よくお聞きとりにならなかつたのですわね』

と、念を押した。

『はあ』

と、うなづいたが、杉村は飽くまで圖うく〳〵しく、

『何んにも、わかりませんでしたな。――きつと狂人か、何かちやないかと、氣味がわるかつたものですから、自動車も留めなかつたのですが』

と、言ひ切つて、さすがに視線だけは反らした。

『さうでせうか……あの人、狂人でせうか』

と呟くと、君江は氣味わるさうに、肩をすぼめた。

『どうして、あんな女のことに、そんなに拘泥るんです？』

『あら、そんなわけちや、ございませんけれども』

『あんな狂人だか、何んだかわからない女のことなど、いゝかげんで、忘れやうちやありませんか』

『えゝ』

君江が、かすかにうなづいた時に、ちやうど自動車は、トリコロールの前に、ぴたりと留つた。

杉村は、君江を先に降ろすと、今度は自分が先に立つて案内して、二階のホールに上つて行つ

た。

二

コーヒーや、お菓子が運ばれてから、しばらく經つてゐるのに、しかし、いつまで待つてゐても杉村は、（津川に關する重大で、秘密な話）といふ觸れ込みの問題には、一向觸れさうにも見えなかつた。――そのことが聞きたいばかりに、わざ〳〵こゝまでいつしよに來た君江は、だん〳〵焦り〳〵して來た。

『あの、さつきのお話でございますが……』

と、君江は腕時計の針を、チラと見てから、たうとう待ち切れなくなつて、自分のはうから切り出した。

『はあ？』

と、杉村はびつくりしたやうに、君江を見て、

『さつきの話と言ひますと、どんな話でせうか？』

と、聞いた。

時計は、十時を五分ばかり過ぎたところであつた。
『津川さんについて、何か、お話があるとかおつしやつた……』
『あゝ、そのことですか……』
と、杉村は何氣なさゝうに、カラ〳〵と笑つたが、
『そんなに改まつて、お聞きになるほどのことでもないと思ひますが……或ひは、既にご存じのことかも知れないと、思ひますけれども』
と、今になつて、つとめて無造作な口ぶりである。
君江は、何んだか杉村に、翻弄されてゐるやうな氣がして、
『でも、さつきは、重大な、そして祕密なお話のやうに伺つたものですから、わたしは、その通りに信じて、こゝまでごいつしよに、來たのでございますが』
と、明らかに抗議と、非難とをこめて言つた。
『それは、あなたに取つては、十分に重大な意味を持つてゐないことはない問題だと思ひますし、また、祕密な話であることも事實ですが』
『それは、いつたいどういふことでせうか。とにかくハツキリと、伺ひたいと思ひますから、お話

し下さいませんか』
君江は落ついて、冷靜な態度を亂さずに言つた。
『友人の祕密を發くやうで、僕としても、こんなことを、あなたにお話しするのは、實に心ぐるしいのですが……』
『はあ』
『あなたのためを思ふと、僕は、やつぱり話さずにはゐられないのです。たとへ、親友を裏切る結果になつても、僕は、あなたのために、お話しなければならないと、決心したのです』
『あら！　それでは、そのことをわたしにお話し下さるのは、友達を裏切ることになりますの？』
君江は、さつと顏色を變へて、杉村を見つめた。
『さうなんです。だから實は、僕も心ぐるしいのです』
と、杉村はうなづいて、さも辛さうに、かすかに溜息をついた。
『そして、それは津川さんの祕密を、發くことですの？』
『だが、僕は、あなたのために、それを敢てしやうと決心したのです』
『さうでございますか』

と言つた君江の唇は、かすかに慄へ、美しい二つの瞳は、憎悪と、蔑みとにかゞやいた。

『お察し下さい！　僕は、そんなにあなたのことを思つて――あなたのためなら、どんなことでもしなければならないと、決心してゐるのです』

『さういふお話でしたら、わたくし、聞く必要がありませんから！』

と言ふなり君江は、もうイスから立ち上つてゐた。

『わたし、これで失禮しますから』

音樂會の切符を貰つたことも、口惜しかつたし、こんなところに、いつしよに來たことも、口惜しかつた。――せめて、コーヒーや、お菓子のご馳走だけにもなりたくないと思つて、計算書を持つことを忘れなかつた。でも、それを持つ君江の手は、ブル〳〵と慄へてゐた。

『あつ、ちよつと……ちよつと、お待ちください！』

と叫ぶなり、杉村もあわてゝ、立ち上つてゐた。

『なぜ、今更、聞きたくないなどゝ、おつしやるのです？』

どうにも腑に落ちないといふやうな、混亂した表情をして、杉村は君江の後を、追つかけて來た。

『そんなお話でしたら、わたくし、聞きたくはございませんの。――津川さんを信じてゐますから』

『その信じてゐる津川君が、若しもあなたを……』

と、杉村が言ひつゞけやうとするのを、君江は耳を掩ひたいやうな厭はしい氣持で、急いで遮ぎつて、

『いゝえ！　お聞かせ下さいますな。わたくしはまた、重大なことゝおつしやるものですから、津川さんの身に何か大へんなことでも起つてゐて、それをわたくしが伺へば、若しお力にでもなれるのではないかと思つたものですから。――さういふ意味の重大なお話なのだと思つたものですから、わたくし早く伺ひたいと氣を揉んだのですが、津川さんの惡口や、祕密でしたら、うかゞひたくありませんから』

と言ふなり、君江は、階段を驅け降りると、カウンターで支拂ひをして、雨の降る戸外に飛び出してしまつた。

（畜生！　人を馬鹿にしてゐやがる！）

しばらく呆然としてゐた杉村は、やがて忌〳〵しさうに呟くと、聞がわるさうに階下に降り、

外に出て行つた。が、もちろん、その時には、もう遅りには、君江の姿など、見えるはずがなかつた。

『築地の増川へ行くんだ』

杉村は、待つてゐる自動車に乘ると、さう行先を命じた。

築地は、眼と鼻の間だつたし、増川といふのは、有名な政治家や、實業家などが、何かあると、よく集まる大きな待合だつた。

三

堀割に添ふた、増川の奥まつた、しやれた離れ座敷。

床の間を背にして、秋草を描いた絽の座團蒲の上に、杉村はどかりと胡座を組むと、扇風器のスイッチを入れたり、團扇を出したりしてゐる女中に、

『それよりも早く、酒だ。イヤ、ウキスキーがいゝ』

と、言つた。

『はい〳〵、たゞ今……』

と、女中は愛嬌のある微笑を、杉村のはうに送つたが、

『それから、美しいところを三四人、大急ぎで呼ぶんでせう』

と、言つて笑つた。

『もちろんだ。三四人では足りないよ。六人でも、七人でも、十人でも、百人でも……いくらでもいゝから、早く、呼んでくれよ』

『あら、大きいわね』

『當り前さ。こんな時に、ケチ〳〵してゐられるかつてんだ』

『どうかなすつたの？』

『シャクにさはることがあるんだ。大いに騒ぎたいんだ。――騒いで、この憂鬱を吹きとばしてしまひたいんだ』

『心得た』

と、女中は我れと我が胸を、ポンとたゝいて見せたが、

『それから、この頃お披露目をしたばかりの、とてもきれいな、若い妓がありますから、呼んでやつてもいゝでせう？　きつと、あなたの氣に入るわ』

『呼んでくれ』
『里龍つていふ妓なの。――ほんとに初心な、いゝ妓だわ』
『里龍だつて、何龍だつていゝから、早く呼んでくれ』
『はい、只今すぐ』
と言つて、女中が出てゆくと、入れ違ひに別の女中が、おしぼりや、お茶を持つて、入つて來た。

空は晴れたれども

一

今朝方まで、しと〳〵と降つてゐた梅雨めいた陰氣な雨は、日の出と共に、やうやく止んだ。
ところ〴〵に殘つてゐた重さうな黑い雲も、勤め人が出さかる七時八時といふ時分には、すつかり消えて、久しぶりの美しい快晴である。

既に夏を思はせるやうな、ギラ〳〵と眩しい太陽は、蒼々として晴れわたつた大空にかゞやき、じめ〳〵として蒸れた大地からも、家々の屋根からも、森からも、林からも、生溫いやうな水蒸氣が、もう〳〵として立ち昇つた。――空氣は濕つぽいし、太陽の光りは、ヂリ〳〵と照りつゞけるし、お盡ぢかくなるに從つて、だん〳〵眞夏のやうな暑さだつた。
初音は、大急ぎで本郷眞砂町の家を出たのであつたが――それでも朝の食事の後片附けをしたり、外出の支度をしたりしてゐるうちに、だん〳〵遲れてしまつて、出がけに時計を手首に附けながら見ると、もう十時をすぎてゐた。
吉祥寺まで行くのには、どうしたつて一時間は、かゝるだらう。
(遲くなつて、もしお留守にでもなつたら、困るから)
さう思つて初音は、ひどく焦つてゐたけれども、水道橋まで市內電車。そこから省線電車に乘つたのは、もう十時をすぎることが三十分。
(困るわ〳〵。こんなに、遲くなつてしまつて)
風を切つて走る省線電車のスピードも、焦り切つてゐる初音の身にして見ればもどかしかつた。
いよ〳〵吉祥寺の驛から降りて、杉村の屋敷に行く道を聞いて見ると、大七丁といふことだつ

た。わざ〳〵人力車や、タクシーに乗るのも、何んだかあまりにモノ〳〵しいので、歩くことにした。

クワツと眩しく照りつけてくる太陽の光線は、やうやくパラソルを翳して除けたけれども、往來からムツと上つてくる地いきれは、いかにしても、防ぐすべもなかつた。着物の裾が、汗ばんだ足首にからまるのは、氣持がわるいばかりではなく、歩みが捗取らなかつた。

（こんなことなら、人力車にでも、乘れば好かつたのに）

と思つても、それはもう後の祭りだつた。（こゝまで、來たのだから）と思ふと、途中から、わざ〳〵乘り物には乘れなかつた。——乘らうとしても、空いたタクシーも通らないし、もちろん、都合よく空の人力車も見當らない。

それに初音としては、今は一錢の金でも、儉約しなければならない身であつた。——父亡き後の家計の助けに、賄ひ附きの間貸しをしてゐたのが、杉村も禎輔も、二人とも、急にゐなくなつてしまつた。すくなくも、大學を卒業するまでは、大丈夫ゐてくれるものと思つて、收入の當てにしてゐたのが、その當てが、すつかりはづしてしまつた。

これは初音の身に取つては、收入豫算の上の大きな打撃と言はなければならなかつた。——さう

かといつて、杉村や津川がゐなくなつた後、すぐに他の大學生に貸し室をするといふ氣にもなれなかつた。

折角の二階の部屋も、そのまゝにしておいてあるので、收入といふのは、妹の美知子の僅かばかりの月給と、それに父の遺産から生ずるものと、たつたそれだけのことで、兩方を合せても、一ケ月やうやく五十圓くらゐのものであつた。

それだけの收入では、どんな工夫をしたつて、どんなやりくりをしたつて、一家の世帶が張れるわけはなかつた。

そこへ持つて來て、どういふものか今年は、母の病疾が重かつたし、初音自身も只ならぬ身體で、どんなに儉約しても、何かと物入りが多かつた。

初音は、毎月々々の赤字で、そんなことでも、實に心細い限りだつた。——杉村に會つたら、何から何まで、いろ〳〵相談しなければならなかつた。

（こんなことまで打ち明けて、相談しなければならないなんて！）

考へると、身を切られるよりも辛いことだつた。

でも、相談して、杉村に力になつてもらふよりほかに、どうすることが出來るだらう。——且つ

正式に、まだ結婚式こそ擧げてはゐないけれども、二人は、たしかに結婚の約束をして、現に自分のお胎には、紛れもない杉村を父とする子供を、宿してゐるではないか！

正式の婚禮は兎に角、杉村と自分とは、立派な夫婦である！　いろ〳〵な點で、杉村が相談にも乘つてくれ、世話もやいてくれゝば、力にもなつてくれるのが、當然のことである。

（でも……）

と初音は、日比谷公會堂前での、思ひがけないあの冷淡――といふよりも、杉村の冷酷な態度を思ひ出して、胸がブル〳〵と慄へて來た。その侮辱に、心象を掻き破られるやうに、口惜しかつた。

二

杉村の屋敷は、外見だけでも、ナカ〳〵立派な構へだつた。

（まあ！）

門の前に立つた時、初音は、何んだか夢のやうな氣がした。――あの杉村が、東京にこんな莫大な屋敷を構へて、そこの主人として住んでゐるなんて、しばらくは、自分の眼でそれを見てゐながら、容易には信じられなかつた。

山口縣の素封家の三男だといふことは、聞いてゐたけれども、初音の家の二階にゐる頃には、小遣や、月謝に困つたことも度び〳〵だつた。

頼まれるまゝに、初音は、自分の乏しい小遣の中から、五圓、七圓と貸したことも、何度だつたか。――それでも足りなくて杉村は、禎輔からも、時々は小遣を借りたらしかつたが。

それが今では、何千萬圓とかの財産を相續して、東京に、こんな立派な別邸まで構へるなんて！

杉村のことは、何から何まで、悉く知り盡してゐるつもりの初音としては、夢でも見てゐるやうな氣がするのは、無理もなかつた。

いかめしい石の門、立派な飾りの附いた鐵の扉。森か林でも見るやうな奥ふかい植込みと、その植込みを縫ふやうにして、玄關までつゞいてゐる道と、はるかに木の間がくれに見えてゐる塔のやうに空にそびえた洋館の赤い屋根。

初音は、何んだかお伽噺にでも出てくゝる城の前に立つたやうな氣がした。そして、そのお城の中には、立派な王子さまが住んでゐて、その王子さまが、自分の愛人なのである！

（あゝ）

と、初音は、溜息を吐かずにはゐられなかつた。
眼が眩むやうな氣がして、危ふく倒れさうになつたのを、やつとのことで、踏みこたへたけれども、すぐにはどうしても、その門を入つて行く氣になれなかつた。——入つてゆくのが、何んだか怖いやうな氣がして、脚も、胴も、ブル〳〵慄へた。しばらくの間は、自分で、自分の氣を鎮めるのに、じつと眼をつむつてゐた。
初音は、凡そ十分間くらゐも、さうして門の前に、佇ずんでゐてから、やうやく思ひ切つて入つて行つた。廣い道には、うつくしく磨いたやうな玉川砂利が敷きつめてあつた。自動車が出入りの度びに殘した二筋の轍の跡が消えずに、長々と玄關までつゞいてゐるだけで、落葉一葉、塵一筋、その邊には落ちてゐない。
しかも、邊りには人がゐないのか、まるで深山の中にでも迷ひ込んだやうに、しんとしてゐる。
初音は、氣味のわるさを通り越して、何んだか恐ろしかつた。——折角、こゝまで來てゐながら、このまゝ、引つ返さうかしらと思つた。
でも、やうやくのことで、勇氣を揮つて、ポーチに立つと、そこに吊り下げてある銅鑼をたゝいた。——意氣地もなく手が慄へるのと、力が入らないので、初めの一つは、鳴らなかつた。つゞい

て思ひ切つて叩くと、初めてびつくりするやうな大きな音が、耳の傍で鳴つた。
どこか裏のはうらしく、けたゝましく四五疋の犬の鳴く聲が、するどく聞えて來た。犬嫌ひの初音は、恐ろしい犬の吠え聲に、きゆつと心臟が縮むやうな思ひがしたが、でも、犬舍につながれてゐるのだらう。いい工合に、犬の吠え聲は、近づいては來なかつた。
ドアに取り附けた、小さな窓が開いて、女の顏がのぞくと、
『どなた？』
と、言つた。
身體のぜんたいや、表情が見えないせゐかも知れなかつたが、恐ろしく無愛想で、その聲なども陰氣に、怒つてゐるやうに聞えた。
『杉村さんは、ゐらつしやいますか』
と、初音は恐る〳〵言つた。
『どなたです？』
と、女は冷やかに繰返した。——蒼い顏をしてゐるのは分つたが、年を取つてゐるのか、若いのかは、よくわからなかつた。が、その聲のひびきでは、二十七八か、恐らく三十とはなつてゐない

らしい。

『初音と、おつしやつて下されば、わかると思ひます』

『ハツネ？』

『はあ』

と、うなづいて、

『もし、それでおわかりにならなかつたら、本郷の眞砂町から來たのですから……さう取次いで下さいませ』

と、ていねいに頼んだ。

『ご主人は、まだ、おやすみになつてゐますが』

『あら、まだ、杉村さんは、お起きになつてゐらつしやいませんの？』

と、初音はびつくりした。——自分の家の二階にゐた頃は、津川と共に、あんなに早起きだつた杉村が、どうしたのだらうと思つた。

十一時は、もう疾つくにすぎて、十二時に近いのに、まだ、起きないなんて、ウソのやうな氣がした。

『あの、ご病氣でも？』

と、聞くと女は、

『いゝえ』

と、いよ〳〵無愛想に、

『昨夜、おかへりが、大へん晩くなつたものですから』

と、言つた。

『ちや、わたし、お眼ざめになるまで、待たせていたゞきますわ』

初音は、折角こゝまで來たのに、いくら寢てゐるからといつても、このまゝでは歸れないと思つた。——起きるまでは、ほんたうに待つてゐても構はないと、固く決心した。

『では、とにかく、さう申し上げて見ますから』

女は、ブイと引つ込んでしまつた。——初音の眼の前で、小窓の戸は、ぴしやりと閉つた。——永久に、杉村と初音と、二人の間を、遮斷でもするやうに。

三

杉村は、寝心地のいいベットの上で、ぐつすり寝込んでしまつてゐた。——この頃では、毎日、酒を飲まない日とてはなかつたが、殊に昨夜は、すつかり醉つてしまつた。あんなに醉うたことは、酒の強い杉村としては、今までにないことだつた。

それでも、屋敷に歸つて來たのは、夜中の二時すぎ、やがて三時に近い頃だつたらうか。

まつたく、前後不覺の狀態だつた。二三人の召使やら、書生やらで、擔ぐやうにして、やうやく自動車から降ろしたが、それからが大へんだつた。

もつとウキスキイを飲ませろと言つたり、風呂に入りたいと言つて、駄々をこねるのを、やうやくのことで、二階の寢臺まで抱き上げるやうにした。そしてピジヤマを着せて、ベットに寢かせたと思つたら、横になつたか、ならないうちに、もう正體もなく、鼾をかき始めた。

それから十二時まで、ほとんど何もわからずに、ぐつすり寢込んでしまつた。——ふと眼をさました時には、日は既に高く、おまけに好いお天氣らしく、カン〳〵照りつけてゐるらしい日が、ぼつてり垂れ下つてゐる窓のカーテンの際間から、斜めに射し込んでゐた。

昨夜中、しと〳〵と降りつゞいてゐた雨が、いつの間にか、すつかり晴れあがつたのだらう。

でも、お晝の十一時十二時頃までも、寢てゐるのは、この頃の杉村としては、當り前のことになつてゐるので、日が既に、どんなに高くなつてゐやうが、どんなに明るからうが、そんなことに頓ぴくともしなかつた。

大學など、何んの未練氣もなく、疾つくに放擲してしまつた杉村は、早く眼をさまして、人並みの時間に起きたところで、何をするといふ當てもなかつた。長い〳〵一日の時間を、退屈したり、持て餘すよりほかはないのである。

莫大な財産を、相續してからの杉村は、遊ぶことゝ、酒でも飲んだり、何か好きなど馳走でも食べるよりほかには、何もすることがなかつた。——だから堂々たる屋敷は構へてゐても、内になぞ落着いてゐることは、すくなかつた。カツフエーだとか、バーだとか、花柳界などに入り浸つて、豪遊を極めてゐることが多かつたし、藝者や、女給などを連れて、箱根だとか熱海だとか、そんなところを二日も三日も、遊びまはることも度々だつた。

金があり、時間があつて、それで健康なのだから、どんなことでも、好きな眞似が出來た。

（あゝ、よく眠つた）

と、思つた。

細目をあけるやうにして、ソムノの上で、かすかにセコンドを刻む冴えた音を立てゝゐる時計を見ると、ちやうど、十一時三十分だつた。

（さて、今日は、どんなことをして、遊んだらいいだらう？ ）

眼がさめるか、さめないかに、すぐに杉村の考へるのは、そのことだつた。何か、面白く遊ぶことはないか？ 何か、これは！ と、びつくりするやうな、ウマい食べものはないだらうか？

だが、どんな面白い遊びでも、毎日々々遊びつゞけてゐると、ちつとも面白くはないし、どんな美味佳肴でも、食べ飽きてゐる身になると、ウマくも、何んともなくなつてしまふ。

さすがに眼がさめた刹那は、氣分が何んとなく重くるしく、頭のしんに、かすかな痛みを感じた。

（昨夜は、ひどく醉つたから）

と思つたが、それと同時に、君江に素つ氣なく、美事に振られてしまつたことや、それから一人で、築地の待合に行つて、藝者を十人以上も招んで、飲んだり、騒いだりしたことが、思ひ出された。

君江に、あんな工合にすげなくされたことは、はげしい侮辱として、口惜しかつた。それを思ひ出すことは、心臓を針の先でゝも突き刺されたやうに、痛んだし、それから昨夜待合で、初めて見た何んとかいふ美しくて、可憐な妓の姿が眼に浮ぶことは、杉村のこゝろを、ひどく楽しくした。

（信州から出て來て、お披露目をしたばかりだといつてゐたが……可愛い、美しい妓だつた）

と思つたが、名前は何んといつたか、すつかり忘れてしまつてゐた。いくら思ひ出さうとしても、どうしても思ひ出せないのが、癪かしかつた。

（名前なんか、増川に行つて聞けば、すぐ分る）

と思つたが、君江に受けた侮辱は、どうにも口惜しく、考へたゞけでも、胸が慄へて來る。

（さうだ！。このまゝで、すまされるものか！ ）

と、杉村はその執拗な性格と、思ひ上つた、傲慢な氣質とから、自分の邪まな慾望など、すこしも反省する氣持はなく、一途に君江を恨んだ。

（どうしても、復讐してやらなければならない！ ）

歯を食ひしばるやうにして、心に誓ひ、それについて、手段と方法とに、じつと思ひを凝らしてゐるところに、かすかなノックが聞え

男の暴力

一

『お入り』

杉村の返事に應じて、しづかにドアが開くと、入つて來たのは、女中頭のやうにして働いてゐるおかねといふ女で、さつき玄關に取次ぎに出て來たのは、この女だつた。

『何か用か？』

と、杉村はフカフカしたベッドに寢たまゝ、チラとおかねのはうを振り向いたと思つたら、不機嫌に言つた。

『お客さまですが』

『お客さま？』

『はあ』

『どんな人だ？』

『若い女の方です』

『名前は？』

と、言つて杉村は、小首をかしげるやうにした。

初音のことなど、ケロリと忘れてしまつてゐた杉村だつた。若い女のお客と聞くと、若しかしたら君江でも、昨夜のことを思ひ直して、わざ〳〵訪ねて來たのではないかと、そんなムシのいいことを考へて、胸がとゞろくのを、どうすることも出來なかつた。

『初音さんとおつしやいましたが』

『ナニ、初音さんが來たつて』

見る〳〵杉村の顏は、一層不機嫌に、暗く曇つた。

『はい。——本郷の眞砂町から來たと言へば、おわかりになるはずだからと、さうおつしやつてらつしやいましたが』

『そんなことは、聞かなくたつて、わかつてゐる』

『はい』

『馬鹿正直に、わざ〳〵取次ぐヤツがあるものか』
『すみません』
『ねると言つたのか』
『はい』
『すぐに　追ひ歸してしまへ』
『はい』
『素直には、歸らないかも知れないが……』
と、言ひかけて杉村は、さすがに少し躊躇すると、ちよつとの間、默つて考へてゐたが、
『もし、素直に歸らなかつたら、その時には、構はないから、少々は手荒なことをしても、仕方がない』
と、言ひ足した。
『はい』
と答へて、おかねが出て行かうとする後から、
『しかし、怪我などさせるやうなことがあつてはならんぞ』

と、注意した。
『よく分りました』
『姙娠してゐるといふことだから……怪我でもさせるやうなことがあると、後々まで、面倒くさくて叶はないから』
と、言つて、そのまゝくるりと向ふを向いてしまつたが、
『どれ、それでは僕も、もう起きることにするから、誰か寄越してくれ』
と、ドアを閉めようとするおかねに言ひつけて、一つ大きな欠をすると、兩手をぐつと、頭の上に伸ばした。

二

初音は、不安に慄へながら、玄關に立つてゐたけれども、一度閉ぢられた小窓は、ナカ〳〵開かなかつた。
――折角、あゝして會つたのに、昨夜の冷酷無慘な杉村の態度を思ひ出すと、斯うして訪ねて來たところで、ナカ〳〵素直に、會つてくれるとは思へなかつた。會つてくれたとしても、親身にな

つて、相談に乗つてくれたり、力になつてくれるか、どうか、甚だ覺束ないものである。
とつおいつ、凡そ十分くらゐも、さうして待つてゐたゞらうか。——初音の眼の前の小窓が、コトリとかすかな頭を立てゝ開くと、さつきの女とは違つて、今度は若い男の顏がのぞいた。
『お會ひならないさうだから、歸つてくれたまへ』
と、頭から冷やかな聲を浴せかけるやうにして、きつぱり斷わつた。
『まあ！』
と言つた切り、しばらく初音は、後の言葉がつゞかなかつたが、やうやく涙を呑むやうにして、
『そんなはずはありまもんから……どうぞもう一度、取りついで下さいませんか』
と、頭を下げて賴んだ。
『何度取次いだところが、同じことですから、このまゝ素直に、歸つたはうがいゝですよ』
若い男は憐れむやうに、冷笑するやうに言つた。
『いゝえ！　そんなひどいことつて、ありません』
と、初音は思はず涙聲で、叫ばずにはゐられなかつた。
『ひどいことだか、どうだか、そんなことは、僕にはわからないが……とにかく、歸つて下さい』

と、若い男は言つた。
『いゝえ！　歸りません。このまゝでは、歸れませんから』
『それなら、そちらの好きにしたら、いゝでせう』
と、言つたと思つたら、小窓をコトリと閉めてしまつた。
『僕は、いつまでも、あなたの相手になんか、なつてゐられませんから』
ドアの向ふに、そんな捨白が聞えたが、そのまゝ、足音が遠ざかつてゆくのが、かすかに聞えた。
『待つて下さい！』
初音は、夢中になつて、ドアをたゝきながら、必死にさけんだ。
『おねがひです！　どうぞもう一度、取次いで下さい』
『……』
返事は何も聞えなかつたけれども、ちよつと、足音が留つた。
『どうしても、お目にかゝらなければならないことがあるのです。——五分か十分、せめて三分間でもいいから、どうぞ會はせて下さい』

『……』

『お目にかゝつても、決して無理なことや、我儘を言ふつもりはありませんから……たゞ、杉村さんのお氣持だけ、たしかめれば、それでいいのですから』

『……』

『一目會ひたいのです。一言、口を利けば、いいのです』

『……』

『どうぞ、會はせて下さい』

『……』

『おねがひです。——會へるやうに、取次いで下さい』

『……』

いくら初音が、泣いても叫んでも、ドアも、小窓も、さながら盲人の瞼のやうに、固く鎖された まゝ、決して開きはしなかつたし、その上、もうその邊には、誰もゐないのか、ひつそりとして、一言の返事もないばかりか、耳をすましても、人の氣はひも感じられなかつた。

『これほど、おねがひするのに、聞いては下さらないのですか』

初音は、更に泣き聲を、振り絞らずにはゐられなかつた。

——昨夜の慘酷な態度といひ、今日のまたこの酷薄無情の仕打ちといひ、はげしい憤怒と、怨恨とに、腸が煮えくり返るやうであつた。

初音は、いくら冷靜に、自分を抑へようとしても、人間の堪忍にも、一定の限度があつて、もうそれ以上は、我慢がならなかつた。自から抑へる力もなければ、堪へ忍ぶことも出來なかつた。

どうなつてもいいと思つた。こゝで倒れるなら倒れてもいいし、死ぬなら死んでもいい。むしろ杉村の胤をお胎に宿して、この杉村の豪奢な玄關前で、慘酷な目にあはされて、胎兒と共にこゝに倒れ、こゝで死ぬなら、それも本望だと思つた。若し、これから杉村が、どこかへ出かけるなら、自分の死骸を跨いで——哀れな母と子の死骸を乘り越えて、どこにでも出かけて行くがいい！

さう決心すると同時に、蒼ざめた初音の形相は、見る〳〵物凄く變つた。——全身が、怨恨と憎惡との化身となつて、その二つの瞳からは、ギラ〳〵と紫色の焰を吹いてゐるのではないかと思はれた。やさしい眉は逆立ち、細い肩は波打ち、血の氣の褪せた唇からは、熱い呼吸が、はげしく喘いでゐた。

この時、初音のこゝろは、まつたく惡鬼に化したと、同じことだつた。

三

『開けて下さい！』

今はもう、纖弱い力を振りしぼつて、扉を打ち破つても、入つて行かうとする意氣込みだつた。

『……』

扉の中は、しんとして、何の答へもなかつた。

『開けないのですか！』

と叫ぶなり初音は、右の肩のあたりを、力いつぱいどしんと、ドアに打つかつて行つた。が、城門の扉のやうに頑丈なドアは、もちろんビクともするはずがなかつた。——固い木と、軟らかな肉躰とが打つかり合ふ、鈍い音を立てたと思つたら、かへつて初音は、自分の肩のあたりに、はげしい痛みを感じた。

でも、初音は、更に屈する色を見せなかつた。

『わたし、杉村さんに會ふまでは、どんなことがあつても、歸りませんから！　このまゝでは、歸りまんから！』

と、叫びながら、二度、三度と、扉に打つかつて行つた。

肩の肉は破れ、骨は碎けたつて、構はないと思つた。——今となつては、いつそ血まみれになつて、こゝに倒れるのこそ、本望だと思つた。

だが、四度目か、五度目に打つかつて、そのはずみでよろよろと、よろめいた時だつた。突然、ドアの片つ方が内からサッと開いたと思つたら、初音の眼の前に、さつきの若い男が、ぬつと突つ立つた。

『何を亂暴な眞似をするんだ』

ぐつと、初音を睨み据ゑるやうにして、行きなり一喝した。——何か一言でも、初音のはうで言つたら、打ち据ゑもしかねまじき勢ひだつた。

でも、初音はその男の姿が、現はれて來たのを見ると、

『おねがひですから、どうぞ杉村さんに、會はせて下さい』

と、相手の胸に取りすがらんばかりに、哀願した。

(こんな男に、こんなことを、泣いて頼むなんて)

と、心外でもあれば、口惜しくもあつた。でも、どんなことをしても——この書生か何かのやう

な若い男の足もとに跪づいても、そんなことは構はないから、どうかして杉村に、一目だけでも會へるものなら、會はせてもらいたいと思つた。今となつては初音は、自分の體面や、面目や、そんなことは言つてゐられなかつた。どんなことをしてもいいから、たゞ杉村に、會へばいゝのだと思つた。

『駄目だと一度言つたことは、いくら繰返しても駄目だ』

頭からどなりつけるなり、その太い腕で、初音の胸のあたりを、力に任せてどしんと突いた。

その一撃で、初音は、

『あつ』

と叫ぶなり、兩手でそつと、我とわが胸をかき抱くやうにして、へた〳〵と、その場に崩折れてしまつた。ちやうど心窩のあたりに、唐手の一撃を喰つたと、同じことだつた。眼がクラ〳〵として、息の根が止つたかと思ふと同時に、氣が遠くなつて、立つてゐる力を失つた。

『門の外に、引きずり出してしまへ！』

玄關の土間に立つて、さつきから、この樣子を見てゐたらしい中年の男が、毒々しい、陰氣な聲で命じた。

『は』

と、答へたかと思ふと若い男は、我と我が胸をかきいだくやうにしたまゝ、息も吐かないで、そこに崩折れてゐる初音の襟首を、ムズと掴んだ。

『何をなさるの！』

と叫ぶのも、やうやく喘ぎ〳〵、口のうちだつた。

初音は、身をもがいて、力いつぱい抵抗しようとして焦つたが、かなしいことには、男の腕力に敵ふはずがなかつた。——口惜しさに齒がみをしながら、捨て犬か何かゞ、つまみ出されるやうにして、襟首を掴まれたまゝ、ずる〳〵と引きずられて行くよりほかなかつた。

『じたばたすれば、これ以上、痛い目を見るばかりだぞ』

と、書生は威嚇した。

『あんまりです〳〵』

引きずられながら初音は、やうやく切れ〳〵の聲でさけんだが、いかなる抗議も、どんな愬へも、取りあげられるはずはなく、そのまゝ門まで、ずる〳〵と引きずり出されてしまつた。

『もう二度と、こんなところに來るのではないぞ』

と、言つたかと思ふと初音の身體は、門の外に放り出されてゐた。そして、門扉は左右から、しづかに閉められてしまつた。――初音は、すぐには立ち上る氣力もなく、地べたに身を投げ出したまゝ、かすかに咽び泣いてゐた。

女の一念

一

髭を剃り、入浴をすませ、贅澤な部屋着に着かへると、杉村は豪奢な食堂で、朝とも、晝とも、わからないやうな食卓に、向つてゐた。

『木下を呼べ』

シェリー酒か何か、小さなグラスを、きゆつと空にすると、そこに立つてゐる召使に言つた。

『は』

女中が、出て行つてから、しばらくすると、

『お呼びになりましたか』

と言つて、鞠躬如として、入つて來たのは、さつき、初音を叩き出す時に、玄關の土間に立つて書生に命令した、あの中年の男だつた。

『うん』

杉村は、すこし醉ひが發して來た赭い顏を、うなづいて、

『ちよつと、頼みがあるんだ』

と、言つた。

『は』

木下が　恐縮したやうに、一つ頭を下げると、

『あの女は、どうした？　』

と、杉村は聞いた。

『は、もう疾つくに、追つぱらつてしまひましたが』

『さうか。――それは、どうもありがたう。べつに怪我などさせはしなかつたぢうな』

『は』

と、木下は頭を下げた、

『手荒なことは、何もしないやうにしましたから』

と、言つた。

『頼みといふのは、ほかでもないが……』

と、杉村はまた、なみ〳〵注がれたグラスをあけると、

『ちよつと、山田君にでも頼んで、調べてもらひたいことがあるんだ』

と、改つて言つた。

山田といふのは、杉村の大學時代の先輩で、今では杉村が顧問辯護士として雇つてゐる男だつた。

『どんなことでせうか？』

『或る人の身の上を、一つ詳しく調べてもらひたいのだ』

『それは、どういふ人ですか？』

『波多野良吉氏――名前くらゐは、君も知つてゐるだらう』

『外交官の波多野氏ですか。名前だけは知つてゐますが』

と、木下は苦笑した。

木下は、今でこそ杉村の執事のやうなことをしてゐるけれども、帝大の政治科出身で、元來が政治志望である。總選擧の時など、眞先に飛び出して、鄕黨の先輩の政治家の運動員などになつて、一生懸命に働くはうだつた。

だから政治界の情勢や、官界の事情などには、割合にその消息に通じてゐるはうだつた。

『實は、波多野氏について、すこし知りたいことがあるんだ』

『はあ』

『知りたいといふのは、主として財政狀態なんだがね』

『先代は、五度も閣僚の椅子を占めたことがある人でしたし、現在の良吉氏も、政變の度びに、よく外務大臣などの候補に數へられるほどの人ですから、表面の生活は、ナカ〳〵派手にやつてゐるやうですが、その實、內情は苦しいのだといふことを聞いてゐますが』

『僕も、さうではないかと思つてゐるんだがね』

と、杉村は會心さうな微笑を、ニヤリと唇のまはりに漂はせると、しきりにうなづいてゐた。

『何しろ先代は、淸廉な人であつた上に、政黨の幹部などになつて金を費つて、死ぬ時など、かなりの借金を殘してゐたらしいのです。そのために、現在の良吉氏は、ひどく苦しいやうな噂です

が』

『君は、ナカ〳〵精しいんだね。――ははゝゝゝ』

と、杉村は上機嫌になつて、ほがらかに笑つた。

『ナニ、それほどでも、ありませんが……』

と、木下は媚びるやうに笑つて、頭を掻いた。

『どうだ、一ついかう』

グラスを突き出すと、木下は、ぺこ〳〵して受取つて、

『どうも、大將お手づからのお酌で、これは恐縮』

と言ひながら、舌舐めずりをするやうにして、一息に飲むと、

『ご存じかも知りませんが、波多野夫人の實家は、身分の高い貴族です。夫人は、社交界でも派手な存在ですが、ナカ〳〵虚榮心が強く、權勢慾がはげしいので、その點でも、人の好い良吉氏は、人通りならず手こずつてゐるといふことです』

と、言つた。

『それだと、いよ〳〵こつちのためには、好都合だ』

『ぢや、大將は、波多野家に對して、何かもくろんでゐられるのですか』

と、木下が小首をかしげると、杉村は少しあわてゝ、

『そんなことは、君の關係したことぢやないよ』

と、急に不機嫌になつて、きびしく突つ撥ねたが、

『とにかく、山田君に依頼して、家庭のことだとか、財政狀態など、更に精しく調べさせてくれたまへ。――山田君から興信所にでも命じて、調査させたら、すぐに分ることだから』

と言つた。

『は。早速、さういふ運びにいたしますから』

と、頭を下げるのを、杉村は更に押しかぶせるやうに、

『なるべく、早くだよ。すこし急ぐことがあるのだから』

と、念を押した。

二

杉村は、二時すぎる頃まで、食堂で、ぐづ〳〵してゐた。

食堂を出て、二階の書齋に入つて見ても、さて何をするといふ當てもない。——思はぬ幸運が、自分の懷ろにころげ込んでからの杉村は、コツ〳〵勉强したり、本を讀んだりするやうな氣には、どうしてもなれなかつた。たま〳〵退屈して、書物をひらいて見ることがあつても、一ページと讀みつゞけないうちに、もう飽いて、バカ〳〵しくなつて、止してしまふ。

そして考へるのは、遊ぶことや、食べることや、それから女のことだつた。——金があつて、暇があつて、健康だと、大抵な女が、自分の思ふ通りにならないといふことはなかつた。

今は杉村は、君江の美貌や、品位ある姿などを、愛撫でもするものゝやうに、生き〳〵しく眼の前に描き、そして、その合間々々に、ひよい〳〵と眼先にチラついてくるのは、里龍の可憐な姿だつた。

君江は、良家の令嬢だし、その上、聰明で、個性もハツキリしてゐるし、自尊心も高いし、見識も持つてゐる。——だから、今まで杉村が、多くの藝者や、女給や、ダンサーなどを、自分の意のまゝにして來たやうな工合に、簡單に運ばないことは、杉村にも十分わかつてゐた。

（だが、里龍なら）

と、考へて杉村は、思はず＝ツコリ微笑した。

君江にたいしては、それ〳〵盡すべき手段を盡さなければならないし、その運びは、ちやんと附けてある。——だから、時機を待つばかりである。

が、里龍は？

（要するに藝者ぢやないか。賣りもの、買ひものだ）

と、圖ら〳〵しく自問自答して杉村は、急に身體が、ぞくぞくして來るやうな喜びを、感ぜずにはゐられなかつた。

たゞ、醉眼にチラ〳〵映つたゞけで、ハツキリした記憶もないはずだのに、妙に鮮やかな里龍の印象が、生き〳〵と杉村の腦裏に浮んで來るのであつた。そして、可愛しさの情が、疼くやうに胸に湧き上つてくると同時に、今、すぐに、ぎゆつと力いつぱい、あの可憐な身體を抱きしめてやらずにゐられないやうな、はげしい衝動に驅られた。

（さうだ）

と、杉村は一人うなづくと、呼び鈴を押してゐた。

三

召使の全部が、玄關まで出て來て、ずらりと並んで、一齊に頭を下げると、杉村の外出を見送つた。

『築地だ』

自家用のの高級車は、ちやんと支度をして、車寄に待つてゐたが、杉村は悠然として乘り込むと、行く先を言つた。

自動車は、すべるやうに動きだした。美事に枝を張り、生き生きと茂つてゐるヒマラヤ杉の下枝の尖に、コンネツトをこすりつけるやうにして、タイヤは、小砂利を撥ね飛ばしながら、門に向つて走り出してゐた。

初音をたゝき出したまゝ、それまで閉められてゐた門扉は、主人の外出に、自動車の音を聞くと、急いで左右に開かれた。——すこし速度をゆるめた自動車は、悠々と門をすべり出ると、右にカーブを切つて廻つたが、ちやうど、その時だつた。思ひもかけず、門の袖のところから、すこし離れた塀の下に、死んだやうになつて、うづくまつてゐた一人の女が、自動車が出て來たのを見る

と、パツと起ち上つて、行きなり自動車を眼がけて、飛びかゝつて來た。

『あつ』

さけんだと思ふと、運轉手が、左りにカーブを切つて、急にスピードを出したので、いゝ工合に自動車は、女を轢き倒しもせずに、走り去つてしまつた。

が、女は、勢ひが餘つて、よろ〳〵と往來の端のはうまで、よろめいて行くと、細い、淺い溝の中に片足突つ込んで、ぱつたり倒れてしまつた。この女は、言ふまでもなく初音だつた。——男の力につまみ出されたけれども、死んでも動くものかと、執拗に塀の下のところにうづくまつて、今まで待ちつゞけてゐたのである。

果して、杉村は出て來たが、しかし、斯くてまた、捕まへることが出來ずに、見す見す取り逃がしてしまつた。

初音は、泣くにも泣けない口惜しさだつた。——もちろん、すぐには起き上る力もなく、そのまま地べたにへたばつて、全身をわなゝかせてゐた。

『執拗い女だ』

杉村は、卷煙草の煙りを、長閑さうに吹かしながら、冷笑するやうに呟いた。

『はあ　昨夜の女のやうでしたから、急いで避けたはうが、いいかと思ひまして』
と、運轉手は靜かに言つた。
自動車は、間もなく築地の增川の玄關前に着いた。

親たちの心

一

應接室で、二三人の客と、何かひそ〳〵話してゐたが、その客が歸つて行くのを、見送らうともしなかつた。――外交官出身だけに、常に身だしなみがいゝのと、愛相がよくて、禮儀正しいのが評判の波多野良吉氏としては、訪問客の歸りを玄關まで見送らないなんて、珍らしいことだつた。
イヤ、今までに曾つて一度もないことだと言つても、いゝかも知れない。
疊にしたら、五十疊以上は敷かれるだらうと思はれるやうな、廣い應接室だつた。どつしりと重みのあるセットで、厚ぼつたい窓飾りの布でも、ペルシヤ絨氈でも、壁間にかゝげられてゐる繪畫

でも、大きな繪皿や、古い太刀や、鐵砲などでも、すべて豪華で、貴重なものばかりである。立派な彫刻のある銀の大花瓶、美事な鎧や、兜のたぐひが飾つてあるかと思へば、いづれは國寶級の品だらうと思はれるが、古ぼけた等身大の佛像などが、二つも三つも、据えられてゐる。
その豪奢な應接室の中央には、小判型をした長方形のテーブルを据え、十四五人くらゐ集つて、會議が出來るやうに、イスが、ずらりと並んでゐる。その中央のテーブルの兩側に、すこしづゝ間隔をおいて、圓卓が二つ据えてあり、その圓卓をぐるりと取りまいて、椅子が五つづゝおいてある。
良吉氏は、正面マントルピースを背にして、その圓卓をかこんでゐる椅子の一つに、くつたりとなつて、身を投げかけるやうにしてゐた。
吸ひさしのシガーを、手にしてゐたが、その手が、かすかにブル〳〵と慄へてゐるのが眼立つた。でも、もちろん、それを誰も見てゐる者はゐなかつたし、良吉氏自身、自分でも氣が附かなかつた。
餘程の大問題に打つかつたか、何か大へんな打撃でも受けて、氣持の平靜を失つてゐるのにちがひなかつた。――時々、シガーを唇に持つてゆくと、眉をひそめるやうにして、せか〳〵と煙を吸ふ

のであつたが、すぐに、また唇から放して、何事かをジッと考へ込むのであつた。
吸ひかけのシガーの先には、だん〳〵灰が溜つて、あやふく落ちさうになつてゐるのにも、氣が附かないらしかつた。
（三十萬圓）
やがて良吉氏は、思はず口に出してつぶやくと、ホッと、いかにも胸の底から、深い溜息を吐いた。
（そんな大金が、今のこのおれに、どうして都合が出來るのだ？）
つゞいて斯う自問した時に、その凛々しい廣い額や、太い首筋などには、ジリ〳〵と膏汗がにじんだ。
（だが、その金の都合が出來ないとすると……おれは……おれは、破廉恥罪に問はれなければならないぢやないか！）
いかめしい檢事の姿や、恐ろしい牢獄の有樣などが、まざ〳〵と良吉氏の瞼に浮んで　正直で、善良な良吉氏の心を脅かした。
（畜生め！　おれは、トリックに引つかゝつたんだ）

と叫んで、口惜しさうな唇を嚙んだ。が、いくら口惜しがつても、それはアトの祭りだつた。この邸宅にも、今までのやうに安穩に、平和に住んでゐることは出來ない。――名譽も、地位も失つて、囹圄の人とならなければならない。
今まで、絶えず努力して、築いて來たところの政治界の重要な立場も、夢に描いてゐた國務大臣の地位も、要するに水の泡ではないか。
（何んとでもして、一つ形勢を挽回する術はないものか）
良吉氏が、膏汗を流しながら呻いた時、コツ、コツとしづかなノック。
しかし、良吉氏は、ちつとも氣が附かなかつた。

二

『あら、あなたは、やつぱりこちらにゐらつしやいましたのね。――ドアをたゝいても、ご返事がないものですから、ゐらつしやらないのかしらと思ひましたわ』
ドアが開いたと思つたら、外出姿の夫人の華やかな姿が、應接室の中に入つて來た。模樣の着物を着て、お化粧をして、まるで眼がさめるやうな美しさだつたが、つか〳〵と良人の傍に近づい

て、

『あなた、どうなさいましたの？　お客さまは、疾つくに、おかへりになつたぢやありませんか』

と、言つた。

『うむ』

と言つて良吉氏は、チラと夫人の姿を見上げたが、

『お出かけか？』

と言ふと、すぐにその眼を、眩しさうに伏せた。

『まあ』

と、夫人は呆れたやうに眼を見はると、良人に向ひ合つた椅子に着いたが

『お忘れになりましたの。今日は、四條の家の結婚式ぢやございませんか』

と、言つた。

四條といふのは、夫人の實家の親類だが、夫人の甥が（兄の三男である）養嗣子になつてゐるのが、今度、同族の令嬢を迎へて、今日の三時に、飯田町の大神宮で、結婚式を擧げることになつてゐるのであつた。――良吉氏夫妻も、親戚の立場として、その式に列なることは、ずつと以前から

決つてゐた。

『あゝ、さうだつたな。わしは、すつかり忘れてゐた』

今の良吉氏の氣持としては、結婚式に列席するどころではなかつたけれども、でも、前からの約束であつて見れば、今更、どうすることも出來なかつた。

『まあ』

と、夫人は呆れて、

『暢氣ですわね。――わたくし、ご注意いたさせやうかと思つたのですが、でも、お客さまでしたものですから……差控えてゐましたの』

『まだ、二時過ぎたばかりだな、そんなにあわてなくてもいゝだらう』

と、良吉氏は置時計の針を見ると、かすかに微笑した。

『時間は、まだ〳〵十分ですけれども……でも、すぐにお支度なさいませ。――わたくし、お手傳ひいたしますから』

『イヤ、誰か……召使に手傳はせるから、お前は、自動車の支度をさせるやうに、さう言つて下さい』

『あら、お自動車の支度は、佐々木が、ちやんと心得てゐますわ』
さう言ひながら夫妻は立つて、いつしよに應接室を出ると、夫人の部屋の隣りの着換へ室に入つて行つた。

三

『わたくし、ちよつと氣にかゝつてゐることが、ございますの』
夫人は、良人のために、モーニングの着換へを手傳ひながら、さゝやくやうに聲を低めて言つた。
『うむ』
良吉氏としては、それがどんなことであるかは、まるきり見當もつかなかつたけれども、でも、イヤな話なら、なるべく今は、聞きたくなかつた。だから、身の入らない返事をして、不器用な手つきで、ネクタイを結んでゐたが、どうしてもウマく結べなかつた。——外國にも長くゐたことがあり、身だしなみのいゝくせに、不器用な良吉氏は、ネクタイを結ぶのが、大骨折りだつた。だから、召使に、着換へを手傳はせる場合には、いつも召使が、結んでくれるのであつた。

——良人の氣持など、何んにも知らない夫人は、ネクタイを結び惱んでゐるのを見ながら、そんなことにはお構ひなしに、チョッキを持つて立つたまゝ、
『實は、津川さんのことなんでございますがねえ』
と、相變らず低い聲で、さゝやくやうに言つた。
『津川君が、どうかしたのか？』
良吉氏は、心では（何んのことだ）と思ひながら、べつに深くは意にも留めずに、聞き返した。
『いゝえ。——どうしたといふわけではございませんけれども……あの方の人物について、あなたは、どうお思ひになりまして？』
『さあ。どう思ふつて……改つて聞かれても、咄嗟には、ちよつと返事にも困るが』
『ですから、簡單に、あなたのお感じになつてゐらつしやるところを、一口におつしやつて見ていたゞきたいのですわ』
『お前は、どういふ意味で、そんなことを聞くのか知らないけれども……さうだな、一口に言へば眞面目な、いゝ青年ぢやないか』
『さうですわね。——眞面目といへば、ほんたうに眞面目だと思ひますけれども……』

と、夫人は何か不服らしく、すこし首をかしげてゐた。
『それに、ナカ〳〵の勉強家だし、頭もいゝやうだし……今時の青年としては、先づ頼もしい人物だらう』
『でも、君江の良人としては、どうも少し……』
『何んだ、お前は、そんなことを考へてゐたのか』
良吉氏は、びつくりしたやうに振り向くと、夫人の顔をジッと見つめたが、その眼ざしには、ついぞ見たこともないやうな、或るきびしさが含まれてゐた。
『あら、あなたも、またお氣が早いぢやありませんか』
と、夫人は笑つて、
『どうしてわたくしが、そんなことを考へるものですか』
と、辯解した。
『では、何んだつて急に、そんなことを言ひ出したのだ？』
『わたしは、決してそんなことなど、考へてはゐませんわ。それどころですか、たとへ津川さんが、どんなに立派な青年であるとしても、君江の良人としては……今のとろあの地位では、どうも

……さうかと言つて、財産があるといふわけでもありませんし、まつたく、不釣合だと思つてゐますわ』
『それなら何も、そんなことを言ひ出す必要はないだらう』
『ところが、どうも君江の氣持が。すつかり津川さんに、傾き切つてしまつてゐるやうでございますから』
『では、何か……君江が、そんなことを、お前に打ち明けでもしたといふのか？』
良吉氏は、すこし慌てゝ聞いた。
『いゝえ』
と、夫人は打ち消して、
『まさか、そんなことを……君江がわたくしに、打ち明けたりするものですか……』
『では、まだ、何も斷定出來ないことぢやないか』
『でも、どうだか分りませんわ』
『何が？』
『若い人たちの氣持の動きなんて、微妙なものでございますから』

『それでは、何かそんなそぶりでも、見えるのか？』
『何んだか、さう思へば、そんな氣もいたしますわ』
『それは、本當か？』
『自分の娘の氣持の動きくらゐ、これでもわたくしにも、わからないことはないと思ひますわ』
と言つて、夫人は意味あり氣に微笑をふくんだ眼で、チラと良人を見た。
良吉氏は、眉をひそめて、
『それは困る。——そんなことは、どうも困る』
と、つぶやいた。

四

『君江は、何しろ自分の生命を助けられたといふ大恩があるものでございますから…… 津川さんに對する感謝の氣持でいっぱいなんですの。今では、結婚するやうな氣持になつてゐるのぢやないかと、思ひますけれども……』
『しかし、感謝の氣持と、愛とは、違ふのぢやないかな』

『でも、若い女の氣持になりますと、同じことかも知れませんわ。——違ふとしましても、感謝の氣持が、次第に愛情に變つてゆくといふやうなことは、若い女の氣持としましては、ありがちのことではないかと思ひますわ』
『とにかく、これからもあることだから、お前としては、よく〳〵氣を附けてくれなくちゃ』
と、良吉氏は念を押した。
『はあ』
と、夫人はうなづいたが、
『それは、おつしやるまでもなく、氣は附けますけれども…… では、あなたも、たとへ君江が、どんなにそれを望んだとしましても、津川さんとの結婚には、不贊成でございますのね？』
と、聞いた。
『もちろん、不贊成だ』
良吉氏は、言下にキッパリ答へたが、すぐに次ぎのやうに言ひ足すことを、わすれなかった。
『それは、津川君の人物とは、別問題だよ。——津川君の人物が、どんなに頼もしくても、立派であつても、君江の結婚とは別問題だ』

『よく分りましたわ。それだけうかゞつておけば、わたくしの考へも、ハッキリいたしましたから、――わたくしもあなたと、同じ意見でございますの』

良吉氏の着換へが終つて、夫妻は揃つて玄關に出ると、そこの車寄に控へてゐる自動車に、先づ良人の良吉氏が、一足先きに乘り込んだ。

つゞいて、夫人が乘らうとした時に、一人の若い女が、門のはうから入つてくると、よろ〳〵しながら、玄關に近づいて來た。――自動車のドアを、うや〳〵しく開けて、立つてゐる運轉手の佐佐木も、玄關にづらりと並んで、頭を下げて見送つてゐる召使たちも、誰も氣が附かなかつたのを、自動車に先に乘り込んで、眞直ぐ向ふを見てゐた波多野氏が、先づ認めて、

『誰だらう？　あの女は？』

と、つぶやいた。

『え？　どの女でございますか』

と、ステップに片足、かけやうとしてゐた夫人は、良人の言葉が耳に入ると、そのジッとそゝがれてゐる視線を追ふやうにして見たが、その時には、もうその女は、自動車の側――夫人の傍らまで、フラ〳〵と近づいて來てゐた。

髪は亂れ、着物の襟もとや、裾などもしどけなくなつてゐた。その姿だけ見ると、どこかで揉み合ひの喧嘩でもしたか、發叫きにでも逢つて來たとしか思はれなかつたが、それにしては、べつに負傷をしてゐるらしい樣子も見えなかつた。

が、顏の色は紙のやうに蒼ざめ、双の瞳は、血ばしつてゐた。ひどく昂奮してゐるのだらう。瞼や、唇のまはりの筋肉が、不隨意に痙攣して、美しい顏全體が、今にもわつと聲をあげて泣き出しさうに、ゆがんでゐるのであつた。

『あなたは、どなたなの？』

夫人は、一旦、自動車に乘らうとしてゐたのを止して、不思議さうに、美しい眉をひそめて聞いた。

『……』

女は氣狂でもなければ、病人でもないらしく、それまで放心したやうになつてゐたのが、夫人に言葉をかけられると、ハッとしたらしく、無言のまゝ眼を見はるやうにして、夫人の顏を見つめた。

『何か、ご用ですか？』

夫人が、冷やかに聞くと、

『わたくし、津川さんに、お目にかゝりたいのですけれども』

と、かすかに呟いたのは、初音だつた。――初音は、吉祥寺からの歸りを、ハツキリした考へもなく、つい夢のやうに、ふら〳〵とこゝに廻つたのである。

『さう、津川さんのご存じの方なのね』

と。夫人は好奇心をうごかされたらしく、ジロ〳〵と初音の姿を眺めながら、熱心に聞いた。

『はあ』

『津川さんは、只今、お留守なんですけれども』

『あゝ、津川さんはお留守ですのね。さうでしたわね。今日は、學校にいらつしやる日ですものね』

初音は、禎輔が留守だと聞くと、見る〳〵絶望の表情を浮べたが、獨りごとのやうに、かすかに口の中で呟いたと思ふと、それまで、やうやく自分を支へてゐた精も根も、盡き果てたのだらう。へた〳〵とその場に崩れるやうに、べつたり倒れてしまつた。

『もう出かけないと、三時に間に合はなくなるよ』

その時、自動車の中の良吉氏が、注意をした。

『さう。では……』

と言つたが夫人は、そこに見送りに立つてゐた召使の一人に、

『津川さんのお客さまよ。ひどく疲れてゐるやうだし、それに姙娠中らしいわ。早く内にお連れして、手當てをして上げなくちや……それからすぐに津川さんへ電話をかけて、知らせてあげなさい』

と言つて、夫人はそのまゝ、ひらりと自動車に乘ると良吉氏に並んで、クッションに凭れた。

『何か、深い事情があるらしいですわね。これで見ると、津川さんの人物も、あまりあてにはなりませんわ。――だつて、あの女のお腹は大きいんですもの。きつと、七ヶ月くらゐだわ』

夫人は、運轉手に聞えぬやうに、良人の耳に口を寄せるやうにしてさゝやいたが、その時にはすでに自動車はロー・ギヤーを入れて、そろ〳〵とすべり出してゐた。

美しき傀儡

一

銀座八丁目の裏通り。昔の煉瓦路も、今はアスファルトになつて、往き交ふタクシーや、自轉車などで、かなり騒うゝしいが、それでも兩側に並んでゐるのは、粹な格子戸づくりの家ばかり。その中には、洒落た袋物屋だとか、小間物屋、浴衣專門の店などが、ところゝ〳〵挾まつてゐるし、おでん小料理屋の淺葱の暖簾が垂れてゐる店も、まじつてゐた。

お稽古の歸りを髪結に廻つて、時代遲れの島田に結つて、黑い襟のかゝつたお召の不斷着に、同じ模樣の前掛けをして、急ぎ足に歩道を歸つて來たのは里龍で。——名前も違へば、姿や樣子も、すつかり變つたけれども、可憐で、美しく、それで初ひ〳〵しく魅力に富んだ新鮮な容貌や、すらりとした姿や、いかにも花柳界の女らしく、粹なつくりはしてゐても、智的なひらめきを見せてゐるその眼ざしや、どことなく氣品のある態度や、物ごしなどには、令孃時代の里枝の面影を殘し

た。インチリと、花柳界の粹とが、まざり合はふとして、まだ、すつかりまざり合つてゐないところに、處女の新鮮さと、魅力とが、あふれてゐるのであつたが、もちろん、里枝自身は、そんなことに、自分で氣が附くはずがない。たゞ、自分でも不思議でもあれば、意外でたまらないのは、親のために仕方なく藝者などになつても、果して自分のやうな者に、よく勤まるかしらと思つて、不安でもあれば、心配でもあつたが、實際に藝者になつてみれば、それが案外の結果になつたことである。

どこがいゝのか、どんなところが、お客の氣に入るのかわからないけれども、酒など一滴も飲まないし、もちろん、お愛相が一つ言へるわけではなし、藝といつたところが、達者なはずはないにもかゝはらず、皆なのお客から贔負にしてもらへることだつた。——お披露目をしてから、まだいくらにもならのに、毎日々々、お約束だけでも四つも五つもあるし、眼のまはるやうな忙しさで、ふりのお座敷がかゝつて來ても、その中の幾つかは、斷はらなければならない始末だつた。

（こんなはずではないのに）

と思つて、里龍は何んだか夢のやうな氣がしてゐた。

『母さん、只今』

花柳界の習慣で、母でもないのに、里枝もやつぱり皆なと同じやうに、さう言はねばならなかつた。初めのうちは里枝も、ナカ〳〵言ひにくゝて、調子よくは口から出なかつたその言葉が、この頃では、大分馴れて來た。

荒い格子戸をがらりと開けて入ると、土間には君の家と書いた吊り燈籠が、下つてゐた。

『お歸り』

古風に眉を落して、おはぐろまで附けた母さんは、茶の間の長火鉢の前に坐つてゐたが、機嫌がよかつた。

『豆奴と、千代龍は、いつしよぢやなかつたのかい』

と、聞かれて里龍は、すぐには返事が出來なかつたが、

『はい』

と、言つてから、

『ちよつと、買ひものがあるからつて、表通りに廻りましたから、すぐ後から、かへりますわ』

と、咄嗟に考へて、そんないゝ加減なウソを吐いてしまつた。

その實は、資生堂裏の角のところで、蜜豆を食べに行かうと誘はれたのを、里龍だけ斷つて、一

人で先に歸つて來たのであつた。――でも、里龍は自分だけ母さんの前に、いゝ子にはなりたくなかつた　そのために、つい吐いてしまつたウソだつたが　でも、いくら友達を庇ふために吐くウソでも、氣が咎めずにはゐなかつた。

里龍は、こそ〳〵と、二階の自分たちの部屋に上つてしまつた。

二

そろ〳〵風呂に入り、化粧をしたり、お座敷に出る支度に、かゝらなければならないと思ひながら、婦人雜誌に讀み耽つてゐるところへ、豆奴、千代龍、朝香、ぼん太などゝいふ朋輩が、言ひ合せたやうにいつしよに、どや〳〵と歸つて來た。

『只今』

『母さん、只今

『遲くなつて、すみません』

などゝ、殊勝に挨拶する聲が、階下から一度に聞えて來たと思つたら、一人づゝ次ぎ〳〵に、二階に上つて來た。

『里龍さん。――母さんに言ひつけはしなかつた？』
半玉から、この春、やうやく一本になつたばかりの豆奴が、十五歳だといふくせに、ひどくませた口を利いた。
『大丈夫よ』
里龍は、雑誌から眼を放すと、ニッコリ見上げるやうにして、
『お歸りなさい』
と、みんなを迎へた。
『お土産』
と、千代龍が鹽せんべいの紙袋に入つたのを、そのまゝ、里龍の前に出した。――藝者のお行儀として、不斷着のまゝのだらしのない恰好で、ブラ〳〵と街中を歩いたり、食べもの屋に入つたり、買ひ食ひをしたり、見知らない男のはうを、チロ〳〵見たりすることは、固く禁じられてゐるのであつた。でも、年がゆかず、教養もなく、人生の本當の苦勞といふやうなことにも、何んの經驗もない多くの若い奴たちは、食べることや、芝居だの映畫だのを見ることや、喋べることや、巫山戯ことが、何よりの樂しみだつた。だから、お座敷と母さんの前では、みんな神妙にしてゐて、

も、すこしでも母さんの眼が放れると、そんな固くるしい言ひ附けなど、一人も守つてゐる者はなかつた。
『千代龍さん、お土産だなんて、あんなウマいことを言つて……その實、口留めぢやないの』
豆奴が、憎まれ口を利いた。
『何んの口留めさ！』
『蜜豆を食べに行つたことを、母さんに言ひつけられると、怖いものだから』
『何を言つてゐるのよ。……お前さんぢやあるまいし、そんなこんとを言ひつけるやうな、里龍さんぢやないわ』
『言つたね』
『言つたが、どうした？』
『わたし、そんなにお喋べりぢやないと思ふわ』
『ずゐぶんお喋べりだよ』
『さうかしら？』
と、豆奴は悄氣たが、今度は里龍のはうに向つて、

『里龍さんは、どう思つて？　ほんたうのことを言つてよ』
と、聞いた。
『さあ』
里龍も、正面から聞かれると、何んと言つて答へたらいゝかわからないので、たゞ、あいまいに微笑してゐるよりほか、仕方がなかつた。
あら、里龍さんも、ほんたうのことを言つてくれないのね。――ぢや、あなたもやつぱりわたしのこと、お喋べりだと思つてゐるんだわ』
『さうさ。誰だつてお前さんのことを、お喋べりでないなんて思つてゐる人は、一人もないよ』
と、千代龍が言つた。
『さう。悲觀しちやつたア』
と、仰山に言つて、泣きべそを掻くやうな表情をして見せたが、その實、べつに悲觀したらしくもなく、
『どら、おせんべいでも、ご馳走になるかな。みんなから、わたし一人が攻撃されたんぢや、やり切れない』

と、鹽せんべいの袋から、一枚摘み出すと、早速、ポリ〳〵始めた。
『まあ、呆れた』
と、千代龍は言つて、朝香や、ぽん太といつしよに、顏を見合せると、皆なはは〻〻と笑つた。
――そして、三人の手は、同時に鹽せんべいの紙袋にのびて、一枚二枚と、つまみ出した。
里龍のために、おみやげに買つて來たはずの鹽せんべいは、斯うして里龍が、一枚も食べないうちに、だん〳〵空つぽになつてゆくのであつた。

三

風呂から上つて、すらりと並んでゐる鏡臺の前に坐つて、化粧をしてゐるところへ、階段の上り口から、
『里龍さん』
と、女中のカネやが、大きな聲で呼びかけて、
『すぐ、お座敷ですから、急いで支度なさいな』

と、言つた。

『はい』

里龍は、素直に返事をしけれども、五時からお約束の座敷があるのは、母さんも知つてゐるくせに、どうして受けたのだらう？　と思つた。――今、四時過ぎたばかりだから、これから支度してゐるうちには、ちやうど、お約束の時間になつてしまふ。

どんなに急いだつて、それまでに、新らしくかゝつて來たお座敷なんかに、行かれるはずはないのに、

（どうしても、行かなければならないやうな、義理のあるお座敷なのかしら）

と思ひながら里龍は、ともかくもお化粧を急いだ。

花柳界などに入つて見ると、外部から考へてゐるやうに、たゞ、呼ばれるお座敷に出かけて行つて、お酌をしたり、三味線を引いたりすれば、それでいゝといふやうな、簡單なわけには、いかなかつた。――いろ〳〵の義理だとか何んだとか、面倒くさい關係が、こんがらかつてゐるのに、里龍など、びつくりしてしまつた。

自分では、行きたくないお座敷でも、出先との關係だとか、お客への顏を立てるためだとか、母

さんへの義理だとか、そんなことのために、イヤ〳〵でも行かなければならないことがあるし、さうかと思へば、自分は行つてもいゝと思つても、他のお座敷の都合で、斷はつてしまはなければならないこともある。

――里龍は、藝者になつてから、まだ、間がないので、まつたく母さんの言ひなりになつてゐた。お座敷の選り好みなどする必要もなかつたし、そんなことは、何もわからなかつた。要するに生ける人形であり、美しき傀儡に過ぎなかつた。

化粧がすんで、着物を着換へ、カネやに手傳つてもらつて、帶を締めてゐるところへ、母さんが上つて來た。

『まだなの？　』

と言つて、ヂロリと見たが、剃り痕の青々とした眉をひそめると、

『何んだね、その締め方は。これぢや、一時間もしたら、ぐさ〳〵に、ゆるんでしまふぢやないか』

自分で寄つて來ると癇性にキリ、と締め直した。

『すみません』

と、里枝は言つた。

女學生上りで、丸帶など締めたことのない里龍は、自分ではコツがわからなかつた。こゝでも美しき傀儡で、たゞ、カネやが締めてくれる通りになつてゐるよりほか、仕方がなかつた。

八時間も、十時間も、厚い、幅の廣い、固い帶を、キチンと緊めてゐると、胸から腹のあたりがしびれたやうになつて、自分の身體で、自分のやうな氣がしないのであつたが、今では、それにもだん〳〵馴れて來てゐる。

『ゆる〳〵に帶を締めておくなんて、藝者の恥だよ』

と、母さんは言つた。

『カネやも、カネやぢやないか。里龍は、自分では何もわからないのだし、帶を締めるコツなんて、わかつてゐやしないのだから、お前のはうで、よく氣を附けてやらないと、イケないよ』

『はい』

『それから、里龍は急いで、增川さんだよ』

『あの、增川さんですか』

里龍は、增川と聞いて、昨夜呼ばれたあの醉つぱらひの、若い、キザで、イヤな客のことを、ま

ざ〳〵と思ひ出さずにはゐられなかつた。

『すぐに行つておくれ。——人力車は、來てゐるから』

『でも、五時半からのお約束は、どうしますの？』

『とにかく、增川さんに、ちよつとお顏を出しておいて、それからお約束のはうには、五時に、間に合ふやうにして、行けばいゝぢやないか』

『はい』

そのことは、增川さんに、ちやんと話してあるからね』

『えゝ』

『お前は知らないかも知れないけれども——增川さんは、君の家に取つちや、大事な出先だからね、それに增川さんのおかみさんと、わたしとは、昔からともても仲のいゝお友達で、今でも深いおつきあひをしてゐるんだから、里龍さんも、そのことは、ちやんと心得てゐておくれでないと、困るんだよ』

『はい』

玄關に降りてゆくと、そこの沓脫の上には、ちやんと表つきの下駄が一足、そろへてあつた。

母さんが自分から、頭の上で、切り火を切つてくれた。

離室の客

一

六時までには、まだ、四十分くらゐ間があつた。

お約束の出先は、同じ築地で、増川とは、一丁とは離れてゐなかつた。だから、歩いて行つても、すぐだつたけれども、すこし早目に、人力車に迎ひに來てくれるやうに言つて、歸した。

『今日は』

と言つて、お勝手から入つてゆくと、帳場からおかみさんが、

『里龍さんかえ。昨夜は遲くまで、ご苦勞さま。——忙しいところを繰合せをつけて、よく來てくれたわね』

と、いつにない上機嫌で、愛相よく迎へてくれた。

年配は、君の家の母さんと、たしかに同じくらゐだらう。が、色が白くて、ぽちや〳〵と肥つて、肌が美しいので、君の家の母さんより、五つ六つくらゐは、誰の眼にも若く見えるのであつた。

二人とも、下地つ子の時分から、新橋の土地の水に馴染んで、半玉となり、一本となつて育つて來て、二十歳前後には、ずゐぶん全盛を歌はれ、繪葉書なども、飛ぶやうに賣れたものである。いい加減な年增藝者になるまで、せつせと稼いでゐたが、三十代になると間もなく、前後して身を固めた。一人は藝者家を、一人は待合を開いたが、どちらも、花柳界の年功者であり、土地の古顔なので、同じ社會では、ナカ〳〵權力があるはうだつた。

一體、出先のおかみさんでも、女中でも、出入の藝者などに對しては、相當の權威を持つてゐて、權柄づくなのが習はしである。それだのに、今、增川のおかみさんが、里龍のやうな、田舍からぽつと出の、藝者になつたばかりの、地位もなければ、箔もついてゐない若い奴に對して、あまりに調子がよく、愛相がいゝのは、かへつて何んだか、氣味がわるいくらゐのものだつた。

『ちよつと、こゝへお出で』

廊下に出て、眞直ぐお座敷に行くつもりだつたのを、おかみさんから呼ばれたので、里龍は、

『はい』

と、素直に引つかへして來て、おかみさんの前に坐つた。
『忙しくて結構だね』
おかみさんは、一服吹かすと、じろ〳〵里龍の姿を、見上げ見下ろして、お愛相を言つた。
『ありがたうございます』
里龍は固くなつて、神妙に頭を下げた。
『忙しいはずだよ。こんなに美しくて、可愛らしいんだもの。——女でも、惚れ〴〵するくらゐだから、お客さんが大騒ぎするのも、無理はないね』
『まあ』
と言つて、里龍が思はず、ほのかに赧くなると、
『ほんとうだよ、お世辭ぢやないよ。——わたしは、誰にでも、人にお世辭を言ふのは、きらひだから。
と、なぜか少し興奮して、ムキになつて言つた。
『……』
里龍は、何んと言つたらいゝのかわからないので、すつかり當惑してしまつた。——まともには、

おかみさんの顏を見ることも出來ず、ほのかに赧らんだ顏を、俯垂れるやうにしてゐた。
『ほんとに美しいよ。——このまゝ一年も、磨きをかけてごらん。どんなに立派な藝者衆になるか。君の家さんでは、ほんとうに掘り出し物をしたよ』
と言ひながらおかみは、俯向き氣味にしてゐる里龍の顏を猶ほも無遠慮に、じろ〳〵と覗き込むやうにして見ながら、そんなことを言つた。

二

『ぢや、わたし、お座敷のはうにまゐりますから』
いつまでも、用事らしい話は切り出さないし、おかみさんの前に、じつと坐つてゐるのも窮屈なので、さう言つて里龍が、立うとすると、
『まあ、もうちよつと、お待ちよ。わたしは、まだ、肝腎の話を、ちつともしてゐないぢやないか』
と、あわてゝおかみさんが引き留めるので、里龍としては、やつぱり立つことも出來なかつた。
『お座敷に出る前に、ちよつと話しておきたいことがあるんだよ』

『はあ』

『ほかでもない、お前さんを呼んで下さるお客さんのことだがね』

と言つて、長煙管に詰めた煙草をウマさうに、一服吸ふと、

『杉村さんといふ方だがね、ついこの頃から、いらつしやり始めた、まだ、新しいお客さまだけれど、金使ひのきれいな、大事のお客さまなんだよ』

『はあ』

『里龍さんが、とても氣に入つたらしいの。——お前さんは、ほんとに仕合せ者だよ。たつた一度呼ばれたゞけで、あゝいふお客さまの氣に入られるなんて……滅多にない運といふものさ』

『……』

里龍は、あんな杉村のやうな男の氣に入られるのを、おかみさんが言つてゐるやうに、決して幸運だなどゝは思はなかつた。——でも、こゝで、おかみさんの言葉に、無理に逆らふ必要もないので、默つて聞いて、うなづいてゐた。

『そこで、お前さんに、よく話しておきたいことがあるんだがね』

『はあ』

『お前さんだつて、覺悟して花柳界に身を沈めるくらゐだから、一通りの苦勞は、わかつてゐないことはないだらうと思ふけれども……一つ腕にヨリをかけて、杉村さんのご機嫌を、取つてくれないと、困るんだよ』

『腕にヨリをかけるなんて……わたしには、腕も何んにも、そんなものはありませんけれども』

『さうさね、腕も何んにもない、その素人くさいところが、かへつてお客さまの氣に入るのかも知れないね』

『……』

お客の氣に入るとか、氣に入らないとか、そんな言葉は、里龍としては、はげしい侮辱とよりほかには、聞くことが出來なかつた。——眼の前で、そんなことを言はれなければならないやうな身になつたのかと思ふと、かなしくもあるし、情けなくもあるし、腹立たしくもあつた。でも、こんな身の上になつた以上、仕方のないことだと諦めて、里龍は涙があふれるほど口惜しいのを、じつと下唇を嚙みしめるやうにして、我慢してゐた。

『すこしくらゐ、お客さまに無理なことがあつても、我儘なことがあつても、そこを辛抱して、お客さまの言ひなりになつてくれゝば、それでいゝのさ』

『はい』
『わかつてゐるね？』
おかみさんは、まるで止めでも刺すやうに、念を押した。
『わかつてゐます』
里龍は、瞳にあふれてくる涙を抑へながら、しづかに言つた。
『山口縣の素封家の跡を、繼いだばかりなんだつてさ。何千萬圓とかの大金持ちなんだつて』
『はあ』
里龍は、そんなことは、聞くのを淺ましく、身ぶるひするほど厭はしかつたが、でも、神妙に聞いてゐた。
『だから、里龍さんだつて、氣に入られておけば、決して損はないよ。身のためといふものさ』

三

離室の一室では、杉村が茶餉臺に凭りかゝつて、女中を相手に、チビリ〳〵と飲んでゐた。
『ナカ〳〵來ないね』

酒もまづさうに、一口飲んでは、口ぐせのやうに言ふ。
『もう、すぐ來ますわよ。——里龍さんは、とても流行りッ兒だから、いくら急いでも、そんなにすぐには、ナカ〳〵間に合はないんですわ』
女中は、上手に機嫌を取つてゐた。
『催促して見てくれ』
『あら、さつき催促したばかりですわ。そしたら、もう出たといふんですもの。今に來ますわよ』
『出たと言ひながら、ナカ〳〵來ないぢやないか』
『ですから、誰かほかの妓も、かけませうかといふのに……』
『イヤ、今日は里龍一人でいゝんだ。醉はないうちに、話があるから、ほかの女なんか邪魔だ』
『まあ、ひどい！　ご挨拶だわ』
と言つてゐるところへ、瓦燈口の襖が、しづかに開いて、里龍の清楚な姿が、すらりと入つて來た——

昭和十八年二月六日印刷
昭和十八年二月九日發行

定價貳圓貳拾錢

著者　中村武羅夫（なかむら ぶらを）
東京市赤坂區青山北町三ノ六七

發行者　筒井宏始
東京市小石川區柳町二六

印刷者　佐藤隣（東京一三四九）

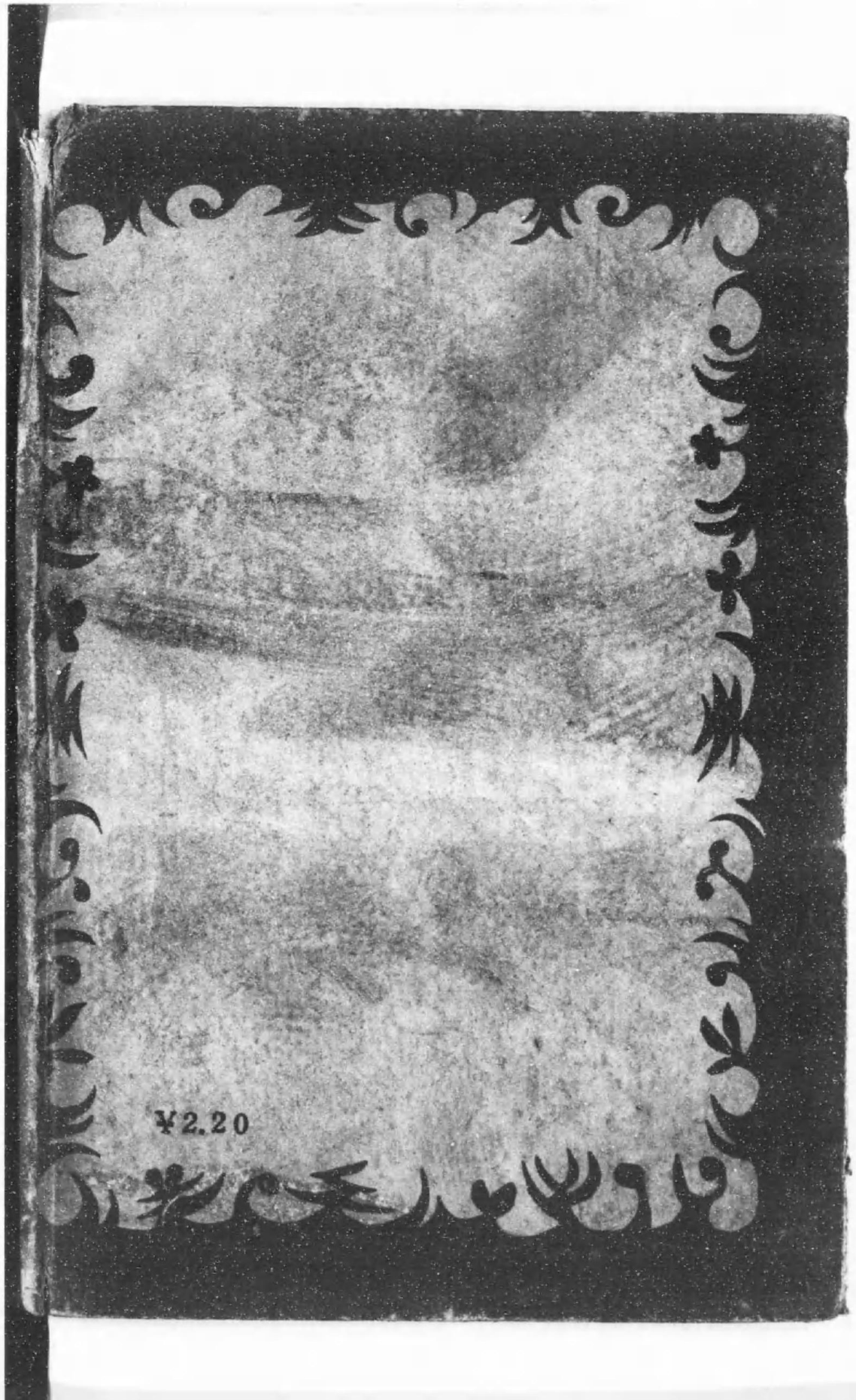
承認番號
ア370311

火の柱

3000部

會員番號 110017

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

發行所　東京市赤坂區青山北町三ノ六七　甲子社書房
振替口座東京八三三三七四番

終